

# 西海考古

第11号

2020年12月  
西海考古同人会

題字 兵働翠苑（日展作家）

表紙デザイン 中村 幸

# 目 次

九州北部における一野式系土器の空間的な展開 —高並垣式土器・陽弓式土器との関係—	大坪 芳典 ( 1 )
大形成人用甕棺墓分布周縁地域の社会 —長崎県本土部の弥生時代社会—	古門 雅高 ( 19 )
滑石製石錘について	土岐 耕司 ( 49 )
長崎の基層文化と表層文化	宮崎 貴夫 ( 73 )
長崎県考古学の三つの課題	宮崎 貴夫 ( 89 )
<b>【研究ノート】</b> 西北九州における弥生時代開始期墓制について .....	大庭 孝夫 (101)
<b>【老朗漫筆】</b> 長崎・佐賀・福岡県域における支石墓の立地について —表層地質との関係から考えたこと—	渡邊 康行 (117)
執筆者一覧	(143)

# 九州北部における一野式系土器の空間的な展開

—高並垣式土器・陽弓式土器との関係—

大坪 芳典

## はじめに

押型文土器が出現する前夜、縄文時代早期前葉の西北九州では、主に貝殻文円筒形土器の一野式系土器が分布していた。ここで一野式系土器とするのは、一野Ⅰ式土器、一野Ⅱ式土器、下末宝式土器といった同一系統の円筒形条痕文土器を総称したい。この一野式系土器とは、基本的には条痕文を施す円筒形土器が主体を成すが、量にしたら少ないため撚糸文を施す円筒形土器も含める。

一野式系土器と九州北部において同一時期に併存する土器として考えられるのが、実態が不明瞭な所謂、無文土器であり、最近の研究では、高並垣式土器や陽弓式土器にあたる。本稿では、一野式系土器と無文土器が出土している遺跡を検証し、九州北部における一野式系土器の空間的な展開を分析したい。

## 1. 研究史から見える長崎編年と年代観の推移

西北九州における縄文時代早期の一野式系土器と、それに併行する時期の九州北部の土器について検討するにあたり、西北九州の貝殻文円筒形土器から押型文土器にかけての研究史を回顧しつつ、まず筆者の編年観と大分編年と比較した相対的な年代観(表1)を説明したい。

1998年、水ノ江和同氏は、一野式土器と弘法原式土器の2型式を設定し発表した。また水ノ江氏は、弘法原式土器の時期を大分編年の稲荷山式土器の頃に位置づけた(水ノ江 1998)。

1999年、渡邊康行氏は、水ノ江氏の一野式・弘法原式土器の設定について検討を行っている。その結果、弘法原遺跡(弘法原式土器)の時期は、縄文時代早期後葉の定住要素を示す百花台遺跡群との連続としての捉え方、実年代と石匙の存在との整合性、無文土器・条痕文土器との関係等から、大分編年の稲荷山式土器から下菅生B式土器の頃に一野式土器が存在し、田村式土器の頃に弘法原式土器が出現するとして、水ノ江氏と時間的な位置づけに異なった見解を示した。

2006年、筆者は、島原半島の押型文土器の様相について、九州に押型文土器が登場する弘法原式土器の頃に東九州系押型文土器の「器形が深鉢形・薄手化傾向の器壁・尖底+文様が押型文様」が伝播してくる過程で円筒形条痕文土器の一野式土器や円筒形撚糸文土器に文様転換が行われた円筒形押型文土器である弘法原式土器が成立し、それに後続して早水台式土器から下菅生B式土器併行期に「器形が円筒形基調の押型文尖底の影響を受けた狭脚な平底・厚手の器壁+文様が押型文様」(大坪 2006)という特徴をもち在地化する事を述べた。

2007年、筆者は、島原半島の押型文土器について、水ノ江氏が大分編年という稲荷山式土器の併行期の円筒形押型文土器を弘法原式土器と位置づけられていたものを拡大解釈し、弘法原式土器に後続する平底押型文土器も含めて誤って位置づけていた。この頃の筆者の考え方は、弘法原式土器の出現期に関しては水ノ江氏に近い考えを有するものの、誤って円筒形押型文土器に後続する数型式の平底押型文土器も含めて弘法原式土器の範疇にしていた(大坪 2007)。

2009年、筆者は、その誤った考えを大きく改めて、水ノ江氏が弘法原式土器を大分編年の稲荷山式土器の段階のものに対して設定したのを踏まえた上で、弘法原式土器に後続する「器形が円筒形基調

で押型文・尖底の影響を受けた狭脚な平底・厚手の器壁+文様が押型文様」という特徴を有する，大分編年という早水台式・下菅生B式・田村式土器と併行期の在地系土器を，弘法原式土器から切り離して，別の土器型式群が存在することを唱えた。また，一野式土器の中に瘤文土器を有する土器があることを発表した。この瘤が稲荷山式土器の属性であるため，稲荷山式土器との併行期に一野式土器が終焉をむかえて，その後の稲荷山式土器の頃にこの土器が成立し，早水台式土器の頃にかけて弘法原式土器が存在する考えを述べた（大坪 2009）。

2012年，筆者は，島原半島の貝殻文円筒形土器と押型文土器を整理して，これまで弘法原式土器に後続する大分編年の早水台式・下菅生B式・田村式土器と併行期の土器群，いわゆる狭脚な平底を有する押型文土器（平底押型文土器）を百花台・下末宝遺跡の一群と称して位置づけた。また一野式土器から瘤を有する土器を細分して別けて，2009年の頃に述べた瘤を有する特徴をもつ土器を下末宝式土器として設定した（大坪 2012）。

2015年，筆者は，2012年に設定した百花台・下末宝遺跡の一群をようやく百花台遺跡群の資料をもって広義の百花台式土器と位置づけることができた。さらに，弘法原式土器に後続する百花台Ⅰ式土器を大分編年の早水台式土器に，百花台Ⅱ式土器を大分編年の下菅生B式土器に，百花台Ⅲ式土器を大分編年の田村式土器の頃に併行するものとして位置づけた（大坪 2015a・b）。

2015年5月，岡本東三氏は，九州の押型文土器の出現とその前段階の土器の編年を整理する中で，弘法原式土器の時間的な位置づけについて「水ノ江氏は一野式土器と弘法原式土器の関係について，山崎・平川両氏同様，前者が古く，後者が新しいとする見解を示し，後者の弘法原式土器を稲荷山式段階に位置づけている（水ノ江 1998）。この水ノ江氏の見解に対し，渡邊康行氏は弘法原式が田村式以降の可能性を模索している（渡邊 1999）。近年，大坪芳典氏は円筒形条痕紋を2段階（一野式土器→下末宝式土器）に分け，弘法原式をやや下げて早水台式土器近くに位置づけている（大坪 2012）。」と評価した（岡本 2015）。筆者に対してこの論文に早水台式土器近くに位置づけたと書かれているが，誤解がないように断っておくと，厳密には2009・2012年及び2015年段階での筆者の論文では大分編年の稲荷山式土器の後半の頃に出現し，早水台式土器のいずれかの段階まで併行し存続した土器だと考えを示している。後述するが現在では，弘法原式土器の時間的位置づけはより古く，川原田式土器や稲荷山式土器と併行するように考えている。

2016年，筆者は，百花台Ⅰ～Ⅲ式土器をさらに詳細に定義づけた。その他，尖底の政所式土器に併行する貝殻円筒形土器のものを小ヶ倉式土器と設定して，その後の下末宝式土器の設定の再確認を行った。この論文では，西北九州の縄文時代早期の編年の変遷が「小ヶ倉式土器→一野Ⅰ式土器→一野Ⅱ式土器→下末宝式土器→弘法原式土器→百花台Ⅰ式土器→百花台Ⅱ式土器→百花台Ⅲ式土器→手向山式土器→妙見・天道ヶ尾式土器→平楯式土器（以降，省略）」のように長崎編年と言えるほどにまでに構築できたと言える。

2020年，筆者は，2016年までの年代観を大きく変える事になった。その理由としては，下末宝式土器の時間的な位置づけを大分編年の稲荷山式土器の一属性である瘤文との共通性から同時期と捉えていた。原因として，現在でも九州の押型文土器の教科書的な編年表である1998年，坂本嘉弘氏が提示した大分編年表（坂本 1998の第3図）では，瘤が付く無文土器を稲荷山式土器に伴わせていた。当時，当該期研究を学び始めの私にとっては，氏の2015年の論文も含めて画期的な論文であったため大きく影響を受けていた事もあり，筆者も2009・2012年の下末宝式土器の設定段階では，大分編年の稲荷山式土器に併行させて位置づけてしまった。しかし，近年，坂本論文の編年表に図示されている瘤が付く無文土器は，その後の研究（綿貫 1999，鈴木 2003，遠部 2003a・2003b・2004a など）によ

り、陽弓式土器と設定されて、押型文土器よりも古く位置づけられている。この様な研究の進展により、九州の早期研究で時間的なものさしとされる大分編年との併行関係に変更が生じたため、西海考古第9号を始めとする2016年までの論文で発表した年代観を改めさせてもらった（大坪 2020a・b）。このため、下末宝式土器を大分編年の陽弓式土器と併行させる事により弘法原式土器が大分編年の川原田式土器と稲荷山式土器と、百花台Ⅱ式土器が大分編年の早水台式土器と併行するように九州の縄文時代早期の編年表を作成（表2）し、従来の時間的位置づけを変更した（大坪 2020a・b）。

西北九州における縄文時代早期土器の編年は、「小ヶ倉式土器→一野Ⅰ式土器→一野Ⅱ式土器→下末宝式土器→弘法原式土器→百花台Ⅰ式土器→百花台Ⅱ式土器→百花台Ⅲ式土器→手向山式土器→妙見・天道ヶ尾式土器→平栴式土器→塞ノ神式土器→苦浜式土器→右京西式土器→轟A式土器」（所謂、長崎編年）の流れでほぼ確立しつつあると言えるほど時間軸は出来つつあるが、一方で、九州島内においてこれらの土器がどのように展開していたのかは不明な点が多い。2020年の論文では、早期初頭の貝殻腹縁文土器の小ヶ倉式土器の九州内での展開と島内で併行する土器との関係について論じた（大坪 2020a）が、本稿では、これに後続する早期前葉の円筒形条痕文・捺糸文土器の一野式系統土器と併行する土器との関係について九州北部での空間的な展開を検討する。

## 2. 一野式系土器と九州北部で併行期の土器について

早期前葉の円筒形条痕文・捺糸文土器の一野式系統土器（一野Ⅰ式土器、一野Ⅱ式土器、下末宝式土器）の九州北部での展開と九州島内で併行する土器の関係について追及するにあたり、まずは、一野式系土器の各型式の説明を行い、その併行する土器についても整理したい。

### ① 一野Ⅰ式土器

1998年、一野式土器は、水ノ江和同氏が島原市有明町の一野遺跡の出土遺物をもって標式土器として設定した（水ノ江 1998）。

水ノ江氏は、一野式土器について「貝殻文円筒形土器で普通は条痕文土器と呼ばれている一群」で「底部は平底で、器形と口縁部ともほぼ立ち上がる円筒形。口縁部から胴部上半にかけて、二枚貝の腹縁を器面に押しつけ横位に条痕文の文様を3～6条巡らすのが最大の特徴である。器面調整はナデで、横位の条痕文の施文部については、同一原体による縦位の条痕文が横位のそれの下に窺えるが、これは器面調整と文様の両方の要素を兼ね備えているようである。横位の条痕文の文様については、ごく緩やかな波状文や押引文の手法により一見山形の押型文のように見えるものもある。～（略）～押型文とは明らかに異なったものである。～（略）～貝殻円筒形土器には無文土器が存在しないことである。」と説明している。その他、器形の特徴として口唇部に面取り調整を行うものもある。水ノ江氏は、型式設定を行う際に時間的な位置づけを、弘法原式土器に先行する土器群としている。

2016年、筆者が一野式土器を一野Ⅰ式土器（第1図6）と一野Ⅱ式土器（第1図9）とに細分して設定した（大坪 2016）。長崎県内から出土する一野式土器は、口縁部の外面に二枚貝腹縁による条痕文の文様帯を施すが、一野Ⅱ式土器が口縁部から胴部にかけての文様帯が器高に対して凡そ2分の1であるものが大半であるのに対して、島原市畑中遺跡から出土する一野Ⅰ式土器の文様帯の幅は、器高に対して5・6分の1程度で狭い。その違いは、熊本県に分布する中原Ⅲ・Ⅳ式土器の属性に類似している面もあり、木崎康弘氏が、中原式土器の設定でその文様帯が拡大化したという考えにより中原Ⅲ式土器から中原Ⅳ式土器への変遷を考えている（木崎 1998）。元々、一野式土器と中原式土器とは属性が類似する点が多い。この類似性と同様に、文様帯が狭い畑中遺跡の資料、つまり一野Ⅰ式土器は、一般的にこれまで一野式土器と言われていた一野Ⅱ式土器の幅広な文様帯の土器群へ変遷する

可能性が高い。また、一野Ⅱ式土器の底部に比べて比較的、底径が狭い。

このように、一野Ⅰ式土器とは、畑中遺跡で出土した土器をもって設定したが、口唇部に面取りを行い、器壁が厚い。比較的径の小さい底部で、平底かつ円筒形の器形である。口縁部の外面に二枚貝腹縁による条痕文を施し、その施文帯が幅狭な文様帯を最大の特徴とする（大坪 2016）。

ところで、型式名称を畑中式土器ではなく一野Ⅰ式土器としたのは、文様帯を除いて基本的な属性が一野式土器と共通し、大枠として一野式系統の土器の範疇で捉えたいためである。ただし、編年で新旧関係を示すために一野式土器を細分して「一野Ⅰ式土器」と設定した。一方で従来の一野式土器とされていたものを「一野Ⅱ式土器」と呼んで新たに設定した。

一野Ⅰ式土器は、2016年時点で川原田式土器ないしそれより古く設定していた（大坪 2016）が、現時点では大分編年の高並垣式土器との併行関係で考えたい。中九州の土器とは、木崎氏の設定した中原Ⅲ式土器と併行すると考えられる。

一野Ⅰ式土器の主な出土遺跡は、島原市畑中遺跡、南島原市宮野遺跡・上畔津遺跡で出土している。

また、一野Ⅰ・Ⅱ式土器の一種と考えられる円筒形撚糸文土器（林 2006）が、春日市原ノ口遺跡（第1図8）、大野城市本堂遺跡などで出土しており、これらが、一野Ⅰ式土器、一野Ⅱ式土器、下末宝式土器のどの段階のものかは今後の検討が必要である。

## ② 一野Ⅱ式土器

一野Ⅰ式土器に後続する一野Ⅱ式土器（第1図9）は、従来、一野式土器と呼ばれていたもので、一野Ⅰ式土器に比べて文様帯が広く、文様帯が器高に対して凡そ2分の1であるものが大半である。口縁部から胴部にかけてに文様帯があり、貝殻により横走る条痕文を施すものや波状のものもある。中には、横位の条痕文の下に縦位の条痕文があるものがあり、単なるケズリ調整の残りではなくて、文様として残しているものも認められる。また、一野Ⅱ式土器の中には、不定方向に粗く施文するもの（第1図9の下土器）もあり退化現象の土器として、時期的に下末宝式土器に近いものと考えられる。器形は、円筒形で底部が幅広な平底である。

一野Ⅱ式土器の主な出土遺跡は、島原市一野遺跡・稗田原遺跡、南島原市下末宝遺跡・大崎鼻遺跡・古作遺跡、雲仙市浚松遺跡、諫早市鷹野遺跡・西輪久道遺跡・牛込A・B遺跡、大村市岩名遺跡などで出土している。その状況から長崎県では、県央から島原半島にかけて分布する。ただし、長崎県外でも出土例があり、福岡県立花町白木西原遺跡（水ノ江 1998）、熊本県一帯で中原式土器という形で出土している。このように島原半島を中心として一円に広がる一野Ⅰ・Ⅱ式土器は、長崎県では大村市を北限とし、東に福岡県八女市、北東に春日市や大野城市、南東の熊本県一帯に中原Ⅳ式土器として広く分布している。さらに広域に見ると大分県では、高並垣式土器と併行すると考えられる。

## ③ 下末宝式土器

一野Ⅱ式土器に後続する下末宝式土器（第1図11）は、2012年、南島原市の下末宝遺跡の出土遺物をもって設定した（大坪 2012）。下末宝式土器の属性について、器形は円筒形土器であるが、一野Ⅱ式土器が胴部から口縁部にかけてほぼ直線的に立ち上がるのに比べて、胴部を最大径として口縁部の径が僅かに小さく、また、口縁部が外反気味である。底部は確認されていないが、一野Ⅱ式土器で見られるような平底と考えられる。器壁の厚さは、1センチ程と厚みがある。文様は、外面に撚糸文を横走施文後に縦走施文する。また、加えて斜方向施文も見られる。内面に横方向にナデ調整を施し、指頭圧痕が見られる。口唇部は、丸く撫でる。最大特徴は、口縁部上端の外面に瘤文を有する円筒形土器という点である。

型式設定時、この瘤文の属性が時期の判別に繋がったと言える。下末宝式土器とは、一野Ⅱ式土器

の衰退型式と考えられることから、一野Ⅱ式土器に後続すると位置づけた。時間的位置づけについては、型式設定当時、大分編年が時間的なものさしとして活用されていたため、比較対象とした。1995・1998年に坂本嘉弘氏が提示した大分編年によれば、稲荷山遺跡から押型文土器の稲荷山式土器と瘤文が付く無文土器を一括りにして稲荷山式土器と位置づけられていた。その論文の編年表には、稲荷山式遺跡から稲荷山式土器と瘤文を有する無文土器とが出土しているため、稲荷山式土器と同時期に位置づけている。その瘤文を有する無文土器が現在、陽弓式土器や東台式土器と呼ばれるものである。そのため、筆者は、下末宝式土器の型式設定時の2012年から2016年まで、瘤文との共通性から稲荷山式土器と併行するように誤って位置づけていた。昨今の研究（綿貫 1999, 鈴木 2003, 遠部 2003a・2003b・2004a など）をもとに、縄文時代早期前半を総合的に検討すれば東九州周辺では無文土器が分布していたところに、本州より押型文土器が到来して川原田式土器や稲荷式土器を成立させるのが土器論的に合理的であろう。また、陽弓式土器が胴張で口縁部が内湾する形状であるのに対して、川原田式土器や稲荷山式土器砲弾型や逆三角形の形状と大きく異なるため、陽弓式土器を稲荷山式土器の範疇で考えるのは、もはや困難である。そのため、条痕文から無文化する高並垣式土器、無文土器の陽弓式土器、押型文土器の川原田式土器、稲荷山式土器の順で変遷すると考えられる。

また、西北九州の下末宝式土器は、瘤文を有し、器形が胴張りで、胴部に対して口縁部の径が小さい点で、東九州の陽弓式土器と共通性がみられる。この瘤文は、陽弓式土器よりも古い野田山式土器以前からの取っ手状に近い突帯からの系譜が考えられ、おそらく東九州の陽弓式土器が分布域方面からの伝播により、一野Ⅱ式土器を母体とする土器に影響を与えて、下末宝式土器に受け入れられたと推察できる。その伝播の一端を現す遺跡に東彼杵町の松山A遺跡で出土している無文土器がそういう状況を示しているのではないだろうか。

#### ④ 高並垣式土器

次に、九州北部において西北九州で分布する一野式系土器と併行期の土器について考えたい。当該期、東九州を中心に福岡県の北部九州一帯に分布する土器に高並垣式土器（第1図7）がある。この高並垣式土器（通称、中原段階）とは、大分県宇佐市大字中原字高並垣の中原遺跡のSK9・16から出土した資料をもって綿貫俊一氏が設定した（綿貫 1999）。

出土地点のSK9・16の問題に関しては慎重を期す（遠部 2004a）必要があるが、高並垣式土器については、SK9で主に見られる条痕文土器と、SK16で主に見られる無文土器とがある。SK16には、1点のみ内面に条痕文が残るものがあり、SK9で見られる条痕文土器の名残と考えられる。器形は、口縁部から胴部が、直立するものとやや外反するものがある。底部は、丸底気味な尖底である。

高並垣式土器のSK16の土器の形態は、底部が尖底であり、口縁部から胴部にかけての形状が筒状を呈することから、円筒形の一野式土器と底部形態を除いたら形状に共通性が見られる。この事から、高並垣式土器は、一野Ⅰ・Ⅱ式土器に併行すると考えられる。また、高並垣式土器は大きく2時期に別ける事ができ、条痕文のものが古く、条痕文がいつしかケズリ調整となり、それをナデ消した無文のものが新しいと考えられる。それら古いものを高並垣式土器古段階、新しいものを高並垣式新段階と呼びたい。その他、高並式土器は、口縁部に横長や縦長の突帯文が付くものがある。この突帯文は、後続する時期の陽弓式土器の頃に瘤文へ変形すると考えられる。

#### ⑤ 陽弓式土器

高並式土器に後続する土器に陽弓式土器（第1図10, 第2図2～11）が考えられる。陽弓式土器は、1999年、国東市国東町の陽弓遺跡より出土した土器をもって綿貫俊一氏により設定された（綿貫 1999）。陽弓式土器とは、尖底の厚手の無文土器で、口縁部は内湾し、胴部が膨らむ特徴をもつ。綿貫氏の型



式設定時の陽弓遺跡からの出土遺物には、直行する口縁部を含むようだが、口縁部が内湾するものが多い陽弓式土器に含めて良いかは検討の必要がある。

また、2003年、鈴木正博氏は、当該土器を型式学的により詳細に分析し臼杵市の東台遺跡の第Ⅲ層より出土した土器をもって東台式土器を設定した（鈴木 2003）。同年、同研究誌に掲載した遠部慎氏は、朝倉市の柿原Ⅰ縄文遺跡で出土したナデ調整無文土器で縦方向に瘤を付ける資料とする、瘤文土器3類（中間 1995）の土器で、かつその瘤の位置が、口縁部付近に付ける土器群を柿原タイプと称した（遠部 2003 a）。押型文土器出現の前夜に存在する無文土器について、この様に型式名が幾つか存在するが、本稿では、型式設定がいち早かった陽弓式土器の名称を用いる事とする。

これらの事から当該土器を整理すると、陽弓式土器の属性（第2図2～11）は、器形について口縁部が内湾もしくは内傾し、胴張りに胴部が膨らむ、底部は尖底である。また、器壁はやや厚手の無文土器である。この陽弓式土器には、口縁部外面の上端に瘤文土器を付ける土器も伴う。この瘤文については、野田山式土器と高並垣式土器の突帯文より変化すると考えられるが、高並垣式土器の突帯文の口縁部の貼付文の位置に比べて、陽弓式土器の瘤文土器の貼付け文の位置は口縁部の最も上端に付く。つまり、突帯文や瘤文は、時代が新しくなるにつれて、口縁部に付ける位置が上に向かう傾向がある。また、瘤文の種類は凡そ円形状のものと、遠部氏が提唱した短めな縦長形状の瘤文の「柿原タイプ」（遠部 2003・2004a）とがある。

さて、東九州の縄文時代早期前半の大分編年についてであるが、高並垣式土器や陽弓式土器を設定した綿貫俊一氏は、その時期設定を底部形態の変化により「高並垣式土器→野田山式土器→二日市Ⅲ土器→陽弓式土器」と位置づけた（綿貫 1999）。一方で、それに異を唱えた鈴木正博氏は、高並式土器を中原式土器と称して野田山式土器よりも新しく位置づけ、かつ東台式土器を設定して「野田山式土器→中原式土器→東台式土器」と位置づけた（鈴木 2003・2004）。鈴木氏の文様（浮文）や形態といった型式学的土器論を踏まえて、筆者も早期前半の編年を野田山式土器→高並垣式土器（中原式土器）→陽弓式土器（東台式土器）の土器変遷が、条痕文→条痕文（減少）・無文（増加）→無文という文様変化と合致することから合理的と捉えている。先述した通り高並垣式土器のSK16の土器の形態は、底部が尖底であり、口縁部から胴部にかけての形状が筒状を呈することから、円筒形の一野式土器と底部形態を除いたら形状に共通性が見られる。このことから、高並垣式土器は、一野Ⅰ・Ⅱ式土器と時期的に併行すると考えられる。また、陽弓式土器（東台式土器）は、西北九州の下末宝式土器と瘤文土器で共通性があることから、同時期と考えている。

また、前述の大分県の早期前葉の土器編年を裏付ける調査における層位的事例としては、二日市洞穴遺跡（竹野・綿貫 2004）において、各層に多少の混入は認められるものの、第4文化上層で早水台式土器、稲荷山式土器、陽弓式土器が、第4文化層下層で高並垣式土器が、その下層の第5文化層で野田山式土器、松木田式土器、小ヶ倉式土器か政所式土器のいずれかの可能性がある土器が出土している。第6文化層は、第5文化層でも出土している野田山式土器が出土しているため大した時期差はないと考えられる。第4文化上層、第4文化下層、第5・6文化層の層位的な出土状況は、先述の土器論による編年を実証していると言えよう。

### 3. 一野式系土器の分布

一野式系土器は、長崎県内では島原半島、諫早市、大村市に分布する（渡邊 1999）状況は、さほど変わってない。本稿では、九州北部の一野式系土器の分布状況をみて行きたい。

佐賀県では、吉野ヶ里町の戦場ヶ谷遺跡で貝殻を用いた施文の条痕文土器（第5図1）が出土して

いる。施文から一野Ⅱ式土器の可能性はあるが、長崎県で出土する当該土器に比べると条痕文が若干波状のうねりが強いように思われる。

次に、福岡県の状況は、林潤也氏が「円筒形撚糸文土器」と呼ぶ一野式系土器と併行するであろう土器が分布している。林氏は、一野式土器分布圏の縁辺部であるため、折衷土器の円筒形撚糸文土器を生み出したと説明している（林 2006）。遠部氏も指摘しているように（遠部・小林・宮田 2007）、おそらく、福岡県では、早期前葉に松木田式土器から浦江式土器と変遷するが、それら撚糸文を施文する伝統を受け継ぎ、一野Ⅰ・Ⅱ式土器に撚糸文を転換して用いた可能性があるが、一野Ⅰ式・Ⅱ式、下末宝式土器のいずれに伴うかは今後も引き続き検討が必要である。円筒形撚糸文土器は、春日市原ノ口遺跡、大野城市本堂遺跡などで出土している。

一野式土器と同一型式の可能性が考えられる中九州の中原Ⅲ・Ⅳ式土器については、本稿の研究対象が九州北部に重点を置いているため、次稿への課題としたい。しかし、一野Ⅱ式土器（中原Ⅳ式土器）と同一属性をもつ貝殻条痕円筒形土器は、近年では鹿児島県曾於郡大崎町の天神段遺跡で良好な資料が出土（立神・眞邊他 2018）しており、大分県を除く凡そ九州一円に広がりを見せる。

#### 4. 一野式系土器併行期の高並垣式・陽弓式土器の分布

一野式系土器と北部九州で併行する土器については、高並垣式土器と陽弓式土器があげられる。これらの高並垣式土器と陽弓式土器といった一野式系土器に併行する土器の分布を確認する事で、一野式系土器が北部九州でどのように空間的に広がっていたのかを再確認したい。

水ノ江和同氏は、一野式土器の設定において、貝殻文円筒形土器の一野式土器には無文土器が共伴しないと述べ、また、「無文土器の分布は北・東北九州に限られ、これに対し貝殻文円筒形土器はそれ以外の北部九州一円に広く分布しており、両者が年代的に共存していた可能性が想定」（水ノ江 1998）できるとして、型式設定段階から九州北部の分布観を示している。その方向性は筆者も同じ考えであるが、実情を捉えるために高並垣式・陽弓式土器といった条痕文・無文土器の分布図（第3図）を作成し、各々の土器の分布状況を確認する。

##### ① 大分県

大分県では、標式遺跡から見て行くと、高並垣式土器を設定した宇佐市中原遺跡では、条痕文を施すもの、条痕文が無くなる過程のもの、条痕文が施されず無文のものといった高並垣式土器の中で変遷が追える土器が出土している。続く、陽弓式土器を設定した国東市陽弓式遺跡では、もちろん陽弓式土器（第2図5～7）が出土している。国東市では、成仏岩陰遺跡からも陽弓式土器が出土している。臼杵市では、市場久保遺跡から条痕文や無文、突帯文を付ける高並垣式土器が出土し、大久保遺跡から陽弓式土器が出土している。佐伯市では、佐伯門前遺跡から高並垣式土器と陽弓式土器が出土し、東台遺跡から瘤文が付くものを含む陽弓式土器が出土している。九重町の二日市洞穴遺跡は早期前半の土器が層位的に出土しており、瘤文が付くものや無文土器の陽弓式土器が出土している。

##### ② 福岡県

福岡県については、遠部氏の論考（遠部 2003）に詳しく、久留米市の安国寺遺跡、朝倉市の柿原Ⅰ縄文遺跡より口縁部に瘤の付く無文土器が出土している。柿原Ⅰ縄文遺跡からは、無文土器の陽弓式土器が出土（第2図10・11）しているから、一応、その範疇と考えるが、両遺跡から出土した瘤は縦長な瘤である事から遠部氏は、「柿原タイプ」と称している。陽弓式土器の瘤は縦長ではなく、縦横比の長さに差が少ない瘤が特徴であるため、この特徴が若干の時期差なのか、地域性なのか今後の研究課題と言える。その他、久留米市の横道遺跡からは縦横比の少ない瘤文が出土し、その内の1点

は外面に瘤文を、内面に斜線状の細い刻目文を付けた土器が出土している。先述した柿原Ⅰ縄文遺跡からは、口縁部上端から若干の隙間をあけて横位に突帯を付ける無文土器が出土している。横位の貼付文を付けるため高並垣式土器としたい所であるが、この土器が口縁部の内傾の具合からすると陽弓式土器とも考えられるため、高並垣式土器の中でも陽弓式土器への移行期辺りに比定したい。また高並垣式土器、縦横比のあまりない瘤をもつ陽弓式土器も出土している。

その他、筑紫野市の原遺跡からは、口縁部から胴部までの器形の形状が分かる厚手の無文土器が出土しており、陽弓式土器のような口縁部が内傾しておらず、口縁部が外に開くため高並垣式土器と考えられる。那珂川市深原遺跡では、内傾して胴部が膨らむ厚手の無文土器の陽弓式土器が纏まって出土している。また尖底の無文土器も出土している。

この様に、大分県では高並垣式土器と陽弓式土器の分布が主体をなし、福岡県も高並垣式土器と陽弓式土器の分布が主体を成すものの、撚糸文を施す一野式系土器も一部に分布する。

### ③ 佐賀県

それでは、福岡県・大分県より西に目を向けて、高並垣式土器と陽弓式土器が西九州・西北九州のどの辺りまで分布するのかを見て行きたい。

佐賀県内では、県東部から見ていくと鳥栖市の西田遺跡では、早期前葉から中葉まで幅広い時期の土器が出土しているが、本稿に関わるものでは高並垣式土器や陽弓式土器(第2図8・9)がまとまって出土している。無文土器に貼り付ける突帯文と瘤文土器は、3種類に分類でき、口縁部の上端から若干の隙間をもち横位に突帯文を貼り付ける高並垣式土器と、突帯文が口縁部上端に凡そ縦横比の少ない円形状の瘤文を貼り付ける陽弓式土器と、縦位の瘤文の柿原タイプが出土している。突帯文が横位のものと同円形状のものが数点ずつ出土し、縦位のは1点のみ出土している。無文土器の底部は、尖底のものと形状は尖底のようだが僅かに丸みのあるものとがある。以上、西田遺跡の土器は、高並垣式土器や陽弓式土器の典型的な突帯文や瘤文を比較できる上で資料的に価値が高い。

次に、吉野ヶ里町の戦場ヶ谷遺跡2区からは、条痕文土器、無文土器が出土している。当遺跡は層位的に確認されているが、無文土器や押型文土器の稲荷山式土器よりも条痕文土器は層位的に下層から出土している。無文土器と押型文土器は同じ層位から確認されているが、その中でも出土土器の全体量の半分を占めるほど無文土器が充実している(市川1999)。これらの条痕文土器と無文土器がいかなる土器かを検討したい。条痕文土器は、無文土器や押型文土器より下層から出土しているため、層位的にそれらより古いと考えられる。可能性としては、北部九州の福岡県を中心に分布する松木田式土器か、東九州の大分県を中心に分布する野田山式土器かそれに後続する時期の高並垣式土器古段階といった縄文時代早期初頭から前葉の3型式が候補にあがるが、出土した条痕文土器が小破片であるため特定までは難しい。ただし、早期初頭の松木田式土器や野田山式土器の頃、当遺跡の地域では小ヶ倉式土器の分布圏である事を考えると、3型式の候補の内僅かに高並垣式土器古段階に絞られてくる。次に、報告書掲載番号13・14の無文土器は、胴部がやや膨らむ傾向にある事から陽弓式土器と考えられる。ただし、報告書に掲載されている13番は、直線的に図化されているが、市川氏のご厚意により実見させて頂いたところ、図よりも口縁部が反り、胴部が膨らむ土器で、まさに陽弓式土器であった。これら陽弓式土器以外の口縁部から胴部が直線的な器形の無文土器は、高並垣式土器新段階の土器と考えられ、戦場ヶ谷遺跡2区の資料は、高並垣式土器から陽弓式土器の変遷を追える上で貴重である。佐賀県では、西田遺跡や戦場ヶ谷遺跡からの出土事例が示すように、佐賀県西部に分布域が偏り、高並垣式土器や陽弓式土器が势力的に分布していたようである。

#### ④ 長崎県

長崎県内では、県北部地域の松浦市に所在する鷹島海底遺跡において陽弓式土器と考えられる無文土器が出土している。この事は、長崎県内で見た時に一野式系土器が確認されていない長崎県北部は高並式垣土器や陽弓式土器などの無文土器が分布している可能性を示している。

その他、長崎県内では、諫早市の長牟田遺跡で瘤文の無文土器（第5図2）が出土している。当遺跡の瘤が付く位置は、口唇部の直下ではない。瘤を付ける位置は、高並垣式土器は口唇部よりやや下の口縁部の外面に付けており、陽弓式土器に時代が下るに連れて口唇部の直下に付けるようになる。そのため、長牟田遺跡の瘤付きの無文土器は、瘤の貼り付け位置と無文土器である事から高並垣式土器の中でも比較的後半の土器と考えられる。ただし、高並垣式土器であれば本来、突帯を付けるのに瘤であるのが疑問が残る。この事から陽弓式土器に極めて近い時期の高並垣式土器と捉えたい。一野式系土器との時間的な併行関係で考えると、一野Ⅱ式土器と併行するのではないかと考えられる。この長牟田遺跡の土器の重要性としては、西北九州内で見た時に、島原半島では、明確な高並垣式土器が出土していないが、一野Ⅱ式土器の分布圏の島原半島の北側の諫早市付近では、東九州を起点として福岡・佐賀方面より伝播し、高並垣式土器が到来していたことが窺える。このように長崎県内では、無文土器が出土する事例はあるが、その地域において主体で用いられている在地土器が一野式系土器であれば、無文土器は客体の土器という事になり、取り扱いには十分気を付けたい。

#### 5. まとめ

今回、九州北部における一野式系土器の分布と高並垣式・陽弓式土器の分布を詳細に分析したところ、一野式系土器は、主に島原半島から大村市にかけての一带を中心とする長崎県を分布圏とし、一部に客体的に佐賀県東部まで伝播していた。一方で、高並垣式・陽弓式土器は、主に佐賀県・福岡県・大分県を分布圏とし、長崎県でも松浦市や諫早市まで及んでいることが判明した（第3図）。中でも、一野式系土器の分布圏に諫早市長牟田遺跡の高並垣式土器らしき土器（第5図2）が客体的に到来しているような現象もあり、お互いの分布圏の土器が九州北部の空間の中で伝播し展開していた事が判明した。また、伝播したとしても一時的な事で客体的な要素が強いために在地で根付くとは限らなかったと思われる。これまで、押型文土器、無文土器、一野式系土器のような条痕文土器の関係性は不明瞭であったが本稿により僅かにその関係性が明らかになってきたのではないだろうか。

また、北部九州における高並垣式土器と陽弓式土器の分布を検討する過程で第4図に示したような変遷が追える事が判明し、突帯文土器から瘤文への変遷図を提示できた。付加文様である突帯文と瘤文の変遷は、条痕文土器に付ける突帯文が野田式土器（第4図1）、次の時期に条痕文もしくは無文土器に付ける突帯文が高並垣式土器（第4図2）、無文土器につける瘤文が陽弓式土器（第4図3）、無文土器に縦位に瘤文を付ける柿原タイプ（第4図4）、最後に押型文につける瘤文が川原田式・稻荷山式土器と考えられる。今のところ、押型文に付く瘤文（第4図5）はあまり類例を見ない。出土量からみると陽弓式土器の瘤文が最盛期を迎えて、本州・四国からの押型文土器の強力な伝播が及び消滅するとみられる。先述したように、野田山式・高並垣式の頃の突帯文の付ける位置に比べて、陽弓式土器の頃になると口縁部の上端に付くようになり、押型文土器の頃にはさらに上へ移動して付けている。下末宝式土器は、陽弓式土器に影響を受けて瘤文を付加文様として付けた可能性がある。一方で突帯文や瘤文と同時期に存在する付加文様として存在するものに口縁部の上位に施す列点文がある。この列点文を施す土器も押型文土器の最盛期になると消滅する。つまり、九州北部における縄文時代早期前葉の土器の基本文様は、条痕文や撚糸文や無文であるが、これらの基本文様に突帯文や瘤

文や列点文を付加的に加飾している。以上、これまで早期研究を分かりづらくしていた突帯文や瘤文、列点文といった付加文様や加飾文様についても、その状況が少しずつ明らかになってきたのではなからうか。

最後に、幾つか今後も検討しなければならない課題があるため、列挙する。第3図からも分かるように、玄海灘沿岸部、北九州や豊前地方では当該期の土器の実態が不明であった。単純に資料を見つける事ができていないだけの可能性もあるが、改めて北九州市付近の早期前葉の遺跡を見て行くと、北九州市周辺における早期前葉の遺跡は少ないが、市域において長野尾登遺跡（第6図1）と貫・丸尾遺跡（第6図2）において器形の全体形状が分かる尖底の条痕文が出土している。両土器は、九州北部であまり見られない土器であるため、北九州付近の空白地域の在地土器の可能的候補として考えられる。また、条痕文土器については、北九州周辺を除く福岡県・大分県・佐賀県では高並式土器の古手の段階で消滅するため、北九州地域でこれらの長野尾登遺跡と貫・丸尾遺跡の資料が分布図の空間的な穴を埋めるのであれば、この地域では条痕文土器が残るという事になる。この理由としては、本州と最も近接する地域がために別の土器が存在していた可能性もある。まだ根拠が薄いため、中国地方との土器の検証や北九州周辺での類似土器などを今後も検討する必要があり仮説として留めておきたい。

また、一野式系土器の分布圏と高並垣式・陽弓式土器の分布圏については、それぞれの分布圏が判明してきたが、円筒形捺糸文土器の分布圏に関しては、一野式土器系土器の分布圏より遠く離れて、高並垣式・陽弓式土器の分布圏に近接し分布している事が第3図からも分かる。円筒形捺糸文土器は、一野式系土器との関連性の高い土器であるために、その分布圏の空間的な距離感に違和感がある。また、時間的な点でも謎が多く、一野式系土器の中でも一野Ⅰ式土器、一野Ⅱ式土器、下末宝式土器のいずれの時期のものか明らかにできていない。円筒形捺糸文土器を松木田式土器の捺糸文の系譜で考えると、一野Ⅰ・Ⅱ式土器のいずれかに併行する可能性があり、一方で下末宝式土器の捺糸文との共通性で考えると下末宝式土器と併行する可能性がある。こういう点で円筒形捺糸文土器は、空間的にも時間的にも引き続き研究を要する。

さて、九州全域という広域な視点で見た時に、長崎県で主に一野式系土器が、福岡県・大分県・佐賀県では主に高並垣式土器・陽弓式土器が、鹿児島県では石坂式土器が分布する。中九州で分布する中原Ⅲ・Ⅳ式土器と一野式系土器との関係についてもまだ解明が必要だと感じている。また、遠く離れた鹿児島県の天神段遺跡では、一野Ⅱ式土器が出土しており、異文化圏かつ九州でも南端の大隅半島で出土する事は、一野式系土器の空間的な情報の移動距離には目を見張るものがある。今後も引き続き、中・南九州との関係、玄海灘沿岸・北九州市付近・豊前地方など実態が明らかでない地域についても研究を続け、九州の縄文時代早期前葉の空間的な空白地帯の地域の実態を掴むとともに、一方で広い視野も持ちつつ多角的な視点で研究を重ねていきたい。

#### 【謝 辞】

本稿の執筆に際して安楽哲史・市川浩文・宇土靖之・遠部慎・芝康次郎・竹田ゆかり・辻田直人・中尾篤志・古門雅高・本多和典・村子晴奈・柳田裕三・渡邊康行諸氏に御教示・御協力を賜った。記して厚く御礼を申し上げる次第である。

#### 【引用・参考文献】

赤司善彦 1994『原（はる）遺跡』福岡県教育委員会  
麻生 優 1968『岩下洞穴の発掘記録』佐世保市教育委員会  
荒木伸也・本多和典 2018『宮野遺跡』南島原市教育委員会

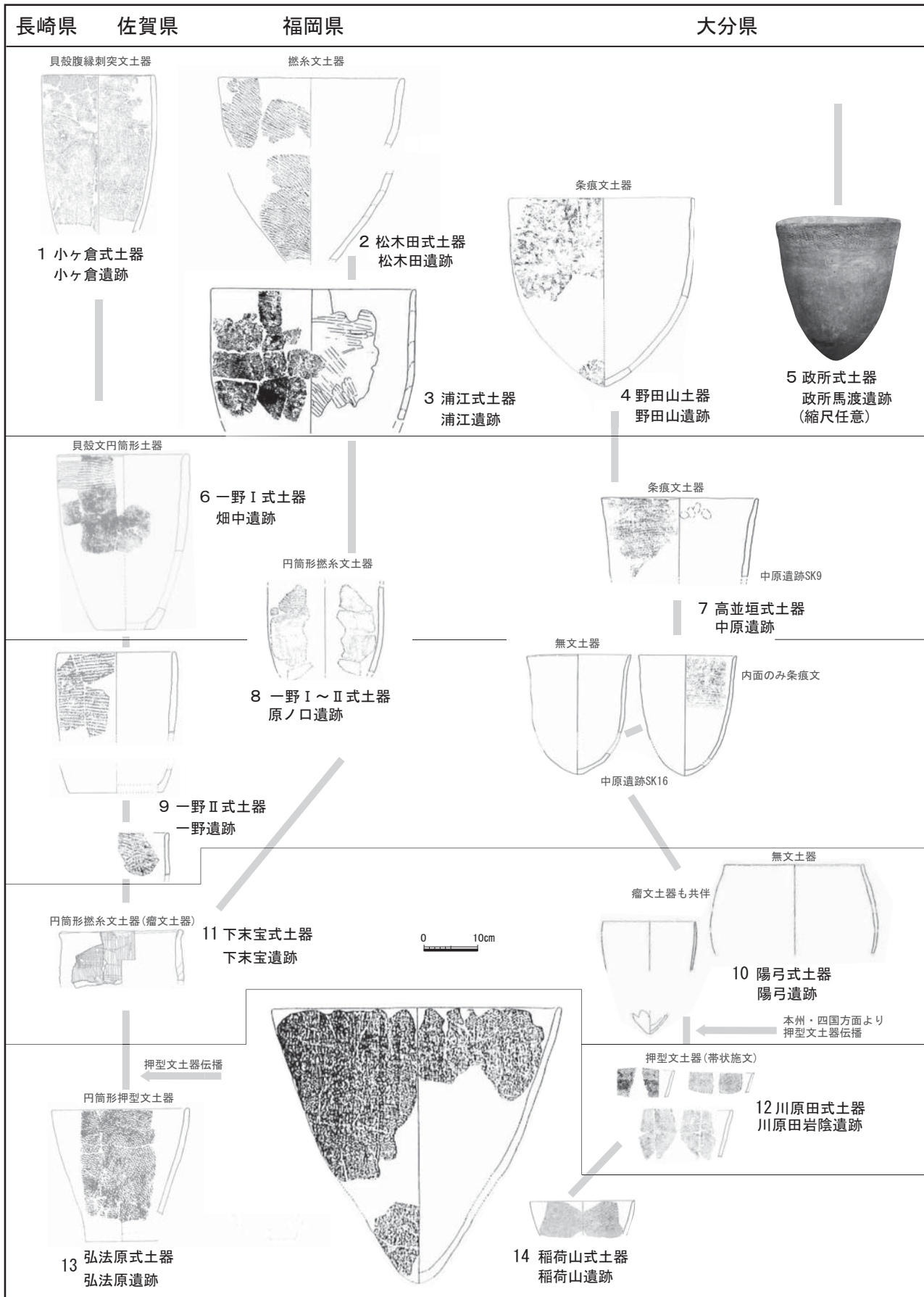
- 市川浩文 1999『戦場古墳群』戦場ヶ谷遺跡他 佐賀県教育委員会
- 今村結記 2016「宮崎県の遺跡における貝殻文円筒形土器と押型文土器のあり方」『貝殻文と押型文』平成26年度宮崎考古学会研究会資料集 宮崎考古学会県南例会実行委員会
- 井上義也 2002『原ノ口遺跡』第33集 春日市教育委員会
- 上杉彰紀 2004「別府原式土器」とその周辺『九州縄文時代早期研究ノート』第2号 九州縄文時代早期研究会
- 上杉彰紀 2005「政所式土器」研究の現状と課題『九州縄文時代早期研究ノート』第3号 九州縄文時代早期研究会
- 宇野慎敏 2000『貫・丸尾遺跡』（財）北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室
- 浦田和彦 1992『一野遺跡』長崎県有明町教育委員会
- 大野安生・松川憲毅 2000「岩名遺跡」『黒丸遺跡ほか発掘調査概報』Vol.2 1997～1999 大村市教育委員会
- 大坪芳典 1998「野田遺跡出土の川原田式土器」『おおいた考古』第9・10集 大分県考古学会
- 大坪芳典 1998「早水台遺跡の押型文土器－表面採集資料の紹介－」『Fragments』創刊号 さくら研究会
- 大坪芳典・遠部 慎・川内野篤 1998「早水台遺跡採集資料（井上コレクション）の紹介」『Fragments』創刊号 さくら研究会
- 大坪芳典・遠部 慎 1999「早水台式土器の新例－竹田高校収蔵資料の提起する問題－」『南九州縄文通信』No.13 南九州縄文研究会
- 大坪芳典・遠部 慎 1999「東九州における押型文土器の様相－黒山遺跡出土土器の分析－」『第11回人類史研究会発表資料』人類史研究会
- 大坪芳典 2000「大分県の押型文土器の一例－別府市尾崎園・野田遺跡について－」『Fragments』第2号 さくら研究会
- 大坪芳典・遠部 慎 2000「早水台式土器の器種－屈曲する胴部に関する覚書－」『別府大学付属博物館だより』No.43 別府大学付属博物館
- 大坪芳典 2003「戦場ヶ谷遺跡の押型文土器」『利根川』24・25 利根川同人会
- 大坪芳典 2006「縄文時代早・前期の遺物」『権現脇遺跡』長崎県深江町（現南島原市）教育委員会
- 大坪芳典 2007「九州における押型文土器様式の壺形土器－南島原市下末宝遺跡・島原半島の資料をもとに－」『西海考古』第7号 西海考古同人会
- 大坪芳典 2009「環境に影響を受けた九州の押型文土器－円筒形押型文土器・壺形土器について－」『南九州縄文通信－新東晃一代表還暦記念論文集（上）－』No.20 上巻 南九州縄文研究会・新東晃一代表還暦記念論文集刊行会
- 大坪芳典 2012「島原半島における押型文土器研究の再考」『九州縄文時代早期研究ノート』第5号 九州縄文時代早期研究会
- 大坪芳典 2015a「西北・西九州における貝殻文円筒形土器と押型文土器の様相」『貝殻文と押型文』平成26年度宮崎考古学会研究会資料集 宮崎考古学会県南例会実行委員会
- 大坪芳典 2015b「西北・西九州における貝殻文円筒形土器と押型文土器の様相」の意義について『肥前史談叢』肥前史談叢の会（筆者作成ホームページ <http://www5.hp-ez.com/hp/otsubo01>）
- 大坪芳典 2016「西北九州における貝殻文円筒形土器と押型文土器の編年」『西海考古』第9号 西海考古同人会
- 大坪芳典 2020a「【前編】小ヶ倉式土器と九州縄文時代早期前葉の貝殻腹縁刺突文土器」『九州縄文時代早期研究ノート』第6号 九州縄文時代早期研究会
- 大坪芳典 2020b「【後編】西北九州の貝殻円筒形土器と押型文土器研究の到達点」『九州縄文時代早期研究ノート』第6号 九州縄文時代早期研究会
- 大野安生・松川憲毅 2000『黒丸遺跡ほか発掘調査概報』（岩名遺跡）Vol.2 1997～1999 大村市教育委員会
- 岡本 勇 1966「尖底土器の終焉」『物質文化』8 物質文化研究会
- 岡本東三 2015「九州島における押型紋土器の出現とその前夜－円筒形貝殻紋土器と押型紋土器の相克－」『高野晋司氏追悼論文集』高野晋司氏追悼論文集刊行会
- 小倉正五 1991『一般国道387号改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概報』（中原遺跡） 宇佐市教育委員会
- 遠部 慎 1998「川原田式土器小考」『おおいた考古』第9・10集 大分県考古学会
- 遠部 慎 1999「下城遺跡群の整理ノート」『おおいた考古』第11集 大分県考古学会
- 遠部 慎 2000「ヤトコロ式土器と出水下層式土器の関係」『九州旧石器』第4号 九州旧石器文化研究会
- 遠部 慎 2003a「『柿原タイプ』とその周辺－久留米市安国寺、横道遺跡からの着想ノート－」『九州縄文時代早期研究ノート』第1号 九州縄文時代早期研究会
- 遠部 慎 2003b「九州における出現期押型文土器概観－赤塚亨氏に対するコメントにかえて－」『利根川』24・25 利根川同人会
- 遠部 慎 2004a「九州における押型文土器出現期（予察）」『古代』第114 早稲田大学考古学研究会
- 遠部 慎 2004b「焼成前穿孔土器から見た下剥峰式土器－車坂第3遺跡出土資料からの着想ノート－」『九州縄文時代早期研究ノート』第2号 九州縄文時代早期研究会
- 遠部 慎 2007「北部九州における縄文時代草創期～早期前半の土器群とC14年代測定」『九州における縄文時代早期前葉の土器様相』第17回九州縄文研究会福岡大会 九州縄文研究会

- 遠部 慎・小林謙一・宮田佳樹 2007「宮崎県における土器付着炭化物の炭素14年代測定—縄文時代前半期を中心に—」『宮崎考古』21 宮崎県考古学会
- 遠部 慎 2009「円筒形貝殻文土器群の炭素14年代測定」『南の縄文・地域文化論考』下巻
- 遠部 慎 2015「南九州における押型文土器期の炭素14年代測定」『貝殻文と押型文』平成26年度宮崎考古学会研究会資料集 宮崎考古学会県南例会実行委員会
- 遠部 慎 2016「縄文時代草創期・早期の縄紋土器型式期の実年代比定（西日本）」『日本列島における縄紋土器出現から成立期の年代と文化変化』中央大学人文科学研究所講演会
- 賀川光夫 1955『早水台』大分県教育委員会
- 賀川光夫 1960「早期縄文式土器の新資料—大分県直入郡荻町政所式土器出土—」『考古学雑誌』第46巻第3号 日本考古学会
- 賀川光夫 1965「縄文文化の発展と地域性—九州東南部—」『日本の考古学』2 河出書房新社
- 賀川光夫 1977「熊本県の円筒形土器」『考古学論叢』4 別府大学考古学研究会
- 賀川光夫 1982「押型文土器の編年—縄文早期から前期への系譜」『政所馬渡』別府大学博物館
- 賀川光夫 1998「大分県川原田岩陰の再検討」『おおいた考古』第9・10集 大分県考古学会
- 片岡宏二 1998「宝満川流域の縄文土器概観」『干潟向畦ヶ浦遺跡』小郡市教育委員会
- 金丸武司 2004「宮崎における縄文時代早期前半の土器群—別府原式土器の設定—」『宮崎考古』第19号 宮崎県考古学会
- 木崎康弘 1996「第V章総括」『蒲生・上の原遺跡』熊本県教育委員会
- 木崎康弘 1995「中原式土器について」『九州縄文土器編年の諸問題—早期後半土器の現状と課題—』九州縄文研究会
- 木崎康弘 1998「中九州西部押型文土器の編年」『九州の押型文土器—論攷編—』縄文集成シリーズ3 九州縄文研究会
- 木下 修 1978『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告 筑紫郡那珂川町大字中原所在深原遺跡の調査』福岡県教育委員会
- 九州縄文研究会 2007『九州における縄文時代早期前葉の土器様相』第17回九州縄文研究会福岡大会 九州縄文研究会
- 工藤雄一郎 2015「王子山遺跡の炭化植物遺体と南九州の縄文時代草創期土器群の年代」『国立歴史民俗博物館研究報告』第196集 国立歴史民俗博物館
- 工藤雄一郎 2018「縄文時代草創期の古環境と<sup>14</sup>C年代」『九州旧石器（縄文時代開始期の土器群と石器群—移行期の地域動態を探る—）』第21号 九州旧石器文化研究会
- 黒川忠広 2002『南九州貝殻文系土器』I～鹿児島県～ 南九州縄文研究会
- 黒川忠広 2002『南九州貝殻文系土器』II～宮崎・熊本・大分県～ 南九州縄文研究会
- 黒川忠広 2003「南の押型文土器」『利根川』24・25 利根川同人会
- 桑畑光博・上田 耕・雨宮瑞生 1993「貝殻円筒形土器と押型文土器の関係—宮崎・鹿児島両県における出土状況の検討—」『南九州縄文通信』No.7 南九州縄文研究会
- 甲野 勇 1976『縄文土器の話』学生社
- 小林謙一 2019『九州における縄文時代草創期研究の到達点—各地の定住生活の様相—』第29回九州縄文研究会宮崎大会発表用紙・資料集 九州縄文研究会
- 片岡宏二 1998「宝満川流域の縄文土器概観」『干潟向畦ヶ浦遺跡』小郡市教育委員会
- 坂田邦洋 1972『国東町文化財調査報告書 縄文時代に関する研究 成仏岩陰遺跡の調査』国東町教育委員会
- 相美伊雄 2016「鹿児島県における貝殻文円筒形土器と押型文土器」『貝殻文と押型文』平成26年度宮崎考古学会研究会資料集 宮崎考古学会県南例会実行委員会
- 坂本嘉弘 1995「西日本の押型文土器の展開—九州からの視点—」『古文化談叢』第35集 九州古文化研究会
- 坂本嘉弘 1998「東九州の押型文土器の現状と課題」『九州の押型文土器—論攷編—』縄文集成シリーズ3 九州縄文研究会
- 重留康宏 2003「宮崎県西部における縄文早期遺跡の概観—出土土器を中心に—」『九州縄文時代早期研究ノート』第1号 九州縄文時代早期研究会
- 近澤康治 2001『横道遺跡II』久留米市教育委員会
- 重留康宏 2004「前原西式土器雑考」『九州縄文時代早期研究ノート』第2号 九州縄文時代早期研究会
- 渋谷 格・徳永貞昭・パレオラボAMS年代測定グループ 2011『小ヶ倉遺跡・入道遺跡・九郎遺跡』佐賀県教育委員会
- 清水宗昭 1974『東台遺跡』臼杵市教育委員会・臼杵開発株式会社
- 新東晃一 1996「もう一つの縄文文化—南九州の縄文草創期・早期の特徴—」『南九州縄文通信』No.10 南九州縄文研究会
- 鈴木正博 2003「二日市洞穴第6文化層への想い—東台式の制定とその意義—」『九州縄文時代早期研究ノート』第1号 九州縄文時代早期研究会
- 鈴木正博 2004「縄紋式草創期「寿能式」制定とその型式学的射程—地域連続と列島斑との間に存在する振り子—」

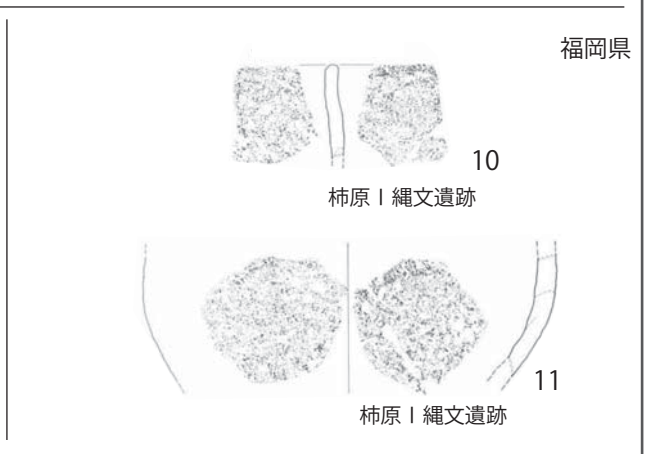
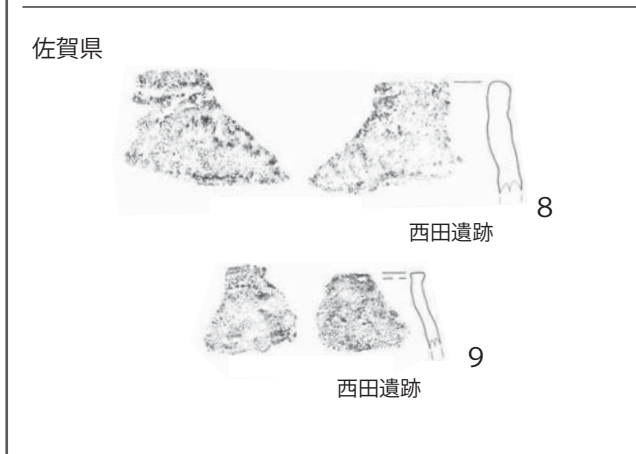
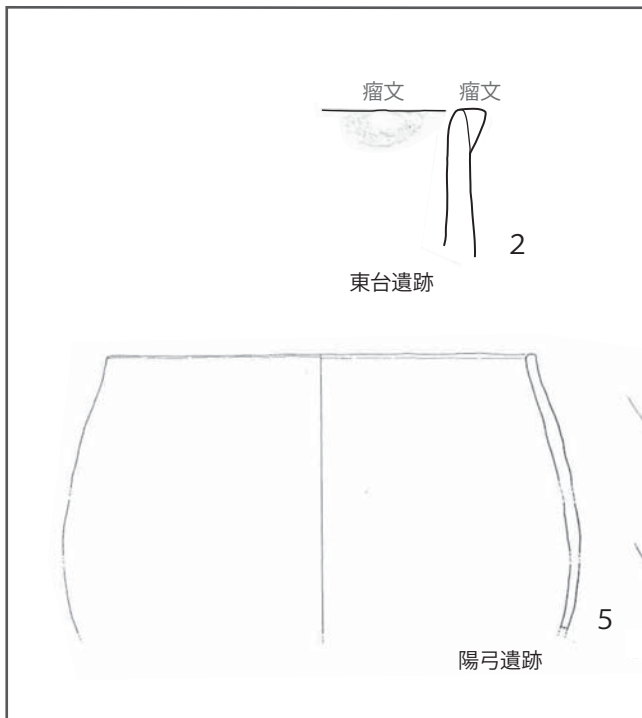
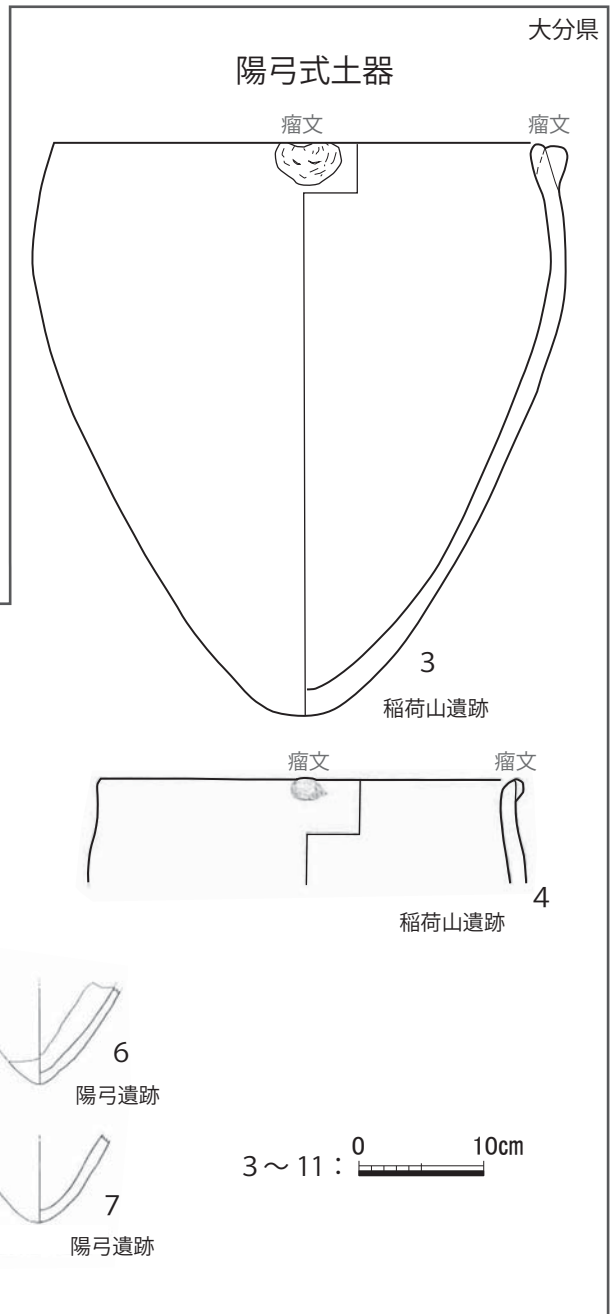
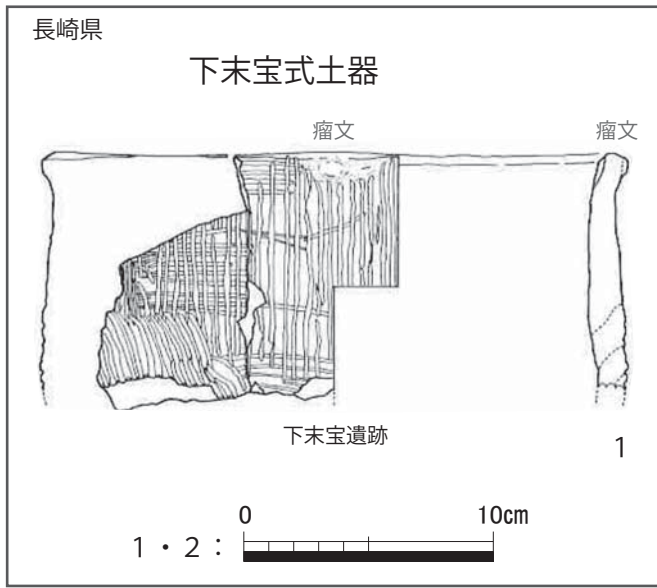
『古代』第115号 早稲田大学考古学会

- 副島和明・片山巳貴子 1983『諫早中核工業団地造成に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅰ』長崎県教育委員会  
竹野孝一郎・綿貫俊一 2004『大分県二日市洞穴一分析編一』九重町教育委員会  
高野晋司 1983『弘法原遺跡』吾妻町教育委員会  
高木正文 1977『九州の円筒土器とその編年の問題』『考古学論叢』4 別府大学考古学研究会  
田川 肇・副島和明・伴耕一朗 1988『百花台広域公園建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』長崎県教育委員会  
田川 肇 1994『県道国見雲仙線改良工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』長崎県教育委員会  
多々良友博 1984『九州地方の押型土器－文様構成から見たその動態－』『金立開拓遺跡』佐賀県教育委員会  
橋 昌信 1970『稲荷山遺跡緊急発掘調査』大分県教育委員会  
橋 昌信 1980『大分県二日市洞穴発掘調査報告書』玖珠郡九重町教育委員会  
橋 昌信 1981『無文土器』『縄文文化の研究』雄山閣  
立神倫史・眞邊 彩・倉元良文・大坪啓子・森えりこ・岩澤和徳 2018『天神段遺跡3 縄文時代早期編』公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財センター  
辻田直人・竹中哲郎 2003『石原遺跡・矢房遺跡』国見町教育委員会  
土橋啓介・渡邊康行 2001『大崎鼻遺跡』布津町教育委員会  
堂込秀人 2003『南九州における押型土器文化期の存在』『利根川』24・25 利根川同人会  
中間研志 1995『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告37 甘木市所在 柿原Ⅰ縄文遺跡』福岡県教育委員会  
西本豊弘編 2009『弥生農耕の起源と東アジア－炭素14年代測定による高精度編年体系の構築－平成16～20年文部科学省・科学研究費 研究成果結果報告』国立歴史民俗博物館  
林 潤也 2006『北部九州土器の円筒形撚糸土器』『九州縄文時代早期研究ノート』第4号九州縄文時代早期研究会  
林 潤也 2007『福岡県における縄文時代早期前葉の土器相』『九州における縄文時代早期前葉の土器相』第17回九州縄文研究会福岡大会 九州縄文研究会  
古門雅高・渡邊康行 1998『広久保遺跡』長崎県江迎町教育委員会  
久山高志 1998『西田遺跡』鳥栖市教育委員会  
本多和典 2005『下末宝遺跡・上畦津遺跡』深江町教育委員会  
本多和典編 2006『権現脇遺跡』第2集 深江町教育委員会  
本多和典編 2018『古作遺跡』南島原市文化財調査報告書第10集 南島原市教育委員会  
前田義人 2004『長野尾登遺跡第3地点3』(財)北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室  
牧尾義則・讃岐和夫 1979『野田山遺跡』大分市教育委員会・三井不動産株式会社  
水ノ江和同 1998『九州における押型土器の地域性』『九州の押型土器－論攷編－』縄文集成シリーズ3 九州縄文研究会  
水ノ江和同 2012『九州縄文文化の研究－九州からみた縄文文化の枠組み－』雄山閣  
村川逸朗 1992『弘法原遺跡』吾妻町教育委員会  
村川逸朗 1994『畑中遺跡』鳥原市教育委員会  
村子晴奈 2019『浚松遺跡・源次広野遺跡・永中道遺跡』雲仙市教育委員会  
森 醇一朗 1974『白蛇山岩陰遺跡』伊万里市教育委員会  
八木澤一郎 1997『上野原遺跡第3工区 国分市』『鹿児島県の縄文文化』国分上野原シンポジウム実行委員会  
山崎純男・平川裕介 1986『九州の押型土器』『考古学ジャーナル』267 ニューサイエンス社  
柳田裕三 2018『西北九州の縄文時代草創期土器群』『九州旧石器(縄文時代開始期の土器群と石器群一移行期の地域動態を探る一)』第21号 九州旧石器文化研究会  
山下大輔 2005『下剥峯式および桑ノ丸式土器の再検討』『南九州縄文通信』No.16 南九州縄文研究会  
山下大輔 2009『南九州の押型土器編年に関する一考察』『南九州縄文通信 南の縄文・地域文化論考』No.20 上巻 南九州縄文研究会  
山下大輔 2012『宮崎の中原式土器』『九州縄文時代早期研究会』第5号 九州縄文時代早期研究会  
山下大輔 2015『南九州における押型土器研究の現状と課題』『貝殻文と押型文』平成26年度宮崎考古学会研究会資料集 宮崎考古学会県南例会実行委員会  
山下大輔 2015『「論文「西北・西九州における貝殻文円筒形土器と押型土器の様相」の意義について」を読んだコメント』『肥前史談叢』肥前史談叢の会  
山下大輔 2019『南九州における円筒形押型土器の編年的位置づけについて－弘法原式土器との関係からみた評価－』『ナベの会考古学論集 和の考古学－藤田和尊さん追悼論文集一』第1集 ナベの会  
渡邊康行 1999『一野式・弘法原式土器の設定をめぐって』『西海考古』創刊号 西海考古同人会  
綿貫俊一編 1996『横手遺跡群発掘調査報告書』(陽弓遺跡) 大分県文化財調査報告書第93集 大分県教育委員会  
綿貫俊一 1999『九州の縄文時代草創期末からの早期の土器編年に関する一考察』『古文化談叢』第42集 九州古文化研究会

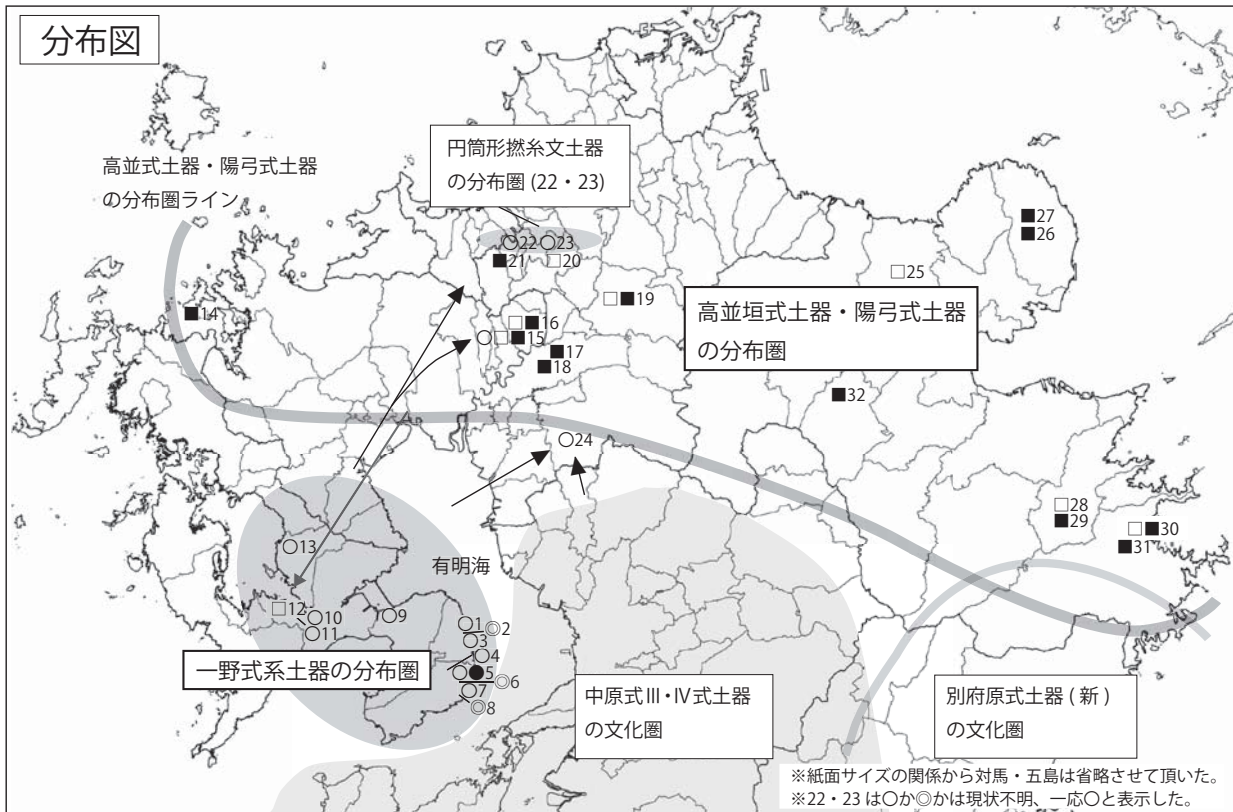




第 1 図 縄文時代早期前半の九州北部の土器編年表 (大坪 2020a)



第2図 下末宝式土器と陽弓式土器



**【主要遺跡】**

**長崎県**

- |      |             |           |          |
|------|-------------|-----------|----------|
| 島原市  | ： 1 一野遺跡    | 2 畑中遺跡    | 3 稗田原遺跡  |
| 南島原市 | ： 4 古作遺跡    | 5 下末宝遺跡   | 6 上畔津遺跡  |
|      | 7 大崎鼻遺跡     | 8 宮野遺跡    |          |
| 雲仙市  | ： 9 浚松遺跡    |           |          |
| 諫早市  | ： 10 西輪久道遺跡 | 11 鷹野遺跡   | 12 長牟田遺跡 |
| 大村市  | ： 13 岩名遺跡   | 14 鷹島海底遺跡 |          |

**佐賀県**

- |       |             |     |           |
|-------|-------------|-----|-----------|
| 吉野ヶ里町 | ： 15 戦場ヶ谷遺跡 | 鳥栖市 | ： 16 西田遺跡 |
|-------|-------------|-----|-----------|

**福岡県**

- |      |              |         |
|------|--------------|---------|
| 久留米市 | ： 17 安国寺遺跡   | 18 横道遺跡 |
| 朝倉市  | ： 19 柿原Ⅰ縄文遺跡 |         |
| 筑紫野市 | ： 20 原遺跡     |         |
| 那珂川市 | ： 21 深原遺跡    |         |
| 春日市  | ： 22 原ノ口遺跡   |         |
| 大野城市 | ： 23 本堂遺跡    |         |
| 八女市  | ： 24 白木西原遺跡  |         |

**大分県**

- |     |              |           |
|-----|--------------|-----------|
| 宇佐市 | ： 25 中原遺跡    |           |
| 国東市 | ： 26 陽弓遺跡    | 27 成仏岩陰遺跡 |
| 臼杵市 | ： 28 市場久保遺跡  | 29 大久保遺跡  |
| 佐伯市 | ： 30 佐伯門前遺跡  | 31 東台遺跡   |
| 九重町 | ： 32 二日市洞穴遺跡 |           |

**凡例**

円筒形捺糸文土器(捺糸文含む)

- |    |         |
|----|---------|
| 記号 | 土器型式    |
| ◎  | ：一野Ⅰ式土器 |
| ○  | ：一野Ⅱ式土器 |
| ●  | ：下末宝式土器 |

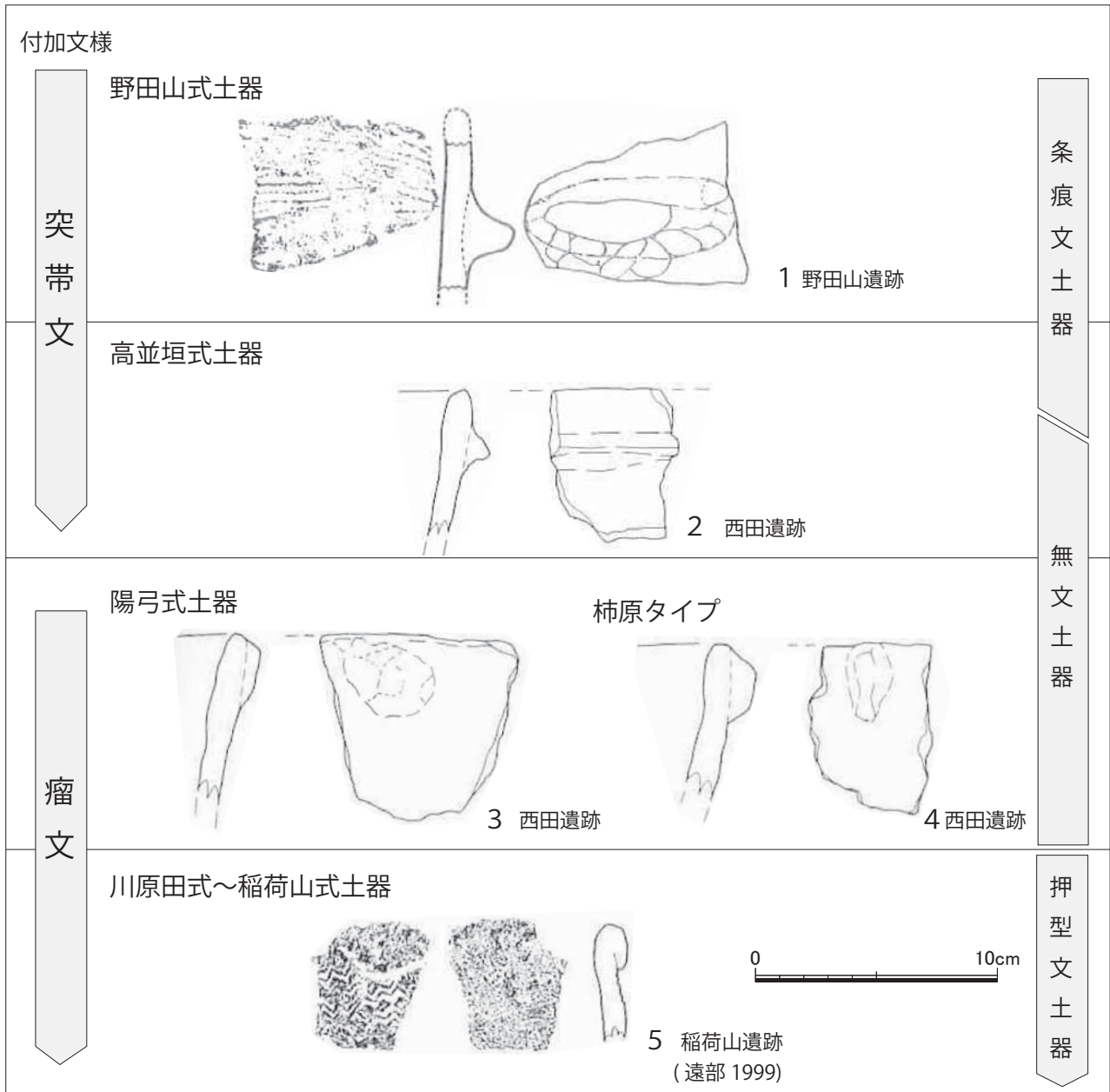
条痕文、無文土器

- |   |         |
|---|---------|
| □ | ：高並垣式土器 |
| ■ | ：陽弓式土器  |
- 今回、柿原タイプは陽弓式の範疇に含める。

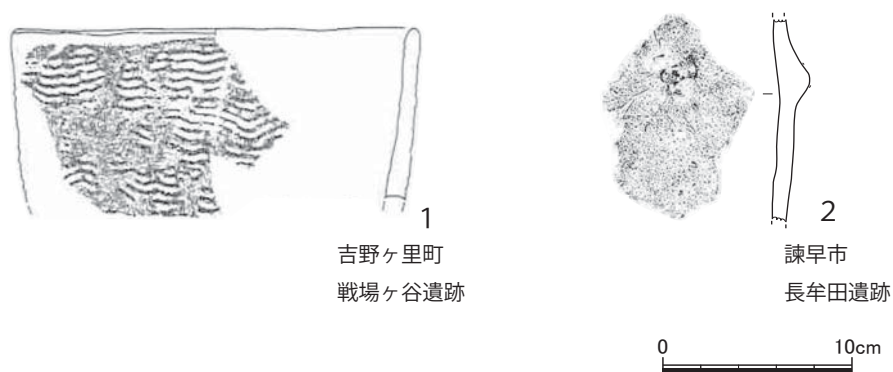
**【説明】**

上記の土器型式の記号と、下記出土遺跡名の組み合わせ(例：○7)により、分布図の出土遺跡の箇所に表示している。

**第3図 九州北部における一野式系土器と併行期土器の主要遺跡分布図**



第4図 突帯文から瘤文への変遷図



第5図 客体の可能性がある土器

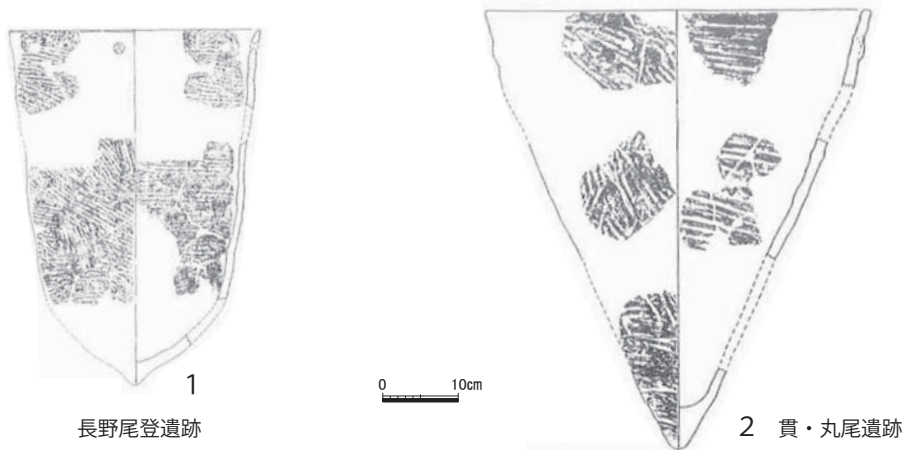
表1 筆者の編年観（年代観）推移表

大分編年	大坪編年観 推移					
	2007年段階	2009年段階	2012年段階	2015年段階	2016年段階	2020年 確定
陽弓式土器	—	—	—	—	—	下末宝式土器
川原田式土器	一野式土器	一野式土器	一野式土器	一野式土器	一野Ⅰ式土器	弘法原式土器
稲荷山式土器		瘤を付す土器	下末宝式土器	下末宝式土器	一野Ⅱ式土器	
早水台式土器	弘法原式土器	弘法原式土器	弘法原式土器	弘法原式土器	弘法原式土器	
下管生B式土器		早水台式～ヤトコロ式土器と併行する土器	百花台・下末宝遺跡の一群(狭脚な平底を有する押型文土器)	百花台Ⅰ式土器	百花台Ⅰ式土器	百花台Ⅱ式土器
田村式土器				百花台Ⅱ式土器	百花台Ⅱ式土器	百花台Ⅲ式土器
ヤトコロ式土器		百花台Ⅲ式土器	百花台Ⅲ式土器	百花台Ⅲ式土器	百花台Ⅲ式土器	
手向山式土器	手向山式土器	手向山式土器	手向山式土器	手向山式土器	手向山式土器	手向山式土器

表2 九州縄文時代早期土器編年表（大坪 2020a・b に加筆）

	西北・西九州(長崎・佐賀)	北部九州(福岡)	二洞六	東九州(大分)	中九州(熊本)	宮崎	南九州(鹿児島・宮崎)
早期前葉	小ヶ倉式土器	松木田式土器 浦江式土器	第5・6文化層	野田山式土器 政所式土器	中原Ⅰ式土器 中原Ⅱ式土器	前平式土器 別府原土器(古) /政所式土器	前平式土器 加栗山式土器 吉田式土器
	貝殻文円筒形土器 一野Ⅰ式土器 一野Ⅱ式土器 下末宝式土器	一野Ⅰ式土器(燃糸文土器含) 一野Ⅱ式土器(燃糸文土器含) 無文土器 陽弓式土器		第4文化下層	高並垣式土器(中原式土器) 陽弓式土器(東台式土器)	中原Ⅲ式土器 中原Ⅳ式土器 中原Ⅴ式土器	別府原式土器(新)
中葉	円筒形押型文土器	川原田式土器 稲荷山式土器	第4文化上層	川原田式土器 稲荷山式土器	弘法原式土器	下剥峯式・桑ノ丸式土器	下剥峯式・桑ノ丸式土器
	狭脚な平底の深鉢形押型文土器	早水台式土器 下管生B式土器 田村式土器 手向山式土器		第3文化層	早水台式土器 下管生B式土器 田村式土器 (ヤトコロ式土器) 手向山式土器	早水台式併行期土器 下管生B式併行期土器 沈目式土器 石清水式土器 手向山式土器	早水台式併行期土器 下管生B式併行期土器 田村式併行期土器 手向山式土器
後葉	妙見・天道ヶ尾式土器 平栴式土器 以降、省略						

本稿、研究対象の土器



第6図 北九州の条痕文土器

# 大形成人用甕棺墓分布周縁地域の社会

—長崎県本土部の弥生時代社会—

古門 雅高

## はじめに

長崎県本土部の弥生時代研究において、墳墓や土器など、個別の遺構や遺物の研究はこれまでも行われてきたが、遺構・遺物の背景にある社会や、精神文化にまで及んだ研究は少なかった。

本稿では、集落と墓・祭祀・生業・威信財という4つの観点から、これまでの発掘調査成果を整理・検討し、遺構・遺物の背景にある本県本土部の弥生社会や、当時の精神文化の考察の足掛かりを得たいと考えている。

まずは、長崎県本土部で集落と墓地が合わせて調査された遺跡を中心に検討し、当地における弥生時代の一般的な集落の姿を復元する。

次に墓地を検討し（註1）、特に集落から離れて形成された共同墓地の分析を行うことにより、集団の在り方を考察する。

また、祭祀の研究もこれまで少なかったため（註2）、墓地に残された祭祀遺構や、集石遺構を中心に弥生時代の葬送に伴う祭祀の様相を明らかにする。さらに住居跡から出土する石器や鉄器などの生産道具を検討し、当地の弥生時代の生業の概要を明らかにしていく。

最後に威信財を検討し、集団内の階層上位者の出現とその後の動向を分析する。

以上のように、最近の発掘調査成果を基に、集落と墓・祭祀・生業・威信財という4つの観点から、本県本土部の弥生社会の姿を考古学的に素描しようと試みたのが本稿である。

なお、遺構などの時期の表記にあたっては、基本的に土器様式名で記し、必要に応じて「中期前半」などの相対年代を用いた。

## 1. 本県本土部の地域区分（第1図）

長崎県は、離島を含む県域の中に九州島がすっぽりと入る広さを持ちながら、律令時代の本土部には、松浦郡・彼杵郡・高来郡の、わずか3郡しか設置されていなかった。しかも松浦郡にいたっては隣県の佐賀県にも及ぶ広さである。律令時代の郡の領域が、人文的・地理的な要因によって形成されたものであり、弥生時代にも適用できるのであれば、本稿の地域区分もこれに准じてよいと考える。本県のように海に囲まれ平野に乏しい地域では、陸より海が生活の基盤となる。そのような意味で、律令制下の当地の郡域は、海域ごとにまとまりを見せており、近世まで見通しても、この領域区分が地域史に通底していることが理解される。

したがって本稿では、上記のような領域が弥生時代まで遡っても、地域史的に有効であろうと仮定した上で論を展開する。その際、旧郡名を「マツラ」「ソノキ」「タカク」と片かな表記とした上で、マツラに属する平戸島（平戸市）を中心とした地域を旧郷名である「庇羅」にちなみ「ヒラ」と呼ぶ。さらにソノキの西部（西彼杵半島西部及び長崎半島西部）は、縄文時代前期より五島列島と土器や石器さらに埋葬形態に共通性がみられるため、旧郷名の「スカ（周賀）」を用い、その五島列島は本土部として整理して「チカ（値嘉）」と呼称する（第1図）（註3）。

## 2. 長崎県本土部の弥生土器編年（表1）

弥生時代の時間軸は弥生土器の編年を用いるが、本県本土部の弥生時代の土器編年は、未だ十分整備されているとは言い難い。早期から前期にかけては、中尾篤志が新編大村市史の中で大村湾沿岸に限定して編年案を掲載しており、本稿でもそれに准じることとする（中尾 2013）。中期は、本県本土部が須玖式土器様式及び黒髪式土器様式の分布範囲にあるため、北部九州、中九州の編年を援用する。後期は、底部に脚台を持つ甕形土器において、本県独自の展開をするようだが、実態は、まだ明らかになっていない。したがって、本県本土部で出土する北部九州の高三瀦式土器様式と下大隈式土器様式を構成する各形式及びその型式と、県内各遺跡の遺構出土土器を比較・検討し、両様式との併行関係を考慮しながら、時期決定を行う。

以上の方針のもとに、筆者は九州新幹線西九州ルート建設に伴う発掘調査の報告書の中で、表1に示した時期区分を披歴したので、本稿でもこれを用いることにする（古門 2020a）。

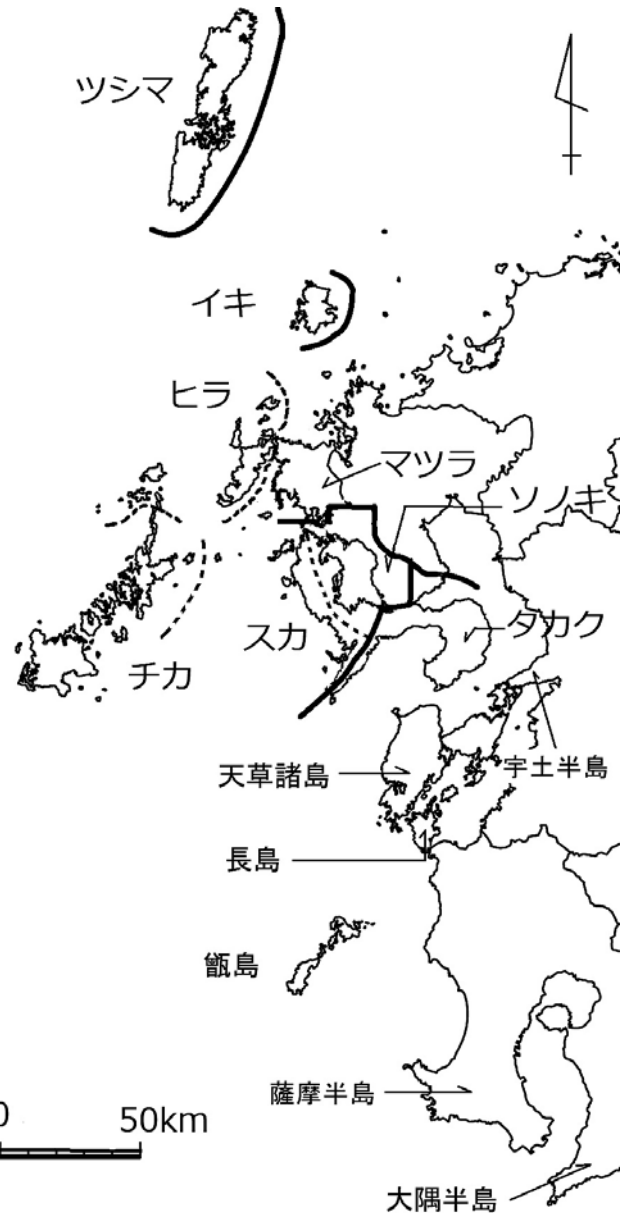
## 3. 長崎県本土部の弥生時代社会研究史

本県本土部の弥生時代社会の考察は、時期や地域を限定したものは散見されるが、本県本土部の弥生社会を時系列で検討した論攷はない。

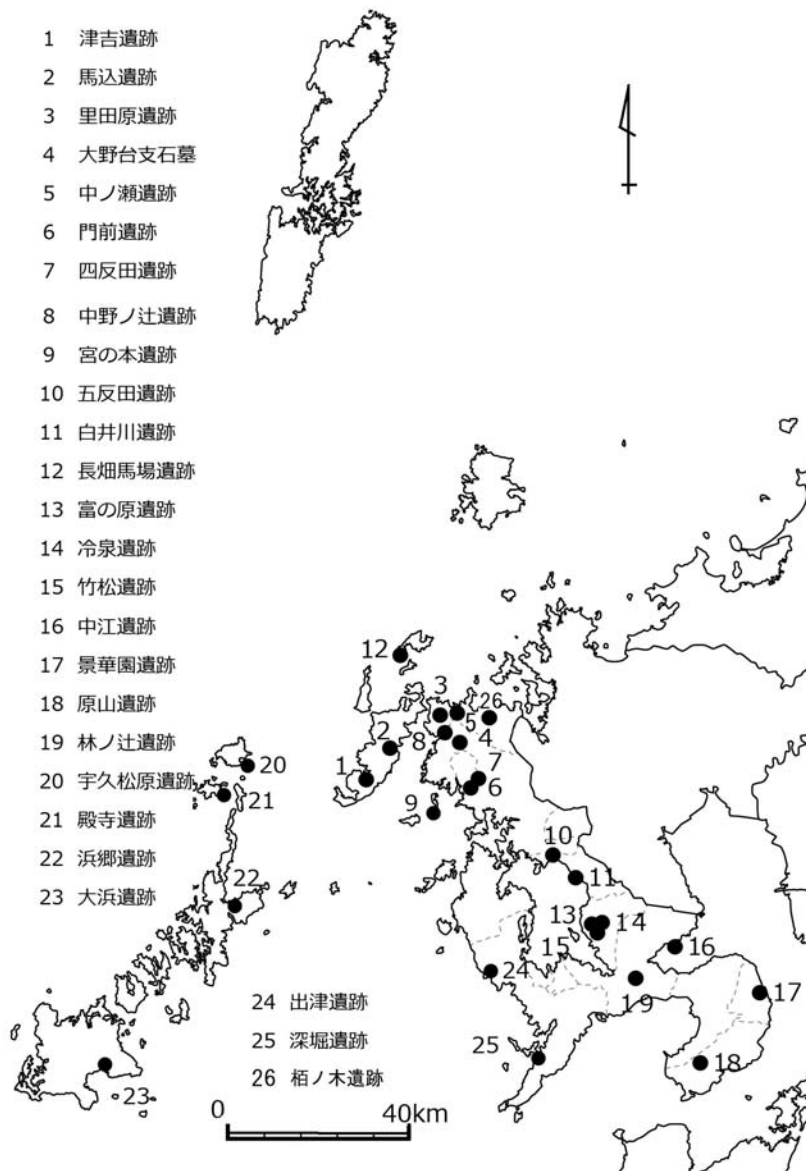
宮崎貴夫はチカ（五島列島）の弥生時代の埋葬習俗を考察した際に、「伝統的な二枚貝貝輪や垂飾品などの身飾が共同体成員に等質的に所有されるが、青銅祭器などの権威を示す威信財の集中や階層分化が進行していなかった。」と指摘した（宮崎 1995：p. 111）。さらに五島列島の中期後半の遺跡数の激減をとらえて、海水準の上昇によって海浜集落の成立基盤が失われ、当地から玄界灘沿岸へ人々が移住した結果であると主張した（宮崎 2019）。

大庭孝夫は北部九州の縄文晩期から弥生前期の墓制を検討する中で、本県の大野台遺跡（第13図）や原山支石墓群（第14図）などで、共同墓地の墳墓が東西方向に主軸をもつ列墓状をなし、一見集団全体の規制が強いように映るが、実際は、支石墓10基程度の小群ごとの規制が強いことを指摘した（大庭 2000）。

さらに支石墓群の立地と基数の多寡に着目し、海岸部に立地して基数が少ない支石墓群は漁労を生業とする集団で、高所に立地し基数も多い支石墓群は、農耕を生業とする集団という解釈を示した。20年前の学説であるが、大庭の論攷以降、本県では南島原市で西鬼塚遺跡が調査されたのみで、当時



第1図 本稿の地域区分と地域呼称



第2図 本稿で扱う遺跡の位置

と比べて支石墓の数は大きく増えていない。したがって今でも通用する見解であると同時に検証すべき考察と考える。

同じく弥生早期の支石墓を分析した中園 聡は、本県を含めた西北部九州の縄文晩期から弥生前期の社会の特質を下記のように指摘した。「西北部九州においては、いち早く朝鮮半島の文化要素が導入されたにもかかわらず、渡来的形質が定着することもなく、また少なくとも弥生時代前期以降において政治的優位性をもつこともなく、環濠集落などもさほど発達しなかった。」さらに「西北部九州は弥生時代前期以降、集落構造、埋葬における改葬・集骨、縄文人的形質の強さなど様々な面で、九州の中でも相対的に「弥生化」の度合いが低かった」と述べている（中園 2004：p 110）。中園は、西北部九州の保守性、弥生化の遅れな

どの原因を当時の西北部九州の「統率者」が社会構造維持のためにとった異文化要素の導入という戦略もしくは志向性にあつたとしている。前半の歴史的な事実は、同氏の指摘の通りであると考えられるが、後半の西北部九州の弥生化の低さの原因については議論の余地があろう。

#### 4. 集落と墓地

##### (1) 縄文時代晩期の集落と墓地

本県本土部の弥生時代集落と墓地を検討する前に、前代の縄文時代晩期の状況を見ておく。本県で縄文時代の竪穴住居跡が確認されたのは、2008年（平成20）の中尾篤志の集成によると6遺跡37棟と極めて少なく、その内訳は、早期が鷹野遺跡（諫早市）の4棟、後期が佐賀貝塚（対馬市）の1棟と筏遺跡（雲仙市）の1棟、そして小原下遺跡（島原市）の28棟で、晩期は嶽ノ下A遺跡（大村市）の2棟と四反田遺跡（佐世保市）の1棟である。（中尾 2008）。



表1 長崎県本土部の土器編年（古門 2020a）

時代	時期区分	竹松遺跡の 時期区分	土器様式との併行関係	
縄文	晩期	I 期	古閑式土器併行	
		II 期	黒川式土器併行	
弥生	早期	III a 期	突帯文土器	
		III b 期	突帯文土器	
	前期	IV a 期	突帯文土器 + 板付系土器	
		IV b 期	板付系土器 + 亀の甲タイプの甕	
	中期	V 期	城ノ越式土器併行	
		VI a 期	須玖 I 式土器	古段階
		VI b 期	併行	新段階
		VII a 期	須玖 II 式土器	古段階
		VII b 期	併行	新段階
		後期	VIII a 期	高三瀨式土器併行
	後期	VIII b 期	下大隈式土器併行	
		VIII c 期	西新式土器古段階併行	
初頭		0 期, I 期, II 期	タケ里式・布留 0 式・同 1 式土器併行	
古墳	前期	III 期	布留 2 ~ 4 式土器併行	

以上の調査実績を見る限り、資料数が少ないことや、調査面積が狭いこと、時期的・地域的な偏りが見られることなどの理由から、総括的な検討は時期尚早と判断した。

そこで、本稿では、最近、九州新幹線西九州ルート建設に伴って発掘調査された竹松（たけまつ）遺跡の調査成果を本県本土部の縄文晩期の典型的な集落例と仮定して、論を進めることにしたい。同遺跡では、縄文晩期の住居跡と墓地が併せて調査されている（長崎県教委編 2019など）。

竹松遺跡は郡（こおり）川が形成した大村扇状地の扇央部分に位置する標高10<sub>メートル</sub>ほどの複合遺跡である。縄文後期後半の埋甕も出土しており、その頃から継続する遺跡であると見られる。円形の竪穴建物跡が、TAK201404調査区から2棟（SC 2, SC 3）、埋甕が同調査区から2基（SK 9, SX 2）出土した（第3図）。埋甕は住居跡と近い距離で、かつ同時期（II期 = 黒川式土器古段階併行）である。したがって縄文晩期では1～3棟の竪穴住居に近接して埋甕が伴う状況を本県本土部の縄文晩期集落の一般的な姿ではないかと仮定する（註4）。

## (2) 弥生時代早期の集落と墓地

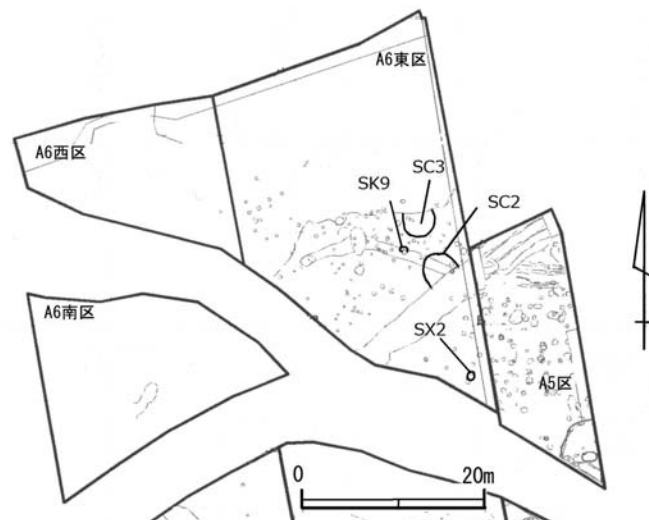
次に本県本土部の弥生時代の集落と墓地を検討する。本県の弥生早期といえば、支石墓が代表的な墓制であるが、集落と共に調査された事例は、佐世保市の四反田遺跡のみで（第4図）、内訳は支石墓1基、住居跡1棟である。資料不足は否めないため、集落と墓地の関係の考察は留保せざるをえない。

(3) 弥生時代前期の集落と墓地

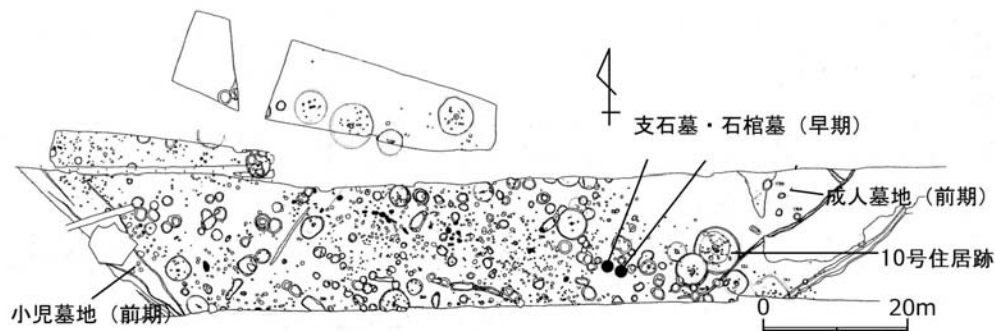
本県本土部で弥生時代前期の集落と墓地が併せて調査された遺跡は、佐世保市の四反田(したんだ)遺跡、平戸市の津吉(つよし)遺跡、同市の馬込(まごめ)遺跡である。

四反田遺跡からは松菊里型住居を含む竪穴住居跡21棟、土坑100基、屋外炉跡29基、掘立柱建物跡(註5)、その他、石棺墓、支石墓、土器棺墓、土坑墓、水田跡等が発見された(第4図)(佐世保市教委編 1994)。10号住居跡では板付系土器と亀の甲タイプの突帯文系土器が出土しており、IV b期(板付系土器が主体で、亀の甲タイプの突帯文系土器が加わる時期 表1参照)に位置づけられる。同住居跡からは城ノ越式土器も若干出土しており、廃絶時期は中期初頭と考える。墓地は成人の墓地と小児の墓地がそれぞれ分かれて、住居からやや離れて営まれた。

平戸市の馬込遺跡(平市教委編 1993, 塩塚 1999)は、平戸島南部の馬込川の河岸段丘の低丘陵と周辺の沖積地の広範囲に広がる。竪穴住居跡9棟や土器棺14基、箱式石棺4基からなる墓地などが調査されている(第5図)。標高は9m前後で、墓地は集落とはやや離れた場所に築かれている。遺跡から出土した土器はIV b期(表1)である。四反田遺跡と馬込遺跡は、ほぼ同時期に営まれ、住居が環状に分布しているところや、住居からやや離れた場所に墓地が営まれることなど、集落構造に類



第3図 竹松遺跡 TAK201404調査区A5, 6小区の縄文時代遺構配置図(長崎県教委編 2019 加筆)



第4図 四反田遺跡遺構配置図(大庭 2000 加筆)

似したところがある。このことは、川道寛が既に指摘しているところである（川道 1997）。四反田遺跡の調査者である久村貞男は、同遺跡を「福岡平野の弥生勢力の地方拠点的な遺跡であるような気がしてならない」と評している（久村 1994: p. 198）。弥生前期に新たに波及した文化（「板付系文化」と仮称する）に影響を受け、それに対応した集落と評価できる。

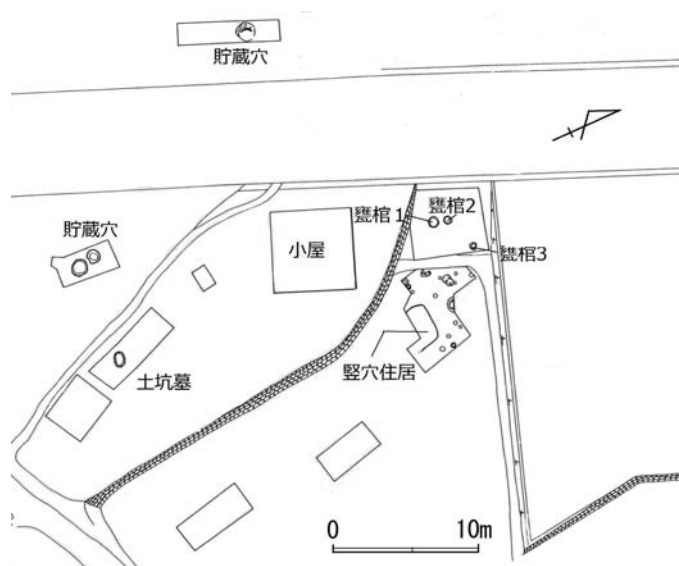
両遺跡において、同時期に存在した住居の数を推定することは極めて困難であるが、仮に四反田遺跡で環状に分布する集落の半分を調査していたとすれば、集落存続期間である弥生前期後半を通じて、のべ40棟ほどの集落規模になる。馬込遺跡も同じく弥生前期後半を通じて、のべ20棟ほどの集落規模があったと推定される。

しかし、この時期のすべての集落がこのような集落規模を見せるのではない。その具体例を平戸市の津吉（つよし）遺跡に見る。津吉遺跡（平戸市教委編 1986）は平戸市の南西に位置し、標高は7mほどである。住居跡1棟、貯蔵穴3基、土器棺墓3基、土坑墓1基などの遺構とともに土器・石器・自然遺物などが多く出土した（第6図）。竪穴建物跡から出土した土器は、亀の甲タイプの突帯文系土器が中心でIV b期（表1）にあたり、土坑墓は城ノ越式土器併行期、貯蔵穴はIV a期（板付系土器と突帯文系土器が共伴する時期）に相当する。貯蔵穴からイチイガシ、アラカシ、スダシイなどのドングリ類が検出されている。土器棺墓などの墓域は住居跡に接近した場所で発見されており、住居跡が1棟であることなど、先にあげた大村市竹松遺跡の縄文晩期の集落に近い在り方である。

津吉遺跡の形成時期はIV a期（表1）



第5図 馬込遺跡遺構配置図（平戸市教委編 1993 加筆）



第6図 津吉遺跡遺構配置図（平戸市教委編 1986 加筆）

で、四反田遺跡や馬込遺跡が廃絶した城ノ越式土器併行期（中期初頭）も存続していたにもかかわらず、発見された住居跡は1棟のみであった。

以上のことから、四反田遺跡・馬込遺跡の集落は、新来の「板付系文化」をこの「マツラ」および「ヒラ」の地域で、いち早く展開させた集落で、津吉遺跡の集落は縄文時代晩期以来の生活形態を踏襲したため、集落規模も前代のままで推移した集落と評価できよう。

四反田遺跡・馬込遺跡にみる前代より拡大した集落規模は、人口増加の反映であり、増加した人口を維持できる新たな生業形態（水田耕作）を獲得したことを意味するのではないかと考える。

#### (4) 弥生時代中期の集落と墓地

本県本土部で弥生時代中期の集落と墓地が併せて調査された遺跡は、大村市の富の原（とみのはら）遺跡と平戸市の長畑馬場（ながはたばば）遺跡である。長畑馬場遺跡は県北部に位置する平戸市の離島である的山大島（あづちおおしま）」に位置するが、本土部として整理した。

富の原遺跡（大村市教委 1987）は、郡川が形成した大村扇状地の扇端に位置し、標高は8mほどである。これまでの調査で竪穴建物跡、掘立柱建物跡群、箱式石棺墓、大形成人用甕棺墓、土器棺などが発見されている。竪穴住居や掘立柱建物周辺に墳墓は見られないので、集落と墓地が分離していたことが分かる。環濠の掘削はⅣb期（表1）と推測され（大村市教委編 2009）、須玖Ⅱ式土器古段階併行期には埋まり始めている（大村市教委編 2004）。住居跡や掘立柱建物跡から出土する弥生土器は須玖Ⅱ式土器古段階併行期までであり、須玖Ⅱ式土器新段階併行期以降の集落が明確ではない。

かたや、平戸市の長畑馬場遺跡（大島村教委編 2000）は、的山大島の南西部に突き出た半島の中央部に立地する。標高は35.45mで、低位溶岩台地上のなだらかな丘陵に営まれている。

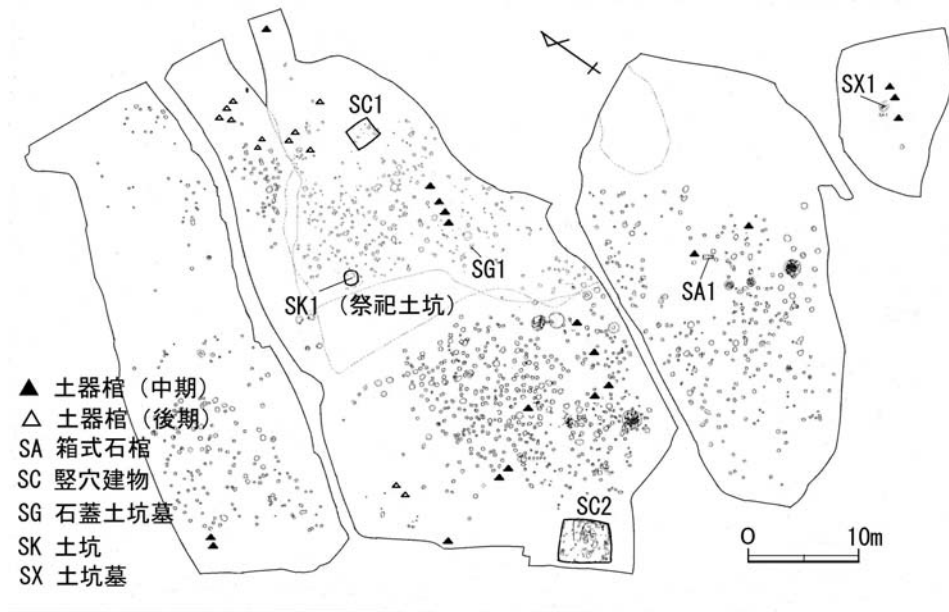
主な遺構としては、竪穴建物跡2棟、石棺墓1基、土器棺墓33基、土坑墓1基、石蓋土坑墓1基、祭祀土坑1基などが発見されている（第7図）。1号住居跡（SC1）床面出土土器は、須玖Ⅰ式土器古段階である。2号住居跡（SC2）の床面からは布留式土器（柳田編年Ⅱb期）が出土しており、住居の廃絶はこの時期と考えられる。

2号住居跡は何回かの建て替えの跡があり、調査者は弥生後期の住居跡とみている。したがって長畑馬場遺跡は、同じ場所に建て替えながら1～3棟ほどの集落規模であったと推定しておく。

同遺跡の土器棺墓は、須玖Ⅰ式土器新段階から下大隈式土器古段階併行のものまで連続して存在するので、集落もその時期のものがあつたと推定される。墓地は、中期には住居に近接した土器棺の墓地と、住居から離れた墓地が何か所かに散在している。調査担当者も指摘しているが、後期は住居と墓地が離れる状況が見て取れる。成人墓は、箱式石棺1基、土坑墓1基しか発見されなかった。石棺の覆土から出土した土器は須玖Ⅰ式土器古段階併行である（註6）。このような成人墓の少なさも集落規模を反映したものかも知れない。

次に、長畑馬場遺跡と同規模の集落として、松浦市の中ノ瀬遺跡をとりあげる（第8図）。同遺跡は今福川の右岸の河岸段丘上に立地し、標高は25mほどである。墓地は発見されていないが、竪穴建物跡4棟が検出されており、報告者は放射性炭素年代測定の結果からSH1（古）を中期後半頃、SH1（新）は中期後半以降、SH2は中期後半頃、SH3は中期前半頃に位置づけている（長崎県教委編 2012）。筆者は住居跡から出土した弥生中期土器から、これらの住居跡の時期を須玖Ⅰ式土器新段階併行と考えている。住居の周辺に墓地は発見されていないため、集落とは離れた場所に営まれたと思われる。

以上のように中ノ瀬遺跡の集落は、竪穴住居の数からみて、同時期には1～3棟規模であったと推察される。



第7図 長畑馬場遺跡遺構配置図 (大島村教委編 2000 加筆)

#### (5) 弥生時代後期の集落と墓地

本県本土部において弥生時代後期の集落と墓地が併せて調査された遺跡には、大村市竹松遺跡と東彼杵町白井川（しらいがわ）遺跡がある。

竹松遺跡は先述したように、郡（こおり）川が形成した大村扇状地の扇中央部分に位置する標高10<sup>メートル</sup>ほどの複合遺跡である。竪穴建物跡30棟、掘立柱建物跡10棟、石棺墓32基、土器棺墓22基、土坑墓12基、石蓋木棺墓2基、祭祀土坑2基が発見された。竪穴建物跡は4～13棟で1グループを形成し、4グループが存在する。

掘立柱建物跡は竪穴建物跡に近接して建てられる場合と、離れて建てられる場合がある。また、高三瀨式土器併行から下大隈式土器併行の共同墓地がある（第21図）。

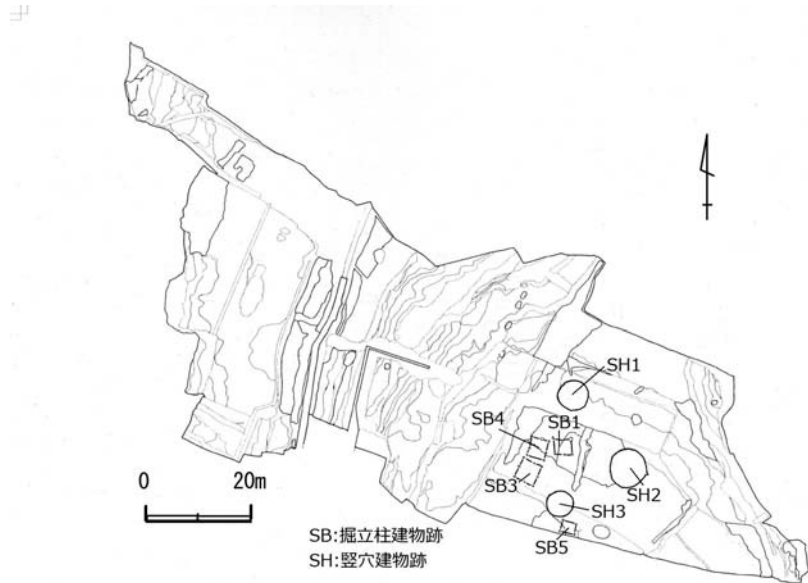
白井川遺跡（東彼杵町教委編 1990）は、彼杵川の右岸に立地し、同川が形成した三角州に立地する（第9図）。標高は5.5<sup>メートル</sup>ほどである。遺構は竪穴建物跡3棟、石棺墓25基、石蓋土坑墓6基が発見されている。

同遺跡の時期は、竪穴住居跡から出土した土器からみて、筆者は西新式土器古段階併行（庄内式土器併行）期と考えている（註7）。同時期に何棟が存在したか、明確には分からないが、1～3棟が想定できる。

同遺跡には共同墓地があり（第9図）、調査担当者は石棺の大きさが富の原遺跡の石棺規模と同程度であることを根拠に、所属時期は中期と認識している。しかし、土器棺墓が見られず（註8）、石蓋土坑墓が見られること、石棺の側壁の板石の積み方に「鎧積み」が見られること（註9）、さらに今回新たに作成した遺構配置概略図（第10図）を見る限り、石棺の長軸（主軸）が不揃いであることから（註10）、筆者はこの共同墓地が作られたのは弥生後期と考える。したがって、隣接する竪穴建物跡とほぼ同時期と判断した。

#### (6) 古墳時代初頭の集落と墓地

本稿が扱う時代は弥生時代であるが、同時代の理解のためにも古墳時代初頭の集落と墓地をみてお

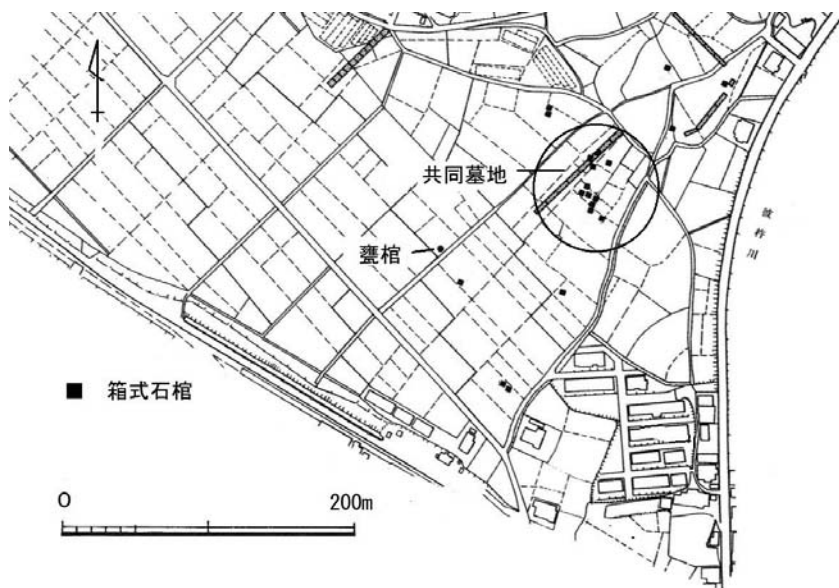


第8図 中ノ瀬遺跡遺構配置図（長崎県教委編 2012 加筆）

く。前述の大村市竹松遺跡では、TAK201403調査区からタケ里式土器併行期（古墳初頭）の竪穴建物跡5棟（SC1, SC3, SC5, SC7, SC8）が検出されており、隣接して同時期と思われる土坑墓が8基（ST1～ST8）見ついている。この土坑墓の上には後に円墳（竹松古墳）が造られる（長崎県教委編 2019）（第11図）。

また、同時期と見られる大村市冷泉遺跡でも集落と墓地が調査されている（大村市教委編 2003）。同遺跡は、郡川中流域の標高10mの沖積地に位置する。竪穴建物跡6棟、竪穴建物跡に隣接して箱式石棺墓3基、配石墓3基が確認された（第12図）。

竹松遺跡や冷泉遺跡の例から、弥生後期から古墳時代初頭にかけては、中期以前と比較して住居の



第9図 白井川遺跡の遺構配置図（東彼杵町教委編 1990 加筆）

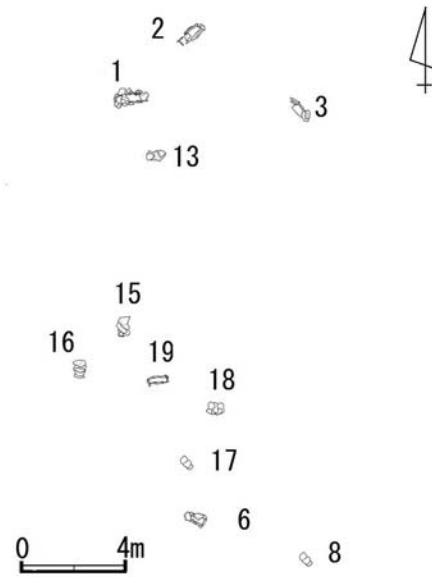
棟数が若干増えていることが分かる。

### 5. 県本土部の弥生時代の集落と墓地の在り方

ここまでの集落と墓地の検討から、本県本土部の弥生時代の集落と墓地の在りは、以下のように整理することができる。

弥生早期の支石墓の出現を契機に墓地の様相が縄文晩期の様相から大きく変化する。具体的には、共同墓地が出現し、成人墓に箱式石棺墓が採用され、小児墓は縄文晩期の埋甕から土器棺墓へと変容する。弥生前期になると、板付系文化の波及により、県北部で集落規模の拡大が一部に見られる。しかし、県内本土部の発掘調査で一度に検出された竪穴建物跡が1～6棟と少ないのが実態であるため、おそらく1～3棟ぐらいが基本的な集落規模で、居住者は家族・親族などの血縁者であったことを推測させる。

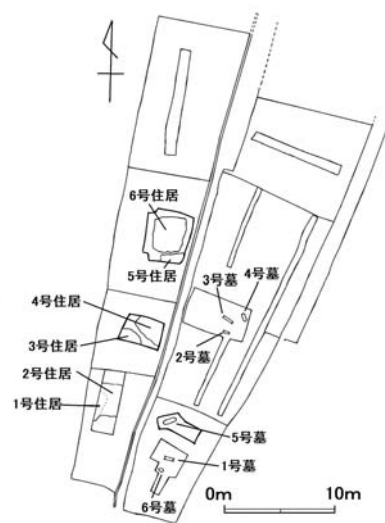
また、竹松遺跡の例から、時に、このような家族・親族で構成される集落が近隣に散在していたと考えられ、長崎県本土部の弥生時代集落は、住居密度が低く、きわめて散村的であることが改めて裏付けられたと言えよう。ただし、中期の富の原遺跡や同時期の島原市小原下遺跡の調査実績をみると、地域や時期によっては規模がやや大きい集落が存在したこ



第10図 白井川遺跡の共同墓地（概略図）第9図円内の拡大（東彼杵町教委編1990をもとに新たに作成しているが、石棺間の距離は実際と誤差がある）



第11図 竹松遺跡 TAK201403調査区の前古時代初頭の遺構配置図（長崎県教委編 2019 加筆）



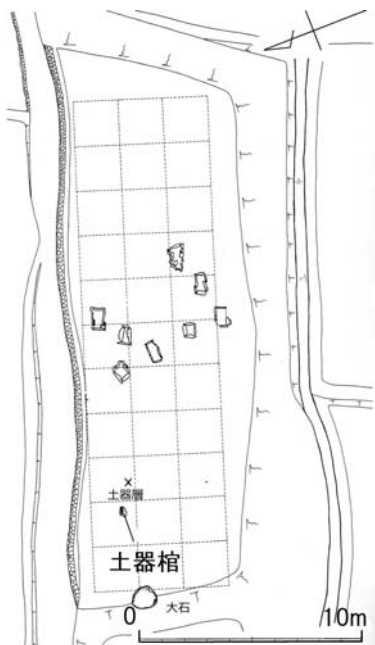
第12図 冷泉遺跡遺構配置図（大村市教委編 2003 加筆）

とが分かる（鳥原教委編 2011）（註11）。このように中期には地域によって環濠集落を中心に規模が大きい集落がみられ、さらに後期になると1集落あたりの住居数が増える様子も窺える。

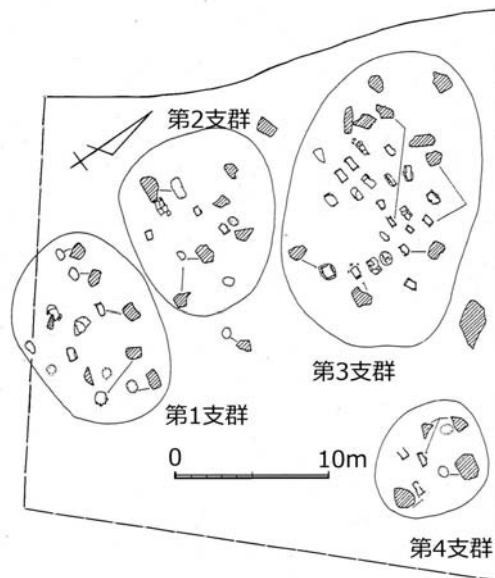
一方、本県本土部の弥生時代の墳墓は、長畑馬場遺跡や富の原遺跡のように、成人用の箱式石棺墓と小児用の土器棺墓で共同墓地を構成することが基本である。土器棺墓は早期の佐世保市の大野台遺跡C地点などで既に存在し（第13図）、後期の下大隈式土器併行期まで存続する。後期には他にも高三瀨式土器から下大隈式土器併行期の南島原市の今福遺跡（長崎県教委編 1986）や、下大隈式土器併行期の諫早市の西ノ角遺跡（長崎県教委編 1985）でも住居跡に隣接して土器棺墓が見られることから、土器棺墓が下大隈式土器併行期（後期後半）まで存続することは確実である。

一方で、下大隈式土器併行期から西新式土器併行期の川棚町の五反田遺跡（第17図）、西新式土器併行期の佐世保市の門前遺跡（第16図）（註12）、同時期の東彼杵町白井川遺跡（第9、10図）、古墳初頭の諫早市中江遺跡の共同墓地（第19図）、同じ時期の冷泉遺跡（第12図）、同時期かやや降る平戸市中野ノ辻遺跡（第18図）などの遺跡は土器棺墓を伴わない。

以上のことから、土器棺墓は早ければ下大隈式土器併行期のある時点、遅くとも西新式土器古段階併行期（庄内式土器併行＝弥生終末）には姿を消すと考えられる。

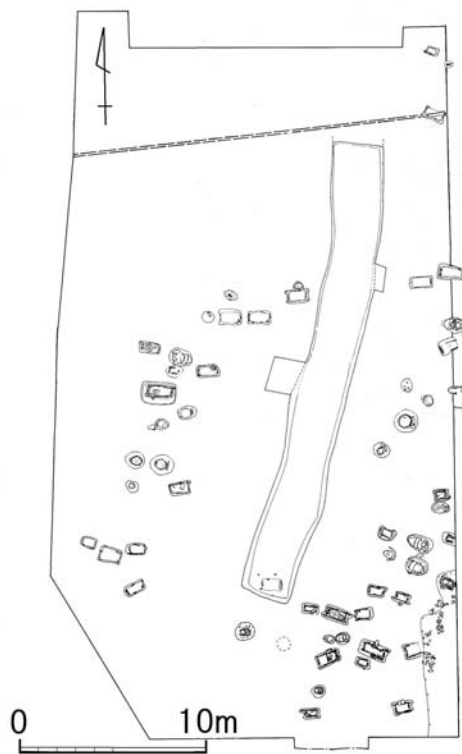


第13図 大野台遺跡C地点（大野台遺跡調査団 1974 加筆）

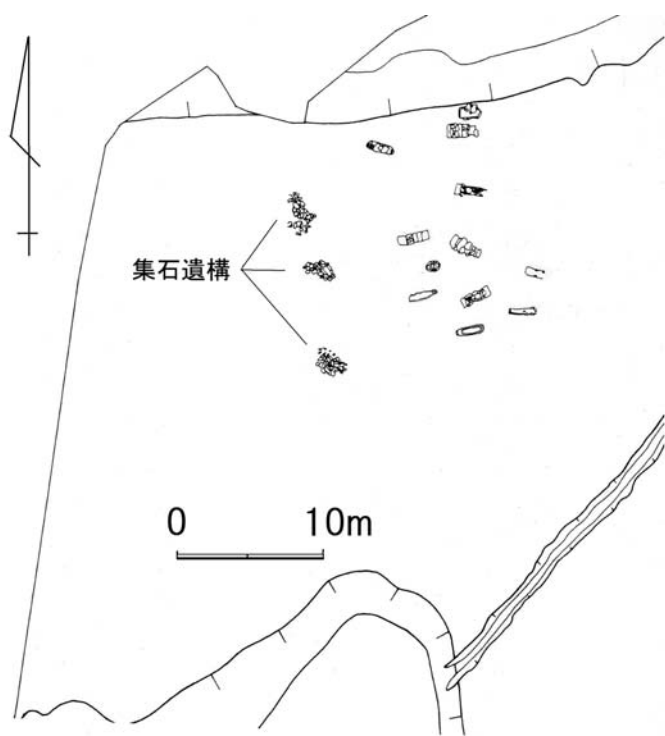


第14図 原山支石墓群第3支石墓群（大庭 2000 加筆）

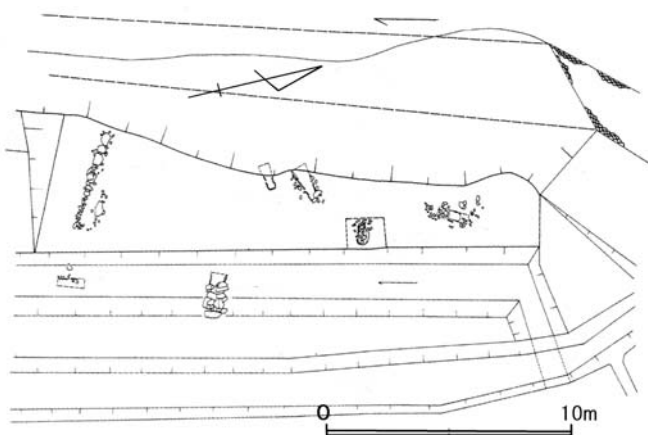




第15図 富の原遺跡B地点西 (大村市教委編 1995) 加筆



第16図 門前遺跡 (長崎県教委編 2006) 加筆



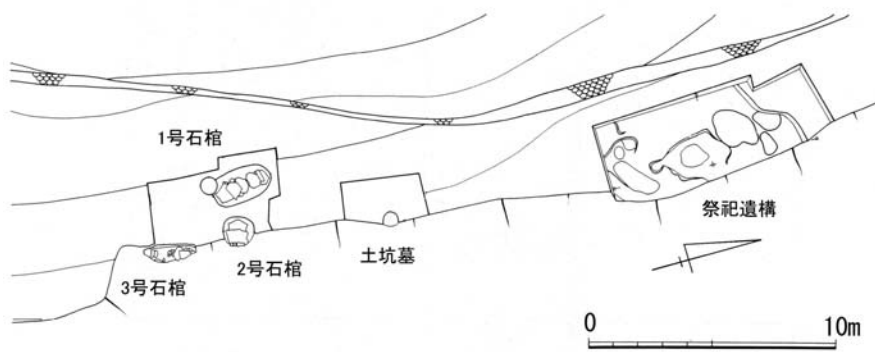
第17図 五反田遺跡 (長崎県教委編 1981) 加筆



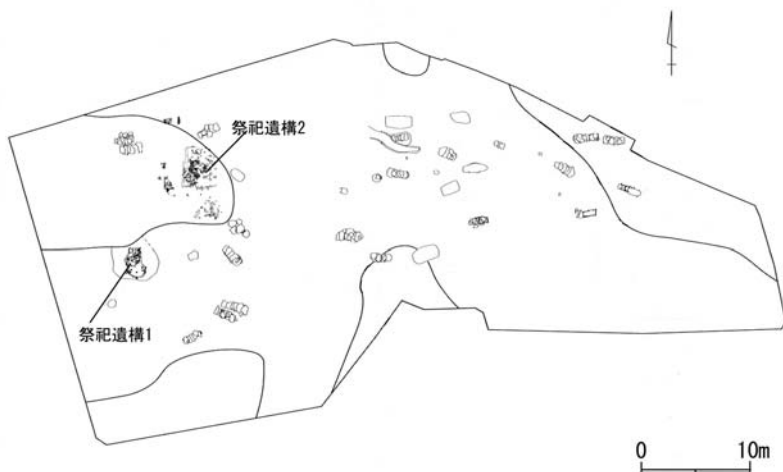
第18図 中野ノ辻遺跡 (田平町教委編 1992) 加筆



第19図 中江遺跡B地点遺構配置図 (高来町教委編 1993)



第20図 林ノ遺跡遺構配置図 (諫早市教委 1983編 加筆)



第21図 竹松遺跡 TAK201302①調査区の共同墓地 (長崎県教委編 2018 加筆)

## 6. 集落と墓地から見た本県本土部の弥生社会

ここからは、本県本土部の集落と墓地の検討に加え、墳墓の様相を異なる属性から、さらに検討する。

### (1) 副葬品、区画、厚葬からみた集団の問題

共同墓地の属性として、副葬品・区画・厚葬を検討する。本県本土部の共同墓地で副葬品がみられる墳墓は少なく、弥生前期では県北部の「チカ」や「ヒラ」,「マツラ」の共同墓地に限られる。中期になると「タカク」,「ソノキ」の共同墓地で副葬品が見られるようになる。しかし、前期同様、区画などはない。例えば須玖Ⅱ式土器併行期の富の原遺跡では、墓前祭祀も共同墓地の中で執行されており、副葬品をもつ墳墓も、他の墳墓との区画などは存在せず、共同墓地の中に埋没している(第24図)。このことは集団内の平等性のあらわれと評価できよう。共同墓地の中から離れて副葬品をもつ墳墓が現れるのは、西新式土器併行期の門前遺跡の墓地からであり(第16図)、後期になると同遺跡のように、共同墓地から離れた特定集団墓が出現するようである。

また門前遺跡では、実用的な鉄製品である鉄剣が1号石棺墓に副葬されていたが、この後、古墳時代初頭から前期の墳墓で実用的な鉄製品の石棺墓への副葬が顕著になる。諫早市林ノ辻遺跡1号石棺と2号石棺(第20図)では鉈、大村市冷泉遺跡3号石棺(第12図)では素環頭刀子、平戸市中野ノ辻遺跡19号石棺(第18図)では刀子、諫早市中江遺跡B地点(第19図)では鉄剣が出土している。これは集団内や集団間の階層差のあらわれと理解できる。

### (2) 大形成人用甕棺墓の分布

次に、厚葬としての大形成人用甕棺墓の分布を検討する。表2は本県本土部で出土した大型成人用甕棺を橋口編年に基づき、地域ごとに配置したものである。なお、大型成人用甕棺の大きさは、速水

表2 大形成人用甕棺の分布

◎大形甕棺 ○中形甕棺

時期 区分	地域区分 橋口編年	地域区分					タカク
		チカ	ヒラ	マツラ	スカ	ソノキ	
前期	K I a	○殿寺4号 ○宇久松原4号、5号、6号	○馬込9号				
	K I b	○殿寺2号					◎景華園
	K I c	◎浜郷2次7号	◎馬込11号				◎景華園
中期前半	K II a			◎里田原44C3号 ◎栢ノ木2号 ◎久保園2、4号			
	k II b	◎浜郷1966		◎栢ノ木1号 ◎久保園3号			◎北岡金毘羅祀 ◎大野原2号
	k II c						◎佃54区 ◎大野原3号、4号 ◎景華園
中期後半	K III a					○富の原B地点2号、8号、9号	◎景華園 ◎帆崎
	K III b						◎景華園
	K III c					◎富の原B地点16号	◎景華園
	k IV a					◎富の原B地点2、4号 ◎富の原B地点20号 ◎麻生瀬1号	
後期	k IV b				○竹松201405ST 6 ○白井川22号	○陣内 ○今福	

信也氏の分類に従い、大形甕棺（器高78cm以上）と中形甕棺（器高62cm以上）のみを掲載し（速水1985）、土器棺（カメ棺）、壺棺、転用棺は除外した。この表を見ると、本県の大形成人用甕棺墓は弥生時代前期には「チカ」（五島）、「ヒラ」（平戸）に集中することが分かる。

中期初頭になると、「マツラ」の地域でも出現し、K II a・K II bに集中する（註13）。K II c以降はタカキが独占し、K III cまで存続する。しかしK IV aからは「ソノキ」に集中するようになる。

このように本県の大形成人用甕棺は地域的、時間的変遷を遂げながら、あたかも交替するように展開することが分かる。大きくはチカ・ヒラ（弥生前期）→マツラ（中期前半）→タカキ（弥生中期中頃から後半）→ソノキ（弥生中期末）と変遷・展開すると言えよう（古門 2020b）（註14）。

### (3) 共同墓地の変化

以上のような本県本土部の共同墓地において、副葬品、区画、厚葬の属性を検討してきたが、早・前期と中期では属性の内容に大きな変化はない。したがって基本的に集団内は平等な関係を維持していたとみられ、大形成人用甕棺の出現の背景に共同体内の階層差は認められるものの、標石墓といわれるタカキの景華園遺跡、北岡金比羅祀遺跡以外は、その差は顕著ではないと考えられる。共同墓地に顕著な変化が現れるのは西新式土器併行期以降である。この時期の前代から、竹松遺跡の共同墓地内の一部墳墓群に祭祀土坑が伴ったり（註15）、西新式土器併行期の門前遺跡のように共同墓地から独立して墓地を営む集団の出現を見ることが出来る（註16）。

また、大形成人用甕棺被葬者の集団内での地位は石棺墓被葬者より相対的に高く、集団内にあって、しだいに有力者として成長していたと考えられる。しかし、大形成人用甕棺墓の分布は、前期の「チカ」、「ヒラ」から、中期前半の「マツラ」、中期中頃から後半の「タカキ」、中期末の「ソノキ」へと移動しているところから見て、集団内の有力者の出現は局所的・時限的なもので、決して安定的で、恒久的なものではないようである。ましてや後の古墳被葬者に繋がるような特定個人墓が本県本土部では未発見であることから、絶対的なものでもなかったと言えよう。

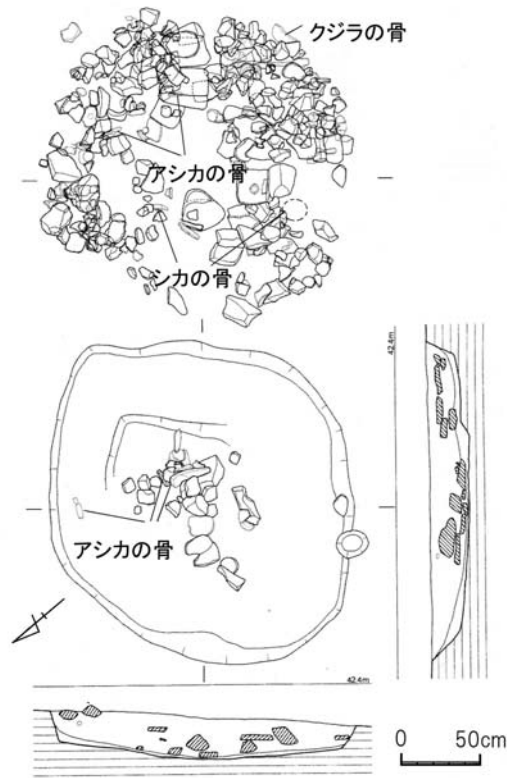
さらに、後期には共同墓地の中で、小児墓が占める割合が減少し、副葬品として武器や工具などの実用的な鉄製品を副葬するものが増える。このような事例に、これまでの共同体内の規制に縛られない有力な特定集団の出現を見ることが出来る。

## 7. 祭祀

次に本県本土部から主に墓地で検出された祭祀遺構や集石遺構を分析することによって、弥生時代の祭祀を検討する。本県本土部の弥生時代の祭祀は、3つの類型に分けられる。ひとつは縄文的祭祀、次に丹塗土器（註17）を用いた祭祀、さらに肥前型器台を用いた祭祀である。

### (1) 縄文的祭祀

縄文的祭祀としては、長畑馬場遺跡の1号土坑が挙げられる（第7、22図）。同遺跡の1号土坑では、アシカ・クジラなどの海獣のほか、鹿・イノシシなどの骨も確認されている。さらに被熱した磨石や炭化物の存在から火の使用が考えられる。共伴した3点の石器（方柱状石斧2、砥石1）は、いずれも破損品であるが、報告者は「祭祀行為の一環としての意図的な破壊・日常生活で使用した際の破損品、の両方の観点を考慮する必要がある。」と指摘する。さらに「埋納されたアシカの骨には、石器による解体痕が認められるとのことから、解体に供した道具を一括埋納した可能性が高いと捉えるべきであろう。」と述べている（本田 2000）。1号土坑の時期は、出土した土器から須玖 I 式土器古段階併行期が中心で、須玖 I 式土器新段階併行期が下限とみる。報告者は丹塗磨研土器導入以前の祭祀としているが、筆者もそれを支持する。このように長畑馬場遺跡の祭祀は、きわめて縄文的な特



第22図 長畑馬場遺跡の第1土坑 (大島村教委編 2000 加筆)



第23図 林ノ辻遺跡土坑 (諫早市教委編 1983)

徴をもつ出土品と破碎行為の組み合わせであり、火を用い、礫を用いることも特徴的で、縄文的な要素を持った祭祀が、当地では弥生時代中期前半まで執り行われていたことが窺える。

(2) 丹塗土器を用いた祭祀

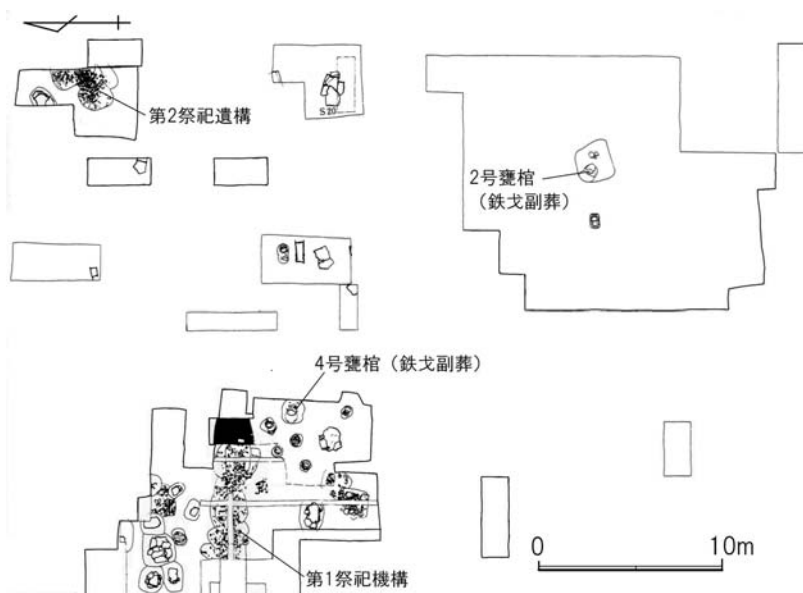
次に丹塗土器の出現を諫早市の林ノ辻遺跡にみる(第23図)。同遺跡は諫早市を流れる本明川を見下ろす標高40<sup>m</sup>の丘陵に位置する。発見された祭祀土坑底面には「更に小土坑が6ヶ

所穿たれている」ことから長期間の使用が窺える(諫早市教委編 1983)。祭祀土坑からは須玖Ⅰ式土器古段階併行から須玖Ⅱ式土器併行の土器が出土した。丹塗土器も含まれている。なお、古式土師器も出土しており、埋没時期は古墳時代前期と思われる。わずかに丹塗土器を含むものの、石鏃・石槍などの石器が出土しているところや、炭化物を含むところから火の使用が窺えること、親指大の安山岩・砂岩礫を含むところなどは、前述の長畑馬場遺跡同様に、縄文時代の祭祀的特徴を示す。

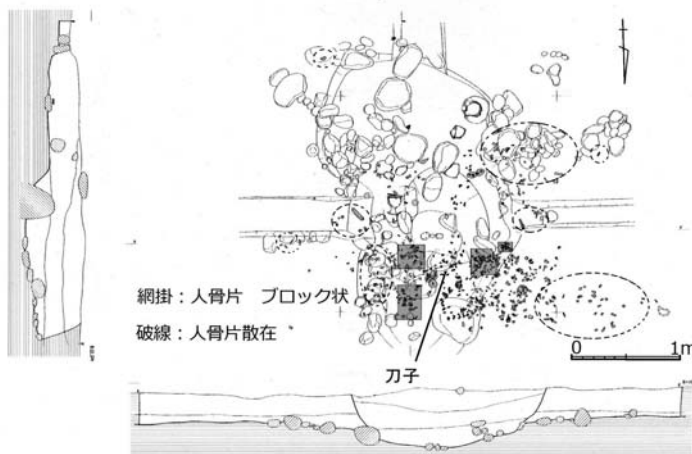
一方、富の原遺跡は須玖Ⅱ式土器新段階併行の丹塗磨研土器を用いた祭祀が行われている(第24図)。そこでは、糸島型祭祀土器(註18)を用いており、極めて北部九州的な祭祀と言える。また、石器および獣骨などの出土がないことも、非縄文的であるが、火の使用や礫の使用は継続している。表3に掲げたのは、当地で祭祀土坑や集石土坑から出土した土器の形式によって分類した祭祀遺構出土土器の一覧である。この表からは、富の原遺跡の祭祀土器群の形式の多様性が見て取れる。したがって、富の原遺跡の祭祀土器群は本県本土部では極めて例外的な墓前祭祀の土器群であることが分かる。

その後の丹塗土器の展開をみると、須玖Ⅱ式土器新段階併行期の諫早市西ノ角遺跡検出の祭祀土坑のように、丹塗磨研土器は用いられるものの、同時期の富の原遺跡の祭祀土器群のような組み合わせは見られない。

例えば竹松遺跡の祭祀遺構1(第25図)は高三瀨式土器併行期であるが、丹塗土器はなく、焼人骨が出土しており、刀子とみられる鉄製品が伴っている。鉄製品ではあるものの生活道具を供献するところなどは、縄文



第24図 富の原遺跡A地点墓地の祭祀遺構 (大村市教委編 1987 加筆)



第25図 竹松遺跡 TAK201302①調査区の祭祀遺構1 人骨片・焼人骨片出土状況 (長崎県教委編 2018 加筆)

表3 弥生中期の祭祀土坑出土土器形式一覧（●は丹塗土器）

遺跡名	遺構	土器様式		土器形式								
		報告書	本稿	広口壺	鋤先口縁壺	袋状口縁壺	台付き壺	甕	高坏	鉢	椀	ミニチュア土器
林ノ辻遺跡	祭祀土坑		須玖Ⅰ式新段階	—	—	—	—	○	○	—	—	○
長畑馬場遺跡	SK1	須玖Ⅰ式	須玖Ⅰ式	○	○	—	—	○	—	—	—	—
富の原遺跡	祭祀遺構		須玖Ⅱ式新段階	●○	●	●○	●	●○	●	●	●	—
西ノ角遺跡	土坑	中期後葉から末	須玖Ⅱ式新段階	●	—	—	—	○	○	—	—	—

的な祭祀が復活したかのような印象を受ける。

以上のように、富の原遺跡の丹塗磨研土器群の印象が強いために、本県本土部でも北部九州的な祭祀土器が広まった印象をうけるが、実際は林ノ辻遺跡、竹松遺跡のように縄文的な祭祀の伝統を残しているかのような事例があり、非縄文的な西ノ角遺跡でも富の原遺跡ほどの多様な祭祀土器は用いられていない（註19）。

(3) 肥前型器台出現後の祭祀

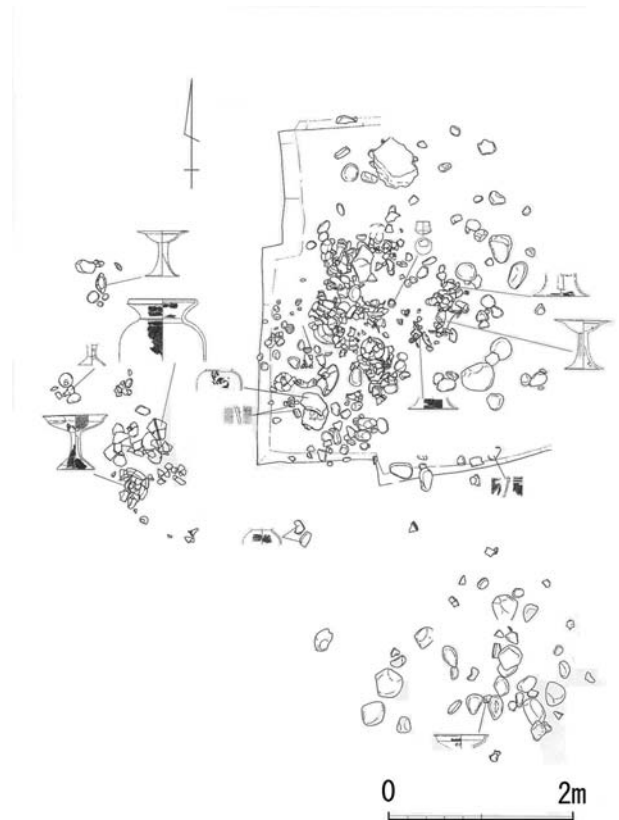
次に本県本土部で弥生後期に出現する肥前型器台を用いた祭祀を検討する。弥生後期の竹松遺跡からは、2基の祭祀土坑を検出しているが、そのうち1基は前述したように丹塗土器や肥前型器台を伴わない遺構である。一方の祭祀遺構2は肥前型器台と丹塗土器が伴う遺構である（第26図）。共伴した高坏の型式から高三瀦式土器併行から下大隈式土器併行期まで長期にわたって使用されたことが分かる。獣骨、人骨、石器が出土していない点是非縄文的であるが、焼土が認められるため、火の使用が想定され、礫も使われている。

また、西新式土器併行期の門前遺跡において墓前祭祀の集石遺構3基と、土坑1基が発見されている（第16図）。集石遺構からは肥前型器台が出土しているが、それ以外の形式の土器は見られず、火の使用もない。肥前型器台を用いる祭祀では、縄文的な祭祀の名残は見られないが、礫や火の使用は継続されている。

(4) 祭祀からみた本県本土部の弥生時代の社会

以上の発掘調査事例から本県本土部の祭祀は、以下のように整理できる。長畑馬場遺跡や林ノ辻遺跡で見られるように、火や礫を使用し、獣骨が出土することから、動物（海獣も含む）を供物とし、石器などの生産道具（破碎する場合もある）などを用いた祭祀があったと思われる。きわめて縄文的な祭祀と言えよう（註20）。少なくとも両遺跡の例から見て、須玖Ⅰ式土器併行期までは、このような祭祀が継続されている。

丹塗磨研土器の出現は、須玖Ⅱ式土器併行期であるが、本県本土部に富の原遺跡の祭祀土器群に見るような、北部九州的な墓前祭祀がそのまま普及している様子は見ら



第26図 竹松遺跡 TAK201302①の祭祀遺構2（長崎県教委編 2018）

れない。丹塗土器がわずかな形式や量で墓前祭祀や住居で使用されているのが実態であり、極めて選択的に用いられている。

さらに肥前型器台を用いた祭祀が下大隈式土器併行期から出現し、古墳時代前期の布留式土器を用いた祭祀が波及するまで継続する。肥前型器台出現後も丹塗土器は継続して使用されており、丹塗土器を祭祀に用いる伝統が残ることが分かる。

## 8. 生産道具および水田跡からみた生業

次に生産道具と水田跡を概観し、当地の弥生社会を考察する。

### (1) 住居跡出土の石器と鉄器

本県本土部の生産道具の出土状況を把握するため、出土した土器により時代が判明した住居跡から、石器と鉄製品が出土したものを表4に整理した。特筆すべきは、竹松遺跡のTAK201303調査区A5

表4 住居跡出土の石器および鉄器一覧

遺跡名	遺跡番号・調査区	遺構番号	土器様式		石器													
			報告書	本稿	石鏃	打石斧	磨石斧	砥石	剥片	敲石	凹石	磨石	搔器	台石	石包丁	礫器		
中ノ瀬遺跡	—	SH 2	中期後半	須玖Ⅰ式土器新段階併行	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
中ノ瀬遺跡	—	SH 3	中期後半	須玖Ⅰ式土器新段階併行	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
富の原遺跡	—	1号	中期後半	須玖Ⅱ式土器古段階併行	—	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
富の原遺跡	—	2号	中期後半	須玖Ⅱ式土器古段階併行	—	—	○	○	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—
十園遺跡	4区	SB01	中期	須玖Ⅱ式土器古段階併行	—	—	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	○
十園遺跡	4区	SB02	中期	須玖Ⅰ式新～Ⅱ式古	—	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
竹松遺跡	TAK2014056区	SC 7	中期末	須玖Ⅱ式土器併行	—	—	—	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
今福遺跡	B 6区	—	後期中葉	高三瀨式土器併行	—	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	○
竹松遺跡	TAK2014071区	SC 6	中期末～後期初頭	高三瀨式土器併行	—	○	—	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
竹松遺跡	TAK201408	SC01	後期前半	高三瀨式土器併行	○	○	—	○	○	○	○	○	—	○	—	—	—	—
竹松遺跡	TAK201408	SC02	後期前半	高三瀨式土器併行	—	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
竹松遺跡	TAK201303A 5	SC 1	後期前半	高三瀨式土器併行	○	○	○	○	○	○	○	—	—	—	—	—	—	—
竹松遺跡	TAK201303B 1	SC124	後期前半	高三瀨式土器併行	○	—	—	—	○	○	—	—	○	—	—	—	○	—
竹松遺跡	TAK201404B 6東	SC 4	後期前半	高三瀨式土器併行	—	—	—	—	—	—	—	○	—	—	—	—	—	—
西ノ角遺跡	B25-26区	—	後期後葉	下大隈式土器併行	—	○	—	—	—	○	—	—	—	—	—	—	○	○
今福遺跡	C 9-10区	—	終末～古墳初頭	下大隈式土器併行	—	—	—	○	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—
白井川遺跡	—	1号	後期終末	西新式土器併行	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
冷泉遺跡	—	4号	庄内式土器併行	タケ里式土器併行	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
竹松遺跡	TAK201403	SC 3	惣座2式からタケ里式古相	タケ里式土器併行	—	—	—	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

遺跡名	遺跡番号・調査区	遺構番号	土器様式		金属器	骨			文献		備考
			報告書	本稿		魚骨	獣骨	人骨	番号	頁	
中ノ瀬遺跡	—	SH 2	中期後半	須玖Ⅰ式土器新段階併行	—	—	—	—	5	21	磨石は柱穴の根石に再利用
中ノ瀬遺跡	—	SH 3	中期後半	須玖Ⅰ式土器新段階併行	—	—	—	—	5	26	—
富の原遺跡	—	1号	中期後半	須玖Ⅱ式土器古段階併行	—	—	—	—	6	42	—
富の原遺跡	—	2号	中期後半	須玖Ⅱ式土器古段階併行	—	—	—	—	6	45	—
十園遺跡	4区	SB01	中期	須玖Ⅱ式土器古段階併行	—	—	—	—	11	29	—
十園遺跡	4区	SB02	中期	須玖Ⅱ式土器古段階併行	—	—	—	—	11	31	—
竹松遺跡	TAK2014056区	SC 7	中期末	須玖Ⅱ式土器併行	—	—	—	—	3	27	—
今福遺跡	B 6区	—	後期中葉	高三瀨式土器併行	—	—	—	—	8	70	—
竹松遺跡	TAK2014071区	SC 6	中期末～後期初頭	高三瀨式土器併行	—	—	—	—	3	37	—
竹松遺跡	TAK201408	SC01	後期前半	高三瀨式土器併行	釣針	—	—	—	1	30	—
竹松遺跡	TAK201408	SC02	後期前半	高三瀨式土器併行	—	○	○	—	1	41	骨は地床から出土
竹松遺跡	TAK201303A 5	SC 1	後期前半	高三瀨式土器併行	鉄鏃	—	—	—	2	147	焼失住居
竹松遺跡	TAK201303B 1	SC124	後期前半	高三瀨式土器併行	—	—	—	—	2	160	黒曜石剥片9点
竹松遺跡	TAK201404B 6東	SC 4	後期前半	高三瀨式土器併行	鉄鏃?	—	—	—	3	24	—
西ノ角遺跡	B25-26区	—	後期後葉	下大隈式土器併行	鉄鏃	—	—	—	7	57-69	住居跡横から鉄製品(鏃?)出土
今福遺跡	C 9-10区	—	終末～古墳初頭	下大隈式土器併行	鉄斧・鏃	—	—	—	9	27	覆土から出土
白井川遺跡	—	1号	後期終末	西新式土器併行	鉄鏃	—	—	—	4	53	—
冷泉遺跡	—	4号	庄内式土器併行	タケ里式土器併行	鉄鏃	—	—	—	10	9	—
竹松遺跡	TAK201403	SC 3	惣座2式からタケ里式古相	タケ里式土器併行	—	—	—	—	3	19	—

- 1 長崎県教委編2017『竹松遺跡』都市計画道路池田沖田線街路改築工事に伴う埋蔵文化財調査 長崎県教育委員会
- 2 長崎県教委編2018『竹松遺跡Ⅲ』九州新幹線西九州ルート(長崎ルート)建設に伴う埋蔵文化財調査 長崎県教育委員会
- 3 長崎県教委編2018『竹松遺跡Ⅳ』中巻 九州新幹線西九州ルート(長崎ルート)建設に伴う埋蔵文化財調査 長崎県教育委員会
- 4 東彼杵町教委編1990『白井川遺跡』彼杵中央地区圃場整備事業にかかる調査 東彼杵町文化財調査報告書 第4集
- 5 長崎県教委編2012『中ノ瀬遺跡』一般国道497号伊万里松浦道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 長崎県教育委員会
- 6 大村市教委編1987『富の原』大村市文化財調査報告書 第12集 大村市教育委員会
- 7 長崎県教委編1985『西ノ角遺跡』長崎県文化財調査報告書 第73集 長崎県教育委員会
- 8 長崎県教委編1985『今福遺跡Ⅱ』長崎県文化財調査報告書 第77集 長崎県教育委員会
- 9 長崎県教委編1986『今福遺跡Ⅲ』長崎県文化財調査報告書 第84集 長崎県教育委員会
- 10 大村市教委編2003『黒丸遺跡』ほか発掘調査概報 Vol. 3 大村市文化財調査報告書 第25集 大村市教育委員会
- 11 国見町教委編2005『十園遺跡Ⅱ』国見町文化財調査報告書(概報) 第5集 国見町教育委員会



小区の SC1（竪穴建物跡）の高三瀨式土器併行期の焼失住居である。生産道具として石鏃、鉄鏃、磨製石斧、敲打石器、打製石斧、砥石が出土しており、焼失住居という遺構の性格から当時の生産道具がそのまま残されている可能性が高い。したがって弥生時代後期前半の本県本土部の人々が所有する基本的な生産道具の一部と思われる。さらに都市計画道路池田沖田線で調査された同じく竹松遺跡の TAK201408調査区の SC01の竪穴建物跡でも、石鏃、打製石斧、砥石、敲石、凹石、磨石が出土しており、先の TAK201303A 5区 SC1 とよく似た石器組成が見られることから、これらの石器群は、腐食などによって消失した木器群と併用された当地の弥生時代後期前半の標準的な生産道具の組み合わせと考えるとよいと思われる（註21）次に石器と鉄器の出土頻度を見ると、石器は下大隈式土器併行期（後期後半）には減少に転じ、西新式土器古段階併行（庄内式土器併行）以降は見られなくなる。一方、鉄器は高三瀨式土器併行期（後期前半）から出土し始め、下大隈式土器併行期（後期後半）以降には頻出する傾向が窺える。住居跡から出土する石器と鉄器を見る限り、本県本土部では弥生後期に生産道具が石器から鉄器への転換が図られたことが分かる。

日本における鉄器の普及は北部九州で中期前半に始まり（藤尾 2014）、全国的には地域差はあるものの弥生後期後半には鉄器化が行われたと見られており（都出 1993）、本県本土部でも同様であったことが分かる。

## (2) 水田跡

本県本土部の生業の考察を行うにあたり、最後に水田遺構も一瞥しておく。本県の水田跡は中川潤次が集成・整理しており（中川 2017）、それによると、弥生時代の水田跡は、佐世保市四反田遺跡と平戸市里田原遺跡の2遺跡で発見されているが、里田原遺跡の水田跡は未報告である。したがって、当地の稲作について総括できる状況にないが、中川が調査担当者から聞き取りした里田原遺跡の水田跡は不定の方形で一辺が6～8m、四反田遺跡の水田跡は報告書によると平面形が不定の方形で一辺が5～6mほどのようである。調査実績が少ないため、これ以上の検討は控えたい。

## (3) 長崎県本土部の弥生時代の生業のまとめ

以上のように住居跡から出土する生産道具を概観した限りでは、弥生中期の住居跡から出土した鉄器は今のところ皆無で、本県本土部では高三瀨式土器併行期（後期前半）まで、生産道具の組み合わせに縄文時代から続く石器群が残り、この時期から鉄器と共伴すると言える。生産道具の鉄器化は北部九州には遅れるものの、下大隈式土器併行期（後期後半）には進み、西新式土器併行期（終末から古墳初頭）には砥石や紡錘車など限られた石器のみとなるため、本県本土部の石器から鉄器への転換の時期は、全国的な趨勢と変わらないと考える。ただ、資料数が少ないため、本県本土部の鉄器化の復元は今後の課題である。

以上のような本県本土部の生産道具と水田遺構の状況から当地の生業形態を復元すると、水田遺構発見事例の稀少さからみて、稲作は生業の主体となりえず、石器が後期前半まで残るところからしても弥生時代を通じて、縄文時代と同様に栽培を含む網羅的な生業体系を継続していたとみるべきである。

## 9. 威信財

次に、本県本土部の弥生時代社会を復元するための最後の検討対象として威信財を取り上げる。本稿では、弥生時代の代表的な威信財として南海産貝輪・鏡・青銅器・鉄製武器を検討する。

(1) 南海産貝輪（表5）

ゴホウラやイモガイから作られた南海産貝輪は、表5に示したように本県本土部ではIV期（表1）から城の越式土器併行期まで、五島列島（チカ）を中心に出土し、五島灘を介して、その対岸ともいえる西彼杵半島・長崎半島西部（スカ）ならびに北部の「ヒラ」、「マツラ」の地域で出土する。五島灘、玄界灘を介した西北九州沿岸に集中すると言える。その他の地域では、弥生中期の「タカク」の景華園遺跡にみられるのみで、極めて限定された分布を示す（註22）。南海産貝輪は遠距離からもたらされる威信財の特徴を顕著に表すもので、所謂「貝の道」によって貝輪材料が運ばれ、いずこかで整品化された貝輪が持ち込まれたのち、弥生中期の北部九州を中心にさかんに消費されたものである。貝輪材料の運搬に本県の海人集団が関わったことは、ほぼ定説となっており（木下 1996）、県内の分布はそのことを反映したものであろう。唯一、景華園遺跡だけが、離れているが、上田龍児によると景華園遺跡から出土した貝輪は「中期中頃から後半に盛行するゴホウラ諸岡型」であるという（上田 2004：p59）。木下尚子は、弥生中期後半に貝輪の材料である南海産貝の運搬システムが合理的に変化し、運搬ルートも外洋を中心とした航路から、有明海を南下する航路へ変化したとしている（木下 1996：pp150-151）。仮にそうであれば、景華園遺跡の貝輪は、そのことを反映したものと見ることができよう。

表5 南海産貝輪の分布

時代	時期	威信財		南海産貝輪													
		地域区分		チカ		マツラ				ソノキ				タカク			
		貝輪		ゴホウラ	イモガイ	ヒラ				スカ				ゴホウラ	イモガイ		
弥生	早期	III a 期															
		III b 期															
	前期	IV a 期（板付系+突帯文）															
		IV b 期（板付系+亀の甲）		浜郷	宇久松原 大浜 浜郷	根獅子			宮の本	出津	深堀						
	中期	城ノ越式土器															
		須玖 I 古段階															
		須玖 I 新段階														景華園	景華園
		須玖 II 古段階															
	後期	高三瀬式土器															
		下大隈式土器															
	終末	西新式土器															
	古墳	初頭															
前期		布留式土器															

一方で、南海産貝の運搬に関わったであろうと推定される本県の貝輪装着者は、どのような経緯で製品としての南海産貝輪を入手したのか、まだよく分かっていない。自ら手に入れたものか、北部九州の有力者から入手したものか、あるいは分与されたものかなど問題は今後の課題である。現状では、威信財の性格からみて、北部九州の有力者からの分与の可能性が高いと思われる。

(2) 鏡（表6）

表6に見るように、本県本土部で弥生時代に鏡が出土したのは、前期には例がなく、中期になって「マツラ」の平戸市里田原遺跡の大形成人用甕棺（橋口編年 K II a 式）から出土した多鈕細文鏡（完形鏡）と、鏡式など詳細は不明ながら「タカク」の島原市景華園遺跡から出土したといわれる事例のみである（註23）。「マツラ」で多鈕細文鏡が出土した背景には、南海産貝輪の項で触れたような「貝

の道」の存在が背景にあると考えられる。景華園遺跡も同様であろう。

次の後期になると、当地には後漢鏡を中心に鏡が出土するようになる。ただし舶載鏡は「マツラ」および「ソノキ」の地域に偏在しており、特に舶載の完形鏡や破砕鏡は「マツラ」でしか出土していない。「ソノキ」では舶載鏡であっても破砕鏡であり、「タカク」に至っては倭製鏡しか出土していない。鏡の分布をみる限り、弥生後期には「マツラ」地域の優位が明らかで、古墳時代に入ると「ヒラ」地域が優位である（註24）。このような鏡の分布の偏在性をどのように評価するかということは今後の

表6 銅鏡の分布

時代	時期	形態 鏡	鏡																			
			チカ				マツラ				ソノキ				タカク							
			完形鏡		破砕鏡		完形鏡		破砕鏡		完形鏡		破砕鏡		完形鏡		破砕鏡					
			舶載	倭製	舶載	倭製	舶載	倭製	舶載	倭製	舶載	倭製	舶載	倭製	舶載	倭製	舶載	倭製	舶載	倭製	舶載	倭製
弥生	早期	Ⅲ a 期																				
		Ⅲ b 期																				
	前期	Ⅳ a 期 (板付系+突帯文)																				
		Ⅳ b 期 (板付系+亀の甲)																				
	中期	城ノ越式土器								里田原												
		須玖 I	古段階																			
			新段階																			
		須玖 II	古段階																			
	新段階																					
	後期	高三瀨式土器								里田原								白井川				
下大隈式土器								栢ノ木		門前							立小路	竹松		佃	今福	
終末	西新式土器																					
古墳	初頭	田助															令泉				上原?	
	前期	勝負田古墳																				

■：舶載鏡

表7 青銅器の分布

時代	時期	威信財 青銅器	青銅器											
			チカ		マツラ				ソノキ				タカク	
			銅剣	銅矛	ヒラ		マツラ		スカ		ソノキ		銅剣	銅矛
弥生	早期	Ⅲ a 期												
		Ⅲ b 期												
	前期	Ⅳ a 期 (板付系+突帯文)												
		Ⅳ b 期 (板付系+亀の甲)												
	中期	城ノ越式土器												立石? 景華園
		須玖 I	古段階											北岡金比羅祀
			新段階											景華園
		須玖 II	古段階											北岡金比羅祀
	新段階												立石?	
	後期	高三瀨式土器												
下大隈式土器														
終末	西新式土器													
古墳	初頭													
	前期	布留式土器												

課題である（註25）。

(3) 青銅器（表7）

威信財としての青銅器も偏在性が顕著で、表7によると弥生中期の本県本土部では「タカク」でしか発見されていない。後期の「マツラ」の大野台遺跡で広形銅矛の袋部の出土例があるが、土坑からの出土であり、共同体祭祀における埋納事例と整理できる（鹿町町教委編 1983）。

景華園遺跡出土の銅矛は、昭和初期の島田貞彦報告分については、尾上博一の報告があるほか（尾上 2000）、小田富士雄報告分は小田と上田龍児による景華園遺跡の再検討の中でも検証されている（小田・上田 2004）。尾上は景華園遺跡出土の島田報告分の銅矛を岩永省三による型式分類に照らして「中細形銅矛c1類」としており、土器様式で示すと須玖Ⅰ式新段階から須玖Ⅱ式古段階の時期となるだろう。

(4) 鉄製武器（表8）

一方、弥生中期の鉄製武器は表8に見る通り「ソノキ」の富の原遺跡に偏在しており、中期における青銅器は「タカク」に、鉄製武器は「ソノキ」という形の偏在性が顕著である。

なお弥生後期になると「マツラ」の里田原遺跡や門前遺跡にも鉄製武器が分布する。

(5) 本県本土部の威信財から見た有力集団および有力者の変化

これまで述べた本県本土部の威信財の出土状況を整理しつつ、威信財を保有した有力集団およびその有力者の動向を検討していく。

弥生前期終末から中期初頭の南海産貝輪の出土の偏在性は、「貝の道」に関わりがあった海人集団の活動を背景としたものと考えられ、飛び地である景華園遺跡のそれは「貝の道」の経路が変化したことが反映された可能性がある。いずれにせよ弥生前期から中期初頭にかけては五島灘、玄界灘を介した「チカ」「ヒラ」「マツラ」「スカ」の地域に有力集団および有力者の存在が窺える。特にこれまで全国で12面しか出土していない多鈕細文鏡を副葬した里田原遺跡第3号甕棺被葬者は、この時期を象徴する当地の有力者と言えよう。

中期初頭の里田原遺跡の多鈕細文鏡以後、本県本土部では景華園遺跡での鏡の出土が伝わるのみで、

表8 鉄製武器の分布

時代		時期		威信財		鉄製武器									
				地域区分		チカ		マツラ		スカ		ソノキ		タカク	
				鉄製武器		鉄戈	鉄剣	鉄戈	鉄剣	鉄戈	鉄剣	鉄戈	鉄剣	鉄戈	鉄剣
		土器様式													
弥生	早期	Ⅲ a 期													
		Ⅲ b 期													
	前期	Ⅳ a 期（板付系+突帯文）													
		Ⅳ b 期（板付系+亀の甲）													
	中期	城ノ越式土器													
		須玖Ⅰ	古段階												
			新段階												
		須玖Ⅱ	古段階									富の原	富の原		
	新段階														
	後期	高三瀬式土器													
下大隈式土器							里田原 門前								
終末	西新式土器														
古墳	初頭	西新式土器										中江			
	前期	布留式土器													

無鏡地帯となり、北部九州の鏡文化圏とは一線を画すことになる。

青銅器では、景華園遺跡を中心とした中期の「タカク」に青銅器が集中し、「マツラ」、「ソノキ」には見られないという偏在性がある。弥生中期の大形成人用甕棺の分布もしかりであり、本県本土部の弥生中期を象徴する有力者集団および有力者が「タカク」に存在したことが分かる。現状では、この背景として考えられるのが前述の「貝の道」の交易に関わる経路の変化である。

続く中期末には前代に優位であった「タカク」に代わるように「ソノキ」に鉄製武器の集中がみられ、大形成人用甕棺も「タカク」より移行して「ソノキ」で盛行する。この背景にも「貝の道」が関わるかどうか、あるいは他の要因があるのかは、現状では不明で、今後の検討課題である（註26）。

次の弥生後期には、本県本土部で鏡が再び出土するようになる。前代とは異なり、「チカ」、「スカ」を除く本土部全域に分布する。しかし、ここでも、舶載鏡は「マツラ」と「ソノキ」に集中し、特に舶載の完形鏡・破碎鏡は古墳時代前期を含め「マツラ」でしか出土していない。一方、「タカク」には倭製鏡しか分布しないという偏在性が見られる。中期に威信財が集中した「タカク」において、後期に舶載鏡が見られないことは不可解であり、注目される。

## 10. 本県本土部の弥生社会の復元

以上のような本県本土部の集落と墳墓・祭祀・生業・威信財からみた弥生時代の社会は以下のように整理できる。

弥生早期の支石墓の伝播により、それまでの縄文晩期の墳墓の形態が大きく変化したものの、大陸の支石墓の背景にある文化を丸ごと受け入れたのではなく、共同墓地・箱式石棺墓・土器棺墓など選択的に取り込んでいることが分かる。そして、あたかも前代（縄文時代）の伝統文化や習俗との整合を図ったかのように、変容させて取り込んでいるのである。例えば、箱式石棺は屈葬に対応した大きさであり、土器棺は埋甕の系譜を引くなどである。文化の受容者が主体的に選択権をもって受容しているところから「選択的变化」ともいうべき変化を指摘することができる。

次の弥生前期には、板付系文化が波及し、一時的に集落の規模が大きくなるが、影響を受けたのは県北部に限られるようで、本県本土部の社会全体に早期ほど影響を与えてはいない。集落の基本は、以前として1～3棟の住居からなる集落で、墓制は前期後半に県北部の「チカ」や「ヒラ」の地域で成人用大形甕棺が出現するほかは、大きな変化はない。

威信財は、五島列島（チカ）を中心にして、その対岸ともいうべき「スカ」および県北部の「ヒラ」「マツラ」に南海産貝輪が集中する。所謂、「貝の道」に関与した集団および集団内の有力者の存在が窺える。「チカ」および「ヒラ」を含む「マツラ」に大形成人用甕棺が県内本土部でいち早く出現する背景にも「貝の道」の交易ルート上にあるためと考えられる。

しかし、その後「チカ」と「スカ」の地は、中期前半から古墳時代前期まで威信財の空白地帯となり、そのまま前方後円墳空白地帯となっている。この背景には南方産の貝を含む交易ルートの変化があったと推定される。

中期においては、「ソノキ」で前期末から中期初頭に環濠集落が出現し、拠点集落の様相を見せるが、局所的であり、その他の集落は依然1～3棟ほどの集落が基本である。北部九州では、前期末から中期初頭においても社会変化があると言われているが（小澤 2009）、本県本土部では環濠集落の形成は見られるものの、それ以外の具体的な社会変化を示す事象の把握に至らなかった。局所的、時限的な状況で留まっていると見られる。

中期の墓制においては、大形成人用甕棺が「ヒラ」、「チカ」から「マツラ」さらには「タカク」や

「ソノキ」に、あたかも地域を交替したかのように移動して用いられている。近年の研究では、成人用大形甕棺の受容には中核地域と周縁地域の序列化が反映されていると言われる。本県本土部では時期と地域を異にして、大形成人用甕棺分布中核地域との関係が築かれていたようである。

祭祀においては、須玖Ⅱ式土器併行期の丹塗磨研土器の波及により、富の原遺跡などで局所的に北部九州の丹塗磨研土器を用いた祭祀が見られる。しかし、やはりここでも同祭祀を丸ごと取り込むわけではなく、富の原遺跡以外は丹塗磨研土器の一部形式だけを取り込むという「選択的变化」が見られる。さらに富の原遺跡以外では、縄文的な祭祀の伝統が残ることすら窺える。

また、弥生中期の威信財である鏡において景華園遺跡でその出土が伝えられるものの、現状では中期初頭の里田原遺跡の多鈕細文鏡以外に舶載鏡や倭製鏡が見られず、弥生中期に北部九州で盛行した威信財としての鏡の欠落がみられる。分布の周縁ながら大形成人用甕棺を受け入れてはいるものの、上位の威信財である鏡の欠落は、大形成人用甕棺分布中核地域と比較した場合、序列的に下位であることを示す顕著な事例であろう。

一方、青銅器は「タカク」に、鉄製武器は「ソノキ」にと偏在しており、大形成人用甕棺の分布の移動とも併せ、「タカク」の有力集団から「ソノキ」の有力集団へ交替したとも言える状況が見て取れる。この背景に何があったのかは今後の検討課題である

いずれにしても、総じて弥生早期の大きな社会変化のあと、弥生前期から中期までは、当地の集落と墓地、祭祀、威信財の遺構や遺物を見る限り、局所的・時限的变化は生じたものの、本県本土部全体の社会に大きな変化は見られなかったと考える。住居跡の出土遺物を見ても、今のところ中期の住居跡からは鉄製品の出土が見られない。したがって生産道具は依然として石器や木器であり、生業形態も変化に乏しかったのではないと思われる。稲作も生業の主体となりえず、縄文時代以来の栽培を含む網羅的な生業体系を継続していたのが本県本土部の弥生中期の社会と考えられる。墳墓の在り方から見ても、集団内は平等を基本としつつ、成人用大形甕棺被葬者などの集団内の有力者が率いる社会であったと言えよう。

しかし、威信財の分布が地域と時期によって偏在し、長く継続しないことから、集団内の有力者は、一時的かつ局所的な地位に留まっているようで、集団内の有力者の地位は流動的で、かつ不安定であったと推測される。

ところが後期になると、状況は一変する。後期前半には住居跡から鉄器が出土し始めることから、生産道具の鉄器化が進んできたことが分かり、墳墓にも実用的な武器や工具を中心とした鉄製品が副葬され始める。墓制では土器棺墓が消滅し、祭祀では肥前型器台が用いられるようになる。さらに共同墓地から特定集団が分離していく様子がみてとれる。

一方、威信財からは、弥生中期までのような偏在や分布の移動は見られず、多極化している状況が窺える。前代の不安定な有力集団およびその有力者の地位が安定するとともに、有力集団の分立の様相を呈しており、特に「マツラ」地域が優勢である。いずれにしても本県本土部の社会に早期以来の大きな変化を見ることが出来る。しかもその変化は前代までの「選択的变化」ではなく、「非選択的变化」すなわち「選択の余地なき」変化ともいうべきもので、変化せざるを得ない社会状況や政治状況が発生したがゆえの変化であるといえよう。

最後に本県の弥生時代の様相を第27図に整理した。弥生早期に現れ、一部は前期末から加わった一連の文化事象の一部は、後期前半までかろうじて存続するが、その後断絶し、後期後半から新たな文化事象が発生していることが窺われる。前述したような社会の「大きな変化」が顕著であったことが見て取れる。

時代	時期	土器様式	集落	墓地	祭祀	生産道具																		
縄文	晩期	I期		埋甕																				
		II期(黒川式土器併行)		支石墓																				
弥生	早期	IIIa期	1, 2, 3 棟の集落	共同墓地	縄文的祭祀	礫石器																		
		IIIb期					剥片石																	
	前期	IVa期(板付系+突帯文)						板付系集落	埋葬方向の一致	丹塗磨研土器	鉄器													
		IVb期(板付系+亀の甲)										環濠集落												
	中期	城ノ越式土器											須玖I	古段階	新段階	土器棺	丹塗土器							
		須玖II																古段階	新段階	埋葬方向の不一致	特定集団墓	实用鉄器副		
																							須玖II	古段階
		高三瀬式土器																下大磯式土器	複数の集落					
	西新式土器												布留式土器											
		古墳																前期						

第27図 本県本土部の弥生時代の様相

本稿は、九州新幹線西九州ルート建設に伴う発掘調査成果に拠るところが大きい。末筆ながら発掘調査にご協力いただいた関係者の皆様に心よりお礼申し上げます。

また、栢ノ木遺跡出土の甕棺の実見では、松浦市教委の合澤哲郎氏に大変お世話になった。さらに本稿の執筆にあたっては宮崎貴夫、渡邊康行、尾上博一、野澤哲朗の各氏から指導・助言をいただいた。芳名を記して感謝したい。

【註】

- 註1 本県では弥生時代の小児埋葬用棺である土器棺も「甕棺」と呼称して発掘調査報告書などに記載することが多い。このことは本県の弥生時代の墓制の特質を理解する上で妨げになると筆者は考えている。近年、弥生中期に北部九州で盛行する甕棺葬は単なる埋葬習俗の域を超えて、政治的・社会的に体系化され、機能していたとされるようになった。したがって筆者は、甕棺分布の中心である福岡平野や筑紫平野から離れた本県の弥生時代の墓制に、この甕棺葬の体系がどのように影響したのか、あるいは、しなかったのか重要な問題であるとの認識を持っている。また、甕棺葬の体系は大形成人用甕棺に顕著に反映されるため、本稿では器高78センチ以上の大形甕棺と62センチ以上の中形甕棺を「大形成人用甕棺」と呼称し(速水 1985)、それ以外は「土器棺」と総称して、意図的に「甕棺」という用語の使用を避けた。
- 註2 弥生時代ではないが、縄文時代の祭祀に用いられた遺物を集成、検討した論攷がある(川道・古澤 2012)
- 註3 地域名称に郡名と郷名が混在する難点はあるが、郡域が広い本県では一部に郷域を加えたほうが、より地域の特質が理解しやすいという考えのもとで採用した。  
なお、本県本土部の地域呼称に律令時代の郡の呼称を引用したのは尾上博一が最初である(尾上 2005)
- 註4 埋甕が小児用の埋葬とすれば、成人用の墓地が今のところよく分かっていないのが本県本土部の縄文時代の墓制研究の現状である。
- 註5 調査者は当該遺構の時期および掘立柱建物跡であるかどうかの判断を留保している。
- 註6 調査担当者はこの石棺墓を時期不明としているが、寺田正剛は箱式石棺の法量などから後期と認定している(寺田 2005)。
- 註7 3号住居跡の出土遺物に古式土師器に似た土器片があり、住居の廃絶時期は古墳時代前期である可能性がある。
- 註8 白井川遺跡からは、橋口編年 K IV b (後期前半)の大形成人用甕棺が1基出土している(第9図)。

- 註9 「鎧積み」と言われる石棺の板石の積み方は、弥生後期から古墳初頭に見られる（寺田 2005）。
- 註10 本県本土部の弥生時代早期から中期の共同墓地では、石棺墓の主軸や長軸が同じ方向に揃っている場合が多い。寺田正剛は、墓地の地形的制約が原因と考えているが（寺田 2005）、後期になると主軸や長軸の方向に乱れが生じてくるので、筆者は後期の共同墓地の主軸や長軸の統一性の欠如は、共同体内の規制の緩みが反映されていると考えている。
- 註11 墳墓は伴っていないが、本県本土部の弥生中期の集落調査成果として、島原市の小原下（おぼるしも）遺跡の調査がある。約700平方メートルほどの狭い調査区内から城ノ越式土器併行期から須玖Ⅱ式土器併行期の14軒の竪穴住居が確認されている（島原市教委編 2011）。
- 註12 門前遺跡の共同墓地の時期は共伴する土器が肥前型器台のみであるため、特定が難しいが、石棺から出土したガラス小玉の8割がソーダ石灰ガラスであったため（長崎県教委編 2020）、弥生終末から古墳時代初頭以降とみて、西新式土器併行とした。
- 註13 松浦市の栢ノ木遺跡では3基の甕棺墓が発見されているが、報告書には甕棺を構成するそれぞれの土器の実測図がない。そのためか所属年代が研究者によって一致していない。井上和夫は栢ノ木遺跡の甕棺を森編年の「金海式」と「立岩式」とみており（井上 1974）、宮崎貴夫は橋口編年のK I c~K II bとしている（宮崎 2019）。  
筆者が実見したところ、現在1号甕棺と3号甕棺は調川小学校に保管され、2号甕棺は中央公民館資料室に保管されている。なお、号数は報告書の記述や遺構図や写真などと照合しての推定である。型式は1号甕棺が橋口編年のK II b式、森編年の汲田式で、2号甕棺は橋口編年のK II a式、森編年の城ノ越式である。3号甕棺は器高50<sup>センチ</sup>ほどの土器棺である。宮崎、井上がそれぞれK I c、金海式とした土器と思われるが、筆者は、古い様相を残すものの、2号甕棺と同時期の土器棺と判断した。後日、宮崎はこの3号甕棺は発掘調査時に3号甕棺とされた資料とは異なる資料ではないかと筆者に語っている。
- 註14 県内本土部の大形成人用甕棺の変遷は既に大村市竹松遺跡の調査報告書（長崎県教委編 2020）で披歴しているが、その際、弥生前期の平戸市馬込遺跡（塩塚 1999）と中期の麻生瀬遺跡（川棚町教委編 2010）出土の大形成人用甕棺の資料が漏れていたことが分かったので、今回あらためて表2に追加している。また、松浦市栢ノ木遺跡（松浦市教委編 1973）、同市久保園遺跡（松浦市教委編 2015）の大形成人用甕棺は一覧表からも漏れていたため、あらためて本稿表2に反映させた。
- 註15 竹松遺跡の共同墓地は東西2群に分かれており、西群にのみ祭祀土坑が伴う（第21図）。
- 註16 弥生後期に墓制が大きく変化する本県本土部であるが、現状では、後の古墳被葬者に繋がるような特定個人墓は未だ発見されていない。
- 註17 本稿では赤色顔料塗彩で研磨や暗文が施された土器を「丹塗磨研土器」と記載し、研磨痕や暗文が確認できない土器または赤色の化粧土などを施した土器は単に「丹塗土器」と表記した。
- 註18 石橋新次の提唱による（石橋 1992）
- 註19 丹塗磨研土器祭祀の総体を取り込まなかったことは、既に宮崎貴夫が指摘している（宮崎 2019）。
- 註20 県立ろう学校建設に伴う本県大村市黒丸遺跡の調査において、縄文後期後半から晩期前葉の3基の集石遺構が検出された。礫だけでなく石器や土器片を多く含み、埋甕や土壙墓の傍に位置することから、調査担当者は祭祀・宗教的な遺構ではないかと考えている（長崎県教委編 2016）。火の使用は見られないが、本稿で指摘した本県本土部の弥生時代の祭祀の系譜をたどれる事例といえよう。
- 註21 表4は本県本土部の弥生中期から古墳時代初頭までの住居跡から石器ないし鉄器が出土した遺跡を集成したものであるが、4棟の住居跡で、剥片ないし剥片石器が出土している。中期の富の原遺跡を除くと、いずれも後期前半の高三瀨式土器併行期である。かつて福田一志は、諫早市伊木力遺跡の弥生後期の包含層から石核や剥片が出土したことを受けて次のように報告している。「剥片等については、（中略）全てのものを見た限りにおいては、寸詰まりの剥片に際面を多く残すものが数量的に多いように思える。これについては、西北九州の縄文晩期にみられる、剥片剥離技術に通じるところがあると考え。」と記載して当地の弥生後期に縄文晩期の剥片剥離技術が残存することを示唆した（福田 1996）。  
また、同じく調査を担当した渡邊康行は、同報告書の「まとめ」の中で、「剥片石器群の技術的特徴や一定量の扁平打製石斧を器種組成の構成員として有する点など、極めて縄文時代的色彩の強い石器群であるといえる」と指摘し、慎重な姿勢ながら「伴出土器との量的な対応関係から見る限り、大半は弥生時代後期～古墳時代初頭に位置づけるのが妥当であろうと思われる。」と記した（渡邊 1996）。  
伊木力遺跡の包含層出土土器は、報告されているように、わずかに縄文土器を含むものの、ほとんどは弥生



後期から古墳初頭の土器である。当時、後期の住居跡から確実に出土した剥片や剥片石器が確認できていなかったもので、結論を将来にゆだねた形となっていたが、20年を経た現在、表4を見る限り高三瀝式土器併行期までは剥片ないし剥片石器が残ると仮定してもよいと思われる。今後は、目的意識を持った発掘調査を行うことで、この仮説を検証することが必要であろう。

なお、竹松遺跡 TAK201303B 1 区 SC124 (長崎県教委編 2018 : p.160) から出土した黒曜石の縦長剥片は渡邊康行によると明らかに縄文時代晩期の所産であるという。仮に流れ込みではないとすると、弥生時代後期の人々が、再利用するために収集したなどの想定をしないかぎり、合理的な説明が見つからない資料である。以上のように当地の弥生後期の剥片石器の残存問題は、現状でもなお課題であり続けている。

- 註22** このうち「チカ」および「スカ」の地域社会は、その後の弥生時代を通じて、威信財を保有することなく古墳時代を迎えている。この地に再び威信財が出現するのは、「スカ」に属する長崎市宮田古墳群から出土した古墳時代中期の倭製鏡まで待たねばならず、実に600年から700年の空白期間がある。さらにこの地域は前方後円墳の空白地帯でもあり、このような当地の長期にわたる威信財の欠落を歴史的にどのように評価すればよいのかは今後の課題である。
- 註23** 島原市景華園遺跡から出土したと伝えられる鏡は、藤田和裕が岡崎敬の集成に基づいて集成し、記載したものである(岡崎編 1974, 藤田 1994)。鏡式不明、現物不明とされる。
- 註24** 本稿では門前遺跡や武辺城跡は「マツラ」に所在する遺跡として整理した。近年、杉原敦史によって律令時代の松浦郡と彼杵郡の郡境を相浦川に求める学説が提示されており(杉原 2012)、それに従えば両遺跡は「ソノキ」の所在となるが、今の筆者には杉原説の是非が判断できないため、従来の佐世保湾背後の山稜を郡境とする説に拠った(木本 2013)。
- 註25** 長崎市の万才町遺跡から併せて3点の鏡が出土している。いずれも遺構からの出土ではなく、近世長崎遺跡群の調査において近世遺物とともに包含層あるいは地山直上から出土したものである。そのため詳細な時期特定が困難で、表6に反映させることができなかった。宮崎貴夫の集成によると舶載浮彫式獸帯鏡片、斜縁四獸鏡(倭製鏡)、素文鏡(倭製鏡)であるという(宮崎 2019)。
- 註26** 木下尚子はソノキに存在する大村市富の原遺跡が「貝の道」の荷下ろし港であったと推定している(木下 1996)

#### 【引用・参考文献】

- 諫早市教委編 1983『林ノ辻遺跡』諫早市文化財調査報告書第4集 諫早市教育委員会
- 石橋新次 1992『糸島型祭祀用土器の成立とその意義』『北部九州の古代史』有明文化を考える会
- 井上和夫 1974「2. 肥前西部の石棺墓について－概観－」『化屋大島遺跡』多良見町文化財報告書第2集 多良見町教育委員会
- 上田龍二 2004「(2) 景華園遺跡出土甕棺の位置付け」『長崎県・景華園遺跡の研究、福岡県京都郡における二古墳の調査』佐賀県東十郎古墳群の研究 箕田丸山古墳及び庄屋塚古墳、補遺篇』福岡大学考古学研究室研究報告第3冊
- 大島村教委編 2000『長畑馬場遺跡』大島村文化財調査報告書第13集 大島村教育委員会
- 大野台遺跡調査団 1974「大野台遺跡」『古文化談叢』第1集 九州古文化研究会
- 大庭孝夫 2000「北部九州における縄文晩期～弥生前期の墓制」『第48回埋蔵文化財研究集会 弥生の墓制(1) 一墓制からみた弥生文化の成立一』発表資料・資料集 pp.76-87
- 大村市教委編 1987『富の原』大村市文化財調査報告書 第12集 大村市教育委員会
- 大村市教委編 1995『富の原遺跡・小佐古石棺墓群B地点』大村市文化財調査報告書第19集 大村市教育委員会
- 大村市教委編 2003「冷泉遺跡」『黒丸遺跡ほか発掘調査概報 Vol. 3』大村市文化財調査報告書 第25集 大村市教育委員会
- 大村市教委編 2004『黒丸遺跡ほか発掘調査概報 Vol. 4』大村市文化財調査報告書 第27集 大村市文化財調査報告書大村市教育委員会
- 大村市教委編 2009『富の原遺跡』大村市文化財調査報告書 第33集 大村市教育委員会
- 岡崎 敬編 1974「長崎県、佐賀県、熊本県における「古鏡」発見地名表原稿」『九州文化史研究所紀要』第19号 九州大学文化史研究所
- 小澤佳憲 2009「北部九州の弥生時代集落と社会」『国立歴史民俗博物館研究報告』第149集 国立歴史民俗博物館
- 小田富士雄・上田龍児 2004『長崎県・景華園遺跡の研究』福岡大学人文学部考古学研究室

- 尾上一博 2000「島原市景華園遺跡出土の中細形銅矛」『西海考古』第2号 西海考古同人会
- 尾上博一 2005「前方後円墳築造周縁域としての対馬」『西海考古』第6号 正林護先生喜寿記念号 西海考古同人会
- 川棚町教委編 2006『麻生瀬遺跡』川棚町文化財調査報告書 第1集 川棚町教育委員会
- 川棚町教委編 2010『麻生瀬遺跡Ⅱ』川棚町文化財調査報告書 第2集 川棚町教育委員会
- 川道 寛 1997「地域概説(県北)」『原始古代の長崎県』長崎県教育委員会
- 川道 寛, 古澤義久 2012「長崎県における縄文時代精神文化遺物の様相」『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要』第2号 長崎県埋蔵文化財センター
- 木下尚子 1996『南島貝文化の研究』貝の道の考古学 法政大学出版局
- 木本雅康 2013「第三節 律令国家の空間支配」『新編大村市史』第1巻自然・原始・古代編 新大村市史編纂委員会
- 佐世保市教育委員会編 1994『四反田遺跡』平成5年度 佐世保市埋蔵文化財発掘調査報告書 佐世保市教育委員会
- 塩塚浩一 1999「平戸市馬込遺跡出土の甕棺」『西海考古』創刊号 西海考古同人会
- 鹿町町教委編 1983『大野台遺跡』鹿町町文化財調査報告書第1集 鹿町町教育委員会
- 島原市教委編 2011『株式会社東洋機工製作所工場建設に伴う発掘調査報告2』島原市文化財調査報告書第13集 島原市教育委員会
- 杉原敦史 2012「古代における彼杵郡と松浦郡の郡境について-考古学的成果に基づく歴史学資料の再検討-」『西海考古』第8号 故 福田一志氏追悼論文集 西海考古同人会
- 高来町教委編 1993『中江遺跡・上田井原遺跡』高来町文化財調査報告書第1集 高来町教育委員会
- 高倉洋彰 1973「墳墓からみた弥生時代社会の発展過程」『考古学研究』第20巻 第2号 考古学研究会
- 田平町教委編 1992『中野ノ辻遺跡』田平町文化財調査報告書 第6集
- 多良見町教委編 1974『化屋大島遺跡』多良見町文化財調査報告書 第2集
- 都出比呂志 1993「前方後円墳体制と民族形成」『待兼山論叢』史学篇27 大阪大学文学部
- 辻田淳一郎 2019『鏡の古代史』KADOKAWA
- 寺田正剛 2005「長崎県地域における箱式石棺墓の様相について」『西海考古』第6号 西海考古同人会
- 中尾篤志 2008「長崎県の縄文住居」『九州の縄文住居Ⅱ』第18回九州縄文研究会熊本大会資料集 九州縄文研究会
- 中尾篤志 2013「土器編年と地域間交流」『新編大村市史』大村市史編さん委員会
- 中川潤次 2017「第Ⅴ章まとめ」『竹松遺跡』都市計画道路池田沖田線街路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 長崎県文化財調査報告書第217集 長崎県教育委員会
- 中園 聡 2004「弥生文化の成立」『九州弥生文化の特質』九州大学出版会
- 長崎県教委編 1981「五反田遺跡」『長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅳ』長崎県文化財調査報告書 第55集
- 長崎県教委編 1985『西ノ角遺跡』長崎県文化財調査報告書 第73集 長崎県教育委員会
- 長崎県教委編 1986『今福遺跡Ⅲ』長崎県文化財調査報告書 第84集 長崎県教育委員会
- 長崎県教委編 1996『伊木力遺跡Ⅰ』長崎県文化財調査報告書第126集 長崎県教育委員会
- 長崎県教委編 2006『門前遺跡』長崎県文化財調査報告書 第190集
- 長崎県教委編 2012『中ノ瀬遺跡』長崎県教育委員会
- 長崎県教委編 2016『黒丸遺跡』県立ろう学校移転改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第215集 長崎県教育委員会
- 長崎県教委編 2018『竹松遺跡Ⅲ』長崎県教育委員会
- 長崎県教委編 2019『竹松遺跡Ⅳ』長崎県教育委員会
- 長崎県教委編 2020『竹松遺跡Ⅴ』長崎県教育委員会
- 速水信也 1985「Ⅵ総括」『横隈狐塚遺跡Ⅱ』小都市文化財調査報告書第27集 小都市教育委員会
- 東彼杵町教委編 1990『白井川遺跡』東彼杵町文化財調査報告書 第4集 東彼杵町教育委員会
- 久村貞男 1994「第7章 総括」『四反田遺跡』平成5年度 佐世保市埋蔵文化財発掘調査報告書 佐世保市教育委員会
- 平戸市教委編 1986『津吉遺跡群発掘調査報告書』平戸市教育委員会
- 平戸市教委編 1993「馬込遺跡の発掘調査 I」平戸市の文化財 35

- 福田一志 1996「剥片石器」『伊木力遺跡Ⅰ』長崎県文化財調査報告書第126集 長崎県教育委員会
- 藤尾慎一郎 2014「弥生鉄史観の見直し」『国立歴史民俗博物館研究報告』第185集 国立歴史民俗博物館
- 藤田和裕 1994「長崎県」『国立歴史民俗博物館研究報告』弥生・古墳時代遺跡出土鏡データ集成 国立歴史民俗博物館
- 古門雅高 2020a「竹松遺跡の時期区分」『竹松遺跡Ⅴ』新幹線文化財調査報告書第12集 長崎県教育委員会
- 古門雅高 2020b「Ⅲ弥生時代の竹松遺跡の総括」『竹松遺跡Ⅴ』新幹線文化財調査報告書第12集 長崎県教育委員会
- 本田秀樹 2000「1号土坑出土石器」『長畑馬場遺跡』大島村文化財調査報告書第13集 大島村教育委員会
- 松浦市教委編 2015『栢ノ木遺跡（中間報告）』松浦市教育委員会
- 松浦市教委編 2015『松浦市内遺跡確認調査（4）』松浦市文化財調査報告書第6集 松浦市教育委員会
- 溝口孝司 2001「第3章 弥生時代の社会」『現代の考古学6 村落と社会の考古学』朝倉書房 pp.135-160
- 宮崎貴夫 1995「五島列島の弥生・古墳時代の墓制と文化—西北九州地域との比較を中心として—」『風土記の考古学』5 同成社
- 宮崎貴夫 2019『長崎地域の考古学研究』自費出版
- 渡邊康行 1996「まとめ 石器」『伊木力遺跡Ⅰ』長崎県文化財調査報告書第126集 長崎県教育委員会

# 滑石製石錘について

土岐 耕司

## はじめに

玄界灘沿岸を中心に分布する漁撈関連遺物として、「九州型石錘」が広く知られている。タテ・ヨコのいずれか、あるいはその両方に溝をめぐらせるものや穿孔するものがあり、その素材として滑石製のものが多く認められる。そして、これらの帰属時期は弥生～古墳時代とされている。

長崎県内においても、「九州型石錘」との形状的共通点を感じさせるような滑石製石錘が出土している。しかし、滑石製石鍋を転用した痕跡があるものが少なからず認められるため、長崎県内のそれは石鍋が盛んに製作・利用された古代後半～中世前半であるものが多いと考えられる。

かつて筆者が従事した長崎市深堀遺跡の発掘調査でも、太めの溝内に大きめの穿孔をするタイプの滑石錘が出土したが、それは一見「九州型石錘」に比定し得るものであった。出土状況からは滑石盛行期である古代後半～中世前半のものと考えの方が妥当ではないかと感じていたのであるが、佐々田学氏による報告書での当該品の観察記述（註1）により、錘下部に鋸引きの痕跡が認められたことから、弥生～古墳時代の産物にはならないことが証明されたのである。

このように形状的にはよく似ていながらも、その製作年代には大きな隔たりがある2つの遺物群が存在することは、一定の認識はありながらも明確に区別されて取り扱われている事例は少ないように感じてきた。そこで、本稿においては「滑石製石鍋に併行する滑石製石錘」に限定した集成作業を試みた。ただし、名称の煩雑さ解消の措置として、本稿においては対象とする該期遺物を「石鍋併行滑石錘」と呼称する。集成範囲が充分でないことは自覚しているが、まずは「石鍋併行滑石錘」の存在そのものを確認し、前代（弥生～古墳時代）のものとの峻別を目的としたい。

## 1. 研究略史

「九州型石錘」は下條信行氏によって提唱され（下條 1984）、以後盛んに分類案が示されてきたが、これらはあくまでも弥生～古墳時代の遺物、或いはその系譜を直接引くものとしての取り扱いである。これらの分類案をまとめる形で、林田好子氏・中尾篤志氏が九州内における集成作業を行っており（林田・中尾 2014）、この中で古代以降の「九州型石錘」についても触れている。中尾氏曰く、「古代以降の類似した石錘については、意外に注目されてこなかった。」「中世の石錘については、長崎県松浦市の楼楷田遺跡での分析事例があるものの、長崎県内でもほとんど手つかずの分野である。」としつつ、長崎県西海市の膝行神貝塚出土資料などから、「古代以降にも九州型石錘の系譜をひく石錘が存続し、特に中世以降は滑石製石鍋の流通により、破片を転用した九州型石錘が盛行した可能性は否定できないであろう。」としている。

このように中尾氏は、「九州型石錘」と「石鍋併行滑石錘」とが系譜的つながりをもつ遺物群であることを示唆している。本稿は両者の峻別が主眼となるので、中尾氏のこのスタンスに対しては相反する趣旨とならざるを得ないが、林田・中尾論文は時代の異なる両者の存在を明確にし、それら进行分析・検討した初例であり重要である。

## 2. 集成にあたっての留意点

「石鍋併行滑石錘」と「九州型石錘」には、形状的共通点が認められる。そのため石鍋を転用した痕跡でも認められない限り、出土品そのもの自体で帰属時期を判別するのは非常に困難である。また、石錘という漁撈具である以上、明確に遺構に伴うということもあまり例がない。さらに、複合時期にわたる遺跡では、古い遺物が新しい層や遺構に混入してしまうことも、しばしばあることである。

このような問題を克服する必要もあり、作業としてはひとまず帰属時期を問わず、滑石製の遺物が掲載される発掘調査報告書を抜き出して、滑石の利用状況を概観した。そして、それらの中から滑石錘を抽出（紡錘車や温石との違いが明瞭でないものは除外）し、「石鍋併行滑石錘」である蓋然性が高いものを、以下の点に留意して抽出した。

- ・石鍋転用の痕跡がある。
- ・当該遺跡から石鍋盛行期以前の遺物が出ていない。
- ・石鍋以前の遺物が出ている遺跡であっても、その出土状況に石鍋盛行期のものである蓋然性がある（遺構や包含層から出土した他の遺物と整合性が感じられる等）。

## 3. 対象とした地域と報告書

滑石利用状況の概観および「石鍋併行滑石錘」の抽出作業は、石錘が沿岸性の遺物であることを想定し、且つ時間的制約もあって、恣意的にはあるが対象地域を選択した（註2）。

### 【福岡県】

- ・福岡市教育委員会が刊行した報告書
- ・糸島市教育委員会が刊行した報告書（合併前市町村刊行のものを含む）
- ・遠賀川流域の市町村教育委員会が刊行した報告書（北九州市を除く）

### 【佐賀県】

- ・唐津市教育委員会が刊行した報告書

### 【長崎県】

- ・対馬を除く県全域の報告書

### 【沖縄県】

- ・県全域の報告書

## 4 - 1. 福岡県における滑石の利用状況

546冊の報告書（福岡市456、糸島市34、遠賀川流域市町村56）において、何らかの滑石製品の出土が報告されていることを確認した。その報告書のうち、A. 弥生時代～古代前半の産物のみを掲載するもの：227冊、B. 石鍋およびその関連・併行遺物のみを掲載するもの：219冊、C. 両者を掲載するもの：74冊、D. 俄かには判別しがたいもの：26冊、となる（表1）。

この集計から、福岡県では石鍋盛行期より古い時期からの盛んな滑石利用が見て取れる。多くは紡錘車・有孔円板といった穿孔製品や、勾玉・子持ち勾玉・白玉・小玉といった玉類であるが、滑石に対する素材としてのこだわりはそれほど強くない印象を受ける。同じ器種であっても、土製のものや結晶片岩・蛇紋岩のような別岩石素材のものも多く、これらの素材が特に区別されている印象は受けない。

このような特定素材に固執しない状況は、「九州型石錘」に関しても同様のことが言え、土製のものや砂岩・粘板岩など他岩石製のものが認められる。弥生時代～古代前半の当地における滑石は、比

表 1 - 1 福岡県の滑石利用状況及び滑石錘の出土状況

刊行年度	刊行機関	集号	書名 (略5字)	滑石 製品 時期	滑石錘	石鍋 併行 滑石錘	刊行年度	刊行機関	集号	書名 (略5字)	滑石 製品 時期	滑石錘	石鍋 併行 滑石錘
1979	福岡市	49	板付遺跡調	A			1990	福岡市	236	脇山 I	B		
1981	福岡市	70	高柳遺跡	B			1991	福岡市	238	今宿五郎江	A	○	
1981	福岡市	71	原深町遺跡	A	○		1991	福岡市	241	影ヶ浦古墳	A		
1981	福岡市	75	今山・今宿	A			1991	福岡市	242	徳永遺跡	C		
1982	福岡市	79	西新町遺跡	A	○		1991	福岡市	244	博多16	C		
1982	福岡市	85	野多目前田	A			1991	福岡市	245	博多17	B	○	○
1982	福岡市	87	海の中道遺	C	○	○	1991	福岡市	248	博多20	B		
1983	福岡市	91	久保園遺跡	C			1991	福岡市	249	博多21	C		
1983	福岡市	92	拾六町ツイ	C	○		1991	福岡市	254	那珂遺跡 4	C		
1983	福岡市	93	野多目拈渡	A			1991	福岡市	255	比恵遺跡群	A	○	
1983	福岡市	96	有田・小田	B			1991	福岡市	259	藤崎遺跡 6	D	○	
1984	福岡市	105	博多	C	○	○	1991	福岡市	262	箱崎遺跡 2	B	○	○
1984	福岡市	107	麦野下古賀	B			1991	福岡市	264	有田・小田	A		
1984	福岡市	108	諸岡遺跡	A			1991	福岡市	269	脇山 II	B		
1985	福岡市	113	有田・小田	B			1992	福岡市	271	三苦遺跡群	D	○	
1985	福岡市	115	板付周辺遺	A			1992	福岡市	272	立花寺 1	B		
1985	福岡市	119	博多 IV	B			1992	福岡市	273	箱崎 3	B	○	○
1985	福岡市	120	博多 V	B			1992	福岡市	274	堅粕 1	B		
1985	福岡市	121	多々良込田	C			1992	福岡市	282	博多27	B		
1986	福岡市	125	柏原遺跡群	A			1992	福岡市	284	博多29	B		
1986	福岡市	126	博多	B			1992	福岡市	285	博多30	B	○	○
1986	福岡市	127	吉武遺跡群	A			1992	福岡市	286	博多31	B		
1986	福岡市	129	有田遺跡群	C			1992	福岡市	287	博多32	D	○	
1986	福岡市	130	比恵遺跡	A	○		1992	福岡市	289	比恵遺跡群	A		
1986	福岡市	132	今宿五郎江	A	○		1992	福岡市	290	那珂遺跡 4	A		
1986	福岡市	135	板付周辺遺	A			1992	福岡市	291	那珂 5	A	○	
1986	福岡市	138	藤崎遺跡 IV	B			1992	福岡市	293	福岡城肥前	B	○	
1986	福岡市	139	有田・小田	B	○		1992	福岡市	296	飯倉 A 遺跡	D	○	
1987	福岡市	147	博多 VII	B			1992	福岡市	301	草場古墳群	A	○	
1987	福岡市	150	博多 X	B			1992	福岡市	306	徳永遺跡 (II)	A		
1987	福岡市	153	那珂遺跡	A			1992	福岡市	307	有田・小田	A		
1987	福岡市	155	有田・小田	C	○		1992	福岡市	308	有田・小田	A		
1987	福岡市	156	博多	B			1992	福岡市	311	脇山 III	B		
1987	福岡市	157	柏原遺跡群	B			1992	福岡市	313	国史跡野方	A	○	
1987	福岡市	162	公民館建設	B			1993	福岡市	319	吉塚本町遺	A	○	
1987	福岡市	167	田村遺跡 III	B			1993	福岡市	323	那珂 7	B		
1987	福岡市	168	田村遺跡 IV	B			1993	福岡市	324	那珂遺跡 8	D		
1987	福岡市	169	青木遺跡	B	○		1993	福岡市	325	比恵遺跡群	A		
1987	福岡市	170	下山門乙女	D	○		1993	福岡市	327	博多35	B		
1988	福岡市	173	有田・小田	C			1993	福岡市	328	博多36	B		
1988	福岡市	180	羽根戸遺跡	A	○		1993	福岡市	329	博多37	C		
1988	福岡市	184	博多	C	○		1993	福岡市	330	博多38	B		
1988	福岡市	186	都地遺跡・	A			1993	福岡市	332	博多40	D	○	
1988	福岡市	191	柏原遺跡群	C			1993	福岡市	335	タカパン塚	A		
1988	福岡市	192	田村遺跡 V	B			1993	福岡市	338	藤崎遺跡 8	A		
1988	福岡市	193	博多	B	○	○	1993	福岡市	340	有田・小田	C	○	
1989	福岡市	194	吉武遺跡群	A			1993	福岡市	341	熊本遺跡群	B		
1989	福岡市	197	峯遺跡	B			1993	福岡市	343	入部 IV	C		
1989	福岡市	198	羽根戸古墳	A			1993	福岡市	348	野方久保遺	A	○	
1989	福岡市	200	田村遺跡 VI	C			1993	福岡市	349	拾六町平田	A	○	
1989	福岡市	201	戸原麦尾遺	B			1993	福岡市	350	青木遺跡 2	B		
1989	福岡市	202	吉塚 1	C	○		1993	福岡市	351	相原古墳群	A		
1989	福岡市	203	西新町遺跡	A			1993	福岡市	352	飯氏遺跡群	A	○	
1989	福岡市	204	博多	B	○		1994	福岡市	357	席田遺跡群	D	○	
1989	福岡市	205	博多	B	○	○	1994	福岡市	361	中南部(3)	A		
1989	福岡市	207	唐原遺跡 II	A	○		1994	福岡市	363	五十川赤目	A		
1989	福岡市	209	老司古墳	A			1994	福岡市	365	那珂 10	C		
1989	福岡市	211	野間 B 遺跡	A			1994	福岡市	367	那珂遺跡 12	C		
1989	福岡市	212	有田・小田	D	○		1994	福岡市	368	比恵遺跡 13	A	○	
1989	福岡市	213	福岡市西部	B			1994	福岡市	370	博多 41	C		
1990	福岡市	216	田村遺跡 VII	A			1994	福岡市	376	藤崎遺跡 9	A	○	
1990	福岡市	217	戸原麦尾遺	B			1994	福岡市	377	有田・小田	A		
1990	福岡市	221	博多	B	○	○	1994	福岡市	378	有田・小田	C	○	
1990	福岡市	222	那珂 2	A			1994	福岡市	379	飯倉 F 遺跡	A		
1990	福岡市	223	都地・七反	A			1994	福岡市	382	東入部遺跡	B		
1990	福岡市	224	大塚遺跡・	A			1994	福岡市	385	田村遺跡 X	B		
1990	福岡市	225	湯納遺跡	A	○		1994	福岡市	386	脇山 VI	B		
1990	福岡市	226	生松台	A			1994	福岡市	387	飯倉唐木遺	A		
1990	福岡市	227	比恵遺跡群	A	○		1994	福岡市	389	今宿遺跡	A		
1990	福岡市	229	博多 14	B			1994	福岡市	390	飯氏遺跡群	B	○	
1990	福岡市	230	博多 15	B	○	○	1995	福岡市	396	博多 47	B	○	○
1990	福岡市	234	有田・小田	A			1995	福岡市	397	博多 48	B		

表 1 - 2 福岡県の滑石利用状況及び滑石錘の出土状況

刊行年度	刊行機関	集号	書名 (略5字)	滑石 製品 時期	滑石錘	石鍋 併行 滑石錘	刊行年度	刊行機関	集号	書名 (略5字)	滑石 製品 時期	滑石錘	石鍋 併行 滑石錘
1995	福岡市	399	那珂14	A			1998	福岡市	583	国道202号線	A		
1995	福岡市	400	東那珂遺跡	A			1998	福岡市	584	今山遺跡	B		
1995	福岡市	402	比恵遺跡群	A			1999	福岡市	589	蒲田部木原	D	○	
1995	福岡市	403	比恵遺跡群	A			1999	福岡市	590	堅粕3	A		
1995	福岡市	404	比恵遺跡群	A	○		1999	福岡市	591	箱崎7	B	○	
1995	福岡市	406	雀居遺跡2	A			1999	福岡市	592	箱崎8	B	○	○
1995	福岡市	407	雀居遺跡3	A			1999	福岡市	594	博多67	B		
1995	福岡市	409	中南部(4)	C			1999	福岡市	595	比恵27	A		
1995	福岡市	418	四箇遺跡25	A			1999	福岡市	597	那珂22	C		
1995	福岡市	424	入部V	B			1999	福岡市	607	藤崎遺跡14	B		
1995	福岡市	431	大原A遺跡	D	○		1999	福岡市	608	有田・小田	B		
1995	福岡市	432	桑原遺跡群	B			1999	福岡市	613	入部IX	D		
1995	福岡市	433	大原C遺跡	B	○		1999	福岡市	614	室見が丘	C		
1995	福岡市	434	都地遺跡(4)	B			1999	福岡市	618	峯遺跡2	B		
1996	福岡市	442	比恵遺跡群	A			1999	福岡市	619	大坪遺跡・	A		
1996	福岡市	443	博多49	D	○		2000	福岡市	621	香椎B遺跡	C		
1996	福岡市	444	原遺跡8	C			2000	福岡市	622	香椎A遺跡	B		
1996	福岡市	446	蒲田部木原	A			2000	福岡市	624	吉塚祝町1	A		
1996	福岡市	448	博多51	C	○	○	2000	福岡市	626	堅粕4	B		
1996	福岡市	449	博多52	D	○	○	2000	福岡市	629	博多71	B	○	○
1996	福岡市	450	博多53	B	○		2000	福岡市	632	博多74	D	○	
1996	福岡市	453	比恵遺跡群	A	○		2000	福岡市	635	雀居遺跡5	A		
1996	福岡市	455	那珂16	B			2000	福岡市	637	東那珂4・	A		
1996	福岡市	456	下月隈天神	B			2000	福岡市	638	那珂24	C	○	
1996	福岡市	459	箱崎4	B	○	○	2000	福岡市	639	那珂25	B		
1996	福岡市	464	吉塚2	B			2000	福岡市	641	南八幡遺跡	A		
1996	福岡市	467	福岡外環状	C			2000	福岡市	643	麦野C遺跡	C		
1996	福岡市	470	有田・小田	B			2000	福岡市	647	田島小松浦	B		
1996	福岡市	471	有田・小田	C			2000	福岡市	651	有田・小田	A		
1996	福岡市	476	三苦永浦遺	A	○		2000	福岡市	654	IR 筑肥線複	A	○	
1996	福岡市	477	三苦遺跡群	A	○		2000	福岡市	658	井相田C遺	A		
1996	福岡市	478	姪浜遺跡2	A	○		2001	福岡市	664	箱崎10	B		○
1996	福岡市	479	今宿五郎江	A	○		2001	福岡市	665	吉塚7	A		
1996	福岡市	481	大原D遺跡	C	○		2001	福岡市	666	博多75	B		
1996	福岡市	484	西新町遺跡	A	○		2001	福岡市	667	博多76	B	○	
1996	福岡市	485	入部VI	C			2001	福岡市	668	博多77	B	○	○
1997	福岡市	501	麦野C・南	B			2001	福岡市	669	博多78	C	○	
1997	福岡市	505	西新町遺跡	A	○		2001	福岡市	670	博多79	B		
1997	福岡市	506	鋤崎古墳群	A			2001	福岡市	671	比恵30	A		
1997	福岡市	507	大原D遺跡	D	○		2001	福岡市	672	那珂27	A		
1997	福岡市	510	重留村下遺	A			2001	福岡市	673	那珂28	C		
1997	福岡市	513	有田・小田	B			2001	福岡市	676	高畑遺跡17	A		
1997	福岡市	514	吉武遺跡群	A	○		2001	福岡市	681	片江B遺跡	A		
1997	福岡市	516	入部VII	B			2001	福岡市	682	樋井川A遺	B	○	
1997	福岡市	518	那珂18	A	○		2001	福岡市	683	西新町遺跡	A	○	
1997	福岡市	519	井和田C第	A			2001	福岡市	684	有田・小田	C		
1997	福岡市	520	比恵遺跡群	A			2001	福岡市	689	神松寺遺跡	D	○	
1997	福岡市	522	博多57	C			2001	福岡市	697	鋤崎古墳群	A		
1997	福岡市	523	立花寺B遺	B			2002	福岡市	699	高畑遺跡	A		
1997	福岡市	525	那珂遺跡19	A			2002	福岡市	700	福岡外環状	A	○	
1997	福岡市	526	博多58	C			2002	福岡市	702	立花寺B遺	C		
1997	福岡市	527	野多目A遺	C			2002	福岡市	703	箱崎11	B		
1997	福岡市	529	井尻B遺跡	A			2002	福岡市	704	箱崎12	B		
1997	福岡市	530	比恵遺跡群	A	○		2002	福岡市	705	箱崎13	B		
1997	福岡市	534	席田青木遺	A	○		2002	福岡市	706	博多80	B	○	○
1997	福岡市	535	福岡外環状	B			2002	福岡市	707	博多81	B	○	○
1997	福岡市	539	板付周辺遺	C			2002	福岡市	708	博多82	B		
1997	福岡市	541	小葎遺跡	A	○		2002	福岡市	711	博多85	C	○	
1997	福岡市	542	橋本榎田遺	C			2002	福岡市	713	那珂32	B		
1997	福岡市	543	博多60	B			2002	福岡市	714	那珂30	A		
1997	福岡市	544	原遺跡9	B			2002	福岡市	716	板付周辺遺	A		
1998	福岡市	551	箱崎6	B	○		2002	福岡市	717	板付周辺遺	A		
1998	福岡市	552	吉崎4	A			2002	福岡市	723	田島A遺跡	A		
1998	福岡市	556	博多61	B	○	○	2002	福岡市	725	有田・小田	A	○	
1998	福岡市	558	博多63	B			2002	福岡市	727	下山門敷町	C	○	○
1998	福岡市	559	博多64	C	○	○	2002	福岡市	728	コノリ遺跡	A	○	
1998	福岡市	560	博多65	C	○	○	2002	福岡市	730	鋤崎古墳	A		
1998	福岡市	565	雀居遺跡4	C			2002	福岡市	732	大原D遺跡	A		
1998	福岡市	566	下月隈C遺	B	○		2003	福岡市	737	今宿五郎江	A	○	
1998	福岡市	576	野芥遺跡3	A			2003	福岡市	738	今宿遺跡2	A	○	
1998	福岡市	577	入部VIII	B	○		2003	福岡市	744	元岡・桑原	A		
1998	福岡市	581	福岡外環状	D	○		2003	福岡市	746	雀居7	A	○	

表 1 - 3 福岡県の滑石利用状況及び滑石錘の出土状況

刊行年度	刊行機関	集号	書名 (略5字)	滑石 製品 時期	滑石錘	石鍋 併行 滑石錘	刊行年度	刊行機関	集号	書名 (略5字)	滑石 製品 時期	滑石錘	石鍋 併行 滑石錘
2003	福岡市	747	雀居 8	A	○		2007	福岡市	949	箱崎28	B		
2003	福岡市	748	雀居 9	A			2007	福岡市	950	箱崎29	B	○	
2003	福岡市	749	重留村下遺	B			2007	福岡市	951	箱崎30	B		
2003	福岡市	750	下月隈C遺	A			2007	福岡市	952	箱崎31	B	○	
2003	福岡市	751	福岡外環状	C			2007	福岡市	956	比恵47	A		
2003	福岡市	757	博多86	B	○	○	2007	福岡市	963	元岡・桑原	A		
2003	福岡市	760	博多89	B			2007	福岡市	964	元岡・桑原	B		
2003	福岡市	761	博多90	B			2007	福岡市	965	吉武遺跡群	B		
2003	福岡市	764	博多93	B			2008	福岡市	971	有田・小田	A	○	
2003	福岡市	766	博多95	D	○		2008	福岡市	976	蒲田部木原	A		
2003	福岡市	767	箱崎14	B			2008	福岡市	983	那珂50	A		
2003	福岡市	773	三苫 4	C	○		2008	福岡市	984	西新町遺跡	A	○	
2003	福岡市	775	吉武遺跡群	A			2008	福岡市	988	博多118	C		
2003	福岡市	776	諸岡B遺跡	B			2008	福岡市	989	博多119	B		
2003	福岡市	777	席田青木遺	D	○		2008	福岡市	990	博多120	B	○	○
2003	福岡市	779	立花寺 5	B			2008	福岡市	991	博多121	B	○	○
2004	福岡市	787	井尻B遺跡	A			2008	福岡市	993	博多123	B		
2004	福岡市	795	下月隈C遺	A			2008	福岡市	994	博多124	B		
2004	福岡市	796	下山門乙女	B			2008	福岡市	996	箱崎32	B	○	○
2004	福岡市	799	高畑遺跡	A			2008	福岡市	997	箱崎33	B		
2004	福岡市	802	那珂36	A			2008	福岡市	998	箱崎34	B	○	○
2004	福岡市	807	博多98	B	○		2008	福岡市	999	箱崎35	B		
2004	福岡市	808	博多99	B			2008	福岡市	1002	比恵52	A	○	
2004	福岡市	811	箱崎17	B	○	○	2008	福岡市	1003	比恵53	A		
2004	福岡市	815	箱崎21	A			2008	福岡市	1009	今宿五郎江	A		
2004	福岡市	820	比恵34	A			2008	福岡市	1011	元岡・桑原	A		
2004	福岡市	823	東油山古墳	A			2008	福岡市	1012	元岡・桑原	C		
2004	福岡市	829	元岡・桑原	A	○		2008	福岡市	1013	元岡・桑原	A		
2005	福岡市	835	今山遺跡	A	○		2008	福岡市	1016	金武 5	A		
2005	福岡市	839	下月隈C遺	C	○		2008	福岡市	1019	五十川遺跡	A		
2005	福岡市	843	那珂39	B			2008	福岡市	1021	那珂遺跡群	A		
2005	福岡市	845	長垂大谷遺	A	○		2009	福岡市	1030	坂堤 1	B		
2005	福岡市	846	西新町遺跡	A	○		2009	福岡市	1031	田村 15	B		
2005	福岡市	847	博多101	B	○	○	2009	福岡市	1033	那珂52	A		
2005	福岡市	850	博多104	B	○	○	2009	福岡市	1037	仲島遺跡 1	A		
2005	福岡市	851	博多105	B			2009	福岡市	1038	博多126	B	○	○
2005	福岡市	852	箱崎22	B			2009	福岡市	1039	博多127	C		
2005	福岡市	853	箱崎23	C	○	○	2009	福岡市	1040	博多128	B	○	
2005	福岡市	854	箱崎24	B			2009	福岡市	1041	博多129	B		
2005	福岡市	855	比恵38	A	○		2009	福岡市	1042	博多130	C	○	○
2005	福岡市	857	比恵40	A			2009	福岡市	1043	博多131	B		
2005	福岡市	860	元岡・桑原	A			2009	福岡市	1044	博多132	B		
2005	福岡市	861	元岡・桑原	A			2009	福岡市	1045	博多133	B	○	○
2005	福岡市	864	吉武遺跡群	A			2009	福岡市	1046	箱崎36	B		
2005	福岡市	866	金武 2	C			2009	福岡市	1048	箱崎38	B	○	
2005	福岡市	868	雑餉隈遺跡	A			2009	福岡市	1058	姪浜遺跡 3	D	○	
2006	福岡市	870	有田・小田	D	○		2009	福岡市	1061	吉武遺跡群	A		
2006	福岡市	875	鴻臚館跡16	B			2009	福岡市	1064	元岡・桑原	C		
2006	福岡市	878	山王遺跡 1	B			2010	福岡市	1066	今宿五郎江	A	○	
2006	福岡市	879	山王遺跡 2	B			2010	福岡市	1070	入部XⅢ	B		
2006	福岡市	881	下月隈C遺	B			2010	福岡市	1071	笠拔遺跡 2	A		
2006	福岡市	884	住吉神社遺	A			2010	福岡市	1072	香椎A遺跡	B	○	○
2006	福岡市	887	那珂41	B			2010	福岡市	1073	蒲田水ヶ元	A		
2006	福岡市	888	那珂42	B			2010	福岡市	1076	山王 4	B		
2006	福岡市	892	博多106	C			2010	福岡市	1078	田島 B 1	D	○	
2006	福岡市	894	博多108	B	○	○	2010	福岡市	1082	那珂56	A		
2006	福岡市	895	博多109	B			2010	福岡市	1083	那珂57	B		
2006	福岡市	896	箱崎25	D	○	○	2010	福岡市	1086	博多135	C	○	○
2006	福岡市	898	比恵42	A	○		2010	福岡市	1087	博多136	B		
2006	福岡市	901	広瀬遺跡 2	B			2010	福岡市	1088	博多137	B		
2006	福岡市	909	元岡・桑原	C	○		2010	福岡市	1090	博多139	B	○	○
2006	福岡市	912	吉塚祀町 2	C	○	○	2010	福岡市	1092	箱崎39	B		
2006	福岡市	914	箱崎26	A	○		2010	福岡市	1094	箱崎41	B	○	○
2007	福岡市	924	今宿五郎江	A	○		2010	福岡市	1096	比恵57	A	○	
2007	福岡市	927	金武 4	C			2010	福岡市	1097	比恵58	A	○	
2007	福岡市	932	下月隈C遺	B			2010	福岡市	1101	麦野C遺跡	A		
2007	福岡市	936	那珂46	C			2010	福岡市	1102	元岡・桑原	C		
2007	福岡市	940	博多110	B	○	○	2010	福岡市	1103	元岡・桑原	C	○	
2007	福岡市	942	博多112	D	○		2011	福岡市	1105	元岡・桑原	A	○	
2007	福岡市	945	博多115	A			2011	福岡市	1107	板付 11	A	○	
2007	福岡市	946	博多116	B			2011	福岡市	1109	今宿五郎江	A	○	
2007	福岡市	948	箱崎27	B	○		2011	福岡市	1111	大塚遺跡 4	A	○	



表1-4 福岡県の滑石利用状況及び滑石錘の出土状況

刊行年度	刊行機関	集号	書名 (略5字)	滑石 製品 時期	滑石錘	石鍋 併行 滑石錘
2011	福岡市	1112	上月隈4	A		
2011	福岡市	1114	坂堤2	B		
2011	福岡市	1116	山王5	A		
2011	福岡市	1117	千里	B		
2011	福岡市	1118	田村17	B		
2011	福岡市	1121	那珂58	B		
2011	福岡市	1125	博多142	B	○	○
2011	福岡市	1126	博多143	D	○	
2011	福岡市	1127	箱崎42	B		
2011	福岡市	1128	箱崎43	B	○	○
2012	福岡市	1137	今宿五郎江	C	○	
2012	福岡市	1141	入部X V	B		
2012	福岡市	1142	卯内尺古墳	A		
2012	福岡市	1144	大塚遺跡5	B	○	
2012	福岡市	1145	香椎A遺跡	A		
2012	福岡市	1148	久保園遺跡	A	○	
2012	福岡市	1151	谷遺跡2・	B		
2012	福岡市	1153	辻ノ花遺跡	B		
2012	福岡市	1161	七曲古墳群	A		
2012	福岡市	1162	中南部10	B	○	
2012	福岡市	1163	箱崎遺跡44	B		
2012	福岡市	1165	箱崎遺跡46	B	○	○
2012	福岡市	1167	原遺跡14	B		
2012	福岡市	1175	史跡鴻臚館	B		
2010	糸島市	1	三雲・井原	B		
2010	糸島市	2	新町・御床	A	○	
2011	糸島市	4	潤遺跡群I	B		
2012	糸島市	6	潤遺跡群II	B		
2012	糸島市	8	吉森遺跡II	B	○	○
2013	糸島市	10	三雲・井原	A	○	
1980	前原町	3	上鎌子遺跡	A	○	
1982	前原町	7	曾根遺跡群	A		
1985	前原町	20	志登遺跡群	C	○	
1990	前原町	32	井原遺跡群	A		
1992	前原町	38	井原塚廻遺	A		
1992	前原町	39	今宿バイバ	A	○	
1995	前原市	58	荻浦	A		
1997	前原市	63	志雲・井原	A		
2000	前原市	70	平原遺跡	A		
2001	前原市	76	高田小生水	B		
2002	前原市	78	三雲・井原	A		
2002	前原市	79	多久川流域	B		
2003	前原市	82	三雲・井原	C		
2004	前原市	86	三雲・井原	C	○	
2006	前原市	90	三雲・井原	A		
2006	前原市	93	潤地頭給遺	A	○	
2007	前原市	96	潤地頭給遺	A		
1991	二丈町	4	曲り田周辺	B	○	
1992	二丈町	5	曲り田周辺	B		
1994	二丈町	7	曲り田周辺	B	○	
1995	二丈町	10	大坪遺跡I	A		
1995	二丈町	12	木舟の森遺	B	○	○
1996	二丈町	13	曲り田周辺	B	○	
1997	二丈町	15	木舟・三本	B	○	○
1998	二丈町	20	曲り田周辺	B	○	
2001	二丈町	27	石崎 曲り田	B		
1992	志摩町	15	四反田古墳	A		
2009	志摩町	30	一の町遺跡	A		○
2009	赤村	4	本河内遺跡	B		
2011	赤村	6	本河内遺跡	B		
1995	芦屋町	7	金屋遺跡	B		
2006	芦屋町	15	金屋遺跡II	B		
1991	飯塚市	14	川島古墳	A		
1993	飯塚市	17	明星寺南地	A		
1997	飯塚市	23	明星寺南地	B		
2007	飯塚市	32	鳥尾遺跡II	B		
2009	飯塚市	37	出口遺跡	B		
1998	糸田町	3	宮山遺跡	A		
1987	碓井町	2	八王寺遺跡	A		
1978	大任町	2	狐塚古墳群	A		
2004	大任町	8	狐塚横穴墓	A		
1983	岡垣町	5	大坪遺跡	B		
1990	岡垣町	11	瀬戸遺跡	A	○	
1999	岡垣町	17	手野古墳群	A		
2008	岡垣町	27	高丸・友田	A		
1993	遠賀町	6	島津・塚の	A		
1999	遠賀町	12	金丸遺跡	A		
1999	遠賀町	13	尾崎・天神	A		
2006	遠賀町	17	鬼津横穴墓	A		
2007	遠賀町	18	尾崎・天神	A		
1984	嘉穂町	4	穴江・塚田	B		
1985	嘉穂町	5	榎町・勘高	B		
1987	嘉穂町	7	嘉穂地区遺	A		
1994	嘉穂町	15	嘉穂地区遺	B		
1985	川崎町	1	永井遺跡	A		
1983	桂川町	2	土師地区遺	A		
1985	桂川町	5	影塚東遺跡	A		
1987	桂川町	8	土師地区遺	A		
1988	桂川町	9	土師地区遺	A		
1989	桂川町	11	土師地区遺	A		
1995	桂川町	14	西田地区遺	B		
2011	添田町	9	榊田遺跡	B		
1983	田川市	2	夏吉古墳群	A		
1984	田川市	3	セスドノ古	A		
1988	田川市	4	下伊田遺跡	A		
1997	筑穂町	3	大分廃寺	B		
1998	筑穂町	5	上穂波地区	B		
1994	津屋崎町	9	在自遺跡群	C	○	
1995	津屋崎町	10	在自遺跡群	C		
1997	直方市	20	水町遺跡群	A		
2003	直方市	25	植木平遺跡	B		
2006	直方市	32	惣用遺跡	B		
2008	直方市	37	屋敷遺跡	B		
2008	直方市	38	水ヶ谷遺跡	C		
1989	穂波町	4	穂波地区遺	B		
1990	穂波町	5	穂波地区遺	B		
1991	穂波町	6	穂波地区遺	A		
1998	水巻町	6	上二貝塚	B		
1985	宗像市	9	埋蔵文化財	A		
1987	宗像市	12	埋蔵文化財	B		
1988	宗像市	15	武丸皆真庵	A		
1990	宗像市	24	名残II	A		
1990	宗像市	25	名残III	B		
2004	宗像市	56	大井平野	A		

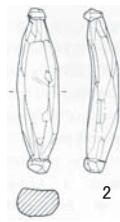
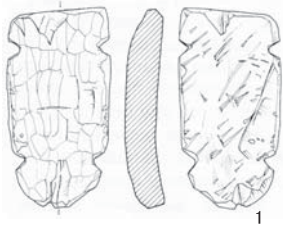
表2-1 福岡県の石鍋併行滑石錘 (法量太字は報告書掲載値, 細字は筆者の図上計測値)

番号	遺跡名	集号	書中の遺物番号	層位・地点	石鍋 転用	長	幅	厚	重さ	備考
1	海の中道遺跡	福岡市87	12	3次調査	○	10.5	5.5	1.5	185	
2	海の中道遺跡	福岡市87	13	3次調査 G-11	○	8.7	2.2	2.1	45	
3	海の中道遺跡	福岡市87	14	3次調査	○	6.5	1.9	1.5	(38)	欠損
4	香椎A遺跡	福岡市1072	790	SD2373	?	8.3	3.6	1.9		
5	下山門乙女田遺跡	福岡市727	110	SD05 (12c 後半~16c)		6.0	2.6	2.5	54	
6	下山門乙女田遺跡	福岡市727	303	包含層 (12c 後半~16c)		3.5	1.7	1.7	14	
7	下山門乙女田遺跡	福岡市727	304	包含層 (12c 後半~16c)		3.0	1.4	1.4	9	
8	博多遺跡群	福岡市105	8	7号土坑	○	5.6	2.3	1.4		
9	博多遺跡群	福岡市105	9	7号土坑	○					欠損
10	博多遺跡群	福岡市105	10	7号土坑	○	7.7	2.5	1.6		
11	博多遺跡群	福岡市105	11	7号土坑	○	8.1	3.6	1.9		
12	博多遺跡群	福岡市205	65	SX33 (15c)		4.5	1.3	1.2		
13	博多遺跡群	福岡市221	12	171号井戸	○	6.0	2.2	1.2		
14	博多遺跡群	福岡市221	31	V層包含層 (11c 後半~12c 前半)	○					欠損
15	博多遺跡群	福岡市230	23	23号溝	○	4.1	2.1	1.5		
16	博多遺跡群	福岡市245	64	735号遺構 (15c)		5.0	2.0	1.7		
17	博多遺跡群	福岡市245	20	965号遺構 (12c 後半~14c)		4.3	2.4	2.3		
18	博多遺跡群	福岡市245	12	1343号遺構 (12c 後半~14c)	○	4.2	2.0	1.1		
19	博多遺跡群	福岡市245	13	1343号遺構 (12c 後半~14c)	○	3.7	2.4	2.0		
20	博多遺跡群	福岡市245	14	1343号遺構 (12c 後半~14c)	○	6.1	2.9	0.9		
21	博多遺跡群	福岡市245	19	1500号遺構 (12c 後半~14c)	○	5.5	2.5	1.3		
22	博多遺跡群	福岡市245	20	1500号遺構 (12c 後半~14c)	○	6.4	2.9	2.5		
23	博多遺跡群	福岡市245	21	1500号遺構 (12c 後半~14c)	○	5.2	1.6	1.3		
24	博多遺跡群	福岡市285	843	11c 以降	○	3.4	2.5	1.3		
25	博多遺跡群	福岡市285	844	11c 以降	○	3.3	2.5	1.3		
26	博多遺跡群	福岡市285	845	11c 以降		4.9	2.1	1.5		
27	博多遺跡群	福岡市285	846	11c 以降		6.3	3.8	2.0		
28	博多遺跡群	福岡市285	847	11c 以降						欠損
29	博多遺跡群	福岡市285	848	11c 以降		7.3	3.6	2.0		
30	博多遺跡群	福岡市285	849	11c 以降		4.3	2.3	1.8		
31	博多遺跡群	福岡市285	851	11c 以降		5.6	2.5	2.2		
32	博多遺跡群	福岡市285	852	11c 以降		5.7	3.6	2.5		
33	博多遺跡群	福岡市285	853	11c 以降		4.9	2.7	1.7		
34	博多遺跡群	福岡市285	854	11c 以降		4.6	1.5	1.3		
35	博多遺跡群	福岡市285	855	11c 以降		4.3	2.4	2.0		
36	博多遺跡群	福岡市285	856	11c 以降		5.1	2.4	1.5		
37	博多遺跡群	福岡市285	857	11c 以降	○	5.6	2.6	0.8		
38	博多遺跡群	福岡市285	858	11c 以降	○	6.9	3.5	1.4		
39	博多遺跡群	福岡市285	859	11c 以降		4.6	4.4	1.9		
40	博多遺跡群	福岡市285	860	11c 以降	○	7.5	2.8	1.1		
41	博多遺跡群	福岡市285	861	11c 以降		4.2	1.9	1.1		
42	博多遺跡群	福岡市285	862	11c 以降		5.1	2.5	1.7		
43	博多遺跡群	福岡市396	640	SD109 (14c 前半)	○	6.0	5.7	1.9	127	
44	博多遺跡群	福岡市396	635	SD82 (14c 前半~中頃)		5.9	2.7	1.7	42	
45	博多遺跡群	福岡市396	636	SK37	○				(193)	欠損
46	博多遺跡群	福岡市396	637	SD119 (13c 初頭~後半)	○	4.8	4.3	2.3	99	
47	博多遺跡群	福岡市396	638	SD120 (12c)	○	3.9	3.2	2.7	55	
48	博多遺跡群	福岡市396	639	SE24	○	10.1	3.4	1.5	105	
49	博多遺跡群	福岡市396	641	包3層 (13c 前半~14c 前半)		9.5	3.6	3.1	156	
50	博多遺跡群	福岡市396	642	包5層	○	7.5	1.8	1.6	34	
51	博多遺跡群	福岡市448	156	SE370 (12c 中頃~後半)		5.3	1.3	0.9	10	
52	博多遺跡群	福岡市448	445	SK-217 (15c 後半)	○					欠損
53	博多遺跡群	福岡市449	301	I面遺構1 (11c 以降)		4.9	2.5	1.8		
54	博多遺跡群	福岡市449	302	II面遺構361 (11c~15c)		4.7	2.3	1.2		
55	博多遺跡群	福岡市449	303	II面遺構371 (11c~15c)		7.1	5.1	2.9		
56	博多遺跡群	福岡市449	304	包含層 (15c~16c)		6.9	4.7	2.6		
57	博多遺跡群	福岡市556	869	182号土坑 (16c?)	○	3.1	2.0	1.7		
58	博多遺跡群	福岡市556	870	182号土坑 (16c?)	○					欠損
59	博多遺跡群	福岡市556	871	182号土坑 (16c?)	○	3.4	2.1	1.4		
60	博多遺跡群	福岡市556	872	182号土坑 (16c?)	○	3.3	2.0	1.4		
61	博多遺跡群	福岡市559	4	175号遺構 (14c 前半)	○	3.9	2.4	1.5		
62	博多遺跡群	福岡市559	9	第4面下包含層 (12c 前半)	○	5.4	2.9	1.9		
63	博多遺跡群	福岡市559	63	1面下包含層 (12c 後半~13c 前半)	○	9.1	2.1	1.7		
64	博多遺跡群	福岡市559	59	56号遺構 (12c 後半)	○	9.3	6.2	2.4		
65	博多遺跡群	福岡市559	62	1面 (14c)	○					欠損
66	博多遺跡群	福岡市559	66	1面 (14c)	○	6.7	5.9	2.3		
67	博多遺跡群	福岡市559	65	3面 (12c 後半)	○	7.1	5.6	2.1		
68	博多遺跡群	福岡市559	64	1面下包含層 (12c 後半~13c 前半)	○					欠損
69	博多遺跡群	福岡市559	67	3面 (12c 後半)						
70	博多遺跡群	福岡市560	153	SE043 (12c 後半~13c 前半)		7.5	2.0	1.8		
71	博多遺跡群	福岡市560	154	SE043 (12c 後半~13c 前半)						欠損
72	博多遺跡群	福岡市560	379	SK038 (12c 中頃~後半)		6.1	2.0	1.2	25	
73	博多遺跡群	福岡市629	535	ビット・攪乱	○	5.9	2.6	1.7	52	
74	博多遺跡群	福岡市668	5	038号遺構 (12c 後半)		5.4	4.6	1.2		
75	博多遺跡群	福岡市706	5	276号遺構 (11c 後半)						欠損
76	博多遺跡群	福岡市707	13	トレンチ	○	5.2	3.0	1.0		
77	博多遺跡群	福岡市707	14	壁面	○	6.0	2.2	1.9		
78	博多遺跡群	福岡市707	76	001c 溝 (12c 後半~14c 前半)		4.8	1.7	1.1		
79	博多遺跡群	福岡市707	78	001c 溝 (12c 後半~14c 前半)		4.8	3.1	0.8		
80	博多遺跡群	福岡市757	1259	中世包含層		5.7	3.0	2.6		
81	博多遺跡群	福岡市757	1260	中世包含層		5.0	2.4	1.7		
82	博多遺跡群	福岡市847	829	溝49	○	5.8	4.8	2.1	107	
83	博多遺跡群	福岡市850	119	SE301 (16c)	○	6.8	3.3	2.0	55	
84	博多遺跡群	福岡市850	120	SE301 (16c)	○	6.7	3.2	2.0	60	

表2-2 福岡県の石鍋併行滑石錘 (法量太字は報告書掲載値, 細字は筆者の図上計測値)

番号	遺跡名	集号	書中の遺物番号	層位・地点	石鍋転用	長	幅	厚	重さ	備考
85	博多遺跡群	福岡市850	292	SE385掘方 (12c 中頃)		6.4	4.7	2.0	121	
86	博多遺跡群	福岡市850	293	SE385掘方 (12c 中頃)		4.3	2.9	2.5	55	
87	博多遺跡群	福岡市850	329	SE399 (12c?)	?					欠損
88	博多遺跡群	福岡市850	453	SE3205 (15c 前後)	○	<b>6.4</b>	<b>3.2</b>	<b>1.8</b>	<b>63</b>	
89	博多遺跡群	福岡市850	1045	11c 以降		5.0	2.6	1.4	32	
90	博多遺跡群	福岡市850	1046	11c 以降		4.9	2.1	1.6	30	
91	博多遺跡群	福岡市850	1047	11c 以降		6.4	3.8	1.9	98	
92	博多遺跡群	福岡市850	1048	11c 以降		5.9	3.5	2.2	79	
93	博多遺跡群	福岡市850	1050	11c 以降		6.9	3.5	1.4	59	
94	博多遺跡群	福岡市850	1051	4 - 5 L 上層 (11c 前半~12c)		6.4	3.2	2.1	76	
95	博多遺跡群	福岡市850	1052	4 - 5 I 上層 (11c 前半~12c)					(22)	欠損
96	博多遺跡群	福岡市850	1053	SK459 (12c)		6.7	3.7	2.0	87	
97	博多遺跡群	福岡市894	3	3 面掘り下げ中 (11c 後半~13c)		6.6	4.3	2.6	132	
98	博多遺跡群	福岡市894	4	SD050 (12c 後半)		6.3	3.6	2.0	64	
99	博多遺跡群	福岡市894	7	3 面掘り下げ中 (11c 後半~13c)		6.5	2.7	1.6	52	
100	博多遺跡群	福岡市894	8	SE039 (16c 以降)	○	6.9	2.5	1.9	41	
101	博多遺跡群	福岡市894	9	トレンチ内	○	7.0	2.0	1.5	39	
102	博多遺跡群	福岡市940	752	第7~9 面包含層 (11c 後半~13c 後半)		7.1	2.6	1.5	47	
103	博多遺跡群	福岡市990	235	黒褐色土下層 (13c~14c)		<b>6.1</b>	<b>2.9</b>	<b>1.8</b>		
104	博多遺跡群	福岡市990	236	黒褐色土下層 (13c~14c)	○	<b>7.8</b>	<b>3.4</b>	<b>1.7</b>		
105	博多遺跡群	福岡市990	237	黒褐色土下層 (13c~14c)		<b>6.7</b>	<b>2.8</b>	<b>1.5</b>		
106	博多遺跡群	福岡市991	90	SX013 (14c 前半)	○	7.2	3.6	2.6		
107	博多遺跡群	福岡市991	281	SP532 (12c 後半)	○	8.1	4.3	2.9	137	
108	博多遺跡群	福岡市991	321	第3 面包含層 (13c~14c)	○	9.5	8.2	2.1		
109	博多遺跡群	福岡市1038	62	76号道路遺構	○	3.8	2.4	1.2		
110	博多遺跡群	福岡市1038	114	トレンチ	○	5.6	4.4	1.4		
111	博多遺跡群	福岡市1038	135	I 層	○	<b>5.9</b>	<b>3.0</b>	<b>2.0</b>		
112	博多遺跡群	福岡市1042	130	SE202 (11c 後半~12c 前半)	○	<b>8.3</b>	<b>3.8</b>	2.4		
113	博多遺跡群	福岡市1042	126	SE165 (12c 中頃~後半)		<b>6.0</b>	<b>6.3</b>	2.5		
114	博多遺跡群	福岡市1042	132	SE206 (12c 中頃~後半)		<b>4.9</b>	<b>3.1</b>	<b>2.8</b>		
115	博多遺跡群	福岡市1045	340	SK33 (12c 中頃~後半)		<b>5.0</b>	<b>2.0</b>	<b>1.6</b>		
116	博多遺跡群	福岡市1045	377	SE38 (12c 初頭~前半)	○	<b>6.4</b>	<b>3.9</b>	<b>2.5</b>	<b>82</b>	
117	博多遺跡群	福岡市1045	400	SD32 (12c 中頃~後半)	○	<b>6.8</b>	<b>3.7</b>	<b>0.8</b>	<b>63</b>	
118	博多遺跡群	福岡市1086	5	SK131 (16c 後半)	○	7.6	3.4	2.3		
119	博多遺跡群	福岡市1090	35	SE188 (11c 末頃)		5.8	1.8	0.6		
120	博多遺跡群	福岡市1125	171	SE1053 (12c 後半~13c 前半)	○	6.5	4.1	1.9		
121	博多遺跡群	福岡市1125	273	SK3021 (10c~11c)		5.0	2.1	0.9		
122	箱崎・馬出遺跡群	福岡市193	93	SK308 (13c 以降)		5.3	3.5	2.3		
123	箱崎遺跡	福岡市262	43	SE27 (18c 前半)	○	<b>10.8</b>	<b>3.1</b>	<b>2.4</b>	<b>140</b>	
124	箱崎遺跡	福岡市262	98	SK26 (12c 後半~13c 前半)		<b>5.5</b>	<b>6.5</b>	<b>3.0</b>	<b>146</b>	
125	箱崎遺跡	福岡市273	140	整地層 SX057・407 (中世後期)		4.0	3.5	2.2		
126	箱崎遺跡	福岡市273	141	整地層 SX057・407 (中世後期)		6.5	3.7	4.2		
127	箱崎遺跡	福岡市273	142	整地層 SX057・407 (中世後期)		7.3	4.8	2.0		
128	箱崎遺跡	福岡市459	43	包含層 (12c 前半~13c)		<b>6.3</b>	<b>4.2</b>	<b>2.2</b>		
129	箱崎遺跡	福岡市459	63	SK-04 (12c 前半~13c)	○	4.1	3.0	1.6		
130	箱崎遺跡	福岡市592	52	SE03 (13c 中頃)		5.7	2.5	1.7	42	
131	箱崎遺跡	福岡市592	63	SE037 (13c 後半)		4.8	2.5	1.7	32	
132	箱崎遺跡	福岡市664	229	SK06 (13c 中頃~後半)	○	4.4	2.8	1.1		
133	箱崎遺跡	福岡市811	193	SE0046 (10c 後半~11c 中頃)		3.9	3.8	2.9		
134	箱崎遺跡	福岡市811	180	SE0042 (13c 前半)						欠損
135	箱崎遺跡	福岡市853	8	SK261 (11c 後半~14c 前半)	○	5.8	3.6	2.1		
136	箱崎遺跡	福岡市853	9	SK305 (11c 後半~14c 前半)	○	5.9	2.9	2.3		
137	箱崎遺跡	福岡市853	10	SK227 (12c 前半)	○	6.7	4.2	1.8		
138	箱崎遺跡	福岡市853	11	SK189 (11c 後半~14c 前半)	○	7.1	2.3	1.8		
139	箱崎遺跡	福岡市853	12	SK154 (12c 後半)	○	2.6	1.0	0.8		
140	箱崎遺跡	福岡市853	13	SE183 (12c 前半)	○					欠損
141	箱崎遺跡	福岡市896	268	焼土面第1 面掘り下げ中央部中心	○	<b>7.1</b>	<b>3.0</b>	1.9	<b>74</b>	
142	箱崎遺跡	福岡市996	6	SD065	○	7.0	4.0	2.3		
143	箱崎遺跡	福岡市998	S1	SD07下部 (12c~16c 前半)		6.1	2.5	1.8		
144	箱崎遺跡	福岡市1094	134	SE025 (13c 前半~中頃)	○	6.5	3.1	1.3	52	
145	箱崎遺跡	福岡市1094	494	遺構検出時	○	10.5	4.6	2.4		
146	箱崎遺跡	福岡市1094	453	SP316	○	<b>7.3</b>	<b>4.8</b>	<b>2.1</b>	<b>79</b>	
147	箱崎遺跡	福岡市1094	495	遺構検出時	○	9.2	6.0	2.8		
148	箱崎遺跡	福岡市1128	173	SK1144 (13c 後半)		4.1	2.4	1.2		
149	箱崎遺跡	福岡市1128	613	12c~14c 中頃	○					欠損
150	吉塚祝町遺跡	福岡市912	466	SK1316 (13c 後半)	○	5.3	1.6	1.5	20	
151	吉塚祝町遺跡	福岡市912	657	SK1413 (14c 中頃)	○				(43)	欠損
152	吉森遺跡Ⅱ	糸島市8		西側湿地帯 (平安~鎌倉)		9.5	2.8	2.2	89	
153	木舟・三本松遺跡	二丈町12	11	SD-06 (12c 中頃~後半)	○	7.9	4.6	1.6		
154	木舟・三本松遺跡	二丈町12	14	SD-06 (12c 中頃~後半)	○	6.0	4.2	1.8		
155	木舟・三本松遺跡	二丈町15	19	ST-01 (11c 後半~12c 初頭)	○	<b>3.3</b>	<b>1.8</b>	<b>0.9</b>	<b>10</b>	
156	木舟・三本松遺跡	二丈町15	20	ST-01 (11c 後半~12c 初頭)	○	<b>3.4</b>	<b>1.9</b>	<b>1.8</b>	<b>21</b>	
157	木舟・三本松遺跡	二丈町15	21	ST-01 (11c 後半~12c 初頭)	○	<b>3.7</b>	<b>2.4</b>	<b>1.6</b>	<b>25</b>	
158	木舟・三本松遺跡	二丈町15	22	ST-01 (11c 後半~12c 初頭)	○	<b>4.4</b>	<b>2.6</b>	<b>1.8</b>	<b>33</b>	
159	木舟・三本松遺跡	二丈町15	23	ST-01 (11c 後半~12c 初頭)	○	<b>5.1</b>	<b>3.0</b>	<b>2.1</b>	<b>42</b>	
160	木舟・三本松遺跡	二丈町15	24	ST-01 (11c 後半~12c 初頭)	○	<b>5.5</b>	<b>2.7</b>	<b>2.0</b>	<b>41</b>	
161	木舟・三本松遺跡	二丈町15	1	SD-01 (11c 後半~12c 初頭)			1.7	1.1	(9)	欠損
162	木舟・三本松遺跡	二丈町15	2	SD-01 (11c 後半~12c 初頭)		<b>4.1</b>	<b>1.3</b>	1.3	11	
163	木舟・三本松遺跡	二丈町15	3	SD-01 (11c 後半~12c 初頭)		<b>4.2</b>	<b>1.7</b>	1.7	18	
164	木舟・三本松遺跡	二丈町15	4	SD-01 (11c 後半~12c 初頭)	○	<b>3.8</b>	<b>2.2</b>	1.8	25	
165	木舟・三本松遺跡	二丈町15	5	SD-01 (11c 後半~12c 初頭)		<b>7.1</b>	<b>2.6</b>	1.9	62	

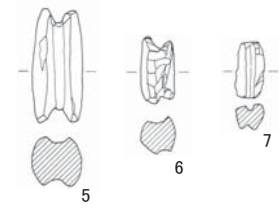
【海の中道遺跡】



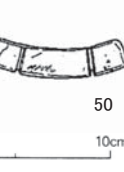
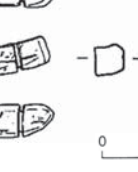
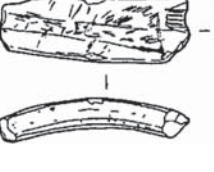
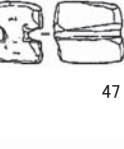
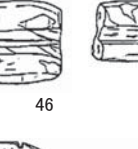
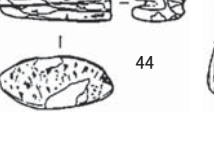
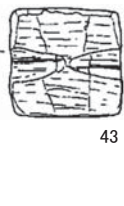
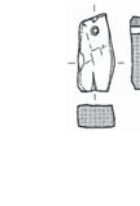
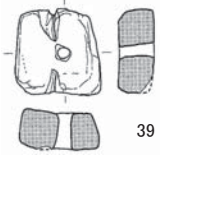
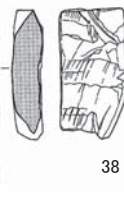
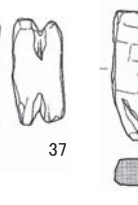
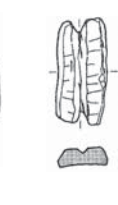
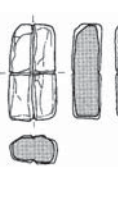
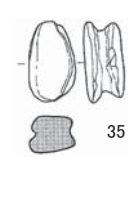
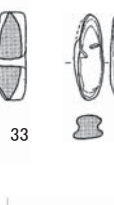
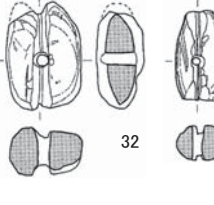
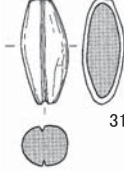
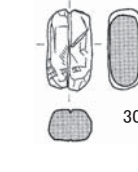
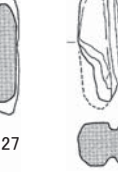
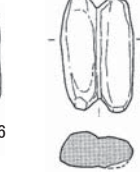
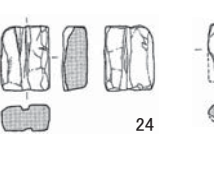
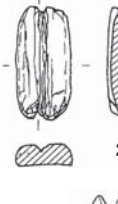
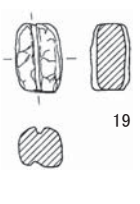
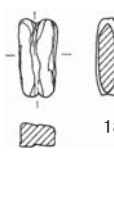
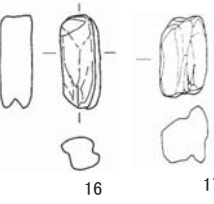
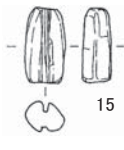
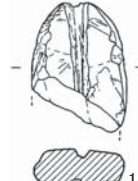
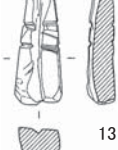
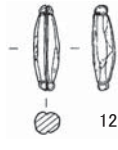
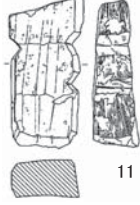
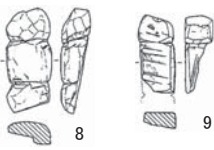
【香椎 A 遺跡】



【下山門乙女田遺跡】



【博多遺跡群】



0 10cm

図1 福岡県の石鍋併行滑石錘 (1) S=1/4

【博多遺跡群】

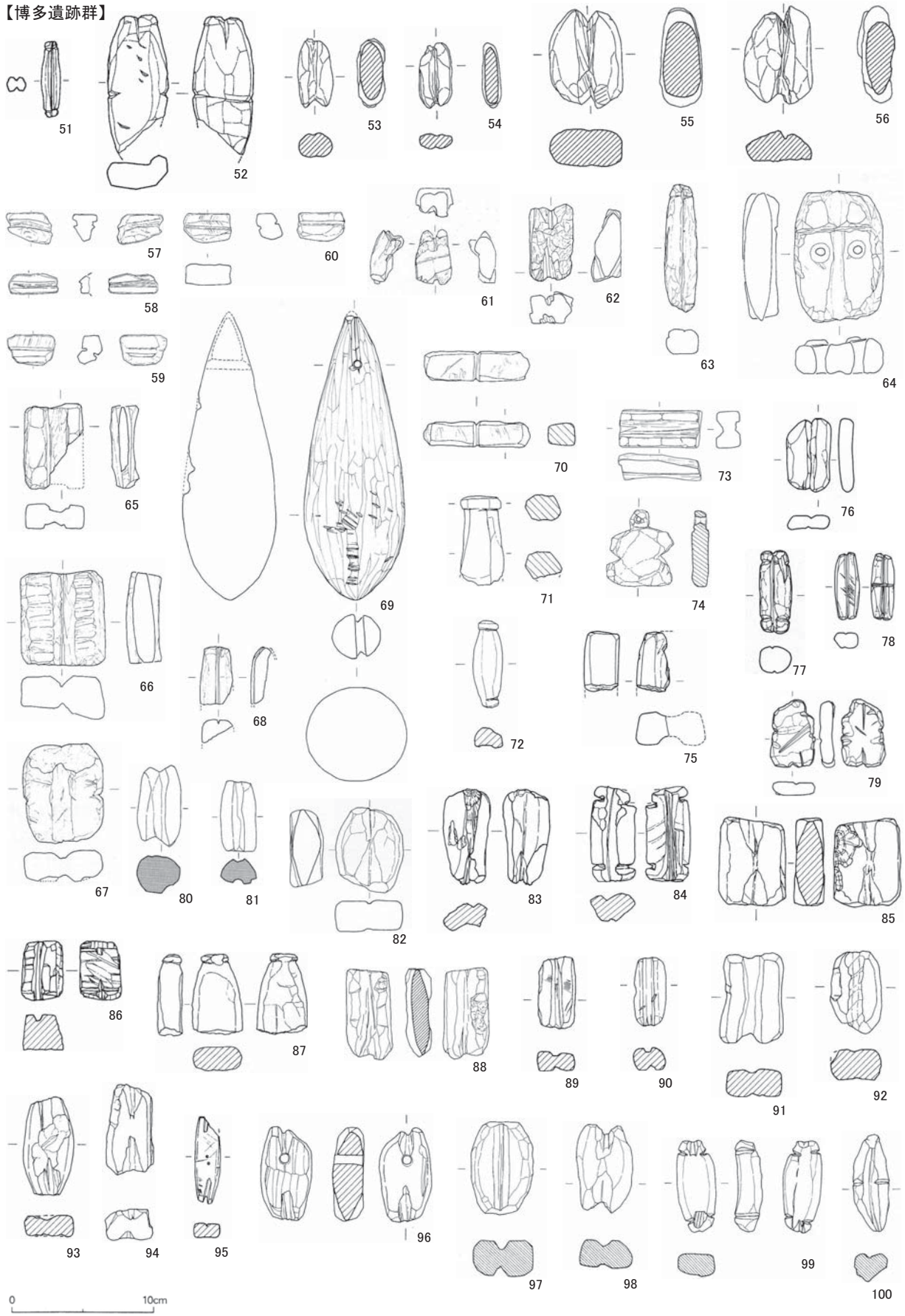
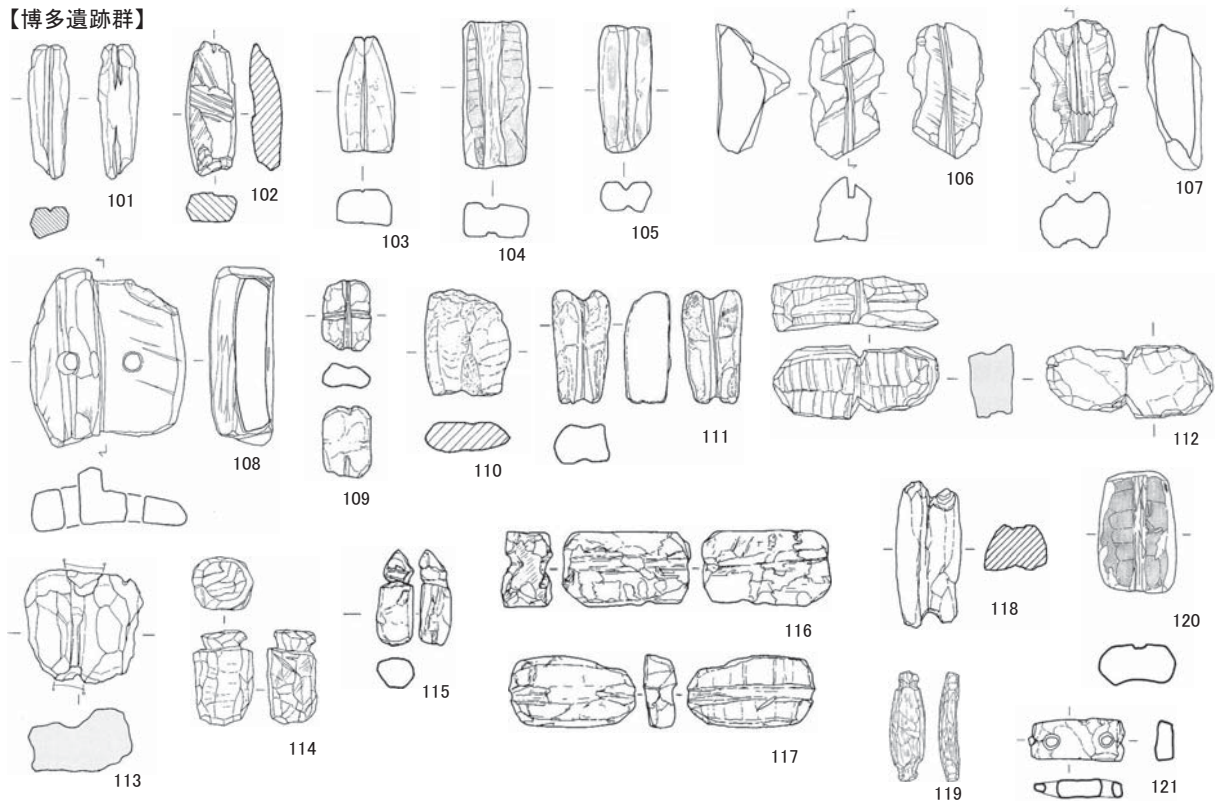


図2 福岡県の石鍋併行滑石錘(2) S=1/4

【博多遺跡群】



【箱崎遺跡群】

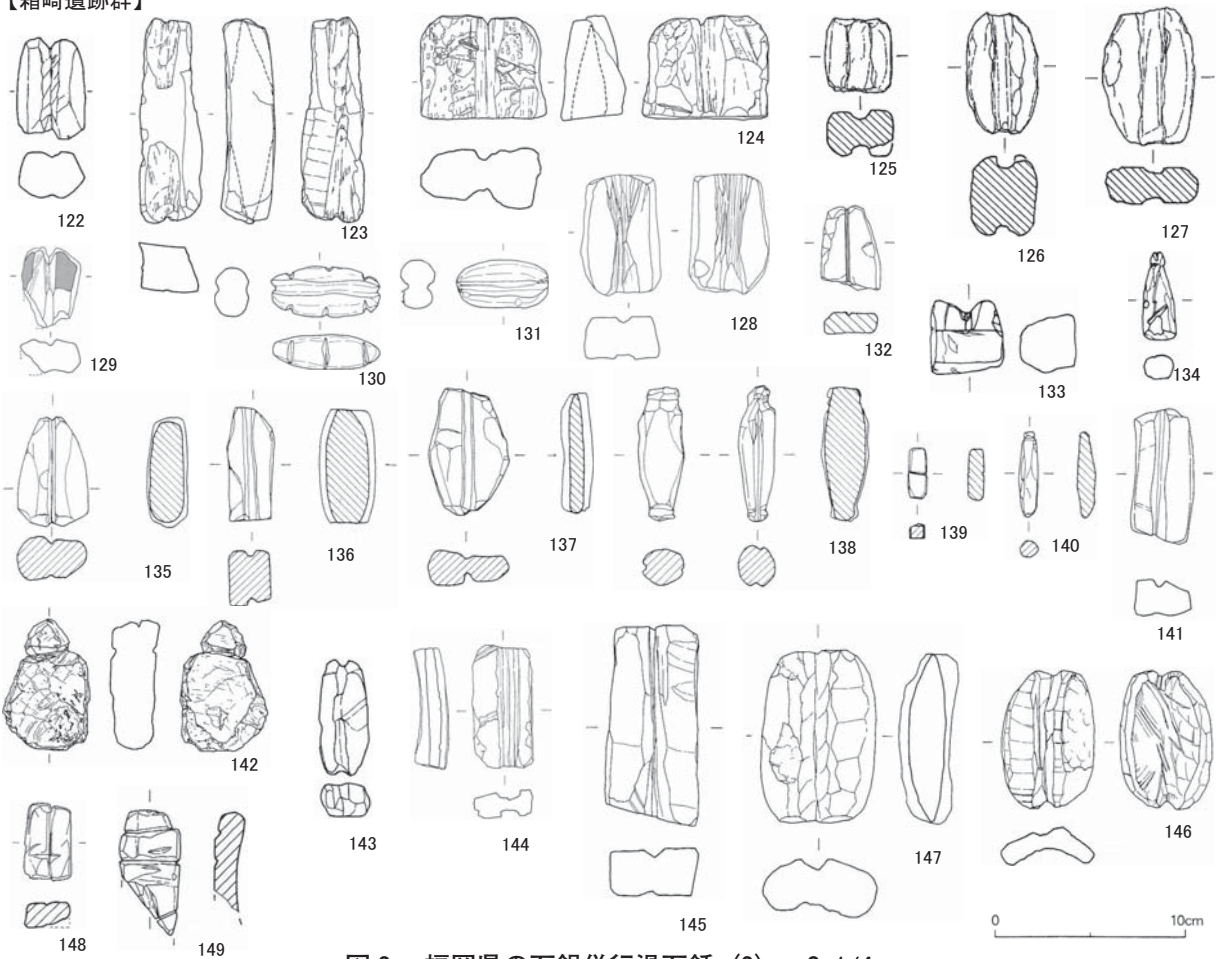


図3 福岡県の石鍋併行滑石錘 (3) S=1/4

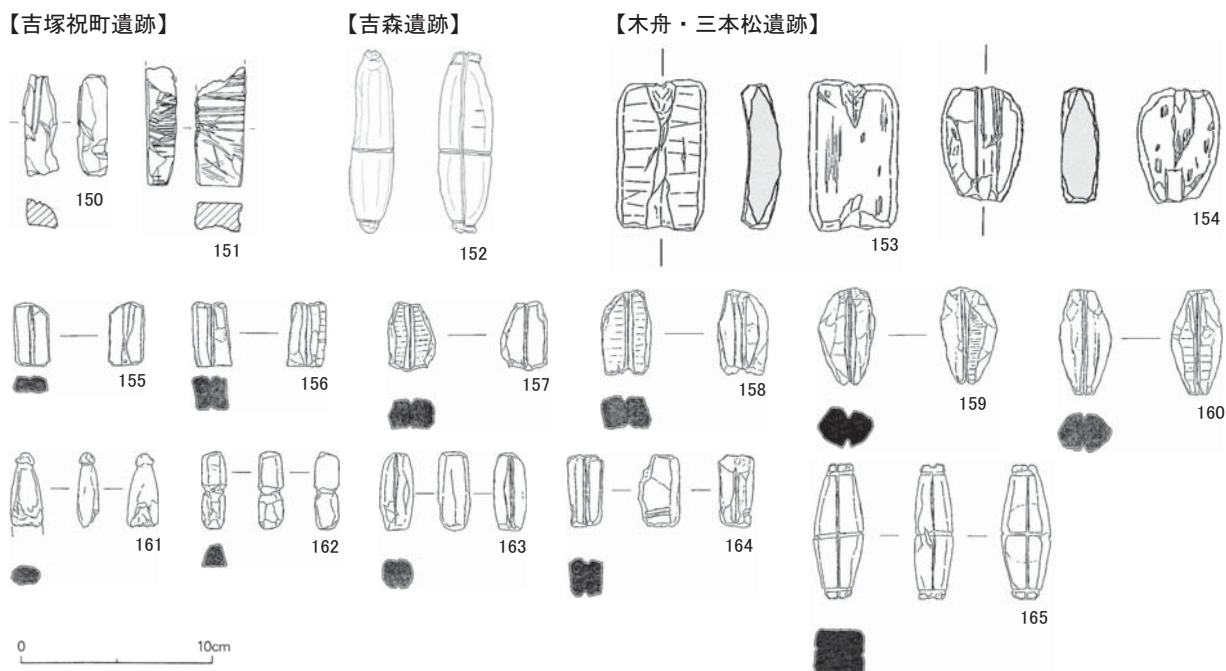


図4 福岡県の石鍋併行滑石錘 (4) S=1/4

較的加工しやすい素材のうちの一つとして選ばれたように感じられるのである。これに対して後世の石鍋素材を選定する場合、加工のしやすさに加えて「保温性の良さ」という特性が必要であるため、滑石に代わり得る岩石素材は当然ながらほとんど存在しない。

弥生～古代前半においては、福岡県域で産出される滑石には「加工のしやすさ」以外の価値・稀少性は見出されていなかったであろう。通常円礫・亜円礫を素材とする、端部を打ち欠いたタイプの石錘や大型の碇石などにも在地産と考えられる滑石が用いられていること（註3）を考慮すると、福岡県における滑石は、入手がそれほど困難でない手頃な素材という認識であったことが想像できる。

#### 4-2. 福岡県における「石鍋併行滑石錘」の抽出

前述した留意点を基に、「石鍋併行滑石錘」の抽出を行った（表2，図1～4）。複合時期の遺跡については、再度報告書の内容を確認し、古い石錘との混同を避けることに努めた結果、滑石製石錘を出土する報告書182冊のうち、該当させることができたものは50冊に絞られた。その殆どが福岡市であり、糸島市からは3冊のみ、遠賀川流域市町村からは全く抽出できなかった。その福岡市にしても、遺跡単位でみると博多・箱崎を主としたわずか6遺跡に限られたことは驚きであった。

完形品かつ重量計測を行っているものは56点、その平均重量は63.4gである。

#### 4-3. 小結：福岡県における「滑石錘」

福岡県の滑石錘を大別すると、①弥生～古墳の「九州型石錘」に含まれるもの、②古代～中世の「石鍋併行滑石錘」、③近現代の「カナギ漁用の錘」（平川 1990）、とすることができよう。

①の石材は滑石に限定されておらず、また滑石の場合でも前述の通り福岡県内で産するものと考えて良い。

②では石鍋転用のものが多くみられ、①に比べてかなり小ぶりとなる。全てのものが石鍋の素材となった長崎産の滑石とする根拠はないため、在地産のもの含まれているのであれば、それは①と系統的に連続するものである可能性がある。

③は網錘で、ほぼ規格が揃い、100g以上の大型である。素材は在地（宝島）産である。

### 5-1. 佐賀県（唐津市）における滑石の利用状況

30冊の報告書において、何らかの滑石製品の出土が報告されていることを確認した（表3）。この滑石製品のうち、A. 弥生時代～古代前半の産物のみを掲載するもの：3冊、B. 石鍋およびその関連・併行遺物のみを掲載するもの：16冊、C. 両者を掲載するもの：3冊、D. 俄かには判別しがたいもの：8冊となる。

### 5-2. 佐賀県（唐津市）における「石鍋併行滑石錘」の抽出

福岡県同様、「石鍋併行滑石錘」の抽出を行った（表4、図5）。滑石製石錘を出土する報告書13冊のうち、該当するものは5冊4遺跡に絞られた。

完形と言えるものは3点、その平均重量は52.0gである。

表3 佐賀県（唐津市）の滑石利用状況及び滑石錘の出土状況

刊行年度	刊行機関	集号	書名 (略5字)	滑石製品 時期	滑石錘	石鍋 併行 滑石錘	刊行年度	刊行機関	集号	書名 (略5字)	滑石製品 時期	滑石錘	石鍋 併行 滑石錘
1988	呼子町	4	松尾田古墳	C			1997	唐津市	78	佐志中通遺	C		
1985	唐津市	14	湊中野遺跡	D	○	×	2001	唐津市	101	唐津市内遺	D	○	○
1986	唐津市	16	見借遺跡群	C			2002	唐津市	104	佐志中通遺	C	○	○
1987	唐津市	19	久里天園遺	A			2002	唐津市	106	唐津市内遺	C		
1987	唐津市	20	双水柴山遺	A			2003	唐津市	109	鶏ノ尾遺跡	A		
1991	唐津市	41	唐津市内遺	D	○		2003	唐津市	110	徳蔵谷遺跡	C		
1991	唐津市	46	千々賀古園	B			2004	唐津市	117	徳蔵谷遺跡	C	○	○
1992	唐津市	49	神田中村遺	C	○	×	2005	唐津市	122	川頭遺跡・	C		
1993	唐津市	53	久里双水古	C			2006	唐津市	128	菜畑内田遺	B		
1994	唐津市	57	徳蔵谷遺跡	C	○		2007	唐津市	133	唐津市内遺	D	○	○
1994	唐津市	59	久里双水古	C			2008	唐津市	144	半田大園遺	C		
1995	唐津市	62	湊松本遺跡	B	○		2008	唐津市	145	五反田松本	D	○	×
1996	唐津市	68	徳蔵谷遺跡	D			2010	唐津市	151	唐津市内遺	C		
1996	唐津市	73	菜畑内田遺	C	○		2013	唐津市	161	唐津城跡(VI)	D	○	○

表4 佐賀県（唐津市）の石鍋併行滑石錘（法量太字は報告書掲載値、細字は筆者の図上計測値）

番号	遺跡名	集号	書中の 遺物番号	層位・地点	石鍋 転用	長	幅	厚	重さ	備考
1	菜畑八反間遺跡	唐津市101	96		○	6.2	3.1	2.3		
2	佐志中通遺跡	唐津市104	5	3層（中世）	○	<b>9.2</b>	<b>2.6</b>	<b>2.3</b>	<b>85</b>	
3	佐志中通遺跡	唐津市104	6	SK01（15c代）	○	<b>7.2</b>	<b>2.0</b>	<b>1.5</b>	<b>40</b>	
4	徳蔵谷遺跡	唐津市117	2	3層下（鎌倉～室町）	○	<b>4.2</b>	<b>1.4</b>	<b>1.4</b>		
5	唐津城跡	唐津市101	97	中世層か	○	3.6	2.5	1.8		
6	唐津城跡	唐津市133	4			<b>3.9</b>	<b>2.8</b>	<b>1.4</b>	<b>31</b>	
7	唐津城跡	唐津市161	23	No. 8～9 石材裏		<b>6.3</b>	<b>3.1</b>	<b>1.8</b>		

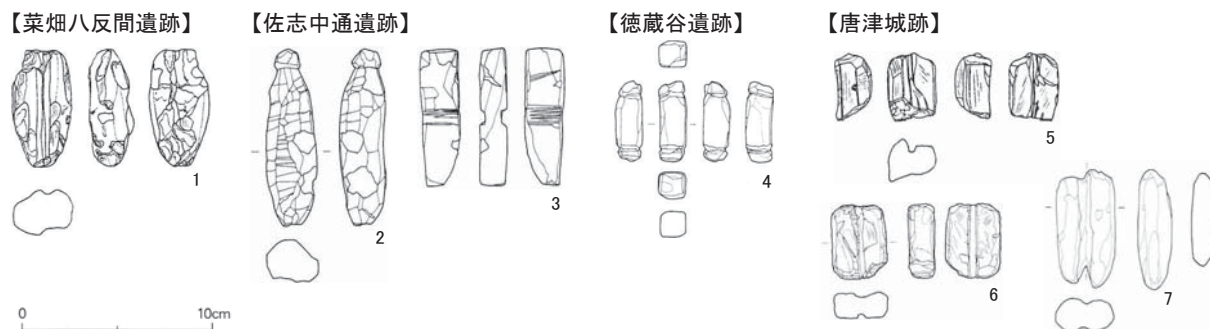


図5 佐賀県の石鍋併行滑石錘 S=1/4



## 6-1. 長崎県における滑石の利用状況

78冊の報告書において、何らかの滑石製品の出土が報告されていることを確認した(表5)。このうち、原の辻遺跡をはじめとした芦辺町(現壱岐市)の諸遺跡や、後述する里田原遺跡・殿崎遺跡等の滑石製品は弥生時代に帰属する。

石錘に滑石が利用されたのは、長崎県内でも弥生時代からのようである。正林護氏は、長崎県内における滑石製の石錘の初現について、「北松浦郡田平町にある里田原遺跡から、弥生時代中期初頭の土器(城ノ越式)に伴って、滑石製の石錘が出土しており、滑石のブロックを加工した例としては最も古い例であろう。」と述べている(正林 1982)。この里田原遺跡の滑石錘は分銅形を呈する異形なものではあるが、林田・中尾両氏の集成においても取り扱われている。弥生時代における滑石錘(「九州型石錘」)の利用は、壱岐島では盛んであったが、それ以降の事例としては大村湾沿岸部で古墳時代のものとされるものが数例確認されるのみである。

石鍋盛行期以前の石錘以外の滑石製品事例としては、小値賀町殿崎遺跡の大珠(弥生時代か)や外海町の宮田古墳群の勾玉・小玉が挙げられる程度で、前代における縄文土器への積極的な粉末混入状況や、前述の福岡県内での状況に比べると、活発な利用があったとは言い難い状況が続く。しかし、古代後半に至って石鍋の使用が開始されると、その副次物とも言える「石鍋併行滑石錘」の姿も目立つようになる。

「九州型石錘」の帰属時期である弥生～古墳時代において、滑石産地である長崎県本土域では滑石

表5 長崎県の滑石利用状況及び滑石錘の出土状況

刊行年度	刊行機関 (所在地)	集号	書名 (略5字)	石鍋	他	滑石錘
1975	県(田平町)	21	里田原遺跡			●
1980	県(西海町)	52	ケイマンゴ	○	○	
1981	県(諫早市)	54	九州横断自		○	
1981	県(川棚町)	55	長崎県埋蔵	○		
1982	県(飯盛町)	57	長崎県埋蔵	○		
1982	県(有家町)	58	堂崎遺跡	○		
1985	県(大村市)	72	九州横断自	○		
1985	県(松浦市)	76	楼厓田遺跡	○		◎
1985	県(北有馬町)	77	今福遺跡Ⅱ	○		
1986	県(小値賀町)	83	殿崎遺跡		○	
1986	県(北有馬町)	84	今福遺跡Ⅲ	○		
1989	県(東彼杵町)	93	九州横断自	○	○	
1989	県(小浜町)	94	長崎県埋蔵		○	
1990	県(大村市)	98	九州横断自	○	○	◎
1991	県(大村市他)	99	九州横断自	○	○	◎
1994	県(国見町)	114	県内重要遺		○	
1996	県(多良見町)	126	伊木力遺跡	○	○	◎
1996	県(大村市)	127	黒丸遺跡Ⅰ	○	○	
1998	県(福江市)	141	大浜遺跡			○
2000	県(島原市)	157	稗田原遺跡	○		
2001	県(島原市)	161	稗田原遺跡		○	
2006	県(佐世保市)	190	門前遺跡	○	○	◎
2007	県(諫早市)	193	開遺跡Ⅱ	○		
2007	県(島原市)	194	稗田原遺跡	○	○	
2008	県(諫早市)	195	小野条里遺	○	○	
2008	県(島原市)	198	稗田原遺跡	○	○	
2011	セ(諫早市)	2	諫早家御屋	○	○	
2012	セ(諫早市)	7	尾和谷城跡	○		
2008	佐(佐世保市)	2	武辺城跡・	○		
2008	佐(佐世保市)	3	竹辺C遺跡	○	○	◎
2008	佐(佐世保市)	4	門前遺跡Ⅱ	○	○	
2012	佐(松浦市)	7	中ノ瀬遺跡	○	○	
2013	佐(松浦市)	8	今福遺跡	○	○	
1998	原(芦辺町)	7	輿触遺跡	○	○	
1998	原(芦辺町)	9	原の辻遺跡			●
1999	原(芦辺町)	14	大宝遺跡	○	○	
2002	原(芦辺町)	24	原の辻遺跡			●
2003	原(芦辺町)	26	原の辻遺跡			●
2004	原(芦辺町)	28	原の辻遺跡			●
2009	松浦市	3	松浦市内遺	○	○	
2012	松浦市	5	松浦市内遺	○		
1990	松浦市	6	池田遺跡	○		
1997	松浦市	12	田川遺跡	○		
1998	松浦市	13	松浦市内遺	○		
1998	松浦市	14	松浦・今福	○	○	○
2000	松浦市	15	小船遺跡		○	
2001	松浦市	16	松浦市内遺			◎
2002	松浦市	18	下谷遺跡		○	
2004	松浦市	20	松浦市内遺	○		○
2006	松浦市	21	松浦市内遺	○		◎◎◎
1993	平戸市	35	平戸和蘭商			◎
1991	吉井町	1	直谷城跡		○	
2006	佐世保市		佐世保の洞			◎
2010	川棚町	2	麻生瀬遺跡		○	
1986	東彼杵町	1	川井川内遺		○	
1997	大村市	20	黒丸遺跡ほ	○		
1998	大村市	21	富の原遺跡	○		○
1998	大村市	22	坂口館跡	○		
2004	大村市	27	黒丸遺跡ほ	○		
2005	大村市	28	黒丸遺跡ほ	○	○	○
2007	大村市	30	市内遺跡発	○		
2011	大村市	35	市内遺跡発	○		
2000	諫早市	14	沖城跡	○		
2005	諫早市	17	小野堀口遺	○		
1990	飯盛町	1	築崎遺跡	○	○	◎
2006	長崎市		深堀遺跡	○	○	◎
1985	外海町	3	宮田古墳群	○	○	
1980	大瀬戸町	1	大瀬戸町石		○	
2000	大瀬戸町	2	雪浦清水遺	○		
1998	西彼町	1	下茅場遺跡	○		
1997	宇久町	3	宇久山本遺	○	○	
1998	瑞穂町	3	陣ノ内遺跡	○	○	
2003	国見町	3	石原遺跡・		○	
1994	島原市	9	畑中遺跡	○		
2011	島原市	13	小原下遺跡		○	
2011	南島原市	5	亀の首遺跡		○	
1991	瑞穂町協会		尻無城跡	○		
1995	大村市協会		富の原遺跡	○		

利用はそれほど積極的だったとは言えない。このことは、「九州型石錘」がその素材が何であるかにそもそも頓着していないことに対しても、総合的な側面があると言える。長崎県内では、さらにその後数百年にわたって滑石利用の低迷期があり、石鍋盛行期に至って、「九州型石錘」に形状的に酷似するが、その素材はほぼ滑石に限られる石錘が登場する。このような状況下で、「九州型石錘」と「石鍋併行滑石錘」が同じ系譜の上にあると考えるのは多少困難にも思えるが、同時に非常に興味深くもある。

表6 長崎県の石鍋併行滑石錘 (法量太字は報告書掲載値、細字は筆者の図上計測値)

番号	遺跡名	集号	書中の遺物番号	層位・地点	石鍋転用	長	幅	厚	重さ	備考
1	楼楷田遺跡	長崎県76	1	G7-33		5.7	1.4	1.3	13	
2	楼楷田遺跡	長崎県76	2	I9-21	○	6.2	2.2	1.7	41	
3	楼楷田遺跡	長崎県76	3	G4-50	△	4.9	1.7	1.6	22	
4	楼楷田遺跡	長崎県76	4	G8-33	△	5.5	1.4	1.4	20	
5	楼楷田遺跡	長崎県76	5	H15-228		5.7	1.9	1.8	28	
6	楼楷田遺跡	長崎県76	6	G11-65		6.1	2.2	2.2	32	
7	楼楷田遺跡	長崎県76	7	I16-126		6.9	2.3	2.0	27	
8	楼楷田遺跡	長崎県76	8	E13-6	△	6.7	2.3	1.5	29	
9	楼楷田遺跡	長崎県76	9	I16-267		4.1	1.5	16.2	15	
10	楼楷田遺跡	長崎県76	10	G9-69	○	4.1	1.7	1.6	17	誤記有
11	楼楷田遺跡	長崎県76	11	H13-108		4.6	1.4	1.4	13	
12	楼楷田遺跡	長崎県76	23	J14-54		2.4	1.2	0.8	3	
13	楼楷田遺跡	長崎県76	27	E1-0		2.5	1.7	1.2	7	
14	楼楷田遺跡	長崎県76	28	H17-117	○	6.2	3.5	1.3	38	誤記有
15	楼楷田遺跡	長崎県76	29	I16-111	○	6.6	3.8	1.6	53	
16	楼楷田遺跡	長崎県76	30	H11-138	○	8.1	4.8	3.5	200	
17	楼楷田遺跡	長崎県76	32	G17-3		3.8	1.3	0.9	9	
18	楼楷田遺跡	長崎県76	34	G6-15	△	6.8	2.6	1.9	60	
19	楼楷田遺跡	長崎県76	38	I13-26		2.6	1.2	0.9	4	
20	楼楷田遺跡	長崎県76	40	I17-118		5.3	2.9	2.0	42	
21	久保園遺跡	松浦市21	51	Ⅲ層(中世)					(12.1)	欠損
22	陣ノ内遺跡	松浦市16	30	Ⅲ層(中世)		4.9	1.6	1.5		
23	平戸和蘭商館跡	平戸市35	2	5層						
24	龍神洞穴	佐世保市	10	混貝黒色土	○					
25	竹辺C正規	佐世保事務所3	20	4-1号河川跡(古代~中世)		3.6	1.9	1.6		欠損
26	小蘭遺跡	長崎県99	1			4.9	2.2	1.5		
27	小蘭遺跡	長崎県99	3			4.7	1.4	1.9		
28	小蘭遺跡	長崎県99	4			3.2	1.7	1.4		
29	小蘭遺跡	長崎県99	9			4.8	1.8	1.6		
30	小蘭遺跡	長崎県99	10			6.0	2.0	2.1		
31	小蘭遺跡	長崎県99	11			6.2	1.6	1.6		
32	小蘭遺跡	長崎県99	12			7.0	1.6	1.8		
33	小蘭遺跡	長崎県99	13			7.7	2.0	2.3		
34	小蘭遺跡	長崎県99	14			5.5	1.7	1.5		
35	葛城遺跡	長崎県98	6	I-28グリッド	○	5.2	3.0			
36	坂口館跡	長崎県99		J2区ピット68		8.0	1.9	1.7	41	
37	伊木力遺跡	長崎県126	113							
38	築崎遺跡	飯盛町1	3	A-10区5層		4.2	2.0	1.7		
39	築崎遺跡	飯盛町1	4	A-11区3層		4.0	1.4	1.4		
40	築崎遺跡	飯盛町1	6	B-11区5層		3.5	1.9	1.8	19	
41	深堀遺跡	長崎市	8	ニ-A'Ⅲ層		5.4	1.8	1.8	29	
42	深堀遺跡	長崎市	9	J76 I g層		5.1	4.0	3.6	114	

## 6-2. 長崎県における「石鍋併行滑石錘」の抽出

長崎県での抽出作業は、実は難航した(表6, 図6)。長崎県の遺跡の場合、中世単独の遺跡というのが少なかったり、明瞭な土層区分が不可能であったりすることが多い。また報告書においては、滑石錘に関して「○○時代の遺物」と断じるのみで、出土地点・法量・観察文章に乏しいことも間々見受けられる。

このような事情から、長崎県内の遺物については、「石鍋併行滑石錘」である可能性が充分にあるもの」という観点での集成とし、表5中の「◎」で示している。また、「○」は「石鍋併行滑石錘」であるとは断じ得ないもの、「●」は弥生～古墳時代に帰属すると考えられるものであることを、それぞれ示す。

以下、遺跡ごと(報告書ごと)に記載する。遺跡名直後の( )には所在市町村と報告書刊行年を、さらにその後には本稿における掲載遺物番号を記載した。

### (1) 楼楷田遺跡(松浦市 1985) : 1~20

県内屈指の出土・報告点数であり、報告者による分類もなされている。遺跡は6層(縄文時代)の上に、4・5層(10~14c)が堆積しており、今回の集成対象としても好資料となっている。点数が多いため、完形品のみを図示した。

### (2) 久保園遺跡(松浦市 2006) : 21

中世遺物として1点の滑石錘が報告されている。欠損品で、重さ12.1g。B5Ⅲ層からの出土で、この基本層Ⅲ層は中世包含層として安定している印象を受ける。同地点から同安窯系青磁皿I-1b類が出土している。

### (3) 陣ノ内遺跡(松浦市 2001) : 22

古代・中世の石器として1点の滑石錘が報告されている。4.9×1.6×1.45cm、重さの記載なし。TP1-Ⅲ層出土で、この層上下から貿易陶磁(白磁・青磁)が多く出土している。

### (4) 平戸和蘭商館跡(平戸市 1993) : 23

最下生活面5層から出土した1点の滑石錘が報告されている。同層位からは12~14世紀後半の青磁碗底部が出土しており、報告遺物の中では最も古い部類となる。商館設置時の層にパックされているため、1101~1609年の中に確実に収まるものと言える。

### (5) 龍神洞穴(佐世保市 2006) : 24

混貝の黒色土から、硬質の土師質土器片80点とともに滑石錘が1点出土している。石鍋片を転用しているため、「石鍋併行滑石錘」と認定できる。帰属時期は平安時代末~南北朝期と報告されている。法量の記載なし。

### (6) 竹辺C遺跡(佐世保市 2008) : 25

4-1号河川跡から1点の滑石錘が報告されている。欠損品である。河川跡からの出土遺物の約8割が古代~中世の産物で、3割強が白磁片である。3.6×1.9×1.6cm、重さ15.29g。

(7) 門前遺跡（佐世保市 2006）：掲載なし

D-9-21~23の2・3層より出土した8点の滑石錘が報告されており、5点を抽出した。当該区では古代末~中世の遺物が多く出土している。書中遺物番号269にはススが付着しており、石鍋からの転用を窺わせる。実測図の縮尺と計測数値に多くの混同があったため、図示はしていない。

(8) 小菌遺跡（東彼杵町 1991）：26~34

14点の滑石錘が報告されており、完形品のみ9点を図示した。出土地点・層位の記載はないが、遺跡での遺物、特に土器に関しては圧倒的に中近世のことが多い。石鍋などの滑石製品の出土も多い。土錘が83点出土しているのも比較資料として注目される。法量の記載なし。

(9) 葛城遺跡（大村市 1990）：35

滑石錘は1点報告されている。縄文~弥生主体の遺跡であるが、数十片の石鍋破損品も出土しており、この滑石錘も「石鍋などの破損品を使用したものと思われる。」との記述もある。重さの記載なし。

(10) 坂口館跡（大村市 1991）：36

「弥生~古墳時代の遺物」として滑石錘が1点報告されている。しかしながら、①当該時期の遺物は他の時期に比べて最も少なく、中世~現代の遺物が圧倒的に多いこと、②滑石錘が出土したピット68も中世以降の遺構であることから、「石鍋併行滑石錘」である可能性が充分考えられるため、集成の対象とした。

(11) 伊木力遺跡（多良見町 1996）：37

出土地点・層位の記載がない滑石錘が1点報告されている。中世遺物として報告されているのは石鍋やその転用品も出土しているためと思われるが、前代の遺物混入が多く、中世層であっても弥生土器片の数が中世遺物を凌駕する状況となっていることには留意が必要である。この滑石錘を中世遺物とした場合、他の陶磁器類から12~14世紀の産物である可能性が高い。法量の記載なし。

(12) 築崎遺跡（飯盛町 1990）：38~40

5層主体に出土した6点の滑石錘が報告されており、このうち完形品3点を図示した。この5層は中世遺物を主に包蔵しているとの見解が示されている。

(13) 深堀遺跡（長崎市 2004）：41・42

滑石錘として掲載されている4点のうち、2点を抽出した。図6-41が出土した同地点同層位からは、12~13世紀の白磁・青磁および北宋の折二銭が出土。同42が出土したI g層も12~13世紀に帰属する層で、滑石製羽口も出土。前代遺物の混入は少なくはないものの、出土状況からは「石鍋併行滑石錘」として評価できる。

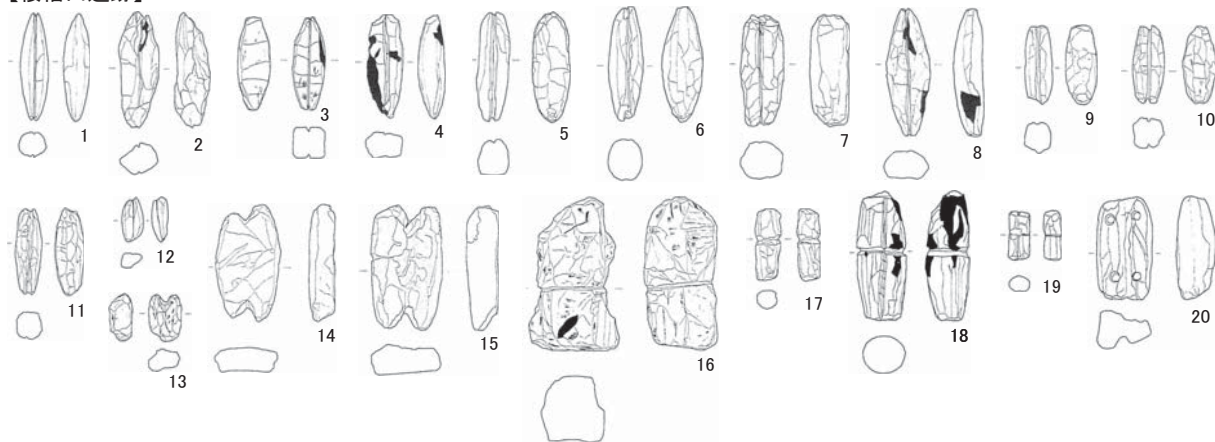
### 6-3. 長崎市深堀遺跡における「錘」

筆者が従事した深堀遺跡の発掘調査において実感したのは、「錘の多様さ」であった。縄文時代から近現代にわたる「超複合遺跡」と言って良いであろうこの深堀遺跡では、土器片錘（縄文後~晩期）、

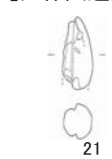
切り目石錘（主に弥生）、有周溝石錘（時期不明）、筒状土錘（主に中世）、滑石錘（古代末～中世前半）、筒状瓦質錘（近世）、陶質錘（近現代）と、素材を問わなければ「錘」を通史的に網羅できたのである。

今回抽出・掲載した2点の他にも、蛇紋岩製ではあるが、未報告資料の中には博多資料(図2-69)や平戸資料(図6-23)に類似するタイプが存在している。滑石錘のみならず、石鍋盛行期の石錘について捉え直す必要を強く感じた次第である。

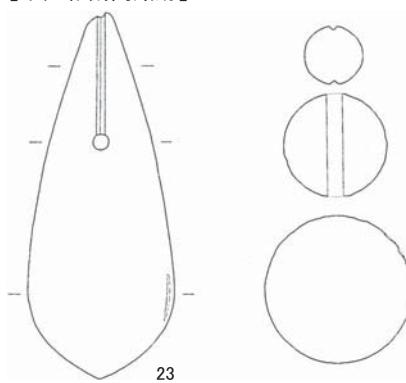
【楼楷田遺跡】



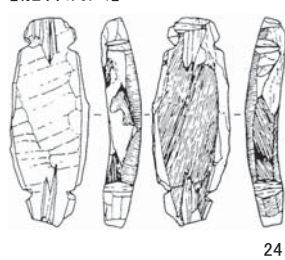
【久保園遺跡】



【平戸和蘭商館跡】



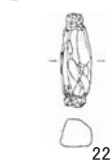
【龍神洞穴】



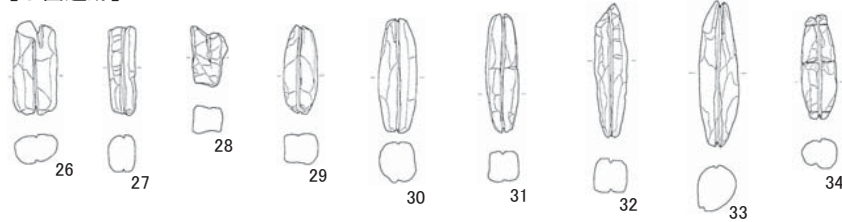
【竹辺C遺跡】



【陣ノ内遺跡】



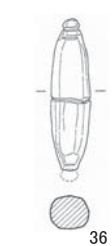
【小菌遺跡】



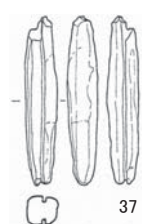
【葛城遺跡】



【坂口館跡】



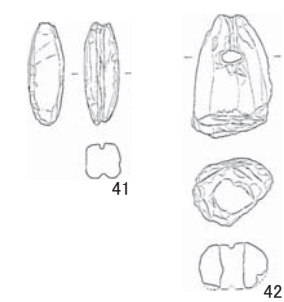
【伊木力遺跡】



【築崎遺跡】



【深堀遺跡】



0 10cm

図6 長崎県の石鍋併行滑石錘 S=1/4

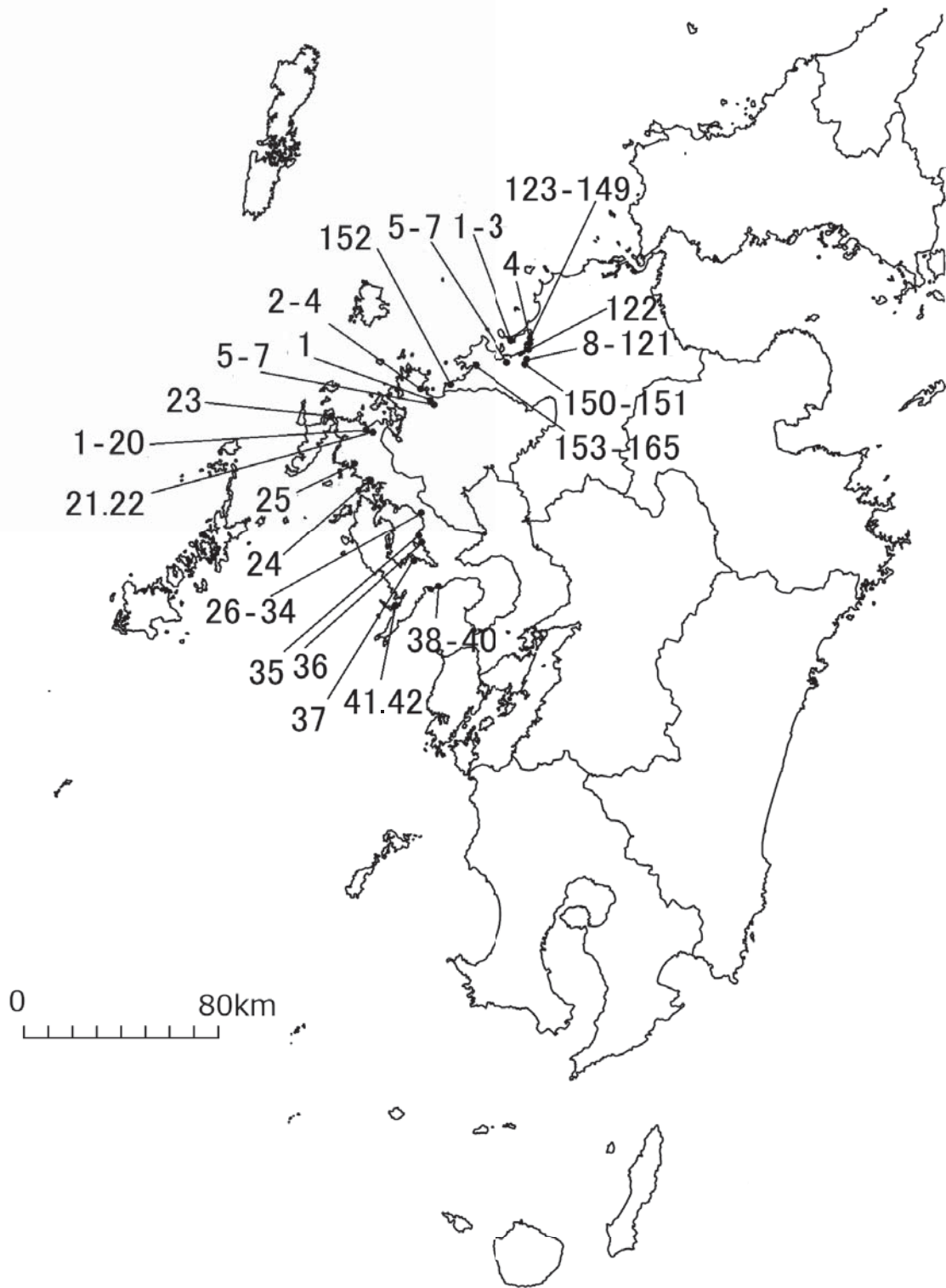


図7 福岡・佐賀・長崎県における石鍋併行滑石錘の出土  
 (図中の番号は各県ごとの出土滑石錘一覧表の番号と対応)

### 7-1. 沖縄県における滑石の利用状況

沖縄県については、近年滑石資料の集成がなされているので(太田・土岐 2018)、それを引用・改変して掲載した(表7)。この集成は滑石片を含む全ての滑石資料を対象としている。

滑石を産しない沖縄県域への滑石の流入は、10世紀末以降の石鍋流通に伴うものに限られていると言って良いであろう。相当量の石鍋が当地に流入したと考えられるが、後続土器において石鍋への積

極的な模倣がなされる一方で、石鍋自体は穿孔・擦切りによって分割されたことが推測されている(宮城 2016)。さらにこの後盛行する「滑石混入土器」への混和材として粉末化されたものとも考えられ、それがために遺物として残ったものは相当に減殺されたものと想像する。

## 7-2. 沖縄県における「石鍋併行滑石錘」の抽出

他県における石鍋併行滑石錘と形状が似るものを抽出し(表8, 図7), 4冊4遺跡で1点ずつ得られた。九州に比べると非常に小ぶりとなり、重さの判明している3点の平均は4.3gである。

表7 沖縄県の滑石利用状況及び滑石錘の出土状況(市町村別)

エリア	市町村	掲載報告書数	滑石資料点数	滑石錘点数	備考
本島北部	今帰仁村	1	1		
	名護市	1	6		
	宜野座村	1	1		
	恩納村	2	16		
本島中部	うるま市	6	26		未報告資料4点含む
	読谷村		3		未報告資料か
	嘉手納町	1	4		
	沖縄市	1	1		
	北谷町	13	670	1	
	宜野湾市	14	103	1	
	西原町	1	9		
本島南部	浦添市	5	9	1	
	那覇市	7	198		
	豊見城市	4	42		
	南風原町	3	5		
	南城市	6	23		
	八重瀬町	3	12	1	
島尻郡離島	糸満市	1	1		
	粟国村	1	1		
先島諸島	久米島町	1	1		
	宮古島市	3	3		
	竹富町	3	3		
合計		78	1138	4	

表8 沖縄県の石鍋併行滑石錘

番号	遺跡名	集号	書中の遺物番号	層位・地点	石鍋転用	長	幅	厚	重さ	備考
1	小堀原遺跡	北谷町34	53	SP417	○	1.5	1.4	1.4	3.4	
2	伊佐前原第一遺跡	沖縄県セ4	7	す-24 No. 19pit		1.8	1.3	1.4	3.6	
3	真久原遺跡	浦添市26	52			5.2	1.3	1.5		
4	多々名グスク	具志頭村3	2	第2層		2.0	1.2	1.3	6.0	現八重瀬町

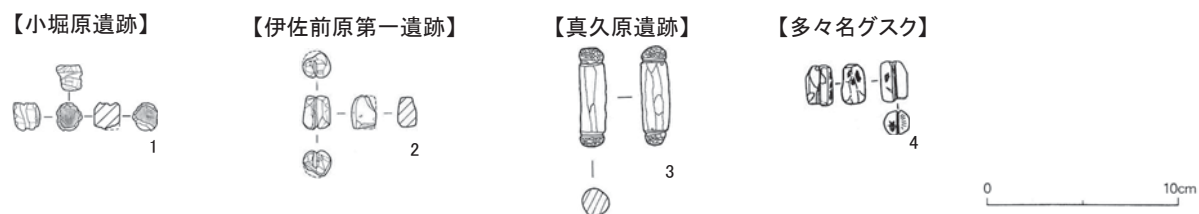


図8 沖縄県の石鍋併行滑石錘 S=1/4

## 7-3. 小結：沖縄県における「錘」

沖縄の滑石錘が4点と少なく、且ついずれも小さいのは、前述したような沖縄特有の事情によるのが大きいと思われるが、これは量産を要する網錘には滑石は不向きな素材である、とも言える。網

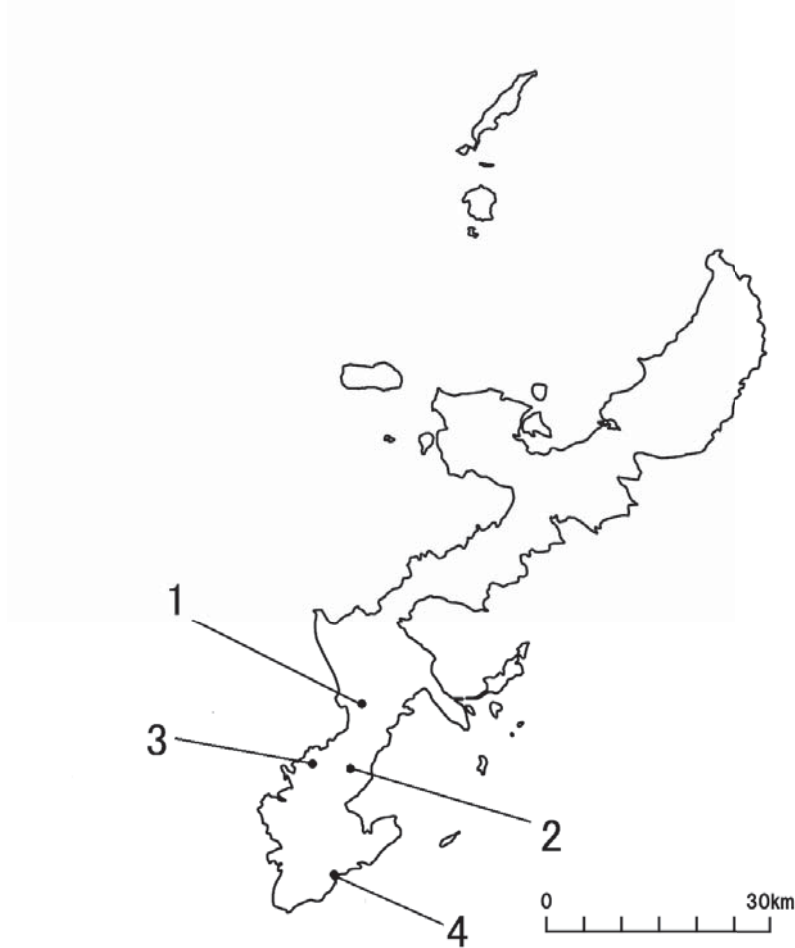


図9 沖縄県における石鍋併行滑石錘の出土  
(図中の番号は各県ごとの出土滑石錘一覧表の番号と対応)

錘には「同程度の規格」と「一定の数量」が求められるはずであるが、当地において稀少性のある石鍋を転用するとなると、その条件を満たせないことになる。沖縄において網錘として捉えられている考古遺物では「貝錘」が圧倒的に多く、シャコガイなどの二枚貝（貝塚時代～グスク時代）→タカラガイ（近世）という編年が捉えられつつある（山城他 2015）。

## 8. まとめ

以上、石鍋併行滑石錘の集成を行い、その出土事例を概観した。当然ながら石鍋が流通した範囲にて認められる遺物であり、「九州型石錘」の分布範囲を考えることとはその意味合いが当然異なってくる。また、出土頻度・量の面から見ると、石鍋の流通・消費拠点であった博多周辺からの出土が最も多く、次いで滑石・産地＝供給元である長崎県本土域となる。遠地沖縄も石鍋消費拠点の1つではあつただろうが、前述の通り粉末化等の理由のためか、沖縄県内での出土例は乏しい結果となった。

## 9. 若干の考察

石鍋併行滑石錘は、量産可能な管状土錘に比べると重さや形状が一様ではなく、「九州型石錘」に比べると非常に軽量のものが多い。漁撈に関わるものではあろうが、同程度の重さのものを量産しにくいことを考えれば、漁網用ではなく、釣用にこそ向いているものであると思われた（註4）。加工しやすい素材の特性とバラエティに富んだ形状からは、作り手のこだわりや工夫が感じられ、横好きの魚釣りに勤しむ筆者には、その細部にこだわる気持ちが理解できる。



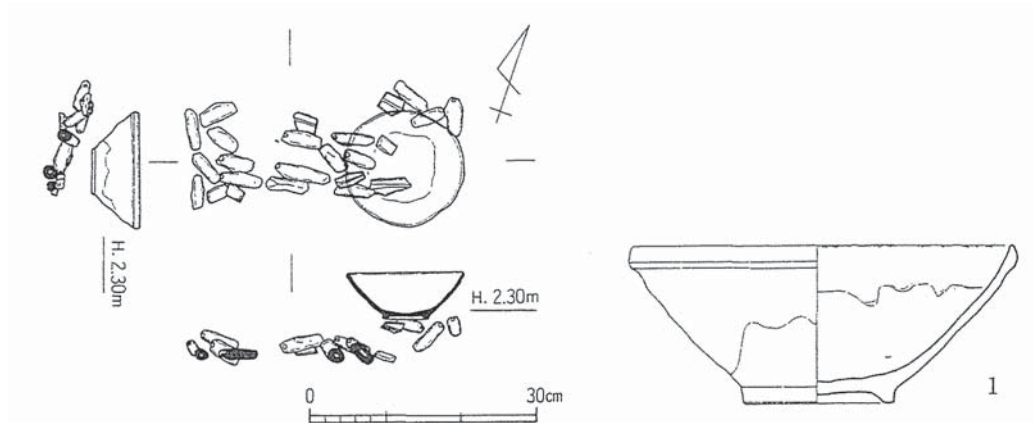


図10 木舟・三本松遺跡1号木棺墓内遺物出土状況（夏木2008から転載）

単に仕掛けをぶら下げる、或いは着底させることが目的なのであれば、オモリはいくら重くても構わないものである。しかし軽量のものが多いということは、ある程度潮の流れに同調させる「フカセ釣り」のようなことをしていたのではないかと、とも筆者は想像している。

しかし、福岡県二丈町（現糸島市）所在の木舟・三本松遺跡1号木棺墓における錘の出土事例は、その用途を考える上で興味深い（図10）。管状土錘17点及び重量がそれらに近い滑石錘4点、そしてそれらより明らかに重い滑石錘が2点出土しており、夏木はこれらが全て網錘であり、2点の重い錘は網の両端に取り付けるものと捉えている（夏木 2008）。確かに、この木棺墓からの出土錘に関しては、そのような解釈をする方が妥当かも知れない。しかし、今回集成した滑石錘を改めて眺めてみると、管状土錘とともに網錘として利用したような印象は、少なくとも筆者には強く感じられないのが正直なところである。さらに検討したい。

## おわりに

今後、九州の他県のみならず、本州を含めた地域においても、このような集成作業を進めていくことで、石鍋としての機能を失った「滑石の材」が、消費地においてどこまで有用価値を持ち続けたのか、より明瞭に把握できることになるのではないだろうか。

今回の集成対象は、九州の一部地域と沖縄県に限られたものであり、より悉皆的に作業を進めていかなければならないことは重々承知している。しかしながら、筆者のように居所がなかなか定まらない民間調査会社の一調査員でありながら、各地において多くのご縁とご厚意に甘えながら集成作業に専念できたことは、本稿の意義の有無を超えた大きな喜びであった。今後、このような幸運に恵まれることがあるだろうかと思慮するのにつまらない話であるが、本稿に触れることでどなたかの興味が増進し、本稿の内容を補完あるいはバージョンアップしてくれる奇蹟的な研究者の出現を切に願うところである。

本稿執筆にあたっては、古門雅高氏から多大なご協力をいただいた。また、資料の閲覧・収集にあたり、以下の方々・機関から多大なご協力・ご配慮を頂いた。ここに御氏名・名称を記し、心からの御礼を申し上げます。

古後憲浩氏（福岡県鞍手町教育委員会）ならびに鞍手町歴史民俗資料館の皆様  
 杉原敦史氏・中尾篤志氏・古門雅高氏（長崎県教育庁）  
 長崎県長崎市埋蔵文化財整理所の皆様

長崎県大村市文化財資料整理室の皆様

高袋春美氏・松原哲志氏・山城安生氏ならびに沖縄県北谷町教育委員会文化係の皆様

### 【註】

註1 『深堀遺跡』2004長崎市教育委員会120頁

註2 沖縄県以外の報告書で実際に閲覧できたものは、概ね2013年度までに刊行されたものに限られており、近刊のものは含まれていない。これは筆者が集成作業を行ったのが2014年頃までであり、その後沖縄に赴任したことによって多量の他県報告書を閲覧することが物理的に困難になったことによる。

註3 「弥生時代後期後半に出現する九州型石錘や有孔石錘の存在は、物理的には福岡県北を東西に走る三郡変成岩帯が博多湾の西と東に露呈し、タルク（滑石）を含んだ加工しやすい片岩類が手に入りやすかったことに依っている。」（小林他 1989）、「この時期（古墳時代後期）に注目されるのは、三苦遺跡や夜臼三代遺跡などでは滑石製の玉類、模造品の製作がある。滑石は同じ粕屋郡内の若杉山などに産出することから、本地域集団がその生産に関わっていたと見られる。下和白の飛山1号墳への供献は、被葬者とこれら集落との関連を示している。」（吉留他 1996）

註4 福岡市今宿五郎江遺跡出土の「九州型石錘」についても、その装着想定を釣用としている例がある（堺市博物館 1987）。概して「九州型石錘」より軽量となる「石鍋併行滑石錘」は、より高度に進化・分化した「釣り」に適している感が否めない。石鍋の湾曲した器面が残る本稿図1-1や図6-24などは、現代釣具の「ブラー」に酷似している。

### 【引用・参考文献】

- 正林護他 1982 『出津遺跡』外海町文化財調査報告書第1集 外海町教育委員会  
下條信行 1984 「弥生・古墳時代の九州型石錘について」『九州文化史研究所紀要』第29号  
堺市博物館 1987 『漁具の考古学－さかなをとる－』  
小林義彦他 1989 『唐原遺跡Ⅱ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第207集 福岡市教育委員会  
平川敬治 1990 「網漁における伝統的沈子についての2, 3の問題」『九州考古学』第65号  
吉留秀敏他 1996 『三苦永浦遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第476集 福岡市教育委員会  
夏木大吾 2008 「木舟・三本松遺跡木棺墓出土滑石製沈子の考察」『七隈史学』第10号  
林田好子・中尾篤志 2014 「九州型石錘の集成と展望」長崎県埋蔵文化財センター研究紀要第4号  
山城安生他 2015 『平安山原B遺跡』北谷町文化財調査報告書第37集 北谷町教育委員会  
宮城弘樹 2016 「グスク時代初期における出土滑石からみた集団関係」『南島文化』第38号  
太田菜摘美・土岐耕司 2018 『平安山原A遺跡』北谷町文化財調査報告書第43集 北谷町教育委員会

### 【遺物実測図所収報告書】

福岡県

- |                                |  |
|--------------------------------|--|
| 1982 福岡市埋蔵文化財調査報告書第87集『海の中道遺跡』 | 1984 福岡市埋蔵文化財調査報告書第105集『博多』              |
| 1988 福岡市埋蔵文化財調査報告書第193集『博多』    | 1989 福岡市埋蔵文化財調査報告書第205集『博多』              |
| 1990 福岡市埋蔵文化財調査報告書第221集『博多』    | 1990 福岡市埋蔵文化財調査報告書第230集『博多15』            |
| 1991 福岡市埋蔵文化財調査報告書第245集『博多17』  | 1991 福岡市埋蔵文化財調査報告書第262集『箱崎遺跡2』           |
| 1992 福岡市埋蔵文化財調査報告書第273集『箱崎3』   | 1992 福岡市埋蔵文化財調査報告書第285集『博多30』            |
| 1995 福岡市埋蔵文化財調査報告書第396集『博多47』  | 1996 福岡市埋蔵文化財調査報告書第448集『博多51』            |
| 1996 福岡市埋蔵文化財調査報告書第449集『博多52』  | 1996 福岡市埋蔵文化財調査報告書第459集『箱崎4』             |
| 1998 福岡市埋蔵文化財調査報告書第556集『博多61』  | 1998 福岡市埋蔵文化財調査報告書第559集『博多64』            |
| 1998 福岡市埋蔵文化財調査報告書第560集『博多65』  | 1999 福岡市埋蔵文化財調査報告書第592集『箱崎8』             |
| 2000 福岡市埋蔵文化財調査報告書第629集『博多71』  | 2001 福岡市埋蔵文化財調査報告書第664集『箱崎10』            |
| 2001 福岡市埋蔵文化財調査報告書第668集『博多77』  | 2002 福岡市埋蔵文化財調査報告書第706集『博多80』            |
| 2002 福岡市埋蔵文化財調査報告書第707集『博多81』  | 2002 福岡市埋蔵文化財調査報告書第727集『下山門敷町跡・下山門乙女田遺跡』 |
| 2004 福岡市埋蔵文化財調査報告書第811集『箱崎17』  | 2005 福岡市埋蔵文化財調査報告書第847集『博多101』           |
| 2005 福岡市埋蔵文化財調査報告書第850集『博多104』 | 2005 福岡市埋蔵文化財調査報告書第853集『箱崎23』            |
| 2006 福岡市埋蔵文化財調査報告書第894集『博多108』 | 2006 福岡市埋蔵文化財調査報告書第896集『箱崎25』            |

- |                                 |                                   |
|---------------------------------|-----------------------------------|
| 2006 福岡市埋蔵文化財調査報告書第912集『吉塚祝町2』  | 2007 福岡市埋蔵文化財調査報告書第940集『博多110』    |
| 2008 福岡市埋蔵文化財調査報告書第990集『博多120』  | 2008 福岡市埋蔵文化財調査報告書第991集『博多121』    |
| 2008 福岡市埋蔵文化財調査報告書第996集『箱崎32』   | 2008 福岡市埋蔵文化財調査報告書第998集『箱崎34』     |
| 2009 福岡市埋蔵文化財調査報告書第1038集『博多126』 | 2009 福岡市埋蔵文化財調査報告書第1042集『博多130』   |
| 2009 福岡市埋蔵文化財調査報告書第1045集『博多133』 | 2010 福岡市埋蔵文化財調査報告書第1072集『香椎A遺跡3』  |
| 2010 福岡市埋蔵文化財調査報告書第1086集『博多135』 | 2010 福岡市埋蔵文化財調査報告書第1090集『博多139』   |
| 2010 福岡市埋蔵文化財調査報告書第1094集『箱崎41』  | 2011 福岡市埋蔵文化財調査報告書第1125集『博多142』   |
| 2011 福岡市埋蔵文化財調査報告書第1128集『箱崎43』  | 2012 糸島市埋蔵文化財調査報告書第8集『吉森遺跡Ⅱ』      |
| 1995 二丈町埋蔵文化財調査報告書第12集『木舟の森遺跡』  | 1997 二丈町埋蔵文化財調査報告書第15集『木舟・三本松遺跡Ⅲ』 |

#### 佐賀県

- 2001 唐津市埋蔵文化財調査報告書第101集 『唐津市内遺跡確認調査(17)』  
 2002 唐津市埋蔵文化財調査報告書第104集 『佐志中通遺跡(2)』  
 2004 唐津市埋蔵文化財調査報告書第117集 『徳蔵谷遺跡(5)』  
 2007 唐津市埋蔵文化財調査報告書第133集 『唐津市内遺跡確認調査(23)』  
 2013 唐津市埋蔵文化財調査報告書第161集 『唐津城跡 (VI)』

#### 長崎県

- 1985 長崎県文化財調査報告書第76集 『楼楷田遺跡』  
 1990 長崎県文化財調査報告書第98集 『九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅶ』  
 1991 長崎県文化財調査報告書第99集 『九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅷ』  
 1996 長崎県文化財調査報告書第126集 『伊木力遺跡Ⅰ』  
 2008 長崎県佐世保文化財調査事務所調査報告書第3集 『竹辺C遺跡・竹辺D遺跡』  
 2004 『深堀遺跡』 長崎市教育委員会  
 2006 『佐世保の洞穴遺跡』 佐世保市教育委員会  
 1993 平戸市の文化財35 『平戸和蘭商館跡の発掘Ⅳ・馬込遺跡の発掘Ⅰ・坊主畑第3遺跡の発掘』  
 2001 松浦市文化財調査報告書第16集 『松浦市内遺跡確認調査(3)』  
 2006 松浦市文化財調査報告書第21集 『松浦市内遺跡確認調査(6)』  
 1990 飯盛町文化財調査報告書第1集 『築崎遺跡』

#### 沖縄県

- 2001 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第4集 『伊佐前原第一遺跡』  
 1997 浦添市調査報告書第26集 『真久原遺跡』  
 2012 北谷町文化財調査報告書第34集 『小堀原遺跡』  
 2012 具志頭村文化財調査報告書第3集 『具志頭村の遺跡』

# 長崎の基層文化と表層文化

宮崎 貴夫

## はじめに

2018年12月に日本考古学協会から長崎県庁跡地の保存と活用について問題提起がおこなわれた。そして、2019年5月には、市民有志によって「長崎県庁跡地遺構を考える会」が発足した。筆者もその会に参加していくことで、長崎のことを考えるようになった。2019年11月には、「長崎県庁跡地遺構を考える会」が主催した第2回シンポジウム「長崎の記憶をほりおこす」が、長崎大学中部講堂で開催され、筆者はそこで「万才町遺跡の発掘から見えてきたこと」というテーマで発表をおこなった。

このシンポジウムの報告書は、『長崎の岬Ⅱ—長崎の記憶をほりおこす』として、長崎文献社から2020年3月に刊行にされた(片峰 2020)。ここで発表する機会をいただいたことが、私自身にとって近世長崎と長崎文化を考えていく直接的な契機となった。

2020年3月に刊行された『長崎県考古学会報』28号には、「都市長崎の基層文化と表層文化」と題した短い文章を寄稿した。しかし、この小文では言い尽くせないテーマであったので、修正と加筆をおこない、表題を「長崎の基層文化と表層文化」と改めて、新たに原稿を書き下ろすことにした。

## 1. 立原道造の長崎紀行

1993年の4月から7月にかけて、長崎県庁新別館の建て替え工事に伴って初めて近世都市遺跡の発掘を担当した。その遺跡が長崎市万才町の万才町遺跡(3-17地点・註1)である。当時、長崎県文化課は県庁の第1別館にあり、県内で発掘してきた遺物等の整理・保管をおこなう文化課分室が県立美術博物館の敷地(現・長崎歴史文化博物館)にあった。長崎県庁跡地は長崎奉行所西役所があったところであり、県立美術博物館は同立山役所があった場所である。筆者は、そのようなことは全く意識することもなく、まるで長崎地役人のように役所を往来しながら事務仕事をしていたのである。

調査をおこなった万才町遺跡は、県庁跡地から国道34号を北東に100mほど離れた位置にある。この遺跡の発掘調査を担当したことで、往来していた長崎の街の足下に江戸時代の長崎の歴史が埋まっているという事実を知り、大きな衝撃を受けたのである。

万才町遺跡は、大村純忠が1571年に町建てした六町の大村町に所在する。この発掘調査の最大の成果といえるのは、地表面から1.5mほど掘り下げて確認できた整地面に、建物・排水溝・井戸などの遺構を検出できたことである。そこは、地山の粘土層が平坦に削られ、堀建柱建物の柱穴跡や小さな礫石が並んでいるだけの造成面であるが、まさしくここが1571年に造られた都市長崎の原点となった場所であり、自分がその地をいま踏みしめているのだという強い感激を覚えた。

その万才町遺跡の調査が終了して、報告書の準備にかかろうとしていた頃に記した小文がある。ここから一部を引用したい。

長崎には江戸時代から長崎遊学に、あるいは旅人として多くの人々が訪れています。昭和十三年にもゲーテのイタリア紀行になぞらえ、病をおして憧れの長崎へ旅立った詩人立原道造がいます。彼は長崎で咯血して東京へ戻り、まもなく世を去りますが、彼をそれほどまで引きつけた長崎の魅力を単に「異国情緒」という言葉だけでかたづけることができるのかというのが、数年来

私自身の疑問として離れませんでした。しかし、今回の調査で、長崎の文化を生き育った現実が累積して埋もれている状況を見て、かつて長崎がもっていた文化の求心力を実感できたような気がしました（宮崎「近世の都市遺跡を発掘して」『長崎考古学会報』2号・1994）。

露玉のような清冽な抒情詩を紡ぎだす青年詩人立原は、学生時代から好きな詩人の一人であった。しかし彼が、憧れの長崎をめざし、長崎に住むために南山手付近の下宿をさがしていたこと、だが夢を果たせずに帰京したことを知ったのは、1989年の西日本新聞に掲載された田代俊一郎の「抒情の光芒—長崎ノートの旅—」であった（田代 1989）。

田代は、立原が長崎紀行をゲーテのイタリア紀行になぞらえ、そのイタリア紀行に「われもまたアルカディアに！」という副題が添えられていることから、立原のアルカディアとは長崎であり、立原の旅路は聖地長崎をたずねる巡礼の旅であったとしている。

万才町遺跡の報告書を1994年度末にまとめた後、私は新別館に移転した文化課の席を暖める猶予もなく、1995年4月から壱岐の調査事務所転勤となり、原の辻遺跡の調査を担当することになった。

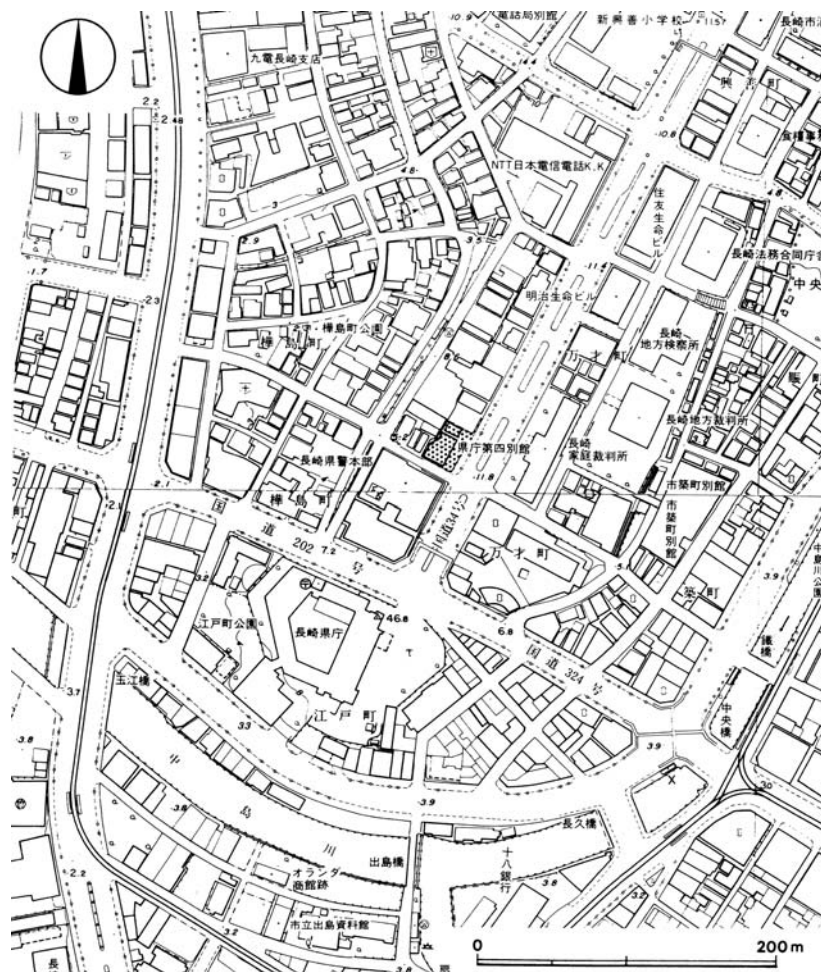


図1 万才町遺跡の位置（宮崎編 1995）



図2 江戸時代後期の長崎と万才町遺跡の調査地点（長崎市役所 1903原図に加筆）

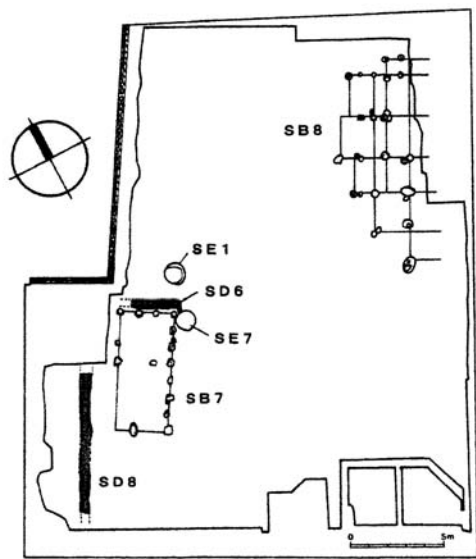


図3 万才町遺跡最下層面の遺構（川口編 2007）

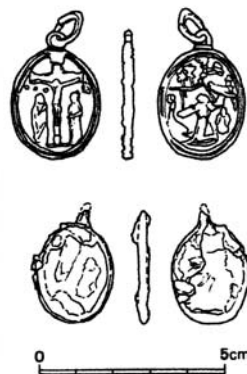


図4 青銅製メダイ・花十字紋瓦（宮崎編 1995）



そして、1999年度までの5年間、壱岐の風土のなかで弥生時代の旅人となって、国の史跡指定をめざしていた原の辻遺跡の調査研究に専心することで、次第に長崎での体験とその思いは忘れていった。江戸時代には、日本各地から好奇心に突き動かされて、憧れの地長崎をめざした多くの遊学者がいる。その最後の長崎遊学者ともいえる立原から発せられた問いかけは、発掘現場で少し垣間見たに過ぎず、答えがまだでていなかったのだと気づいたのは、万才町遺跡の発掘から四半世紀を過ぎてのことである。

2018年12月以来、日本考古学協会や長崎県庁跡地遺構を考える会などが中心となって、県庁跡地の問題がクローズアップされるようになった。私もそれに関わりをもつようになり、何かに揺り動かされるような思いで、ふたたび長崎の都市遺跡のことを考えるようになった。

## 2. 長崎くんちと基層文化

2019年10月4日、令和最初の長崎くんちに玉園町が奉納する獅子踊り、その「人数揃いの稽古仕上がり」が桜町小学校で行われ、映像がテレビで流れていた。

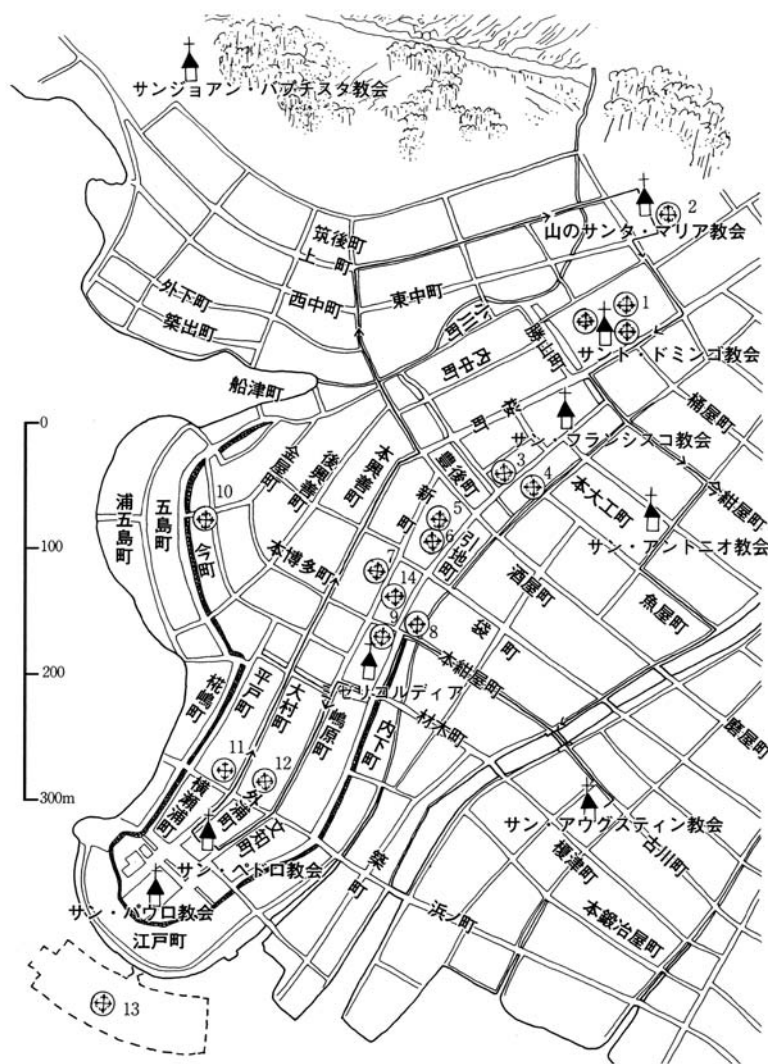


図5 17世紀初頭の長崎の教会の位置と花十字紋瓦出土地（山崎 2015）  
山崎信二は、矢印→で1614年5月の聖行列のルート进行を推定している

そこは旧勝山小学校があった勝山町遺跡であり、1609年にドミニコ会のモラーレスによってサント・ドミンゴ教会が建てられ、1614年の教会破却の後には、末次平蔵の長崎代官屋敷になった。末次平蔵は、長崎奉行水野守信に協力してキリシタン弾圧をおこなったといわれるが、密貿易が発覚したことで一族ごとくが処罰され没落したという歴史をもつ場所である。

勝山町遺跡は、桜町小学校新設の校舎建設に伴って、長崎市が2000年と2001年に発掘調査を行い、サント・ドミンゴ教会に関係する敷石、石組地下室、土坑などの遺構が確認された。日本布教のキリスト教の教会遺構が発見されたとの認識から、文化庁が入って協議を行った結果、遺構は現状で保存されることになった。小学校校舎の一階に、サント・ドミンゴ教会跡資料館が併設され開館した。

その小学校の運動場には、歴史の出来事を物語る遺構が、まだ手つかずのまま埋もれて残っている。そのような場所で、「くんちの稽古仕上がり」が披露されていたのである。

くんちは、禁教後に、元キリシタンの長崎の住人すべてが諏訪神社の氏子として定められ、幕府のキリシタン対策としてはじまったといわれる。下妻みどりは、くんち神輿の行列をキリシタン時代に盛んに行われていた「聖行列」と重ねることができるという。諏訪神社のくんちは1634年にはじまったというが、1614年5月に長崎で行われた最後の「聖行列」は人びとの記憶にまだ残っていたに違いない。そして、その年の11月に長崎旧町にあった11の教会は、1620年に破壊されたミゼリコルディアの教会をのぞいて、すべて破却された。

1790年から1800年ごろ製作されたといわれる「長崎諏訪神社祭礼図屏風」（長崎歴史博物館が所蔵）には、出島、西役所、御旅所、棧敷が描かれ、お下りの神幸行列が西役所の前に入ってきている様子がうかがえる。現在の神幸行列は国道34号線の道を通っているが、江戸時代には地方裁判所のある、いまフロイス通りといわれている道を通っていた。これは、長崎くんちがはじまった頃に、中央の道路を通るのを妨害されるということがあって、この道を通るようになったと原田博二（元長崎市博物館長）が指摘している（原田 2017）。屏風絵の棧敷のあるところは外浦町（ほかうらまち）になるが、この場所にはサン・ペドロ教会があったことが推測されている（山崎 2015）。その場所の上に、棧敷が設けられていたことになる。

そのような町の様子を見ていくと、長崎くんちは諏訪神社の秋の祭礼としてはじまったというだけでなく、キリシタン禁教、弾圧、迫害、殉教など、長崎の土地に起きたさまざまな出来事への鎮魂のまつりであったのか、と思えてくる。

### 3. 幕末以前の長崎は地中に埋まっている

長崎には、居留地時代の面影を残す洋館群、大浦天主堂、出島川べりの石垣、オランダ坂の石畳、また清朝時代の中国文化が偲ばれる唐寺、孔子廟など、長崎の「異国情緒」を醸し出す遺産がある。消えゆく洋館の保存を訴えた長崎の版画家田川憲は、時の記憶を残そうと版画に刻み込み描いた。

だが、それらの遺産は、唐寺などの建物や一部の石垣などをのぞけば幕末から明治をさかのぼらない。それよりも古い幕末以前の歴史は、私たちの足下に埋もれているのだ。その歴史の地層を長崎の「基層文化」と呼ぶことができれば、私たちが眺めている地表に遺った遺産や風景、そしてまつり、食文化などは長崎の「表層文化」ということになるのであろう。地中に埋もれた「基層文化」と日常の暮らしのなかにある「表層文化」とが重なり合って二重構造になったものが、「長崎文化」なのではないかと気づいたのである。

このような長崎の情景を見ていると、江戸時代の出来事はとうに過ぎ去ってしまった過去でなく、私たちは過去の人たちとつながりをもって生きているということではないか、と思えてくる。そう感



じるのは筆者一人だけではあるまい。立原道造のみならず、今なお人びとを引きつける長崎の魅力の秘密は、このことにあるのではないのかと思えるのである。

長崎の「基層文化」である近世長崎で発掘された出土品と地中の遺跡は、過去の人たちが残してくれた財物（たからもの＝埋蔵文化財）である。この長崎の埋蔵金ともいえる潜在的資産を、私たちは将来の長崎のために活かしていくべきであろう。

長崎県庁跡地は、もともと長崎奉行所西役所の敷地であり、明治になって長崎県庁舎が建てられた場所である。石垣で囲まれた長崎奉行所の下層には、キリスト教日本布教の中心地となった岬の教会があったところである。そこは、「長崎」の名の発祥の地であり、大村純忠が1571年に「長崎町建て」がおこなわれて以来、450年にわたって政治・経済・文化の中核となった、「長崎」という名を象徴するきわめて大事な場所である。

そして、長崎港に浮かぶ出島和蘭商館跡を臨む位置にある長崎奉行所（西役所）は、ポルトガル人やオランダ人を出島に収容して管理するために岬先端の場所におかれたと言っても過言ではなく、西役所と出島は「長崎貿易」のなかで一体的に機能していた施設である。その後に唐人屋敷を設けて出島とともに鎖国政策を押し進めた、そのような鎖国時代の歴史的・文化的景観を形成している。そのエリアは、歴史教科書に書かれている「鎖国」というものが、どのようなかたちでおこなわれたのか、奉行所・出島・唐人屋敷という具体的な教材を通して学べる優れた教育的資産であると思われる。

また、県庁跡地を起点とすれば、立山役所跡（長崎歴史文化博物館）、サント・ドミンゴ教会跡資料館などさまざまな史跡・博物館などと組み合わせ、長崎旧町を回遊する観光資源として活用することが可能である。鎖国時代の近世長崎をめぐる回遊する起点ともなる長崎県庁跡地の保存と活用については、今後、学識経験者・専門家・市民など多くの人びとの知恵を集めて、どのようなかたちが長崎の将来像として最も相応しいのか、もっと議論と熟考を重ねながら検討を進めていく必要があると思われる。

#### 4. 長崎文化の見方・捉え方

「近世の都市遺跡を発掘して」を『長崎考古学会報』2号（1994年3月）に書いた頃は、長崎に遊学した人びとを対象とした「長崎遊学資料館」を漠然とイメージしていた。長崎遊学に訪れた人が、長崎で何を学び、その後に、近世・近代の日本にどのような貢献を果たしたのか、その功績を検証して、その業績を顕彰する資料館である。そこで子どもたちが学ぶことで、長崎が果たしていた役割が理解でき、長崎の文化や歴史に誇りをもてるのではないかと考えたのである。自分の娘たちの顔を思い浮かべながら、長崎の未来を担っていく子どもたちが、近世から近代にかけて輝いていた長崎の歴史について学ぶ施設がないということに、気づいたのである。

1980年代に、鹿児島県歴史資料センター「黎明館」（1983年開館）を見学したことがある。そこでは、近代日本を築いていくことに貢献した、鹿児島が輩出した明治維新の人物群像を前面に押し出すことで、県民のプライドを誇示し、アイデンティティを確立していこうとする、熱情ともいえる展示コンセプトに、圧倒されたことがある。また、1970年代に提唱され新しい研究分野である近世考古学が、1990年代になると江戸・大坂・堺などの近世都市を中心に研究が進められ、その成果の一つとして、1993年3月に「江戸東京博物館」が誕生したこともヒントになった。そのような刺激と二つの博物館の存在が重なって、長崎の子どもたちのアイデンティティを喚起する施設として、「長崎遊学資料館」をイメージしたのである。

そののちに、長崎県と長崎市によって共同で運営する長崎歴史文化博物館が建設されるという構想

が持ち上がった。その時には、近世長崎から出土している遺物にもスポットライトが当てられ、貿易都市長崎の暮らしを物語る具体的な展示がおこなわれるのだろう、と大いに期待したのである。

両館がそれぞれに所蔵していた長崎関係の歴史資料が、長崎歴史文化博物館にまとめられて収蔵され、一体的に活用されることは、長崎にとって最善のことであろう。しかし、2005年に開館した長崎歴史文化博物館を観覧させていただくと、メインテーマが「近世長崎の海外交流史」になっているのだが、両館の歴史資料を中心とした展示構成になっており、近世長崎の遺跡でそれまでに発掘されていた出土品は展示からほとんどがオミット（除外）されていた。そこで、それまで期待していた気持ちは、落胆することになったことを記憶している。

また長崎市は、2015年に「長崎市歴史文化基本構想」を策定している。そのなかにおいても、近世長崎の遺跡や出土品については触れられていない。長崎の史跡やまつり、食文化などの「表層文化」がとりあげられて、「基本構想」としてよくまとめられている印象を受ける。しかし、「長崎文化」の土台・基礎となった「基層文化」（埋蔵文化財）についての認識はみられず、長崎の観光イメージとなっている「異国情緒」を醸し出す遺産・景観、食文化の「表層文化」としての「長崎文化」だけが論じられているように思える。

『長崎の岬Ⅱ』の「長崎市万才町遺跡の発掘から見えてきたこと」では、私たちが普段眺めている風景は長崎の「表層文化」であって、長崎旧町の地中には江戸時代の「歴史の地層」・「歴史の記憶」である「基層文化」が埋もれていること。この「基層文化」と「表層文化」が重なって二重構造になっているのが、「長崎文化」ではないかと、『長崎の岬Ⅱ』のなかで指摘した（宮崎 2020）

哲学者野家啓一は、『物語の哲学』（岩波現代文庫）という歴史哲学の書籍のなかで、歴史的時間について述べている。すなわち「時は流れない、それは積み重なる」ものであり、「過去は流れ去ったわけではなく、下層に沈殿しているからこそ、われわれは、それを史料や遺物を手がかりに再活性化することが可能なのである。」「それゆえ歴史的時間は『流れ去る』という運動学的比喩ではなく、『積み重なる』という地質学的比喩によって捉えなければならない」、そのような「解釈学的時間」であるという（野家 2005）。

野家啓一の歴史解釈からみれば、歴史的時間とは地層として堆積する時間であり、時間が一端止まって固定化（化石化）した地質的時間の積み重なりということになり、筆者のいう「基層文化」を歴史的時間が積み重なって堆積している「歴史の地層」あるいは「歴史的な記憶」、として捉えてよいのであろう。「長崎の記憶をほりおこす」の発表では、長崎県庁跡地での「岬の教会と奉行所の変遷」という考古学的視点で遺構の変遷を整理した表を示して説明をおこなった。

ここでは、この表を逆にして地質的時間をさかのぼっていくという編年表（表1）を作成してみた。この表1を、上から下に順追って見ていくと、地表から発掘調査で掘り下げていくことと同様なことになる。1953年に建設された昭和县庁舎の基礎からはじまって、1911年建設のレンガ造の明治県庁舎、1876年と1811年木造2階建ての明治県庁舎、そして西役所、奉行所、糸割符会所、一番下の面には1971年頃建設された岬の教会の遺構が検出されることになる。

検出された遺構や施設を判定するうえに年代的なメルクマールとなるのが火事による火災層である。この場所は、教会が1614年に破壊され焼却（火災層Ⅰ）されており、糸割符会所が1633年の火事（火災層Ⅱ）、奉行所が1663年（火災層Ⅲ）、1678年（火災層Ⅳ）、1698年（火災層Ⅴ）の合計5度の火災にあっている。発掘現場で火災層と地層の重複、遺構の切り合い関係を検証することで、「歴史の地層」を解読し、検出された遺構がどの施設に伴うものなのかを推定し、それぞれの遺構の変遷をおさえていくことができるのである。

表1 長崎県庁跡地における各施設の変遷

変遷	年代（西暦）	長崎県庁跡地における各施設の変遷とその内容
県庁舎4期 1953～2018	2018 1967 1953	尾上町に県庁移転 第1別館（コンクリート造5階）完成 5月に県庁舎（コンクリート造5階）完成、開庁
県庁舎3期 1911～1945	1945 1911	原爆によって倒壊 4月に県庁舎（レンガ造3階）完成、5月に開庁
県庁舎2期 1876～1907	1907 1876	庁舎解体 3月に県庁舎（木造2階）完成
県庁舎1期 1874	1874	7月に県庁舎（木造2階）完成・開庁。8月に風雨によって倒壊
西役所8期 1855～1873	1873 1857 1855	西役所を解体 西役所に語学伝習所を設ける 西役所に海軍伝習所を設ける
西役所7期 1808～ 1850年代	1808	石垣上御長屋が石火矢（大砲）を擁した備場となる
西役所6期 1780年代～ 1807	1807	石垣上長屋が備場になる
西役所5期 1744～ 1780年代	1744	西役所と立山役所を瓦葺に改める（建物を全て瓦葺へ／防火対策）
西役所4期 1718～1744	1718	西役所の老朽化のために、全面的に改築
西役所3期 1700頃～1718	1700前後？	西役所を再建
西役所2期 1679～1698	1698 1679	西役所屋敷内より出火烧失（→火災層Ⅴ） 西役所修復
西役所1期 1673～1678	1678 1673	延宝6年の火事／西役所が類焼（→火災層Ⅳ） 西屋敷が西御役所となる。東屋敷は立山役所として移転
奉行所2期 1669～1673	1669	高木作右衛門屋敷（後の船番屋敷）に東屋敷を建て、1668年に石垣を横幅6間突出し、1669年に西屋敷長屋を建てる
奉行所1期 1635～1663	1663 1635	寛文3年の大火／二つの奉行所屋敷ともに類焼（→火災層Ⅲ） 本博多町から奉行所を移転（二つの屋敷をもつ奉行所）
会所期 1614～1633	1633 1614	寛永10年の火事／糸割符会所類焼（→火災層Ⅱ） 外浦町に糸割符宿老会所を設置。カーザを糸割符仲間が占拠〔安野眞幸説〕
教会4期 1601～1614	1614 1601	被昇天の聖母教会が破壊・焼却される（→火災層Ⅰ） 非常に大きく壮麗な教会が完成。日本最大の修道院を有し、附属する司教館に54名の聖職者が住み、全管区を掌握する副管区長と巡察師が駐在 三層（4階建）の教会・修道院・学院・神学校・カーザ（生糸倉庫）・印刷所など
教会3期 1593～1599	1599 1598 1593	副管区長と巡察師が駐在する修道院（イエズス会本部）に30人の聖職者が居住し、90人の少年がいる神学校を併設 岬の教会に、学院・神学校と印刷所が移される 教会と修道院を再建
教会2期 1580～1592	1592 1588 1585	被昇天の聖母教会と修道院が破壊され、材木は名護屋に運ばれる 非常に大きくすばらしい教会を建てる。修道院を併設 司祭4名と修道士2名が駐在。教会は二、三度増築したが、さらに大きい教会を建てることにする
教会1期 1571～1579	1579 1571	長崎に司祭館を有し、司祭2名と修道士1名が駐在 岬の波止場の傍らに小さな聖堂を建てる（サン・パウロ教会）

## 5. 長崎の基層文化と長崎感覚

深層心理学では、意識と無意識の領域を北海に浮かぶ氷山にたとえることがある。氷山の一角という言葉があるように、海面から見えている意識部分がここでいう「表層文化」であり、海中に沈んだ広大な無意識部分が「基層文化」といえる。それぞれが、意識と無意識の領域にたとえることができ、そして全体を「長崎文化」としてイメージすることができる（註2）。

「表層文化」は、2018年1月29日付けの西日本新聞「近況往来」というコラムで、美術家の浦川大志が今後の抱負として、「時代の表層としての風景」を描いていきたいと述べていたことが取材されており、これにインスピレーションを受けた言葉である。画家の浦川が描いているのは、現在という時代が表された表層という風景であるとすれば、画かれている表層の風景の地下には時代の地層が重なっている、と想起したのである。

このように、浦川が語った「時代の表層」という言葉から、地表に表れている幕末から明治の遺産、現代に引き継がれている長崎くんちや食文化が長崎の「表層文化」であって、地中に埋もれている江戸時代の長崎を「基層文化」としてイメージすることができたのである。

長崎の旧町は、内町・外町の80町で、くんちの踊り町（77町・出島・丸山・寄合町は除かれる）と重なっている。その町の中心部では、都市開発によってビルが立ち並び、様変わりしてしまった印象を受ける。だが、まだ町のなかには、古い町の枠組みともいべき石垣や「背割りミゾ」と呼ばれる排水路がそこかしこに残っている。現在、残っている石垣は後世に積み替えられていても、基礎石は残っている可能性がある。石垣や排水路などの街区・街路を示す遺構は、江戸時代にあった長崎の町の姿を残しているのである。

布袋厚は、古地図を読み解いて、長崎の町並みに残る痕跡から江戸時代の長崎を復元する仕事をしている。とくに、長崎歴史文化博物館が所蔵する精密な測量図である『長崎惣町絵図』（明和年間・1765年ごろ）を手がかりにして、町並みを踏査して絵地図と対照させ探究していくことで、『復元！江戸時代の長崎』と『長崎惣町復元図』を現代地図上に再現している（布袋 2009）。

布袋厚が絵図面から精密に復元した長崎の町並みの地下には、江戸時代の歴史の記憶をとどめる地層が埋もれている。筆者は、長崎くんちがおこなわれている情景のなかで、「基層文化」が埋まっている地中から時を超えて、過去の人びととつながっているような感覚を覚えたのである。

元祖カステラ店のテレビコマーシャルに「時をつなぐ街、長崎」という洒落たフレーズがある。長崎くんちのように、情熱的な「くんち好きたち」が芸能の所作、わざを磨いて一体感をもったまつりに仕上げ、江戸時代からとぎれることなく引き継がれているものがある。そのような文化をつないでいる街が長崎だと、イメージを喚起しているのであろう。

脳科学者茂木健一郎は、人間が感じる「言葉で表現しきれないもの」を「クオリア」という感覚として捉えている。絵具を塗り重ねた絵画の画面から発せられるようなオーラのような雰囲気もそうであろう。筆者が、長崎くんちの映像を見て感じた「基層文化」から時を超えて何かがつながっているという感覚、あるいは「長崎が好き」「長崎は素晴らしいところ」と感じるような感覚を、〈長崎感覚〉と表現できるのではないか、と思う。

江戸時代から長崎をめざした遊学者たち、明治以降になっても、北原白秋らの「五つ靴」のメンバー、芥川龍之介、そして立原道造がいたが、いまでも多くの人びとを引きつける長崎の魅力の秘密は、いま現実に見えている「表層文化」だけではなく、「表層文化」の下に「基層文化」が層をなしていることにあるのではないかと想起する。「表層文化」が「基層文化」の過去の世界と分かちがたくつながっていて、二重構造になっているのが「長崎文化」であり、そのつながった感じが〈長崎感覚〉で

はないだろうか。すなわち、地下にある「基層文化」の基礎・土台があつての「長崎文化」である、と述べたいのである。

だが、「基層文化」である近世長崎の遺跡で掘り出された多くの出土品は、陽の目をみずに眠っている状態にある。長崎の基層文化を見直していこうとする機会に、これから表に出してもらって、多くの皆さんに観ていただきたいと思う。地中の遺跡とともに出土品は、「長崎の埋蔵金ともいえる潜在的資産」と述べたが、もし、長崎県庁跡地の発掘調査で「岬の教会跡」が発見されることにでもなれば、長崎への経済波及効果は計り知れないと考えられる。それほど価値のあるものと思う。

## 6. 長崎の歴史・文化資産と地域おこし

『長崎の岬Ⅱ』と『長崎県考古学会報』28号では、文化遺産は、「寺の建物の一部をのぞけば幕末から明治をさかのぼらない」と記した。その寺とは崇福寺、興福寺、聖福寺、清水寺であり、それぞれ国指定、県指定となっている。この文章では石垣の一部を付け加えたが、それと加えておかなければならなかったのが、かつて14のアーチ石橋があつた中島川石橋群である。この石橋群は、片寄俊秀が日本人商人や唐通事、中国人の民間人の寄付によって架設された民衆が築いた文化遺産として評価している（表1）。すなわち中島川石橋群は、天領として長崎を支配していた幕府が築造したものではなく、長崎に関わりのある民衆の力で築かれているのである。この民衆の文化遺産である石橋は、1982年7月の長崎水害によって眼鏡橋、袋橋、桃溪橋の3つの石橋が一部崩壊し、6つの石橋が流失してしまった。その後、眼鏡橋、袋橋、桃溪橋の3つの石橋について復元がおこなわれている。

1970年より1996年まで長崎総合科学大学教授だった片寄俊秀は、石橋群を長崎の民衆の築いた文化遺産として石橋の保存に尽力していた。私の手元には、古書店で入手した『ながさき巡礼』（1982）と『長崎歩く考える。』（1985）の片寄が執筆した2冊の著書がある。片寄は、石橋群を町おこしの起爆剤として「中島川まつり」に取り組み、長崎という町の全体を「博物館都市・長崎」として構想している。片寄の「博物館都市・長崎」のグランドデザインには学ぶところが多い。ここでは、『ながさき巡礼』のなかの一節を引用しておきたい。

長崎は、実に多くのことを学ばせてくれる町である。町を構成するすべてのものが、そしてそこに住まうすべての人たちが、何かを語りかけてくれる町である。町そのものが、世界的かつ世界史的な存在であるゆえに、たとえ住民にとってはほんのささいな事象であったとしても、それに執着して少し掘り下げてみると、とてつもなく大きい未知の鉱脈にぶつかる（片寄 1982）。

片寄は、またこの本のなかで、「足元を掘れ、そこに泉湧く」ということも述べている。いま思うと意味深な言葉である。

片寄がこの本を執筆した1982年～1985年の時点では、1984年に出島の試掘調査が開始されたばかりで、長崎市内の発掘調査はほとんどおこなわれていなかった。したがって、筆者がここでいう「基層文化」の地中にある遺跡や考古資料は、残念ながら片寄の視界にまだ入っていない時機であった。

近世都市長崎の発掘調査は、1990年代以降になってからさかんに実施されるようになった。もし、長崎市内でさまざまな遺物や遺構が検出されている状況を、片寄が目当たりにはしていれば、私たちにどのようなアドバイスをくれたのであろうか。おそらく、長崎の町おこしに関わる適切な助言をいただけたのではないかと、思ってしまう。

表2 民衆が築いた中島川石橋群

川	名称	当初架設年	寄贈・架設者
堂門川	堂門橋 (大手橋)	慶安 3 (1690)	唐通事高一覧
	桃溪橋 (ト意橋)	延宝 7 (1679)	在留唐人僧ト意
中島川	①阿弥陀橋 (極楽橋)	元禄 3 (1690)	園山善爾
	②高麗橋	承応元 (1652)	興福寺檀徒蘇州人
	③大井手橋	元禄11 (1698)	岡正敏
	④編笠橋 (網笠橋)	元禄12 (1699)	岸村氏夫妻
	⑤古町橋	元禄10 (1697)	河村喜兵衛と母妙了
	⑥一覽橋	明暦 3 (1657)	唐通事高一覧
	⑦芋原橋 (芒原橋)	延宝 9 (1681)	中国人
	⑧東新橋	寛文13 (1673)	中国人
	⑨魚市橋	元禄12 (1699)	岡正恒
	⑩眼鏡橋	寛永11 (1634)	興福寺住持唐僧黙子如定
	⑪袋橋	承応元 (1652) ?	不明
	⑫古川橋 (常盤橋)	延宝 7 (1679)	魏之琰
	⑬榎木津橋 (賑橋)	寛文 6 (1666)	何高材
	⑭萬橋 (万橋) 大橋 (元・鐵橋) 長久橋	延宝 6 (1678) 木橋 木橋	京都商人金屋喜右衛門

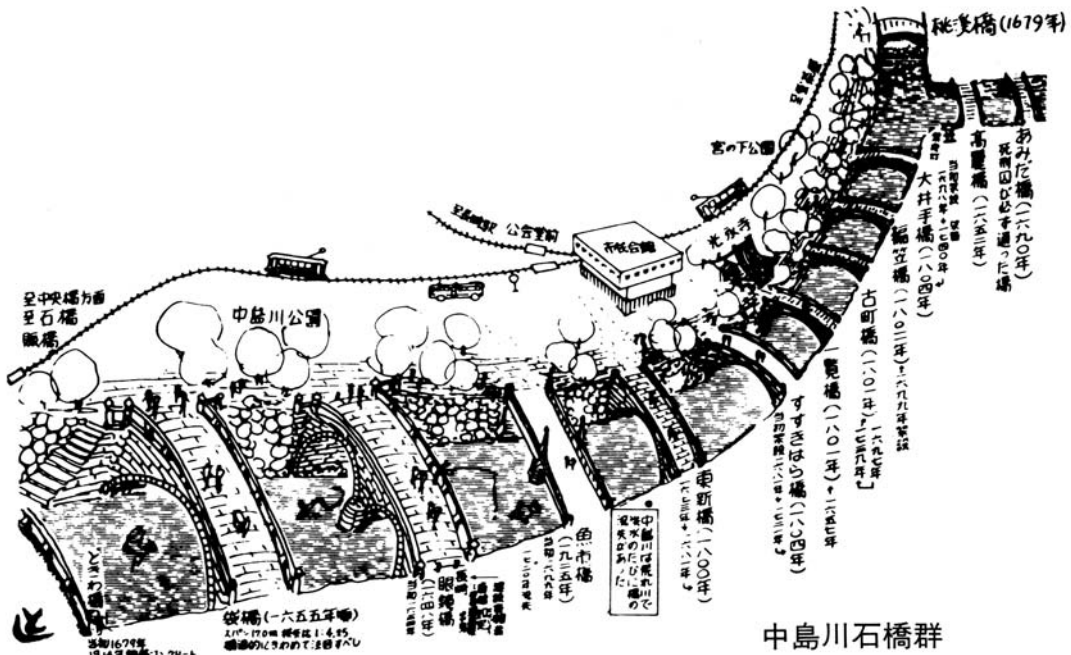


図6 民衆の文化遺産としての中島川石橋群 (片寄 1985)

日本各地の市町村では、島おこしや地域おこしのために、新しい魅力の発見にやっきになっている。どのようにすれば町や島が元気になっていくのかと、生き残りや地域の存続と活路を模索している市町村に比較すると、長崎は資産に恵まれた場所である。

しかし、先人たちが築き上げた文化や遺してくれた遺産にあぐらをかいているだけのように思える。残されている史跡や遺産のおかげで観光事業が成り立っているといっても過言ではなく、自らが汗をかいて、潜在的な資産の掘り起こしや新しい魅力を引き出すことをしてこなかったように思える。

このように、長崎は文化・歴史遺産に恵まれたところなのであろう。ところが現実には、転出する人口が全国で一番多い市という危機的な状況におちいつている。長崎を訪れた人たちに「長崎には観るところはいろいろありますんで、その辺を観ていってください」など、悠長なことを言っている場合ではない。地域おこしに取り組んでいる市・町・村に学び、もっと知恵をしぼって努力しなければならないと考える。民衆の文化遺産である石橋群を、町おこしの起爆剤にしようと取り組んだ、片寄俊秀の精神に立ち戻り考えていく必要があるのではないだろうか。

江戸時代の長崎は、世界に開かれた国際貿易都市として、外国から先端文化を受け入れて学び、国内に情報発信し、多くの遊学者が訪れる憧れの地であった。そのような長崎の歴史を知り、学ぶことは、新たな魅力を発掘し発見することである。長崎の魅力を知ることは、将来を担う青少年たちの誇り、アイデンティティを確立していくための人づくりとなるであろう。長崎の先人達がせっかく残してくれた宝物・贈物を、将来に対する戦略的資源として活かし、市民、観光客、多くの人びとに向けて広く公開・活用していただきたいと思う。

## 7. 県庁跡地遺構を考える会の市民運動

2019年10月からはじまった長崎県庁跡地の確認調査は2020年1月に終了し、17世紀前半の井戸や落ち込みなどの遺構が検出され、奉行所の石垣が発見されるなどの調査成果があった。この調査結果を受けて、長崎市は県庁跡地での文化芸術ホールの建設をとりやめ、最初の計画である市庁舎跡の建設の方針に計画を戻した。

県庁跡地の取り扱いについては、2018年12月に日本考古学協会から保存問題が提起された。その後、日本考古学協会ならびに九州考古学会からの保存に向けての働きがあり、長崎県庁遺構を考える会が2019年5月に発足した。県庁跡地遺構を考える会では、2019年6月と11月に市民に向けてシンポジウムを開催し、それらの文化活動によって県庁跡地の保存問題は前進することになった。

2019年6月2日には、長崎県庁跡地遺構を考える会の第1回目のシンポジウム「長崎の岬—日本と世界はここで交わった」がメルカ築町5階プラザホールで開催された。そこの「あいさつ」のなかで、代表者の一人、片峰茂は、元県庁跡地活用懇話会の委員長であった市川森一の言葉を引用する。

仮に将来県庁が移転し、そこが更地になった場合、最初に取り組まなければならないのは跡地の徹底的な発掘調査であろうと思われます。その結果、不明なことの多かった『長か岬』の幾重にも歴史の地層が浮き彫りとなり、長崎は埋もれていた世界的な資産をようやく手中に取り戻すことができるのであります。願わくば、そのことが長崎の観光・文化の発展に寄与する輝かしい未来図となることを望むものであります（『長崎県庁跡地活用懇話会提言書』2014年4月から）。

そして、片峰はこの言葉をもう一度かみしめて考えていく必要があると指摘している（片峰 2019）。現在、更地になっている県庁跡地を活用する計画では、市川が望んでいた方向から一端乖離した方向

に向かっていたが、ふたたび原点に回帰したということになる。

県庁跡地の保存活用については、遺跡の保存へ向けて学術的な発掘調査を実施して国史跡の指定となり、調査指導委員会・整備委員会のなかで遺跡としての価値付けをおこなって、保存活用していくという方向も選択の一つである。今後、長崎県庁跡地の遺跡の保存活用については、多くの人びとの知恵を集めて、さらなる検討を重ねていく必要があるのではないかと考える。

### おわりにーエトランジェが築いた町・長崎ー

私は、福岡県大牟田市で生まれ、島原市、東京、大野城市から長崎市へと転居を重ね、まるで根無し草のような人生を送ってきたようである。そして、壱岐の二度の単身赴任を経て、いま長崎市の在住の期間が一番長くなり、終の棲家となりそうである。

原田伴彦の『長崎 歴史の旅への招待』（原田 1964）は、中公新書という小さな冊子であるが、私たちに長崎の魅力を語ってくれる名著の一つであると思う。この本のなかで、原田は「長崎は、文明史的に見れば、二つのいちじるしい特色、いわば『二つの顔』をもっている」という。

「ひとつは、西欧文明と大陸文物が、長い歴史を背景に混然と融合した、日本でただひとつ、国際性豊かな珍しい町だという点である」と指摘して、「洋風化された町なら、日本にほかにないでもない。異国調の趣きは、横浜に、神戸に、函館にもある。しかしそれはあまりにも歴史が浅く、そのコスチュームも表装的である」と長崎がもっている「歴史の年輪」の厚みについてふれている。

そして、「第二の顔は、長崎が『市民の町』であったという点である」として、長崎の歴史について次のように記している。

中世の終りー戦国のころ、京都や、堺や、博多では町衆たちが、みずからの力で自治的な町づくりをはじめた。とくに堺では、異国宣教師をして、ヴェニスのごとき共和制とたたえさせたほどの『自由都市』的秩序が形成された。だがこの都市自立も、つかのまにして織豊権力によって圧殺された。江戸時代になって、日本の都市のすべてが、きびしい封建支配のくびきの下に屈服させられた。しかし、中世の市民的伝統は、庶民の町大阪とこの長崎にのみうけつがれた。

「市民的伝統」が長崎においてとくにいちじるしかった理由として、「長崎が、鎖国日本の時代を通じて、ただ一つの海外の空気をうけいれる窓として、開放的性格をもちつづけたことが大きく影響していよう。また、貿易によって、この町が富んでいたこともあげられよう」としている。

以下、長崎について説明の文章が続くが引用したい。

長崎は江戸時代に、幕府の直轄領として、長崎奉行の支配下に置かれた。もちろんその形式的統制はきびしかった。だが、実際は町人の勢力と発言権のほうが強かった。町の政治は、「年寄」を中心とする町人の合議制によって事実上運営されていた。奉行が手をこまぬけば市政は無為にして治まり、奉行がこれに干渉すれば非難がたちまち四方におこって、ついに奉行は解任のうき目であった。「御老中でも手が出せないものは、江戸城の大奥と長崎である」とさえいわれた。

ともかくここには、領主や武士の遺した封建的陰影というものがきわめて薄い。日常の生活のしきたりや行事などいっさいが、市民的な心情を主体として構成され、その伝統は今日になお揺曳している。こんな町は日本には珍しい。



また、「いくたの南蛮人や紅毛人が、この港を訪れ、絶ちがたい追憶をいだいて去っていった。異国（とつくに）のまれ人だけではない。長崎の街道は、瀬戸内に、大阪に、京都に、そして江戸につながり、文人、学者、商人のむれの往還はひきもきらなかった。これだけの多彩な、歴史の幅と厚みをもつ町は、日本ではあまり類がない」と、原田は長崎が魅力に満ちあふれた町であると力説する。

長崎の町は、ポルトガル船を港に寄航させ貿易するために、1571年に「長崎町建て」をおこなって造られた新興都市であり、その住人のすべては他所から移住して来たエトランジェであった。そして、イエズス会の教会領時代の長崎は、キリスト教信者を迎え入れるアジール（避難所）となり、教会を宗教的拠り所とする町人たちによって自治されるキリシタン都市となった。秀吉の豊臣公領期を経て、江戸時代になっても幕府の鎖国政策のなかで、長崎は西欧と中国に開かれた日本国内のなかで唯一の経済特別区のような国際貿易都市として発展した。

原田伴彦も「このような市民感情は、異国人に対する寛容な包摂的精神となってあらわれている」と指摘しているが、そのような場所にいた長崎の人びとは、命をかけてはるばる海を渡って来た外国の異邦人に敬意と共感をもち、異文化に対しても寛容に接したのではないかと思える。長崎にもたらされる外国からの最先端文化と文物に、好奇心をもって学び吸収していくなかで、異国文化と混淆した独特な「長崎文化」を創りあげていったのだと思われる。

片寄俊秀は、中島川に架かる石橋は、唐人を含めた民衆によって架橋された、と指摘している。出島も長崎の町人たちの出資によって築造されている。1838年の長崎総町の人口は27,166人であるが、長崎地役人は2,069人いて、人口の7.6%を地役人が占めていたのである。長崎は、もともと自治都市として出発したが、その系譜をもった町人階層がおり、国際貿易都市という性格から長崎貿易に関わる地役人の数が突出することになったのであろう。

いずれにしても、江戸幕府が独占し管理をおこなっている長崎貿易や天領長崎の町の行政も、実質的には長崎の人口の4～7%を占めていた長崎地役人によって遂行されていたことになる。原田伴彦がいうように、長崎という町は、幕府の公儀という公の力というよりも、町衆の力で長崎の町の運営をおこなってきたという実績をもっている場所・町であるということができよう。

これからの長崎の将来に向けては、長崎の歴史と伝統を顧みると、海外・国内との「交流創造」（JTB）ともいべき文化・経済の活性化を、もっと民間・市民の力によって推進して盛り上げていかなければならないのではないかと考える。

筆者も、長崎のエトランジェの一人である。長崎県庁跡地遺構を考える会に参加し、第2回シンポジウムでの発表の機会をいただいたことで、四半世紀以前に発掘した万才町遺跡の再評価を思い立ち、ふたたび長崎について考えるようになった。このような機縁となったことで、長崎がもっている良さ、素晴らしさについて、さらに考えていきたいと思う。

#### 【謝 辞】

『西海考古』の原稿の募集から編集まで、渡邊康行氏と共に西海考古同人会を主宰されている古門雅高氏のご尽力がなければ、長崎県の考古学研究者が、論文を書いて研究意欲を高めていくことはできないのではないかと思います。『西海考古』という広く開かれた考古学の研究の場を提供いただいている古門・渡邊両氏に深く感謝を申し上げます。今後とも、一考古学徒として、『西海考古』の継続と発展を希望いたします。

#### 【註】

註1 1995年3月に刊行された『万才町遺跡』では遺跡の地番を万才町3番13号として報告しており、実際の地番は万才町3番17号であるので、『長崎県埋蔵文化財センター紀要』第10号（2020年3月）の「万才町遺跡の

再検討」の論稿のなかで訂正をおこなった。近世長崎では、万才町3-13地点と遺跡表記する場合があるので、万才町3-17地点であるとして訂正しておきたい。

註2 2015年9月に放映されたNHKの日曜美術館「まど・みちおの秘密の絵」のなかで、ゲストだった現代詩人の谷川俊太郎が語っていた話からイメージした。谷川は、ユング派の心理学者河合隼雄と対談するなど、友人として互いに影響を受けたと思われる。

#### 【引用・参考文献】

- 赤瀬 浩 2000『鎖国下の長崎と町人』長崎新聞社  
扇浦正義編 2003『勝山町遺跡』長崎市教育委員会  
大田由紀 2017「風流の精神が生きるまつり長崎くんち」『楽』私と長崎くんち イーズワークス  
片峰 茂監修 2019『長崎の岬—日本と世界はここで交わった』長崎文献社  
片峰 茂監修 2020『長崎の岬Ⅱ—長崎の記憶をほりおこす』長崎文献社  
片寄俊秀 1982『ながさき巡礼』日本放送出版協会  
片寄俊秀 1985『長崎歩く考える。』長崎出版協会  
川口洋平 2007『世界航路へ誘う港市 長崎・平戸』新泉社  
川口洋平編 2007『万才町遺跡Ⅱ』長崎県文化財調査報告書第192集 長崎県教育委員会  
坂井 隆 1998『「伊万里」からアジアが見える』講談社選書メチエ・講談社  
下妻みどり 2017「プロシヤンの彼方」『楽』私と長崎くんち イーズワークス  
田代俊一郎 1989『抒情の光芒—立原道造への旅』本多企画  
立原道造 1974「長崎紀行」『立原道造全集』第4巻 筑摩書房  
外山幹夫・加藤 章 1984『わが町の歴史 長崎』文一総合出版  
『長崎遊学 オランダ坂から世界が見える』1986 太陽スペシャル 平凡社  
長崎市歴史文化基本構想策定委員会 2015『長崎市歴史文化基本構想』長崎市  
野家啓一 2005『物語の哲学』岩波現代文庫・岩波書店  
原田伴彦 1964『長崎 歴史の旅への招待』中公新書・中央公論社  
原田博二 2017「長崎諏訪神社祭礼図屏風」『楽』私と長崎くんち イーズワークス  
福満葉子編 2018『長崎の美術6 田川憲』長崎県美術館  
布袋 厚 2009『復元！江戸時代の長崎』『長崎惣町復元図』長崎文献社  
宮崎貴夫 1994「近世の都市遺跡を発掘して」『長崎県考古学会報』2号 長崎県考古学会  
宮崎貴夫編 1995『万才町遺跡』長崎県文化財調査報告書第123集 長崎県教育委員会  
宮崎貴夫 2019「万才町遺跡の発掘から見えてきたこと」第2回シンポジウム『長崎の記憶をほりおこす』長崎県庁跡地遺構を考える会  
宮崎貴夫 2020「万才町遺跡の発掘から見えてきたこと」『長崎の岬Ⅱ—長崎の記憶をほりおこす』長崎文献社  
宮崎貴夫 2020「都市長崎の基層文化と表層文化」『長崎県考古学会報』28号 長崎県考古学会  
宮崎貴夫 2020「万才町遺跡の再検討」『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要』第10号 長崎県埋蔵文化財センター  
茂木健一郎 2019『脳とクオリア』講談社学術文庫・講談社  
山崎信二 2015『長崎キリシタン史 附考キリシタン教会の瓦』雄山閣

#### 【引用図版出典】

- 図1・4 宮崎貴夫編 1995『万才町遺跡』長崎県文化財調査報告書第123集 長崎県教育委員会  
図2 長崎市役所編 1903『幕府時代の長崎』（長崎市役所編 1973『増補訂正 幕府時代の長崎』臨川書店）に加筆  
図3 川口洋平編 2007『万才町遺跡Ⅱ』長崎県文化財調査報告書第192集 長崎県教育委員会  
図5 山崎信二 2015『長崎キリシタン史 附考キリシタン教会の瓦』雄山閣  
図6 片寄俊秀 1985『長崎歩く考える。』長崎出版協会



# 長崎県考古学の三つの課題

宮崎 貴夫

## はじめに

長崎県地域における考古学の基本的課題とは、埋蔵文化財保護行政における遺跡の保存・活用にかかる課題でもある。拙書『長崎地域の考古学研究』（2019）では、長崎県における古代・中世考古学の課題として「遣唐使関連遺跡」と「滑石製石鍋生産遺跡」の二つをとりあげた。今回は、それに加えて、近世考古学として「近世城郭跡および城下町遺跡」と「長崎遺跡群」の「近世遺跡」の課題を併せて、長崎県における考古学の三つの課題として論じてみたい。

## 1. 遣唐使関連遺跡

古代において国際的交流として知られるのが、遣唐使派遣（630年～838年）である。唐との緊張した国際関係を安定させるために、古代日本政府が政治的な外交としておこなった文化交流である。長崎県地方は、遣唐使の派遣において、壱岐、対馬を経由する北路と、五島を経由する南路の両方の航路上に位置する。したがって、「遣唐使関連遺跡」の問題は、長崎県の考古学のテーマとして学術研究においてはもちろんであるが、長崎県の行政的な施策においても、取り上げていかねばならない極めて重要な課題であると考えられる。しかし、残念ながらまったく手つかずの状況にある。

これまで、長崎県地域の「遣唐使関連遺跡」については、「肥前風土記」にみられる「値嘉嶋（ちかじま）」の「相子田・川原・美弥良久」などの古代史の文献にみられるわずかな情報で語られているにすぎず、実態は不明のままといつてよい。この状況を打開するためには、考古学的方法にもとづいた現地踏査から発掘調査をおこなっていく体制づくりが必要と考えられる。

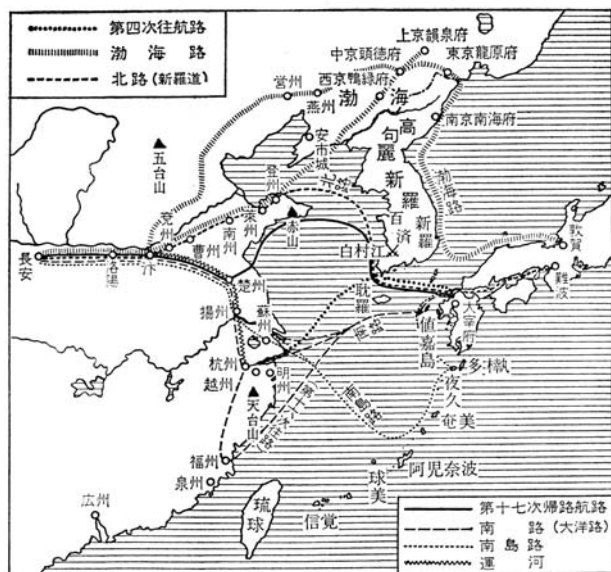


図1 遣唐使の航路図（森・沼田編 1978）

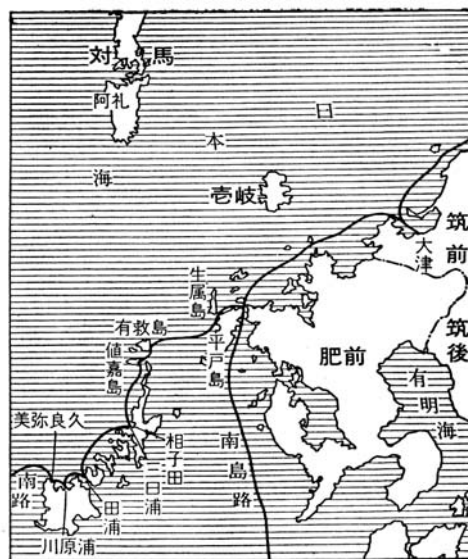


図2 遣唐使の航路と寄港地（瀬野 1972）

すなわち、まず、現地の悉皆調査や文献調査の「遣唐使関連遺跡の基礎調査」をおこない、学識者の指導委員会を設置して発掘調査をおこなう「遣唐使関連遺跡の総合調査」を、年次計画に基づいて

実施していけば、多大な成果がもたらされることが期待される。その場合、大学と行政がタイアップしてプロジェクトチームをつくり、計画を練り上げて実施していくのが最善の方法であると思われる。

遣唐使の経路上にあった五島などで、遣唐使関連の遺跡が確認され、発掘調査で遺構を検出することになれば、学術的に重要な遺跡として国史跡へ指定される可能性が高い。そして、遺跡の環境整備が実施できれば、その場所は「島おこし」や地域振興への起爆剤になることは間違いない。

古代五島の「<sup>ちかじま</sup>値嘉嶋」についてとりあげてみると、中国・朝鮮などの異国・異域との対外交流がおこなわれる列島最西端の「境界」の地であり、亡くなった親しい人に逢えるという「みみらくの島」は異界へとつながる場所であった。

この「遣唐使関連遺跡」の調査によって、中国へ向けて東シナ海を越える日本最後の出港地にある遺跡が明らかになって、遺跡の環境整備がおこなわれれば、見学者はその遺跡に立って、出立にあたって遣唐使が抱いていた中華文明への憧れ、派遣の使命感と責任、これから横断する航海の旅路などの不安な気持ちなど、さまざまな思いを馳せることができるものと思われる。

「遣唐使関連遺跡」は、まだ手つかずで、知られることもなく、眠りつづけている潜在的な資産である。「遣唐使関連遺跡」の調査研究をおこなうことによって、古代の国際交流史の実態が明らかになっていくことが期待される。

## 2. 滑石製石鍋生産遺跡

古代から中世の時代に、列島最西端の西彼杵半島から野母半島（長崎半島）に一带において、豊富な滑石岩脈を使って製作されたのが滑石製石鍋である。石鍋製作所遺跡の数は、祖型を切りだした工房跡まで数にいれると、100ヶ所を超えることが推定される日本列島最大の石鍋生産地帯である。

長崎県文化課は、1980年後半代から90年前半代にかけ、長崎県全体の遺跡分布調査事業を実施して、計7冊の「遺跡地図」を作成することができた。西彼杵半島の地域では、私は、西海町、外海町、琴海町の分布調査を担当した。この地域の特徴的な遺跡は石鍋製作所遺跡であり、未確認の製作跡を確認することをめざして、最初に実施した琴海町では山の中をやみくもに探し回ったが、それまで知られていた遺跡以外には成果をあげることができなかった。そこで調査の方法を検討し、外海町からは「表層地質図」から蛇紋岩地帯を二万分の一の地図におとして、それを目当てに河川の沢沿いに踏査することで、新たな石鍋製作遺跡をいくつも発見することができた。そのことで、いくつもの石鍋製作所遺跡の位置を、「遺跡地図」のなかにドットで示すことができたのである。

この分布調査において、川筋の沢をさかのぼって石鍋製作所遺跡を探索した経験からわかってきたことがある。山中には道らしい道などないので、沢の奥にある石鍋工房跡で荒割した祖型を職人が切りだし、おそらく背負子にかついで支流の沢を下って本流の河川まで運び、集めた祖型を小舟にのせ河口まで運んだことを想定できる。そして、河口にある集落（雪浦、神浦、出津など）で成形して仕上げをおこなって、製品を河口の集落から交易船が寄航する港湾集落まで運び、その港から大きな船に積んで日本各地へ海上ルートを紹介して流通していったことが想定されるのである。杉原敦史は、佐世保市の門前遺跡が九州西岸の南北航路上にある石鍋集散地の港湾集落であることを推定している（杉原 2012）。また、松尾秀昭は、石鍋の流通・輸送を直接的に担った人びととして海運集団としての「海夫（かいふ）」の存在を指摘している（松尾 2016）。

滑石製石鍋のかたちには、両手鍋のように耳がつく縦耳のタイプと羽釜のような鐔（つば）がついた鐔付きタイプのものがある。縦耳付タイプが古く10世紀～11世紀に流通し、鐔付きタイプが12世紀～16世紀前半に流通したが、石鍋の初源については、田中史生や徳永貞紹らによって9世紀後半から

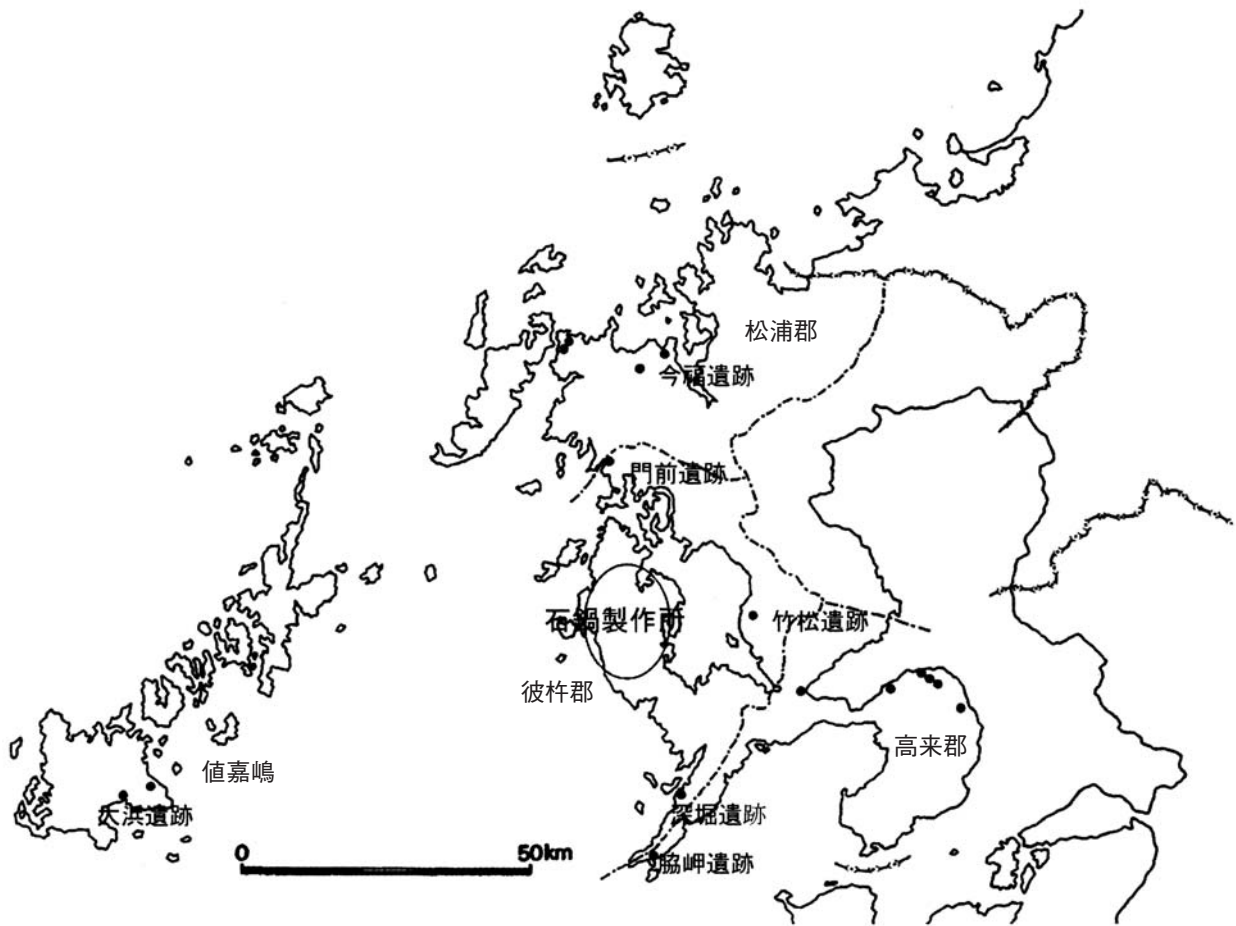


図3 滑石製石鍋製作所遺跡と肥前西海域の遺跡群 (宮崎 2019)

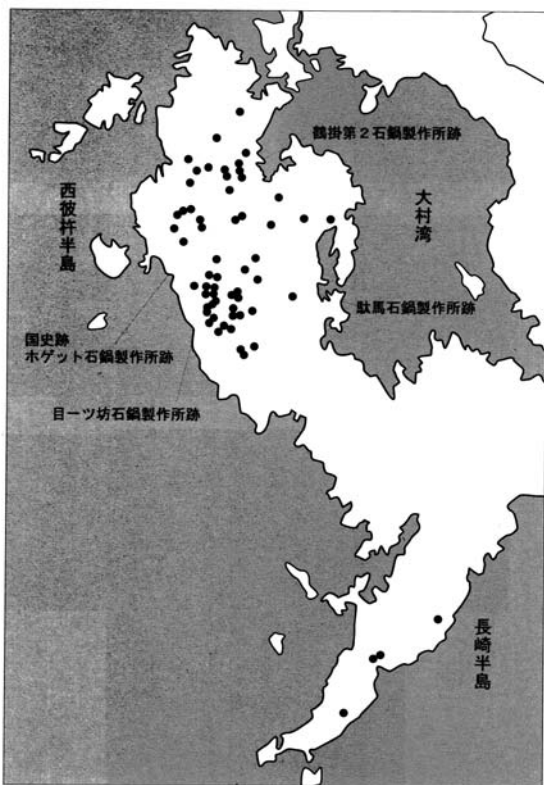


図4 滑石製石鍋製作所遺跡位置図 (松尾 2016)

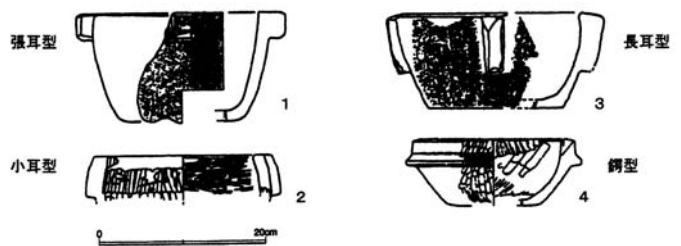


図5 徳永貞紹による滑石製石鍋の分類 (宮崎 2019)  
徳永貞紹は、縦耳付石鍋を、張耳型・小耳型・長耳型の三タイプに細分している

末頃までさかのぼって、中国海商（江南唐商）の働きかけによって滑石製石鍋の生産が開発された可能性が高まってきた（田中 2009・徳永 2010）。初源である縦耳付石鍋が、国内の煮炊き具の系譜にたどれないからである。滑石製石鍋は、出土地の遺跡の分布から、東北の平泉から琉球諸島に至るまで、海上ルートにのって広域な地域に流通したことがわかっている。

西彼杵半島・野母半島で製作された滑石製石鍋は、列島最大の生産地であることから、古代から中世にかけ日本国内に流行・流通した最初の「長崎ブランド品」といえるようである。西彼杵半島は山勝ちで水田地に恵まれない土地・風土である。水田生産が乏しい土地の住民たちにとって、石鍋の生産と海上輸送を担うことは、生活の糧を得るための基幹産業になったことも想像されてくる。

滑石製石鍋製作所遺跡は、西彼杵半島を中心として日本最大の数と規模をもつが、野母半島にも4ヶ所の石鍋製作所遺跡がある。野母半島の石鍋製作所遺跡は、橘湾側の高来郡域にあるが、どの段階から製作が開始されるのか、まだその内容は詳らかではない。双方にある滑石製石鍋製作所遺跡は、西彼杵半島側が「彼杵郡一彼杵庄」、野母半島側が「高来郡一伊佐早庄」と各郡衙あるいは各荘園によって、それぞれ別の主体によって滑石製石鍋の生産と経営がおこなわれていたことが想定される。

これまで、西彼杵半島の滑石製石鍋の調査については、東貴之、松尾秀昭らの「石鍋記録会」が地道な活動をおこなっている。しかし、どこの石鍋製作所遺跡がいつから始まって終わったのか、各製作跡の実態はまだ明らかになっていない。また、列島最大の「滑石製石鍋生産遺跡」が列島最西端の西彼杵・野母半島にあること、そこで生産された滑石製石鍋がブランドとして、広汎に流通して日本国内を席卷していた事実が、県民にまったく知られていないこと、それがいちばんの問題であろう。

上述してきたように西彼杵半島と野母半島における「滑石製石鍋生産遺跡」は、長崎県にとって極めて重要な遺跡群である。また、未周知の滑石製石鍋製作遺跡が発見される可能性もある。現状では、山中にある未周知の遺跡に対しては、各種の開発計画から守る方法がない。平成の大合併によって町がまとめられ、滑石製石鍋製作所遺跡は西海市と長崎市の二市に分布することになった。

長崎県文化課（学芸文化課）では、これまで「県内古墳詳細分布調査」（藤田 1992）、「長崎県中近世城館跡分布調査」（寺田ほか 2010・2011）をおこなった実績がある。今後は、「石鍋記録会」の調査成果も踏まえ、行政的な手立てのなかで、年次計画的に「詳細調査」と「総合調査」をおこなっていくことは急務な課題ではないだろうか。「滑石製石鍋生産遺跡」を総合的にとらえていくためには、直接石鍋を切りだした工房である滑石製石鍋製作所遺跡だけでなく、滑石製石鍋を成形・仕上げたことが推測される河口にある集落も調査対象に含め、「滑石製石鍋生産遺跡」として併せた総合的な学術的調査をおこなっていく必要がある。

「滑石製石鍋生産遺跡」の保存・活用については、滑石製石鍋を切りだした工房が山中にあるので、その場所に行きづらいという難点がある。私も、長崎の滑石製石鍋製作所遺跡を案内してくれと県外の友人に頼まれ、西海市のホゲット石鍋製作所遺跡（国史跡）へ向かったのであるが、雨がひどくなって足場が悪くなり現地へいくことをあきらめ、外海町の神浦川沿いにある鷹ノ巣岩石鍋製作所遺跡へ案内したことがある。

滑石製石鍋が日本国内を席卷した「長崎ブランド品」であったことを知っていただき、行きづらい山中にある遺跡を見ていただくためには、多くの方々の知恵を集めて議論を重ねて保存活用を図る方法を模索していく必要があると思われる。

余談ではあるが、石鍋を新たに製作して、五島灘の魚介類、いのしし肉、野菜などからめた鍋料理などの地元素材の食によって「地域おこし」を図るなどの工夫もあってよいのではないのだろうか。

### 3. 近世遺跡—近世城郭・城下町と長崎遺跡群—

平成10年（1998）9月29日付け文化庁次長から都道府県教育長あて通知「埋蔵文化財の保護と発掘調査の円滑化等について」、という文化庁からだされた文書がある。「4 埋蔵文化財包蔵地の把握と周知について」という項のなかには、「(1) 埋蔵文化財として扱うべき遺跡の範囲」という節があり、そこに大まかな時代ごとの遺跡として扱える範囲・基準が箇条書きで記されている。

- ①おおもむね中世までに属する遺跡は、原則として対象とすること。
- ②近世に属する遺跡については、地域において必要なものを対象とすることができること。
- ③近現代の遺跡については、地域において特に重要なものを対象とすることができること。

これは、埋蔵文化財として取り扱える遺跡を各時代に分けて、文化庁がはじめて示したガイドラインである。このことによって、ここで取りあげようとする「近世遺跡」について保護するためには、「地域において必要なもの」という条件が付与されることになったのである。

#### (1) 近世城郭と城下町

江戸時代の長崎県地域では、対馬、平戸、大村、五島、島原の各藩と佐賀藩諫早領・神代領・深堀領などにわかれ、天領としての長崎が長崎奉行の支配下にあった。したがって、対馬、平戸、大村、五島、島原の各藩には政庁としての近世城郭があり、佐賀藩の諫早領・神代領・深堀領には陣屋が設けられ、天領である長崎には奉行所が置かれていた。

近世城郭は、対馬市に宗氏の居城である金石城跡（1528年～1678年）と棧原城跡（1678年～）、平戸市に松浦氏の平戸城跡（亀岡城跡）、大村市に大村氏の玖島城跡、五島市に五島氏の石田城跡（福江城跡）、島原市に松倉氏・松平氏らの島原城跡（森岳城跡）がある。それぞれの城郭は埋蔵文化財包蔵地として保護の対象になっているが、そのうち国史跡に指定されているのは1995年に指定された金石城跡だけである。

対馬市の棧原城跡は、石垣などが残り、市指定文化財になっているが、陸上自衛隊対馬駐屯地がおかれている。平戸市の平戸城跡は、1963年にコンクリート造の天守閣が建設された観光地になっており、城域には亀岡神社、平戸護国神社、県立猶興館高校、市立図書館、地域福祉センターなどの施設がある。

大村市の玖島城跡は大村公園となっており、堀に花菖蒲園が設けられ、オオムラザクラの花見とともに市民の憩いの場となっている。板敷櫓が再建されており、天丸には大村神社と社務所がある。大村神社のオオムラザクラが国指定の天然記念物、玖島城に附属したお船蔵跡が県指定になっている。

五島市の石田城は、江戸時代の最後に築かれた近世城郭であり、本丸と二の丸には堀がめぐらされている。二の丸の五島氏庭園は名勝の天然記念物で国指定であるが、本丸に五島高校、二の丸に福江文化会館・五島市図書館・城山神社などの施設がある。1966年に県指定文化財に指定されている。1995年から2000年にかけて県立五島高等学校の建て替え工事等によって学芸文化課によって発掘調査が実施されている。

島原市の島原城は、本丸・二の丸が堀に囲まれ、三の丸と石垣に囲まれた外郭が残っている。1964年にコンクリート造の天守閣が再建され、その後櫓などが再建されている。復元された天守閣は、キリシタン史料と藩政時代の史料を展示する歴史資料館となっている。二の丸には文化会館、三の丸には島原第一小学校と島原高校がある。2016年に本丸・二の丸などが県指定文化財に指定されている。

以上のように、長崎県内の近世城郭では、金石城跡だけが国指定史跡となっている。文化庁の調査官の指導では、近世城郭は基本的に国指定になるというのであるが、その条件が整っていないという



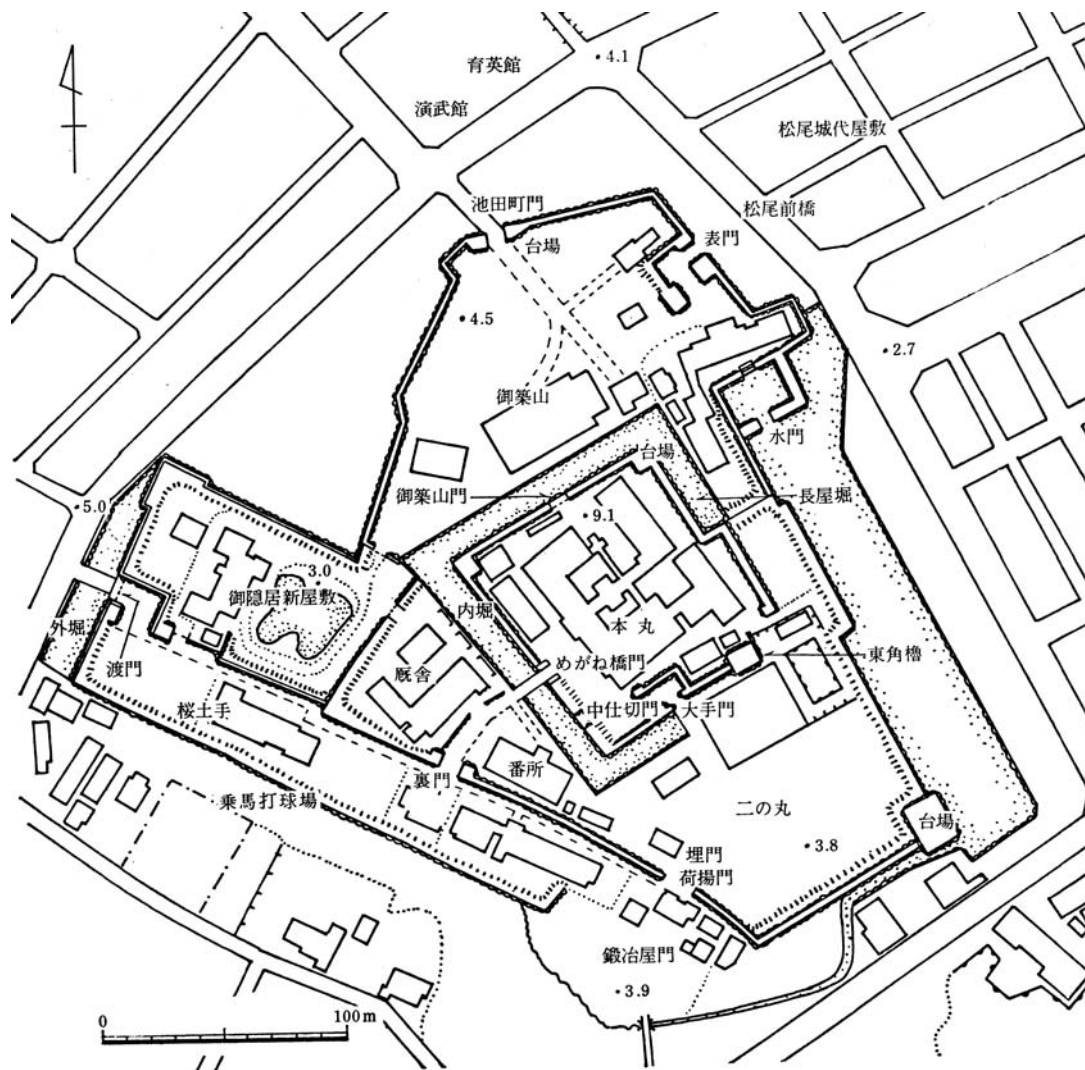


図6 石田城（福江城）要図（外山・高島忠平編 1980）

ことである。天守や櫓などを近代的工法で再建して観光地となっている平戸城と島原城があり、本丸・二の丸・三の丸には学校や市、自衛隊などの施設が存在していることがあげられる。文化庁の指定基準では、城域にある学校や市などの施設を本丸・二の丸などから移転することが要件となってくる。それらの施設を移転して国指定にもっていくには、たいへんな努力が必要ということである。

近世城郭とともに、城郭の外郭も含めた近世城下町の問題がある。島原城跡は外郭が埋蔵文化財包蔵地（遺跡）になっているが、城下町は武家屋敷など観光地になっている。対馬市の城下町では、家老屋敷跡の発掘調査が実施されているが、城下町自体は埋蔵文化財包蔵地にはなっていない。このように、県内にある近世城下町は、埋蔵文化財の保護の対象地域として扱われていない。城下町全体を遺跡にすれば、文化財部局が開発の確認、工事立会、発掘調査を継続しておこなっていかねばならず、専門職員の確保、文化財保護の組織、財源の確保など体制づくりが課題となるからである。

江戸時代の藩としてまとまった地域の中心地であった近世城郭は、歴史的・文化的景観のシンボル、ランドマークになっている。その歴史性は、城下町の住民にとって、自らのアイデンティティを証明する誇りである。城と城下町をもつ各市には、歴史愛好者の団体である史談会などの歴史研究会があって、文献史を基にした研究などがおこなわれているようだが、いまひとつ盛り上がっていないように思える。



図7 島原城と外郭部 (土橋 2001)

城の石垣や堀、武家屋敷などの残った遺産は、近世城郭と城下町として捉えられる。地表に表われている城の石垣や堀は、確かに江戸時代の所産であるが、地中には「歴史の地層」ともいえる「基層文化」（埋蔵文化財）が埋もれているのである。城の歴史を中心とした郷土史研究がいまひとつ盛りあがらないのは、私は考古学による発掘調査がおこなわれていないからではないかではないかと考える。住民らは、自らの暮らしや文化の基礎になっているものが地中に埋もれていることを知らずに、自分たちと密接につながっている歴史の厚みや、城下町としての故郷の魅力を実感できずにいるのではないだろうか。

近世城郭のある場所は、各藩の中心的拠点であり、文献史料、絵図面などの歴史資料が多く残っている。その文献史学の成果を活用して、文献史、考古学ほかの専門家の意見をいただきながら発掘調査をおこなえば、新たな歴史的事実が発見され、近世考古学の学術研究の進展に寄与するだけでなく、市民・住民の知見も広がっていくことになるであろう。発掘成果は、市民・住民たちに刺激を与え、自らのアイデンティティとして歴史に興味と関心をもってもらえるのではないかと思う。

城下町などで発掘によって掘り出された新しい歴史の成果は、地元で公表・周知されるばかりでなく、内外に発信されることで、新しい魅力発見が発掘され「地域おこし」に結びついてくるであろう。また、青少年が自分たちの故郷の歴史を知ることによって、将来を担う人材育成につながっていくのではないだろうか。だが、教育委員会の担当部局だけで、「地域おこし」まで含めた文化財の活用をおこなっていくのは、事務分掌、ノウハウ面からも難しく、市長部局との連携したプロジェクトチームの体制づくりが必要になってくると思われる。

本来、近世城郭と城下町は一体的に成立したものであり、別々に語るべきものではない。発掘でほりだされる遺物や遺構は、城下町に暮らした過去の人びとの生活・文化・歴史を物語る財産（たから）である。この潜在的資産を、「地域おこし」の戦略的資産として活用すべきと考える。

## (2) 長崎遺跡群

筆者と長崎市にある万才町遺跡の発掘現場を共に担当した川口洋平は、長崎市内の個々の近世遺跡の調査成果をミクロに見るのではなく、「港市長崎を形成した個々の場や機能の集合体」として体系的にマクロな視点で把握する「長崎遺跡群」を提唱して、西欧・中国に開かれた国際貿易港である「港市長崎」の状況を考古学的方法によって把握しようと試みている（川口 2000 ほか）。

戦国時代末期の1571年に大村純忠が町建てをおこなった「六町」と岬の教会の建設が都市長崎のはじまりである。江戸時代の鎖国時代には、西欧・中国に開かれた貿易都市として、長崎旧町80町までひろがった。明治以降は、長崎旧町が基礎となって、県の行政と経済の県都として発展した。昨今、長崎市内の中心部では、コンクリートビルの建物へと再開発が進んでいる。

近世の遺跡は、文化庁の基準では、「地域において必要なものを対象とする」ということになっている。そこで、たいへん苦労しながら取り組んでいるのが、長崎市の文化財部局である。「近世長崎」の町が、市街地と重なっているからである。

ビルなどの開発が申請されれば、まず開発地点の試掘を文化財側の予算で実施する。そして遺構等が確認されれば、まず遺跡としての登録手続きをおこなう。そして、その地点の開発を前提にした発掘（記録保存調査）をおこなうには、個人住宅には国庫補助事業による費用の負担があるが、民間のビル建設など場合には開発業者に埋蔵文化財の保護について説明して理解していただき、原因者負担の原則で発掘費用をお願いしなければならないのである。



図8 江戸時代後期の長崎（長崎市役所編 1903）

出島和蘭商館跡の整備は、オランダ政府と日本政府の戦後賠償の約束を受けてはじまったのである。出島の範囲確認の試掘調査が1984年に開始され、出島整備にともなう発掘調査の成果については、長崎市の山口美由紀によってまとめられている（山口 2008・2016・2019）。商館時代の建物が復元され、出島は観光地として賑わいをみせている。その輝かしい成果がみられる一方で、市内の近世遺跡を発掘する担当者は公的施設のみならず民間開発との調整と調査に追われている現状がある。

長崎市内の近世長崎の発掘調査は、1990年代から長崎市の永松実らが中心となって発掘調査が実施されるようになった（永松 1996）。また、近世都市長崎を「長崎遺跡群」として捉えていく研究は、川口洋平が先鞭をつけたが、最近、田中学が長崎に置かれていた藩屋敷の調査研究を発表するなどの成果がみられてきている（田中 2019）。

また、出島とともに鎖国時代の長崎貿易の居留施設として重要なのが唐人屋敷跡である。1689年に

完成して市中に來泊していた唐人たちを収容した場所である。唐人屋敷については、長崎市の宮下雅史（宮下 2012）・扇浦正義（扇浦 2014・2019）らの陶磁器を中心とした研究があったが、最近、大阪市文化財協会の小田木富慈美によって唐人屋敷の検討がおこなわれている（小田木 2019）。このように、田中・小田木らによって「長崎遺跡群」の調査研究の新しい成果が表れてきている。今後の研究の進展に期待したい。

筆者は、2019年11月17日に開催された県庁跡地遺構を考える会のシンポジウム「長崎の記憶をほりおこす」で、四半世紀以前に発掘した万才町遺跡の成果について発表させていただいた。万才町遺跡は、最初に町建てされた「六町」のひとつ大村町に所在している。県庁新別館の建て替え工事にともなって発掘調査をおこなうことになったのであるが、事務をおこなうために立山町にあった文化課立山分室から県庁第一別館の文化課と往き来していた官庁街の足下の地下に、江戸時代の長崎の歴史が埋もれているという事実衝撃を受けた。そのことが、長崎を考えていく原点になっている。

シンポジウムの発表を要約すると、長崎の「異国情緒」をかもしだす洋館、石畳、唐寺、孔子廟などの遺産は、寺の建物や石垣の一部をのぞけば幕末から明治をさかのぼらず、幕末以前の歴史は私たちの足下に埋もれていることに気づいたのである。その歴史の地層を長崎の「基層文化」と呼ぶことができれば、私たちが眺めている地表に遺った遺産や風景、そしてまつり、食文化などは長崎の「表層文化」として捉えられてくる。「長崎文化」とは、地中に埋もれた「基層文化」と日常の暮らしのなかにある「表層文化」とが重なり合って二重構造になったものではないかということである。長崎の魅力とは、長崎には「基層文化」があって、地表に表れている「表層文化」とのつながりではないだろうか。長崎の「基層文化」である地中の遺跡や発掘された出土品は、過去の人たちが残してくれた財物（たからもの＝埋蔵文化財）であり、この潜在的資産を活用していくべきであろう（宮崎 2020）。

長崎県庁跡地は、いま、遺跡の取り扱いについて問題が提起されている。この場所は、日本最大のキリスト教会があって日本布教の拠点となっていた。その後は、江戸幕府の鎖国政策のなかで長崎奉行所が設けられ、天領長崎の支配のみならず、貿易・外交・防衛を日本の最前線で担う政治的拠点であった。稲富裕和は、ここは古代の大宰府に相当する機関（政庁）であり、またキリスト教関連資産と近代化遺産の二つの世界遺産の原点となった重要な場所であると指摘する（稲富 2020）。この長崎県庁跡地の保存と活用については、歴史的文化的な景観のうえからも国指定史跡の出島和蘭商館跡と一体となった保存活用策を模索していくべきではないかと思料する。

#### 【謝 辞】

『西海考古』に2本の論稿の掲載を許された編集者の古門雅高氏に感謝申し上げます。

これからも開かれた研究発表の場として、『西海考古』が一層発展されることを願います。

#### 【引用・参考文献】

- 稲富裕和 2020「長崎の記憶を守る」『長崎の岬Ⅱ－長崎の記憶をほりおこす』長崎文献社  
扇浦正義 2014「唐人屋敷建設期の貿易陶磁」『中近世陶磁器の考古学』第4巻 雄山閣  
扇浦正義 2019「唐人屋敷建設後の貿易陶磁」『中近世陶磁器の考古学』第10巻 雄山閣  
小田木富慈美 2019「長崎市唐人屋敷2012年度調査における出土資料についての再検討」『九州考古学』第94号 九州考古学会  
片峰 茂監修 2019『長崎の岬－日本と世界はここで交わった』長崎文献社  
片峰 茂監修 2020『長崎の岬Ⅱ－長崎の記憶をほりおこす』長崎文献社  
川口洋平 2000「一括資料からみた長崎遺跡群」『西海考古』第2号 西海考古同人会  
川口洋平 2007『世界航路へ誘う港市 長崎・平戸』新泉社

- 杉原敦史 2012「古代における彼杵郡と松浦郡の郡境について」『西海考古』第8号 西海考古同人会
- 田中史生 2009『越境の日本史』ちくま新書・筑摩書店
- 田中 学 2019「長崎の蔵屋敷跡の発掘調査と成果について」『対外交渉の窓口 長崎・出島』令和元年度長崎県考古学会秋期大会資料 長崎県考古学会
- 寺田正剛・川淵雅行 2010『長崎県中近世城館跡分布調査報告書1』長崎県文化財調査報告書第206集 長崎県教育委員会
- 寺田正剛・林隆広・宮武直人 2011『長崎県中近世城館跡分布調査報告書2』長崎県文化財調査報告書第207集 長崎県教育委員会
- 土橋啓介 2001「島原城外郭遺構について」『西海考古』第3号 西海考古同人会
- 徳永貞紹 2010「初期滑石製石鍋考」『先史学・考古学論究』V 龍田考古会
- 外山幹夫・高島忠平編 1980『日本城郭大系』17 長崎・佐賀 新人物往来社
- 永松 実 1996「長崎と出島」「長崎の歴史と考古学」『掘り出された都市』東京都江戸東京博物館
- 藤田和裕編 1992『県内古墳詳細分布調査報告書』長崎県文化財調査報告書第106集 長崎県教育委員会
- 本田秀樹ほか 2001『西海考古』第3号 長崎県の城郭・城館特集号 西海考古同人会
- 松尾秀昭 2016「縦耳付石鍋の生産と流通」『9～11世紀における大村湾海域の展開』長崎県考古学会
- 松尾秀昭 2017『石鍋が語る中世 ホゲット石鍋製作遺跡』新泉社
- 宮崎貴夫 2019『長崎地域の考古学研究』（自費出版）
- 宮崎貴夫 2019「万才町遺跡から見えてきたこと」『長崎の記憶をほりおこす』長崎県庁跡地遺構を考える会
- 宮崎貴夫 2020「万才町遺跡から見えてきたこと」『長崎の岬Ⅱ－長崎の記憶をほりおこす』長崎文献社
- 宮下雅史 2012「唐人屋敷出土の清朝陶磁」『西海考古』第8号 西海考古同人会
- 山口美由紀 2008『長崎出島』日本の遺跡28 同成社
- 山口美由紀 2016『旅する出島』長崎文献社
- 山口美由紀 2019「国史跡『出島阿蘭陀商館跡』」『対外交渉の窓口 出島・長崎』令和元年度長崎県考古学会秋期大会 長崎県考古学会

#### 【引用図版出典】

- 図1 森 克己・沼田次郎編 1978『対外交渉史』体系日本史叢書5 山川出版社
- 図2 瀬野精一郎 1972『長崎県の歴史』山川出版社
- 図3・5 宮崎貴夫 2019『長崎地域の考古学研究』（自費出版）
- 図4 松尾秀昭 2016「縦耳付石鍋の生産と流通」『9～11世紀における大村湾海域の展開』長崎県考古学会
- 図6 外山幹夫・高島忠平編 1980『日本城郭大系』17 長崎・佐賀 新人物往来社
- 図7 土橋啓介 2001「島原城外郭遺構について」『西海考古』第3号 西海考古同人会
- 図8 長崎市役所編 1903「長崎図」『幕藩時代の長崎』（長崎市役所編 1973『幕藩時代の長崎』臨川書店

## 西海考古同人会ホームページのご案内

<http://saikaikouko.jp>

# 西海考古

新着情報 2020年10月21日

『西海考古』第9号,10号のDL

既刊号目次



**お知らせ** 引っ越ししてきました。西海考古同人会のホームページです。

西海考古同人会は、長崎県の考古学研究を目的に県内の文化財担当者有志と考古学愛好者が集う名も無い勉強会からスタートしました。

その後、通信紙『西海ニュース』の発行を経て、1999年4月に『西海考古』を創刊し、2018年10月には第10号を刊行して現在に至っています。

# 【研究ノート】 西北九州における弥生時代開始期墓制について

大庭 孝夫

## はじめに

弥生時代の開始にあたり、日本列島（以下「列島と略」）は、水稻農耕に代表される朝鮮半島（以下「半島」と略）の無文土器文化を選択的に受容することで弥生文化が成立するが、その受容した新たな文化要素の一つとして、支石墓などの墓制及び葬送儀礼があり、その内容から社会構成や社会観念なども大きな変化が生じたと考えられている。

この列島の支石墓は半島の起源地の形態をそのまま完全にみせるのではなく、北部九州に出現した時点ですでに在地的（縄文的）要素を含んだ変容した姿で築造されたとされる（平郡 2018）。

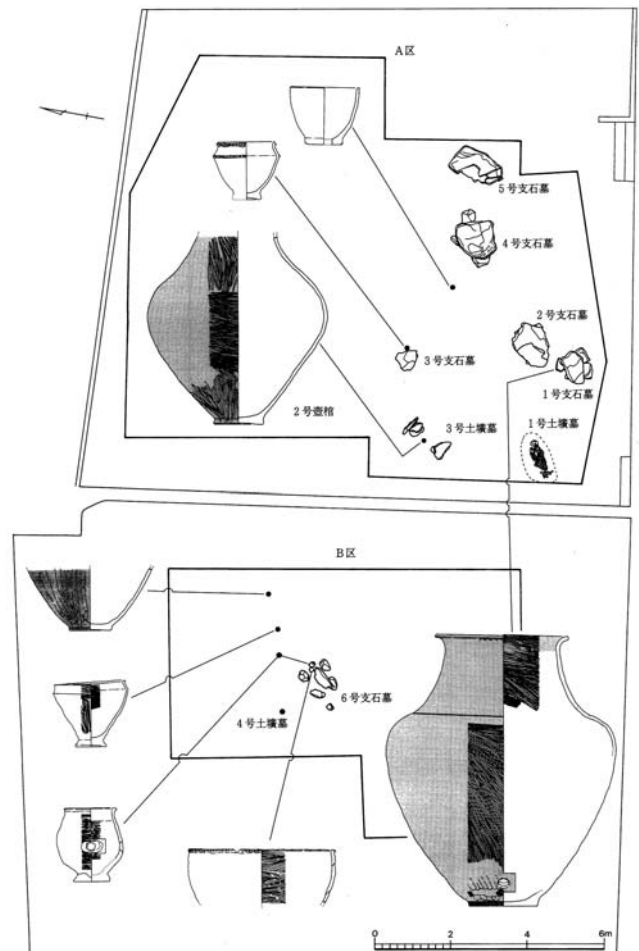
このように、半島無文土器文化に系譜が求められる支石墓は、墓制という保守的な性格上、弥生文化の成立に関与したとされる渡来人の故地と列島内の到達地を推定する上で重要な要素とみなされたことから（端野 2018）、研究者の関心が高く、これまで多くの先行研究がある。特に近年、端野晋平氏（端野 2018 他）・中村大介氏（中村 2016 他）による弥生時代開始期の半島と列島における墓制を中心とした様々な文化要素の比較研究によって、半島と列島における墓制の系譜や伝播経路、副葬・供献土器の在り方など、当該期における半島と列島との交流の具体像に迫る、より踏み込んだ議論が行われている。さらに、西北九州の五島列島、北松浦半島、西彼杵半島、長崎半島、島原半島を包括する現在の長崎県域（以下「本地域」と略）についても、宮崎貴夫氏による総括的な検討が行われている（宮崎 2018・2019）。

筆者も以前、北部九州における縄文時代晩期～弥生時代前期の墓制（大庭 2000）及び本地域における石棺墓について検討したことがあるが（大庭 2003）、先の端野・中村氏を中心とする近年の優れた研究成果を踏まえて、再度本地域における弥生時代開始期墓制で、現在のところ筆者が考えるいくつかの課題について、私見を述べさせていただく。

## 1. 本地域における支石墓の立地の特徴について

### (1) 宮崎貴夫氏による支石墓の立地分類にみる特徴

本地域の支石墓の特徴の一つとして、水稻農耕の伝播と結びついた支石墓が、本地域南部の風観岳支石墓群及び原山支石墓群のように水稻農耕による一定規模での生産活動が難しい、標



第1図 A類型の宇久松原遺跡遺構配置図 (1/200)



高200mを超える高位丘陵に立地すること、また半島からの伝播経路にあると推測される対馬・壱岐に支石墓は存在しないという問題がある。そこで、ここでは宮崎貴夫氏による当該期の墓地の立地分類（宮崎 2018・2019）に基づいた支石墓の立地に関する検討に加え、対馬・壱岐に支石墓が存在しないこと、この2点について考えてみたい。

宮崎氏は、本地域の支石墓の立地について、A：海浜部の低地砂丘（宇久松原遺跡）、B：谷底平野や沖積地を臨む低丘陵上（里田原遺跡、大野台遺跡、小川内支石墓群、狸山支石墓、四反田遺跡）、C：海を臨む標高10～60mほどの低・中丘陵上（天久保遺跡、西鬼塚支石墓・石棺群、井崎支石墓）、D：標高200mを超える高位丘陵上（風観岳支石墓群、原山支石墓群）という4類型を設定し、その在り方について論じている（宮崎 2018・2019）。なお、宮崎氏はC類型について、水稻農耕不適地かつ海を臨み、漁労活動を生業活動の一つとして営んだとみられることから、B類型から分離させたと想定されるが、C類型では天久保遺跡で小規模な貝塚が発見されている以外は、BC類型とも墓地に伴う居住域及び生産活動については、少し時期が新しい板付Ⅱa式段階の四反田遺跡以外はほとんど明らかになっていないため、ここではBC類型として一括して扱う。

## (2) 低地砂丘のA類型と丘陵上のBC類型について

A類型は、寒冷化に伴う海退現象により、発達した砂丘上に墓地が営まれたものである。唐津地域では大友遺跡、糸島地域では新町遺跡、支石墓ではないが博多湾沿岸地域では今宿遺跡、藤崎遺跡など、玄界灘沿岸地域の弥生時代早期～前期の墓地立地で比較的多くみられる。本地域で唯一このタイプの宇久松原遺跡は、埋葬主体が石棺でなく土壙で、乳幼児用の大型丹塗磨研壺の使用とその壺自体の形態などから（第1図）、海を介した玄界灘沿岸地域との直接的な交流による墓制及び葬送儀礼などの導入が予想される。ただし宇久松原遺跡のすぐ背後は丘陵であることから、砂丘の後背湿地での水稻農耕は難しく、豊富な地下水による小規模な谷水田の水稻農耕が伴っていた可能性を考えている。

唐津地域の大友遺跡の周辺も水稻農耕適地が少なく、そこを目指して渡来人が移住することが少ないとみられるにも関わらず、かなり改変が加えられているが支石墓という墓制を採用する背景として、端野晋平氏は漁民(海人)



第2図 BC類型の遺跡立地  
(1/25,000, 電子地形図25000を一部改変して作図)

の交流等により縄文時代晩期中葉以前、半島から唐津地域への半島無文土器文化の情報の蓄積が基礎となって、先進文化である半島無文土器文化のあこがれと、支石墓がない福岡平野の住民とは異なるアイデンティティを表現したいという欲求が高まり、これらが結果として支石墓の導入に踏み切らせたと理解する（端野 2018）。

B類型の里田原遺跡では、夜臼 I 式段階から水稲農耕が営まれた可能性があり、加えて弥生時代前期末～中期初頭の高鈕細文鏡を副葬する甕棺墓の存在から、弥生時代前半段階においては玄界灘沿岸地域からの強い影響が予想される。またB類型の小川内支石墓群や大野台遺跡、狸山支石墓及びC類型の天久保遺跡や西鬼塚支石墓・石棺群では、支石墓が存在する丘陵下の谷底平野で谷水田が営まれた可能性があり（宮崎 2019）、BC類型の墓地を営んだ集団は主な生業として水稲農耕を営んでいたと理解したい。なお、水稲農耕は溝（水路）の掘削、畦畔の構築や土地造成など、自然地形を変える土木工事が必要で、それらの技術を携えた人自身が移動してきた可能性があり、その技術を保持した人が支石墓に埋葬された可能性がある。

### (3) なぜ支石墓は山に上がったか、D類型について

D類型の風観岳支石墓群では、礫石原式・黒川式併行の I 期、夜臼 I 式併行の II 期については、当初居住域として利活用され、II 期から墓域としての利用が始まると報告されている（秀島 2006）。密集度の高い墓地構成と前段階における居住域が存在するとの指摘から、II 期段階では墓域周辺に明確に空間が分かれた同時期の居住域が存在することが予想される。また打製石斧、多量の石鏃類の出土などから、黒川式併行段階まで狩猟や畑地を営んでいた在地の「狩猟・栽培民」が、水稲農耕技術を携えた支石墓集団を排他することなく入植地を提供するが、在地の「狩猟・栽培民」は支石墓を墓制として受容することはなかったとの指摘がある（宮崎 2018）。この考えは、風観岳支石墓群や原山支石墓群の周辺を生産域、集落として新たに入植・開発したのであれば、磨製石斧など伐採斧が多く出土するはずであるが、風観岳支石墓群では磨製石斧・打製石斧も量的に顕著でないことが、このような理解になったと思われる。

また原山支石墓群において、近くの諏訪池の地形を利用した谷水田の存在が想定されているが（宮崎 2018）、柱状片刃石斧や扁平片刃石斧という木製農耕具の加工具な



第3図 D類型の遺跡立地  
(1/25,000, 電子地形図25000を一部改変して作図)

どの出土が認められず、石庖丁以外は打製石斧などの従来の土堀具であると予想されることから、高位丘陵上で水稲農耕が実際行えたかどうか、疑問が残る。

このため、この高位丘陵上では、水稲農耕以外の栽培植物による生産活動の存在を考える必要がある。その際、弥生時代の栽培植物はイネ以外に多数存在し、それぞれの場面で必要な技術を使い分けることで多様な農耕生産活動の一端を担っていたという意見（山崎他 2014）や近年レプリカ法により北部九州以外ではアワ・キビ栽培が水稲農耕に先行して始まったという成果は重要と思われる。

具体的には弥生時代開始に伴い、縄文時代からのアズキやダイズの栽培や堅果類の採集活動など（山崎他 2014）に加えて、半島から水稲農耕に伴って伝播したアワ・キビ・ヒエ・オオムギという雑穀類などの畑作技術を中心とする新たな生産様式を携えた人々が、在地集団と接触する中で、既存の生産活動の中に新たな生産様式が加わり、発達・展開していったことを想定したい。宮崎氏も本地域では水稲農耕とアワ・キビなどの複合的農耕技術の存在を示唆している（宮崎 2019）。この新たな畑作技術の内容は、縄文系譜の栽培植物の利用段階では厳密に区画されていなかったことが推定される耕作地から作物を作りやすくするための区画や土地造成、安定的な収穫を行うためには水が求められ、水を確保するための水路や溜井、水はけをよくする工夫や技術、連作障害を防ぐ技術や新たな施肥技術など、複数の世帯での共同作業が必要な規模の新たな畑作技術であった可能性がある。このことで集団による土地開発が進み、その結果、大規模な集団墓地が営まれた可能性があるだろう。

なお、この高位丘陵上の遺跡は前期前半で衰退するが、水田可耕地が乏しい土地条件では水稲農耕への移行は困難であり、支石墓を造営した集団社会が一端、崩壊したとの指摘がある（宮崎 2019）。加えて、畑作は連作障害もあることから、広い耕地が必要なわりに収穫量が低く、水稲農耕に比べ導入メリットは低いこと、半島から伝播した水稲+畑作の複合的農耕技術については当時の列島の気候・自然条件は水稲稲作の展開に適したものであり、施肥技術が充分でない段階では畑作の発展的展開には向かなかつたという意見（安藤 2009）などが、遺跡が衰退する原因の一つであったとみられる。ただし、水稲農耕も現在とは異なり相当程度の「休耕」が必要で、畑作と稲作の輪作が行なわれていた可能性があることは注意すべきである。

端野氏は、水稲農耕を受容した列島側の要因として、①既存の食糧獲得システムとの適合、②水稲農耕適地の形成、③水稲農耕文化とその文化への期待を挙げる（端野 2018）。①は既存の生業やそれを維持した社会秩序などに大幅な改変を迫ることなく、労働編成を再編成することが比較的容易であったことは、先の高位丘陵の状況をみると整合的である。②は気候の寒冷化に伴い、沖積低地や砂丘背後に後背湿地が形成されるなど、水稲農耕の適地が形成されたことを指す。これはA類型がそれにあたる。③は本格的な水稲農耕開始前の黒川式併行期に、半島の無文土器文化に関する情報の流入があり、その蓄積によって水稲農耕や新たな畑作技術を含む文化に対する期待が高まり、これが後の稲作農耕の導入につながったと理解される。よって、風観岳支石墓群及び原山支石墓群が立地する高位丘陵上は、①・③の条件が適合したため、支石墓という墓制を導入したといえよう。

今後、高位丘陵上の遺跡の生産域、集落に対する発掘調査が進むことで、畑作の有無やその内容と在り方について明らかになり、課題が解決することが期待される。

#### (4) 対馬・壱岐になぜ支石墓はないのか

対馬では当該期の箱式石棺墓は存在するが、支石墓はない。壱岐も同様である。端野氏は、半島と列島との交流は、対馬・壱岐ルートを経由した可能性が高いとする。その上で、弥生時代開始期の対馬では、夜臼式土器と孔列土器・丹塗磨研土器の出土など、半島・列島間をつなぐ遺物の出土は認められるが、当該期の居住痕跡は確認されていない。このことから、そこでの長期間の滞在を経ない、

九州へ到達するための航海上の中継地点としての性格が強いとされた。その背景として、両島とも水稻農耕適地が少なく、半島南部から列島に渡来してきた水稻農耕民が積極的に居住をしなかったため、支石墓は営まられなかったと推測する（端野 2018）。

時代は下るが、3世紀の『魏志』倭人伝では、対馬には良田はなく、壱岐には水田や畑が少しあるものの、農耕だけでは食料には足りないとされることから、端野氏が指摘するように、対馬・壱岐では当初水稻農耕が定着しなかった可能性が考えられる。しかし、先の(3)でみたように、高位丘陵上の風観岳支石墓群や原山支石墓群では必ずしも水稻農耕を伴ったとは考え難いことから、端野氏が指摘する居住に伴う生活様式や習俗の定着、つまり対馬・壱岐にも、支石墓を含む無文土器文化情報は伝わっていたが、渡来人の定着がなかったため、支石墓を受容し、造営することはなかったと考えられるのではないかと推測できる。つまり、人の定着なくしては墓制や習俗は定着しないことを示していると推測できる。なお、このことは、4の海人の在り方と深く関わるため、後ほど詳述したい。



第4図 小川内支石墓群遺構配置図 (1/200)

## 2. 墓地構成について

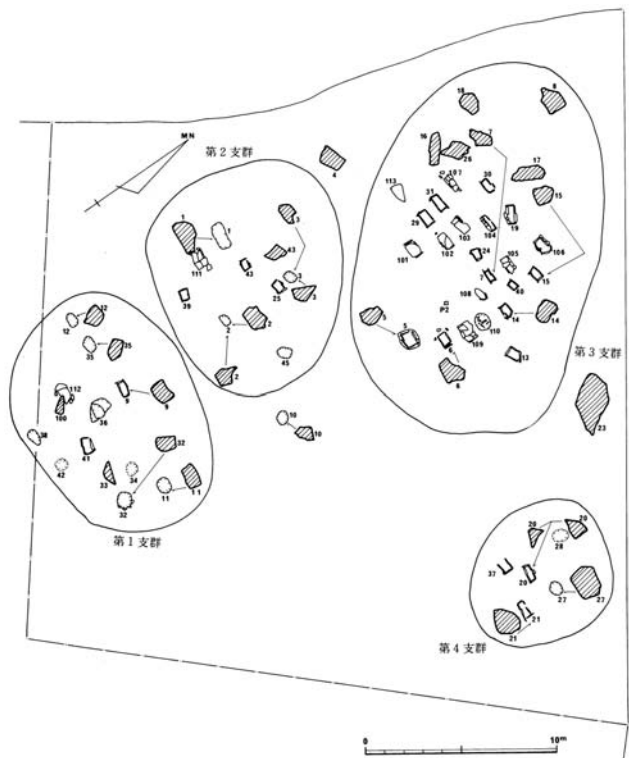
### (1) 墓地構成研究に係る近年の動向

弥生時代の開始にあたって埋葬施設が大きく変化するが、同時に居住域と墓域が分離し、半島から列状構成が導入されることで、集団内部の規制の強化が窺えるなど、墓地構成も大きな変化が生じた。

以前、筆者は弥生時代早期～前期における北部九州の墓地構成について、小川内支石墓群のような10基程度の墓地(第4図)と、原山支石墓群第3支石墓群のような数基～10基程度の小群が複数集まって大規模な墓地を構成する(第5図)という概ね2者に分かれることを指摘した(大庭 2000)。

また10基程度の4つの小群からなる原山支石墓群第3支石墓群において、小群ごとの土壌と石棺の比率が異なること、明確な小群間の空閑地の存在から、各小群の規制が強いものを第1タイプとし、このような墓地構成は縄文的であると推測した(第5図)(大庭 2000, p77)。

一方、各小群を超えた規制が強いものとして、列状をなす墓地を第2タイプとし、有茎式石剣や磨製石鏃などの副葬・供献品の在り方から、半島の影響のもと成立したものと想定した(第6図)(大庭 2001)。ただし、原山支石墓群第3支石墓群・大野台遺跡では小群を超え、全体的に主軸の方位を概ね揃える状況が認められることから(第5図)、第2タイプまではいかないものの、各支群を超えた緩やかな規制も存在することを指摘した(大庭 2003)。



第5図 原山支石墓群第3支石墓群遺構配置図(1/400)

さらに墓地内の成人棺と乳幼児・小児棺の在り方について、墓地内に成人棺とともに乳幼児・小児棺が規則なく配置されるAタイプ、成人棺と乳幼児・小児棺の墓域が明確に分かれるBタイプ（第6図）、成人棺と乳幼児・小児棺が近接し、セット関係をなし、中には成人棺と乳幼児・小児棺の関係が何らかの血縁関係を表現しているかのようなものをCタイプ（第6図）に分類した。本地域ではCタイプからなる墓地のみが分布し、縄文的規制が強く残ることを示唆した（大庭 2000）。

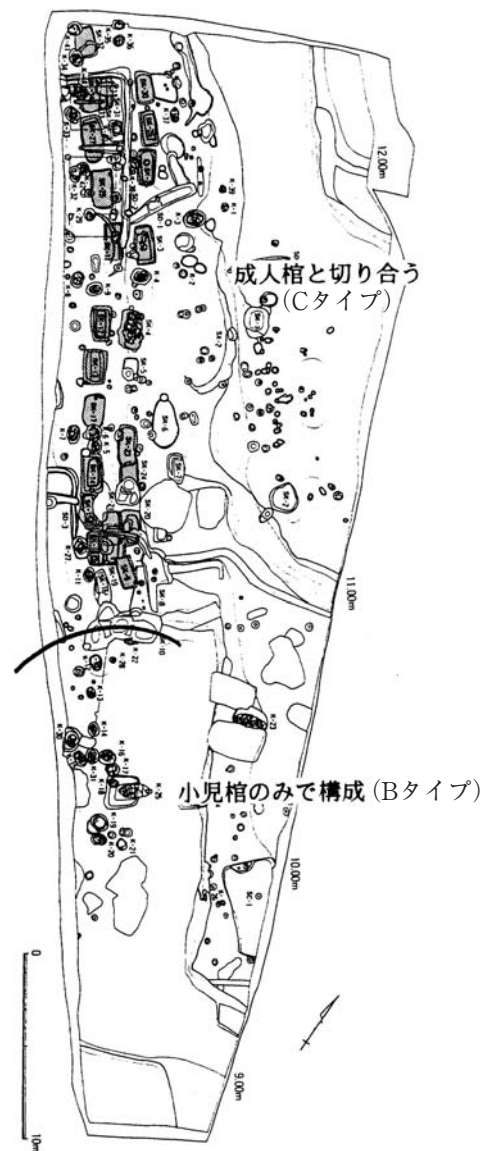
宮崎貴夫氏は本地域の墓地構成について、I型：10基前後からなる1群からなり世帯共同体による短期間の造営と想定されるもの、II型：数群の支群で構成されるものに分類した。さらにII型は墓地がある程度一定の距離に分散し、居住域と墓域がセット関係になると予想される「分散型」、各支群が近接した位置にまとまる共同墓地的な在り方を示す「集合型」に分け、「集合型」は墓地を近接することによって、集団としての精神的な一体感をもたせたと推測されるとする（宮崎 2019）。

近年、中村大介氏は墓地構成について、埋葬施設が環状に配置されたものを「環状構成」、列状であるものを「列状構成」、集塊状であるものを「塊状構成」とし、原山支石墓群第3支石墓群や狸山支石墓は縦列配置の列状構成、小川内支石墓群は塊状構成、大野台遺跡は列状構成と塊状構成の群が混在するとした。そのうち列状構成は半島に類例が認められることから、半島から導入された墓地構成であるとする（中村 2012）。

なお、本地域では石棺を埋葬主体とする支石墓だけで墓地を形成するものが多い。糸島地域では支石墓と土壙墓、木棺墓、甕棺墓が混ざった墓地や支石墓が単独で築造される。2者の地理的に中間的な位置である唐津地域では、割石石棺やそこから退化したものや石が完全に無くなった土壙などを埋葬主体とする支石墓だけで墓地を形成することから、埋葬施設は糸島地域、墓地構成は本地域に近い、地理的条件と同様、中間的な様相をもつとした（中村 2016）。

以上のことから、支石墓群の墓地構成にみられる地域性は、半島嶺南地域では支石墓を中心に石槨墓や石棺墓で墓地が構成され、一方、支石墓だけで構成された墓地がすべて湖南地域のものに由来するわけではないとするものの、湖南地域南部では支石墓のみで墓地が営まれることから、列島各地域の墓地構成においても、半島の多様な地域性が発現されているとした（中村 2016）。なお、宮本一夫氏は、塊状を呈する配置について、唐津地域の太友遺跡では当初築造の3基周辺に次第に墓が配置されることで、結果的に集塊状を呈したと理解する（宮本 2012, p170）。

宮地聡一郎氏は、縄文時代後期後半以降の墓域構成について、土坑墓及び埋設土器から構成される墓域は、居住域内もしくは居住域に近接する様々な祭祀関連遺物を含んだ遺物包含層を伴う「送り場」としての性格を有する場でもあったこと、その墓の配置は散在的で、墓域としては緩やかな認識であった。それが弥生時代になると、居住域と離



第6図 福岡市下月隈天神森遺跡3次調査遺構配置図(1/400)

れた場所に明確な墓地を形成し、乳幼児墓と成人墓にそれぞれ分かれて墓域を構成する傾向が強いこと、密集度を数値で比較した上で、弥生時代になると墓地内の密度も高くなることを指摘した（宮地 2018）。その変化の背景としては、縄文時代には世帯や小さな集団単位で執り行われていた墓の造営や葬送儀礼などが、弥生時代になると複数の集落からなる大きな集団単位で執り行われるようになった可能性があること、中村大介氏の意見を踏まえて（中村 2012, p455）、支石墓は構築の際人数を要することなど、墓の構築及び葬送儀礼が、縄文時代に比べて大きな集団の紐帯強化の役割を果たしたと理解した。加えて、弥生時代に始まる新たなイデオロギーの転換の事例として、本地域を例に挙げ、原山支石墓群など、必ずしも水稻農耕を伴ったと考えられない場所にも支石墓が明瞭にみられることについて、本地域では生業面での転換よりも墓制の転換、つまり精神面（イデオロギー）における転換の方が早く進行していた可能性を指摘した（宮地 2018）。

ちなみに端野晋平氏は、半島南部の墓地形態について、上石・埋葬施設の長軸方向を揃え、列状に配置されたものと直軸方向を揃えず集塊状・環状に配置されたものの2種類があり、分析を行ったが、有意な結果が得られなかったとしている（端野 2018）。

## (2) 墓地構成からみた在り方

以上の先行研究を踏まえると、筆者が縄文的としていた小群内の規制が強い墓地構成（第1タイプ）は、本地域では縄文時代晩期の墓制の詳細が不明であるものの、原山支石墓群第3支石墓群は中村氏分類の縦列密集の列状構成を示すことから（第5図）（中村 2012）、一概に縄文的とはいえ、中村氏が指摘するように支石墓という墓制とともに半島系要素の強い墓地構成と考えられる。また風観岳支石墓群など小群間の空闲地の存在や、石棺や土壙の比率が異なることなど、小群の存在も顕在化した状況の中で、原山支石墓群第3支石墓群は密集する墓地かつ全体的に方位を揃えるなど各小群を超えた規制も窺える。

また居住域と墓域の関係については、本地域では墓域と対応する居住域がほとんど分かっていないが、原山支石墓群・大野台遺跡等における支石墓の密集状況及び小川内支石墓群など独立丘陵上に群をなしている状況から考えると、基本的に墓域と居住域は明確に分離している可能性が高い。

さらに宮地氏らによる集団の紐帯強化を支石墓などの墓制及び葬送儀礼が担ったという指摘（宮地 2018）については、水田造成及び経営にあたり、集団内外の共同作業や調整が必須であったとみられること、時期は下るが甕棺墓が盛行する弥生時代中期、北部九州における甕棺墓の構築及び葬送儀礼が集団の紐帯強化の役割を担ったとみられることと時代は違えど調和的な意見である。

なお、精神面における変化が生業の変化よりも早く進行したという指摘（宮地 2018）については、集団の拡大や労働力編成という点では非常に重要であるが、先に詳述したように考古学的な証拠は少ないが、共同墓地を営んだ複数の集団による生業面・精神面の共同行為がなければ、精神面のみの変化で墓制及び葬送儀礼、墓地構成、居住域と墓地の分離などの大きな変化とそれが数世代継続することをうまく理解できないと考えられることから、精神面と同時に生業面も変化したのではないだろうか。新たな生業の開始に伴い、年間を通じた労働と行事のサイクル、いわゆる「農事歴」のようなものが生み出されたことが予測される。今後生業の変化を把握する詳細な調査研究が必要であろう。

また本地域では、宮崎氏作成の支石墓埋葬主体の石棺内寸による法量散布図（宮崎 2019）をみると、幅についてはほとんどが50 $\text{cm}$ 以上を測る。幅は被葬者の身体サイズ（肩幅）と強く相関するとの意見（端野 2015）から多くが成人棺ないしは小児棺と予想され、少なくとも乳幼児棺はない。各遺跡報告書などでサイズから小児棺と推定されているものは概ね小児棺であったとみられるが、その小児棺の割合は、玄界灘沿岸地域における乳幼児・小児棺である甕棺と成人棺の比率と比べ低い。加え

てBタイプとした成人棺と乳幼児・小児棺の墓域が明確に分かれるものではなく、本地域の多くがCタイプとした成人棺と乳幼児・小児棺が近接し、セット関係をなすものであるなど、墓地構成や墓制の在り方自体も玄界灘沿岸地域とは異なる部分も多い。

宮本一夫氏は、支石墓の構築に係る労働力について、大友遺跡支石墓の上石が1.5～2トンの以上の重量であることから、運搬・設置に際して成人4～6名は必要とし、造営にあたっては少なくとも2つ以上のリネージ単位による氏族共同作業であったとみられること、かつ支石墓各世代の全構成員が埋葬された墓地ではなく、各リネージの代表が各世代埋葬されたと想定した(宮本 2012)。しかし、筆者は本地域の支石墓における墓地構成や立地を考えると、集団の全構成員が支石墓に埋葬されたと考えている。ただし、玄界灘沿岸地域では長野宮ノ前遺跡支石墓のように、上石が墓地のシンボリックな在り方を示すことから、糸島地域と本地域とでは支石墓に対する意識が異なる可能性がある。

今後墓地にみられる社会構成の分析だけではなく、支石墓構築に対する地域間の意識や観念の相違も念頭に置き、検討する必要があるだろう。

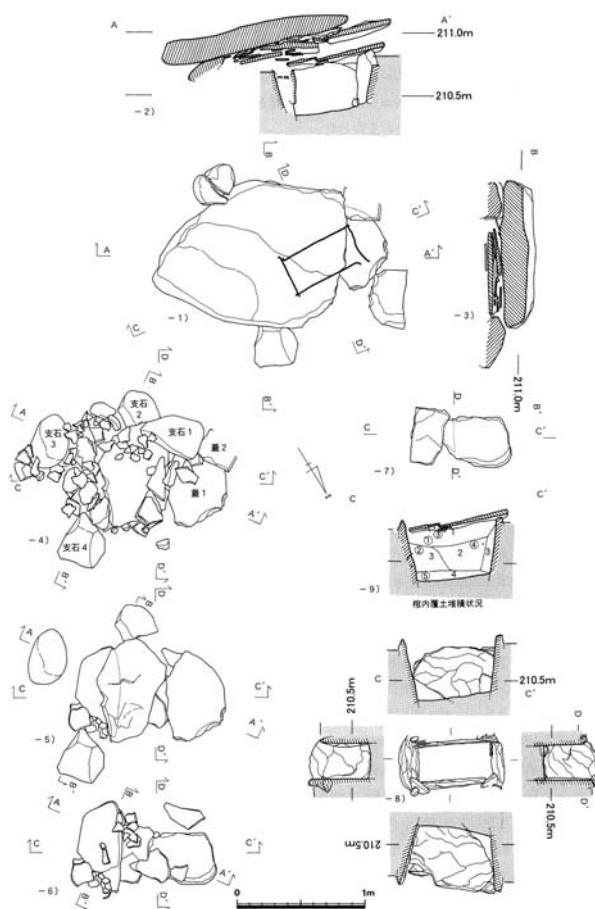
### 3. 石棺墓は変容したものか

#### (1) 箱式石棺墓の系譜

箱式石棺墓については、縄文時代の墓制に系譜が求められるものではなく、その系譜は夜臼I式併行段階、半島南部からの影響下に成立した支石墓埋葬主体である石槨施設(端野 2018 他)ないしは箱式石棺に求められる(宮本 2012 他)。なお、弥生時代早期～前期の箱式石棺は、山口県西部や玄界灘沿岸地域の一部を除き、その多くが支石墓埋葬主体の石棺としての在り方を示す。本地域における支石墓埋葬主体の石棺は、夜臼I式併行段階から小型方形を呈すること、支石墓ではないが小型方形を呈する出津遺跡の石棺墓から屈葬された壮年女性人骨が出土したことなどから、石棺内の基本的な葬法は屈葬で、縄文時代の葬制である屈葬の影響を受けて、半島の石棺墓の要素が変容したと考えられている。

この変容について、端野氏は支石墓が玄界灘沿岸地域から周辺地域への拡散する際の情報伝達の手段について、人骨にみられる渡来的形質は、水稲農耕適地である北部九州から適地が少ない西北九州へと至るルートで急激に失われることから、西北九州では支石墓を含む水稲農耕関連の文化的情報も変形あるいは欠落すると理解した(端野 2018)。

弥生時代前期前半になると、支石墓はほぼ造営されなくなる一方、石棺墓は支石墓埋葬主体の石棺から独立した箱式石棺墓となる。中期前半にかけて、箱式石棺墓のサイズが長大化することに伴い、棺の深さが浅くなるため、葬法も変化したと考えられる。その後箱式石棺墓は、中期後半以降、



第7図 風観岳支石墓群30号支石墓 (1/60)

北部九州から瀬戸内地域に分布域が拡大し、北部九州でも成人用甕棺墓が衰退する後期前半以降、主要な成人用墓制として営まれるが、本地域では弥生時代を通じて主体的な墓制として営まれる。

箱式石棺墓は弥生時代を通して土器を含む副葬・供献品が極めて少ないが、出現期にあたる支石墓埋葬主体の石棺には、半島系譜の土器副葬・供献行為の影響で比較的供献品が多く発見されている。宮本一夫氏は、出土遺物からみると本地域の支石墓を含む墓制は西北九州から島原半島への漸移的な伝播過程を示すことができなるとするなど（宮本 2012）、本地域では南北の時期差なく、ほぼ同時期に支石墓埋葬主体の石棺として造営が開始されたとみられる。

## (2) 石棺の形態

これまで支石墓埋葬主体の石棺を含む箱式石棺墓については、石棺のサイズ、石棺を構成する板石の組み方、墓壙の形態などによる検討が行われている（寺田 2005, 秀島編 2006, 宮崎 2019他）。

このうち、寺田正剛氏は、夜臼Ⅰ・Ⅱ式併行段階では石棺サイズの長短比率がほぼ同じ範囲に集まることから、比較的均一した形態の石棺が構築されているとした（寺田 2005）。宮本氏は石棺墓の一部は法量からみて小児用の石棺が含まれているとし（宮本 2012）、秀島貞康氏はサイズが小児棺と成人棺に二分化する傾向を示すのが、弥生時代中期前後とした（秀島編 2006, p184）。さらに秀島氏は風観岳支石墓群の小型石棺について、糸島地域の石崎曲り田遺跡支石墓の埋葬主体が小型の円形土壙で、その中から炭片、火を受けた人骨片が出土した事例（橋口 1983）を引用し、小型石棺は火葬による二次葬であるとした（秀島編 2006）。本地域の支石墓においては火葬の実体的な証拠はなく、加えて西北九州の縄文墓制に火葬が知られていないことから、石棺内の葬法は屈葬であるとの指摘（宮本 2012, p158）を踏まえると、基本的に火葬はなかったと考えたい。

なお、風観岳支石墓群30・31・35号支石墓埋葬主体の石棺は多数の板石で丁寧な蓋をしており密閉意識が強いこと、棺材の組み方も小口と側板との接合部に小さめの板材でおさえるなど、この時期の石棺としては非常に巧妙な作りをしたものがみられることは注目される（第7図）（寺田 2005）。

次に石棺棺材である板石の組み方については、端野氏は半島南部における石棺の組み合わせ法が、側板が小口板を挟み込むタイプが主体をなすとし（端野 2001）、宮本氏も本地域では小口板が側板を挟み込むタイプが主体をなし（第8図）、半島とは全く逆の構造であると指摘している（宮本 2012）。中村氏は、本地域の石棺は小口に側板を合わせた型式が多いこと、墓壙と棺との間の裏込め空間が極めて狭い点が半島とは異なると指摘した（中村 2016）。寺田氏は石棺の組み方について、弥生時代前期から中期にかけて、側板が小口板を挟み込む形式が増加する理由として、長くなった側板の外圧から棺材が内側に傾くことを防ぐ、技術的な進歩とする。また加工しやすい砂岩や結晶片岩など入手できる石材の種類により、石棺を構成する棺材の大きさや数などが異なるため、分類をする上で考慮すべきとしている（寺田 2005）。筆者も以前、支石墓埋葬主体の石棺を構成する板石の支え方に注目し、石棺小口板の掘り込みの有無で型式分類した。その上で、小口に掘り込みを持たないⅠ類石棺（第9図）を導入期の形態として推定し、概ね本地域北部から南部に展開していく様相を論じた。また墓地

類形	形状	大野台遺跡A地点	同 C地点	同 E地点	原山第3支石墓群	小川内支石墓群
Ⅰ		17	2.5.6	3.5.10.11.16.17. 19.28.32.34	104.101.43.40.37. 29.20.57	5.7
Ⅱ	a		1	20	9.6	3
	b			7	30	
Ⅲ	a		3.4.7		417.31.24.25.21. 19	2.6
	b				39	
Ⅳ	a			4.31	106	
	b			24.25		

〔注〕大野台遺跡E地点については、蓋石が失われていて、構造が判明しているもののみについてあげた。

第8図 石棺墓組み方状況（正林・松尾 1983）



を形成した集団の生業形態や規模により、石棺型式が異なることを指摘した（大庭 2003）。しかし、導入期の祖形にあたるものと半島資料との比較が不十分であったこと、その変遷も時間差なのか地域差なのか明確に考古学的に証明できていない問題が残ったままであった。

### (3) 半島及び玄界灘沿岸地域、本地域の関係性

近年では、端野氏や中村氏により、半島及び列島における地域性や時期変遷を踏まえた、支石墓をはじめとする様々な文化要素の比較研究が精力的に実施され、格段に様相が明らかになっている。以下では、石棺墓に関する事項を中心に両氏の研究成果を取り上げたい。

端野氏は半島と列島における支石墓の構成要素及びその他の文化要素を比較した結果、列島の支石墓の祖形は、石槨を下部施設とするもので、その内部施設は木棺が推測されるとし、類似度から半島南海岸部の南江流域がその起源地である可能性が高いと指摘した（端野 2018他）。またその伝播ルートも水稻農耕とともに、対馬・壱岐を介して玄界灘沿岸地域にまず伝播し、その後周辺地域に拡散するモデルを提示し（端野 2018）、済州島を経由した多元的伝播の可能性は低いと結論付けた（端野 2003）。

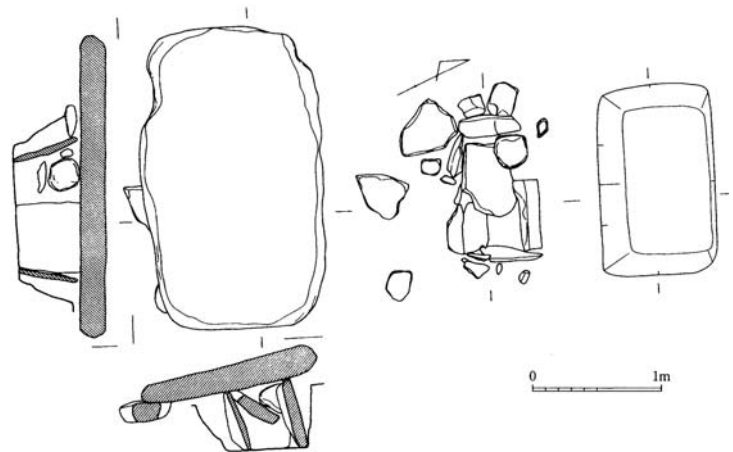
さらに支石墓埋葬主体の石棺について、半島において石材と木材を併用して棺をなす事例及び石槨内に石棺を設置している事例などから、半島において木棺と石棺は相互に変換可能な要素であるとした（端野 2001）。よって、列島内で材質転換により木棺から石棺へ変化した可能性が高く、半島無文土器文化からのインパクトが強くみられる縄文晩期後葉において、この時間幅に収まる物質文化の変容現象はあり得るものとした（端野 2017）。

一方、中村氏は列島の支石墓の起源を半島嶺南地域南部に加え、有柄式石剣の在り方などから、半島南西部の全羅南道湖南地域も起源地の一つである可能性を指摘した（中村 2012）。また半島南部では支石墓埋葬主体以外の木棺墓・石棺墓が支石墓と同時に併存することから、それらがそれぞれ北部九州、中・四国地域の各地域に直接的な影響を与えたとし、支石墓を含む複数墓制の伝播は多系統であること及びそれらが時期差を持ち波状伝播したと考えた（中村 2016）。

宮本氏も、列島の支石墓・木棺墓・箱式石棺墓は、半島湖南地域から南江流域を含む嶺南地域から、玄界灘沿岸の東部と西部、西北九州と各地域へ時期差を持って伝わり受容されたという、中村氏に近い意見を述べている（宮本 2012）。

加えて中村氏は、列島における支石墓埋葬主体である石棺と木棺（土壙）との関係について、風観岳支石墓群の調査成果から石棺は土壙に先行するとみられること、半島では支石墓の埋葬主体となる木棺は少なく、同時に列島においても木棺は極めて少ないこと、木棺の掘り方は広く、裏込め土や石を入れて棺を固定するものが多いが石棺の掘り方は極めて狭いことなどから、端野氏が指摘する木棺からの石棺への材質転換は難しいという見解を示した（中村 2016他）。

これに対し端野氏は、半島湖南地域と列島との直接的な関係を積極的に肯定する遺物はみられないとし（端野 2017）、本地域の石棺を埋葬主体とする支石墓について、半島南西部・全羅南道西部にも



第9図 I類石棺（小川内支石墓群7号支石墓）（1/60）

本地域の石棺墓と構造的に類似する石棺を埋葬主体とする支石墓はわずかであるとする中村氏自身の見解（中村 2016）と矛盾するとした。加えて、風観岳支石墓群51号支石墓出土丹塗磨研壺は器壁がやや厚く、縄文土器の通有の内傾接合で製作されているなど、本地域における弥生時代開始期の遺跡では、半島からの搬入品と積極的にみなせるものはなく、少量ながらも発見例のある玄界灘沿岸地域とは状況が大きく異なると指摘した（端野 2017）。

#### (4) 西北九州における石棺墓の系譜について

以上、先行研究をみてきたが、半島、列島とも同じ資料を用いても、論者によりその結論はかなり異なる。筆者は、端野氏による支石墓埋葬主体の木棺から石棺への材質転換及び南江流域→対馬→壱岐→玄界灘沿岸が伝播のメインルートとの結論は妥当と考えているものの、中村氏や宮本氏による支石墓伝播多元論・波状伝播について、検討の余地が残っているとみている。

端野氏は、夜臼Ⅱ a 式段階では半島からの影響を積極的に示す証拠に乏しく、夜臼Ⅱ a 式段階になると半島からの影響力が薄まったとする（端野 2015）。一方、中村氏は夜臼Ⅱ a 式段階からの築造が開始される宗像地域の田久松ヶ浦遺跡の石槨構造は、半島嶺南地域の埋葬施設と類似した構造であることから、端野氏の一元的な伝播・展開論に疑問を呈している（中村 2012）。

平郡達哉氏は、夜臼Ⅱ a 式新段階からの福岡平野の雑餉隈遺跡 SR003・SR015など、磨製石剣・磨製石鏃と副葬した土器というセット関係や副葬位置等が半島と高い共通性をみせることから、単なる物品のみの伝播ではなく、葬送儀礼を含む半島の制度の伝播であることに加え、半島において代表的な副葬品である磨製石剣は列島においてもその多くが埋葬遺構から出土するものの、玄界灘沿岸地域では木棺墓や土壙墓のみから出土し、支石墓からの確実な出土はないとした（平郡 2018）。

このように、南江地域を中心とする半島南部から玄界灘沿岸地域への伝播ということは研究者間で概ね一致をみるが、中村・平郡氏の意見を踏まえると波動的な伝播もあった可能性があるため、夜臼Ⅱ a 式段階における半島からの影響を念頭に置いた上で、もう少し時期や地域も幅をもたせて、伝播の在り方を考古学的に検討する必要がある。なお夜臼Ⅱ a 式段階では、端野氏の意見のとおり半島からの影響力の低下した可能性が高いが、夜臼Ⅰ式段階までの交流ネットワークが何らかの事情によって縮小することによって、半島からの往来も途絶えた可能性が推測される。

また風観岳支石墓群の埋葬主体は土壙の割合が高く、22・26号支石墓では土壙上面に木蓋の押さえ石の可能性のある安山岩の小塊石が認められることから（秀島編 2006）、木蓋ないしは木材などの有機物からなる構造物を想定する見解がある（端野 2015）。加えて風観岳支石墓群及び原山支石墓群では小壺が供献されていること、風観岳支石墓群第51号支石墓の埋葬主体には乳幼児棺である丹塗磨研壺が使用されていること、その丹塗磨研壺の形態や原山支石墓群及び西鬼塚支石墓・石棺群出土供献小壺は、佐賀平野の久保泉丸山遺跡など有明海沿岸地域に類似する形態であるなど、支石墓以外の半島無文土器文化の要素が本地域ではほぼ皆無であること（端野 2018他）を踏まえれば、少なくとも本地域南部の支石墓については、有明海を通じた伝播と見たほうが自然と思われる。

一方、本地域北部の支石墓については、大野台遺跡C地点8号石棺は側板の一部に積石状の石がみられること（第10図）、C地点7号支石墓は敷石が存在すること（端野 2018）、小川内支石墓群9号支石墓の埋葬主体の石棺は一部積石で壁面を構成していること（第11図）、6・9号支石墓では墓壙内の石棺と墓壙との間に裏込めとして礫を詰めていることなど（第11図）、本地域北部における支石墓埋葬主体の石棺は、玄界灘沿岸地域の木棺を埋葬主体とする支石墓と類似点が多い。

ちなみに、端野氏による支石墓埋葬主体の木棺と石棺は相互に変換可能であるとの指摘は、玄界灘沿岸及び有明海沿岸地域において石棺が非常に少ない中で、風観岳支石墓群における木蓋ないしは木

材などの有機物からなる構造物と想定されるものの存在から、風観岳支石墓群ないしは原山支石墓群で木棺から石棺へ転換することが具体的に実現した可能性がある。

さらに中村氏は副葬・供献小壺の受容と展開について、夜臼式段階においては本地域南部では小壺等を墓壙上に置く「供献」行為がみられるが、北部の小川内支石墓群及び大野台遺跡では棺内副葬・棺外副葬行為の存在を指摘している（中村 2006, p25, 表1）。小壺の副葬と供献の受容の在り方と土器自体の影響の受け方が一致しないことは留意すべきとするものの（中村 2006）、半島では有柄式石剣・磨製石鏃・小壺を棺内・外に「副葬」するのに対し、北部九州では小壺のほとんどが「供献」され、半島の方法をそのまま継承していない中で（中村 2006）、本地域北部における棺内副葬の存在は、半島との類似度を考える上で、興味深い。

なお筆者は、当初小川内支石墓群7号支石墓は上石が235×140<sup>mm</sup>の長方形の平たい上石（第9図）で、蓋石がなく、上石が蓋石の役割を果たしていること、4号支石墓出土土器は半島無文土器の壺に類似することから、本地域北部と半島南部との直接的な系譜関係を念頭に置いていたが（大庭 2003）、その後端野氏により半島南部において小川内支石墓群のような墓地形態（I類）（第4図）では蓋石がないものは存在しないこと（端野 2018）、さらに河仁秀氏は蓋石を含む閉塞施設・敷石を有するものからないものへの時間的な変遷を想定していることなど（河 1994）、蓋石の有無は半島との系譜を追及する材料とはならないことが明らかになっている。

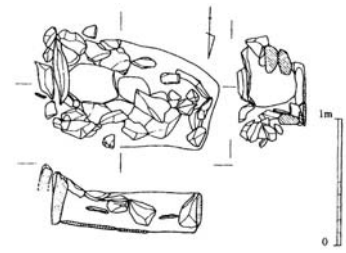
以上のことと、唐津地域→糸島地域→福岡地域へ半島支石墓との類似度が高い→低いという評価（端野 2018）を踏まえると、地理的に近い本地域北部と唐津地域との直接的な交流による支石墓の伝播や対馬・壱岐から本地域北部への直接的な伝播する在り方など、糸島地域、福岡平野を一旦介しない伝播も念頭に置く必要がある。

なお、蛇足になるが、先の石崎曲り田遺跡支石墓周辺の集落域からは半島系要素を持つ遺物が出土しているが、石崎曲り田遺跡支石墓の埋葬主体は小型の円形土壙かつ火葬とされる（橋口 1983）。当該期の火葬の存在を否定する意見は多いが、埋葬主体が小型の円形土壙であることについて、宮本氏がこの小型の円形土壙は屈葬用の縄文的な土壙墓であり、特異な例とみなす意見以外（宮本 2012）、言及する意見は管見の限り少ない。筆者は、糸島地域ではまもなく支石墓埋葬主体として大型丹塗磨研壺を使用した乳幼児用の甕棺を導入することから、乳幼児・小児用の葬制と成人用葬制とでは、無文土器文化受容に際して異なる観念が働いた可能性を推測している。

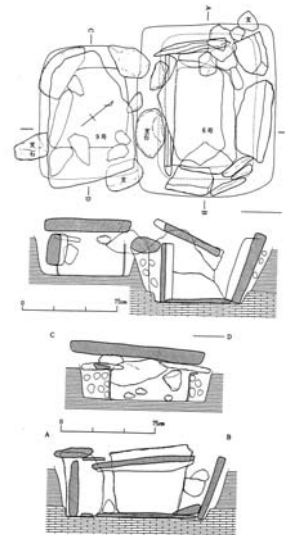
今後、本地域においても成人用石棺と小児用石棺の区別やその在り方のみならず、乳幼児棺は石棺墓ではない墓制である可能性も含めて、様々な面から検討すべき課題であろう。

#### 4、支石墓と海人

弥生時代の開始にあたり、中村氏は「西北九州や唐津地域における支石墓の導入こそが新たな交易者としての海民（海人）形成の端緒である…」とし、中期以降の中国・朝鮮半島との交易を直接的に



第10図 大野台遺跡C地点  
号石棺 (1/60)



第11図 小川内支石墓群  
6・9号支石墓 (1/60)

担った海人形成のきっかけとなったと指摘する（中村 2016）。ただし、氏は支石墓導入段階には海人のネットワークが機能していたかは定かではなく、かつこの段階では海人は形成されていないとし、当該期の半島南部での漁労活動内容が明瞭ではない現状では、海人による交流だけでは、支石墓の伝播と受容を説明することは難しく、人の移動に伴う社会の再編を指摘する（中村 2012）。

宮崎貴夫氏は、五島列島及び西海沿岸域は対馬海流の海洋資源を基盤とした西九州型漁撈文化が縄文時代後期中頃まで盛行、後期後半には遺跡が激減するが、晩期中頃には五島列島の白浜貝塚などで漁労活動が活発化し、出土土器から玄界灘沿岸地域との地域間交流が想定されとした（宮崎 2018）。筆者も本地域の支石墓群の規模の違いについて漁労と水稻農耕という生産活動の差に求め、さらに伝播にあたり、本地域北部では漁労に携わった集団の関与を想定した（大庭 2000・2003）。

では、多島海である西北九州沿岸では日常生活の中で、船を使った交易活動が盛んで、操船技術が発達したことが予想される。本地域への無文土器文化の伝播にあたり、海運・水運の役割は常に高かったことは間違いないが、漁労に携わった集団の関与は、実際どうであったのだろうか。

現在筆者は、漁労活動の専門化は、交換経済が発達し、水産物が商品化され、素早く流通させることが前提で、玄界灘沿岸地域における漁労専門集団「海人」のはじまりは、古墳時代前期以降と想定している。真鍋篤行氏による瀬戸内地方を対象とした弥生・古墳時代の瀬戸内地方の漁業技術史に係る研究では（真鍋 1994・1995）、水産資源を大量捕獲する前提として、加工・貯蔵する技術やこれを迅速に消費地に運ぶ優れた運搬手段、交通ネットワークの組織化、水産資源を受け入れる大規模な消費地の存在が必要と指摘した。玄界灘沿岸地域では、瀬戸内地域から伝播した土器製塩を開始し、その土器製塩により供給された塩の一部が魚介類の保存料としても活用され、かつ網の大型化による魚



第12図 西九州の支石墓分布図(縮尺任意, 国土地理院地図を改変)

類の大量捕獲や漁場の広域利用など網漁業の発達が見られる（真鍋 1994）、古墳時代前期以降が漁労活動の一大画期と考えている。

また半島との交易が大規模化するのには、鉄器による加工精度の高い技術を用いた準構造船が成立する弥生時代中期後半～後期以降で、ちょうどその時期、玄界灘沿岸地域では弥生時代中期後半に九州型石錘を創出するなど釣漁を中心とする水産物の捕獲技術の発達に伴い、水産物の捕獲量が増加したことが予測される。このような漁労活動の活発化に伴い、半島から北部九州に向けた長距離交易ネットワークや中国の史書に記された倭の国々と中国王朝との交流における直接的な担い手として、玄界灘沿岸の優れた操船技術を保持した海人が重要な役割を果たすようになったと考えられる。早期～前期は管状土錘の出現など、小規模な網漁を中心とする漁労活動の存在が窺えるものの、個人、少数で行う小規模な漁労内容で、集団による共同作業を伴った漁労活動ではなかったと推測される。

さらに輸送手段としての船も、準構造船の出現以前は、縄文時代以来の丸木船であったとみられる。丸木船は幅80～100<sup>cm</sup>前後、長さ6<sup>m</sup>前後の一本の丸太を半裁し、その内部を削り貫き、船首・船尾を尖らせた単純な構造で、積載量は少なく、大規模な交易活動は望めないことから、準構造船出現以前の交易活動は小規模であったと考えられる。『魏志』倭人伝における対馬・壱岐の状況から、稲束・稲粃（コメ）が玄界灘沿岸地域から本地域（北部）への最大の交易品と考えられるが、弥生時代早期に玄界灘沿岸地域が本地域を含む他地域との交易に用いることができた程のコメの生産量があったかは、現在発見されている水田遺構も少ないことから疑問が残る。かつ本地域ではコメ等穀物の貯蔵・運搬用の土器である大型壺が、埋葬用の甕棺以外では出土がないこともこのことを示すと思われる。

以上のことから、弥生時代開始期の通常の上交易活動による交流は、端野氏が指摘した、「玄界灘沿岸地域から周辺地域への拡散する際の情報伝達は、半島南部から玄界灘沿岸地域への情報伝達の背景（通常の商品・婚姻などに加え、小規模な人の移動）と異なり、玄界灘沿岸地域からその周辺地域への情報伝達は、通常の商品・交易などを媒介として行われたものと考えられる」（端野 2018, p477）程度が通常のものであったと考えられる。

しかし、1-(4)でみたように、対馬・壱岐に支石墓がみられない要因として、水稻農耕が定着しなかったことが推測されることから、本地域南部、北部とも夜臼Ⅰ式併行段階の支石墓を含む当初の半島無文土器文化伝播当初のみ、人の移動を伴う伝播であった可能性が推測される。

顕著な交易品が見当たらない、当該期の通常の商品・ネットワークは、人間関係のネットワークであった可能性が高く、その人間関係は漁労に携わった人と人との関係が基礎であったと想定される。その程度の商品では墓制や生業など、基層的な文化伝達はごく一部の時期を除き、ほとんどなかったであろう。

しかし、その内容は低く評価されるものではない。水稻農耕が縄文時代の生業と大きく異なる点は、農耕が可能な環境への改変に加え、景観まで伝播することである。水稻農耕の開始により副食物が求められ、かつその副食物も長期の保存性が要求されたことで、加工・貯蔵技術の水準において、縄文時代の漁業と一線を画するとした研究（真鍋 1994）を踏まえれば、弥生時代開始に伴い漁労活動の役割は前段階より大きくなったことが予想される。漁労活動による近隣の人々との交流が活発化する中で、文物や情報がまず漁労に携わる人に伝わり、その情報が漁労に携わる人を介して伝播したことで、その後の生業や習俗の伝播を受容する基盤形成になったとみられる。

現在、弥生時代開始期における漁労活動はよく分かっていないが、今後は比較的遺物が残りやすい当該期の漁労具の形態やその分布の検討を行うことで、交流の在り方も追求できる可能性がある。

## おわりに

以上、関係する近年発表された優れた先行研究をもとに、本地域の弥生時代開始期の墓制を中心に若干の私見を述べた。

立地に関しては、本地域への支石墓を含む墓制の伝播にあたっては、基本的に農耕とその技術を携えた人が伴っていたこと、南部の高位丘陵上の支石墓群を造営した人々は縄文系譜の栽培植物に加え、半島系譜の畑作技術等による新たな生産様式を受容し、展開させていたことを予測した。

墓地構成では、弥生時代の開始に伴い、集落と墓域が明確に分離し、その墓域も密集度が高く、複数集団からなる共同墓地的な在り方を示す。また本地域でも半島系要素である列状構成がみられること、小児棺の比率が他地域よりも少なく、墓地内でも成人棺と小児棺の区域が明確に分かれず、かつ乳幼児棺の葬制もよく分かっていないことから、玄界灘沿岸地域と本地域では乳幼児・小児に対する葬制に係る観念が異なる可能性があることを指摘した。さらに石棺墓の在り方などから、本地域南部で支石墓埋葬主体が木棺から石棺に材質変換した可能性があること、本地域北部は玄界灘沿岸地域、南部は有明海沿岸地域と、本地域南部・北部で墓制の伝播ルートが異なる可能性があることを示した。

支石墓の伝播と海人との関係については、海人による通常の交流では支石墓などの習俗や水稻農耕など、半島無文土器文化系譜の基層文化は伝達できない可能性があること、漁労活動は小規模かつ集団的なものではなく、海人では大規模な支石墓群の形成が難しいことなどを考えた。

なお本地域では、弥生時代中期の成人用大型甕棺墓の分布は富の原遺跡や景花園遺跡など県北部、中部、南部の一部以外のみ認められ、今山系磨製石斧、立岩系石庖丁の分布範囲も県南部の一部が含まれるが、今回みてきた支石墓分布圏はそれより広い（第12図）。宮地聡一郎氏が指摘する弥生時代開始期におけるイデオロギー転換が、水稻農耕不適地を含む当地域にどの地域を起源・経路として伝わり、在地社会にどのような影響を与えたのか。原山支石墓群や風観岳支石墓群のような高位丘陵における生業が今回指摘した新たな畑作であれば、その由来は有明海、玄界灘沿岸ないしは朝鮮半島のどこにあるのか。本地域南部で支石墓埋葬主体が木棺から石棺に材質変換したのであれば、その変換を可能にした集団の意識・観念は半島由来の意識・観念ないしは豊富にある石材などに理由を求めているのか。さらに本地域では本格的な水稻農耕を伴う板付系文化が流入する弥生時代前期後半に支石墓の築造をやめ、以後支石墓を造営していた遺跡は継続するものが少ない状況を踏まえると、弥生時代早期の墓制・葬送儀礼または生業などの文化伝達が、どのくらいインパクトのある内容であったのかなど非常に気になるところはあるが、本稿ではその多くが課題として残ってしまった。

今後発掘調査が進展することで、いくつかの課題は解決できるかもしれないが、それぞれの論点についてさらなる分析作業が必要であり、個別に取り扱ってさらに詳細に考察を行う必要がある。今後の調査研究に期待したい。

なお、本稿を執筆するにあたり、古門雅高氏には執筆の機会をいただき、古門氏・宮崎貴夫氏・渡邊康行氏には事前に草稿を確認していただいた。特に宮崎氏には長崎県内の当該期の遺跡の動向をはじめ、支石墓と集団・生業の在り方、石棺墓研究の問題点など、様々な観点からの有益な意見をいただきました。深く感謝申し上げます。

## 【引用・参考文献】

- 安藤広道 2009「弥生農耕の特質」『弥生時代の考古学 5 食糧の獲得と生産』 同成社  
太田 新 2014『日本支石墓の研究』 海鳥社

- 大庭孝夫 2000「北部九州における縄文晩期～弥生前期の墓制」『弥生の墓制(1)』第48回埋蔵文化財研究集会発表資料・資料集 埋蔵文化財研究会
- 大庭孝夫 2003「北部九州における石棺墓の導入と展開」『続文化財学論集』文化財学論集刊行会
- 小田富士雄 1974「大野台遺跡—縄文晩期墳墓群の調査」『古文化談叢』第1集 九州古文化研究会
- 川道 寛編 1997『宇久松原遺跡』宇久町文化財調査報告書第4集 宇久町教育委員会
- 九州大学文学部考古学研究室編 1997『東アジアにおける支石墓の総合的研究』九州大学考古学研究室
- 坂田邦洋 1978「長崎県・小川内支石墓発掘調査報告」『古文化談叢』第5集 九州古文化研究会
- 正林 護・松尾泰子編 1983『大野台遺跡』鹿町町文化財調査報告書第1集 鹿町町教育委員会
- 高野晋司編 1981『国指定史跡原山支石墓群 環境整備事業報告書』北有馬町教育委員会
- 田中良之・小澤佳憲 2001「渡来人をめぐる諸問題」『弥生時代における九州・韓半島交流史の研究』九州大学大学院比較社会文化研究院基層構造講座
- 寺田正剛 2005「長崎県地域における箱式石棺墓の様相について」『西海考古』第6号 西海考古同人会
- 中村大介 2006「弥生時代開始期における副葬習俗の受容」『日本考古学』21 日本考古学協会
- 中村大介 2012『弥生文化形成と東アジア社会』塙書房
- 中村大介 2016「支石墓の多様性の交流」『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要』第6号 長崎県埋蔵文化財センター
- 河 仁秀 1994「嶺南地方の支石墓の形式と構造」『古文化談叢』第32集 九州古文化研究会
- 橋口達也 1983『石崎曲り田遺跡Ⅰ』今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第8集 福岡県教育委員会
- 端野晋平 2015「近年の弥生時代開始期墓制論の検討」『古文化談叢』第74集 九州古文化研究会
- 端野晋平 2017「中村大介著「支石墓の多様性と交流」に対するコメント」『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要』第7号 長崎県埋蔵文化財センター
- 端野晋平 2018『初期稲作文化と渡来人』すいれん舎
- 秀島貞康編 2006『風観岳支石墓群発掘調査報告書』諫早市文化財調査報告書第19集 諫早市教育委員会
- 平郡達哉 2018「日韓の墓制(弥生時代前半期)」『新・日韓交渉の考古学—弥生時代—』第1回共同研究会「新・日韓交渉の考古学—弥生時代—」研究会
- 真鍋篤行 1994「弥生時代以降の瀬戸内地方の漁業の発展に関する考古学的考察」『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要』第7号 瀬戸内海歴史民俗資料館
- 真鍋篤行 1995「弥生・古墳時代の瀬戸内地方の漁業」『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要』第8号 瀬戸内海歴史民俗資料館
- 宮崎貴夫 2018「長崎県本土地域の弥生文化形成期前後の遺跡と初期支石墓」『海峡を通じた文化交流』九州考古学会・嶺南考古学会第13回合同考古学大会 九州考古学会・嶺南考古学会
- 宮崎貴夫 2019『長崎地域の考古学研究』
- 宮地聡一郎 2018「縄文から弥生へ—墓域構成の変化に見るイデオロギー転換—」『古文化談叢』第80集 九州古文化研究会
- 宮本一夫 2012「弥生移行期における墓制から見た北部九州の文化受容と地域間関係」『古文化談叢』第67集 九州古文化研究会
- 山崎頼人・比嘉えりか・坂井貴志・渡邊隆行・金民善・西江幸子・佐々木由香 2014「北部九州における弥生時代植物利用研究1」『古文化談叢』第71集 九州古文化研究会

# 【老朗漫筆】長崎・佐賀・福岡県域における支石墓の立地について

－表層地質との関係から考えたこと－

渡邊 康行

## 1. 「気づき」にいたるまで

あれは『原始・古代の長崎県』編集のお手伝いをしていたころだから、1990年代の後半、四半世紀近くも前のことである。新型コロナ禍で外出自粛が求められる昨今とは異なり、当時は、編纂事業の責任者であった高野晋司さんに誘われて、居酒屋の暖簾をくぐるが多かった。

高野さんは明治大学の考古学専攻卒業生で、支石墓をテーマとして卒業論文を書かれた方だから、酒席ではしばしば支石墓が話題にのぼる。朝鮮半島から九州島へ伝播する過程で、その中継点となることが想定される対馬・壱岐で支石墓が発見されないのはなぜか？ ということが話題の中心だったように記憶しているが、その一方で西彼杵半島に広く分布している結晶片岩(長崎変成岩類)を用いた支石墓が見られないのはなぜか？ ということも語られていた。西彼杵半島には結晶片岩の板状石を用いたキリシタン墓地がある。外観が支石墓に似ている、と言われれば、まあ、似てないこともない。

杯を重ねるにつれ、高野さんは「(西彼杵半島の山中に)支石墓のごたつとのある！ という連絡ば受けてさ、現地ば見にいくとばってんがさ、ぜーんぶちがうとさな!! ほんとに今まで、なんべん騙されてきたことか!!」と、焼酎を片手に、笑いながら愚痴をこぼされていた。

2018年8月、九州考古学会・嶺南考古学会・長崎県考古学会の合同研究会が長崎市内で開催され、宮崎貴夫さんが支石墓について発表されたとのことで、発表要旨を送って下さった。宮崎さんらしい緻密な考察に感心しながら読み進めるうちに、すでに泉下の客となられた高野さんとの会話が思い出されてきて、それが支石墓の立地と表層地質との関係を考えるきっかけとなった。

現代は様々な情報を簡単に入手できる便利な時代である。それは地質図も例外ではない。さっそく産総研の地質図 Navi にアクセスして地質図をダウンロードし、長崎・佐賀・福岡の支石墓の位置を確認してみることにした。ベースになったのは、宇久松原遺跡の報告書(川道編 1997)である。

そこには長崎県(12)、佐賀県(20)、福岡県(9)、熊本県(3)の44遺跡がリストとして示されており、このうち熊本県を除く西北九州3県の計41遺跡を対象として地質図上での支石墓分布図作成を試みたわけである。支石墓の位置を地質図に落とす作業は、必ずしも容易ではなかった。基数が多い場合はともかく、数基しかない遺跡では、ピンポイントで狙いを定めなければならない。とりあえず作ってはみたものの、精度に自信が持てなかったため宮崎さんにお願ひし、何度かの修正指示をいただきながら、同年9月下旬にどうにか完成させることができた。結果は、とても興味深いものだった。地域によって、特定岩石との間に強い相関があるように思われたからである。

支石墓の立地と表層地質との関係を考える前に、上石について触れておきたい。支石墓の上石として用いられている巨礫は、花崗岩・花崗閃緑岩・玄武岩・砂岩の未風化核岩が多いように思われる。未風化核岩はコアストーンとも呼ばれ、2014年8月の広島豪雨災害で甚大な被害を生じた原因の一つとして注目を集めるようになったものである。

「2005年福岡県西方沖地震による玄界島頂部のノンテクトニック断層」(加藤・横山 2010)には、玄界島における未風化核岩についての場景が詳述されているので、以下に紹介しておきたい。



「(玄界島の)地質は、後期白亜紀志賀島花崗閃緑岩とそれを不整合で覆う鮮新世の玄武岩からなる(唐木田ほか, 1994)。不整合の標高は120~140mである。志賀島花崗閃緑岩は、北部海岸の一部の露頭を除いてマサ化している。玄武岩は節理に沿ってたまねぎ状風化が進行し、強風化した外殻に取り巻かれた長径が1~3mのやや平たい餅状の未風化核岩を形成している。未風化核岩のあるものは外殻が完全に失われ、岩盤から完全に分離した巨礫として山頂平坦面に転がっている。」

こうした場所は地質的な面だけで考えれば支石墓を築造するのに好適である。長崎県域では天久保・風観岳・原山・井崎などが類似した環境と考えられる。未風化核岩は、岩石の種類や節理によって様々な形状になる。火山岩である安山岩や玄武岩で、板状節理の場合は板状や餅状となろうし、玄武岩の柱状節理や、花崗岩・花崗閃緑岩など深成岩に多く見られる方状節理の場合は、より厚みのある玉石に近い形状になるだろう。前者はごく一般的な支石墓の上石で、後者は福岡県新町遺跡13号墓の上石が代表例である。未風化核岩は、斜面崩壊や土石流などで遠方まで運ばれることも考えられる。

沖積地に立地する支石墓の上石は、本来、より上位の山中や丘陵に存在していた巨礫が、自然営力によって運ばれた可能性があり、加えて人為的な移動も考慮する必要がある。同一労働量で考えれば、移動可能な距離は上石の重さに反比例すると思われるが、地形などを考慮すると単純な話ではない。

さて、宇久松原遺跡の報告者である川道寛さんは、総括で、(2)長崎県における支石墓のあり方に触れ、①県北地域 ②県央・西彼杵半島 ③島原半島に大別して各地域の様相を整理している。そして①の県北地域について、「この地域は支石墓の密集地帯であり、遺跡数も7カ所にのぼる。宇久松原遺跡とは平戸島を介して至近距離にあり、その関係が注目されるところである。」とし、②の県央・西彼杵半島地域については、「(天久保・風観岳・井崎の)3カ所と少なく、しかも距離的に相当離れており分散している。そのあり方にも共通性はあまりないようである」と述べている。

報告書で示された分布図を見るかぎりでは、たしかにそうである。しかし今回、地質図と重ね合わせることで、新たな共通性を見いだすことができた。なかでも注目したのは西彼杵半島北部に位置する天久保、諫早市と大村市の境界山中に所在する風観岳、島原半島山中の原山、有明海に面する井崎の各遺跡が、いずれも玄武岩地帯に立地していたことである。長崎県域の表層地質における玄武岩の占める面積は決して多くはない。西彼杵半島・長崎半島・島原半島では、とりわけその傾向が強い。にもかかわらず天久保・風観岳・井崎・原山の4遺跡は、いずれもが玄武岩地帯に所在していたのである。さらに範囲を広げると、宇久松原・田助・里田原の各遺跡もまた玄武岩地帯に立地している。とすると長崎県域の支石墓築造(註1)集団には、玄武岩に対する強い志向性があるように思える。

一方、佐賀県の唐津湾周辺や背振山南麓地域、福岡県糸島半島周辺では、花崗岩や花崗閃緑岩との結びつきが強いように見える。地質図上の分布図から見えてきた表層地質の共通性に考古学的な意味を見いだせるか? については多面的・多角的な検討が必要であって、安直に結論を求めるべきではないと考える。とはいえ、たいへんに興味深い事実であることもたしかである。

改めて言うまでもないことだが、支石墓は墓である。であるがゆえに考古学的調査・研究の対象として下部構造・埋葬形態・副葬品・人骨などに主たる関心が向くのは当然である。しかし支石墓には土坑墓・石棺墓・木棺墓等とは異なり、多くの場合おそらくはトン単位の重量の上石を伴っている。それが当時の技術力・労働力で遠隔地からの移動が困難だったのであれば、支石墓を築造した集団の選地基準が表層地質の制約を受けていた可能性は高い、と考えられる。それゆえ「埋葬遺構」としてのみならず、地質的環境を含めた「遺跡」としての視点から改めて眺めて見るのも面白いのではないかと考えた次第である。

## 2. 長崎・佐賀・福岡県域における支石墓遺跡と周辺の表層地質

以下、長崎・佐賀・福岡県域で確認されている支石墓周辺の表層地質について見ていく。使用した地質図は産総研・地質図 Navi の20万分の1地質図幅（唐津（第2版）・福岡・長崎（第2版）・熊本）と50万分の1（福岡・鹿児島）で URL は以下の通りである。記述内容は地質図幅の凡例に従っているが、表層地質に関する情報であって、各支石墓遺跡における上石の岩石名を意味するものではない。

- 20万分の1【唐津】 [https://gbank.gsj.jp/geonavi/docdata/data/org\\_data/wxga\\_1046\\_org\\_1045.jpg](https://gbank.gsj.jp/geonavi/docdata/data/org_data/wxga_1046_org_1045.jpg)
- 20万分の1【福岡】 [https://gbank.gsj.jp/geonavi/docdata/data/org\\_data/wxga\\_762\\_org\\_762.jpg](https://gbank.gsj.jp/geonavi/docdata/data/org_data/wxga_762_org_762.jpg)
- 20万分の1【長崎】 [https://gbank.gsj.jp/geonavi/docdata/data/org\\_data/wxga\\_1043\\_org\\_1042.jpg](https://gbank.gsj.jp/geonavi/docdata/data/org_data/wxga_1043_org_1042.jpg)
- 20万分の1【熊本】 [https://gbank.gsj.jp/geonavi/docdata/data/org\\_data/wxga\\_1044\\_org\\_1043.jpg](https://gbank.gsj.jp/geonavi/docdata/data/org_data/wxga_1044_org_1043.jpg)
- 50万分の1【福岡】 [https://gbank.gsj.jp/geonavi/docdata/data/org\\_data/wxga\\_14\\_org\\_14.jpg](https://gbank.gsj.jp/geonavi/docdata/data/org_data/wxga_14_org_14.jpg)
- 50万分の1【鹿児島】 [https://gbank.gsj.jp/geonavi/docdata/data/org\\_data/wxga\\_15\\_org\\_15.jpg](https://gbank.gsj.jp/geonavi/docdata/data/org_data/wxga_15_org_15.jpg)

20万分の1地質図は4×4の16区画に分割されており便宜的に北→南をA～D，西→東を1～4とした。図示はこの小区画を最小単位とするが、縮尺は不統一である。20万分の1・50万分の1地質図ともに接続部には微妙なズレが見られ、印刷の色調も異なっている場合がある。対象とする支石墓遺跡は、基本的に宇久松原遺跡の報告書によるが、熊本分は含んでいない。なお南島原市の西鬼塚遺跡についても支石墓としての疑問があるため（註2），対象から除外している。

	1	2	3	4	1	2	3	4		
A	【地質図唐津】 1:200,000								【地質図福岡】 1:200,000	A
B										B
C				大友	小田・新町・志登 曲り田・石崎矢 風長野宮ノ前・ 石ヶ崎・三雲加賀石 井田用会					C
D			田崎 里田原	徳須恵	五反田・割石 葉山尻・岸高 追頭・瀬戸口 森田	戦場ヶ谷・船石 西石動・香田				D
A	宇久松原		大野台・小川内 狸山・四反田		佐織	久保泉丸山 南小路・礫石 黒土原・四本黒 木・伏部大石				A
B			天久保							B
C				風観岳	井崎					C
D	【地質図長崎】 1:200,000				原山				【地質図熊本】 1:200,000	D
	1	2	3	4	1	2	3	4		

第1図 1：200,000地質図の小区画と各支石墓遺跡の位置関係

### A. 長崎県域の支石墓と周辺の表層地質（第2図～第5図参照）

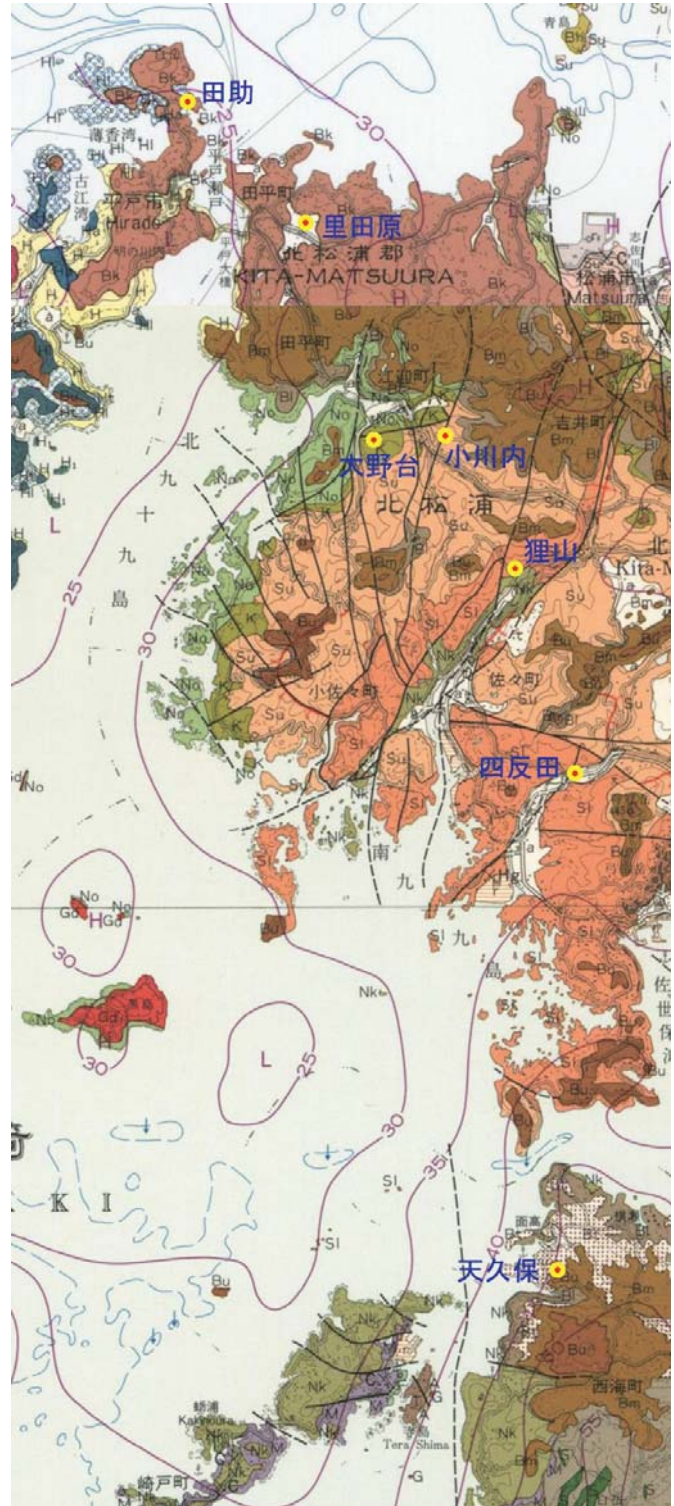
**宇久松原遺跡** 宇久島はほぼ全島が新第三紀鮮新世の宇久島火山岩類（[Ud] 城ヶ岳デイサイト・[Ua]野方安山岩・[Us]采森山安山岩）で占められ，[Ub]（平玄武岩）は，島北部の一部と寺島を含む島の南部に散在的に見られるのみである。宇久松原遺跡はこの玄武岩地帯に立地している。



第2図 長崎県域の支石墓と周辺の地質①

**田助遺跡・里田原遺跡** 両遺跡とも周辺の表層地質は新第三紀中新世後期の北松浦玄武岩類[Bk]である。里田原遺跡の支石墓は，周囲を低い丘陵に囲まれた沖積地に所在する。地質的には田助遺跡とともに玄武岩の未風化核岩を利用しやすい環境と考えられる。

**大野台遺跡・小川内遺跡・狸山遺跡・四反田遺跡** 佐世保市北部～北松浦半島基部にかけての範囲に所在し，四反田を除く3遺跡は比較的近接している。各遺跡とも周辺の地質は微妙に異なるが，基本的に新第三紀の佐世保層群の上部を北松浦玄武岩が覆っている。この玄武岩台地は浸食が進んでいるため，玄武岩[Bu・Bm]は部分的にしか残存しておらず，周辺の表層地質は大野台が[K]佐世保層群加勢層，小川内が[Su]佐世保層群，狸山が[SI]相浦層群で，いずれも砂岩・泥岩・凝灰岩・凝灰角礫岩などの堆積岩類である。四反田は沖積地の立地である。全体としてみると佐世保層群・相浦層群の堆積岩が多くを占めるが，いずれも至近距離には玄武岩が浸食されずに残った卓状台地がある。大野台遺跡C群では



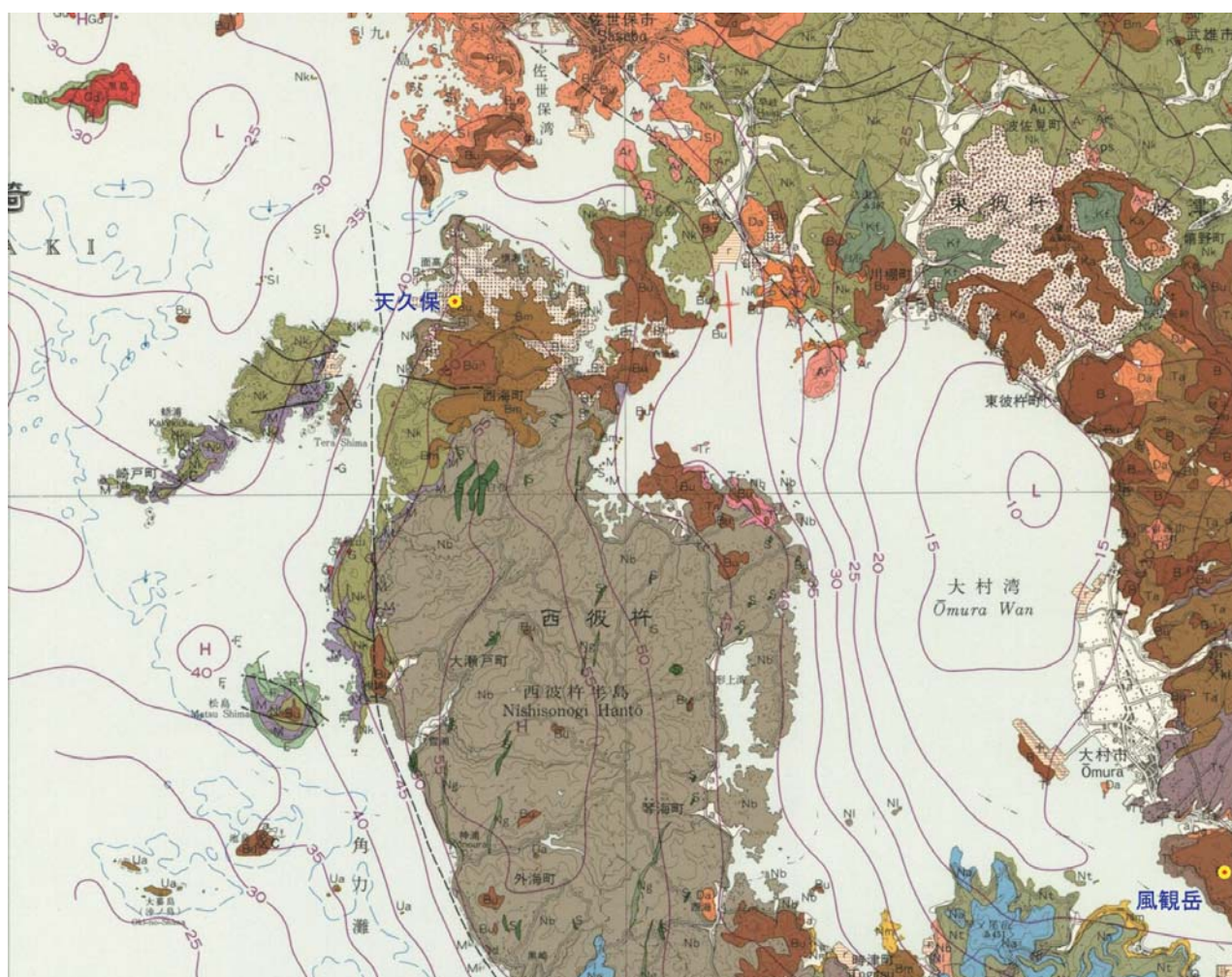
第3図 長崎県域の支石墓と周辺の地質②

8基の石棺が検出されているが，いずれも玄武岩の板石を用いている（註3）とのことで，上記4遺跡の周辺も玄武岩の板状石や未風化核岩を利用しやすい環境と思われる。

**天久保遺跡** 西彼杵半島の北端に近い西海市天久保郷に所在する。周辺の表層地質は新第三紀中新世後期の北松浦玄武岩類で[Bu]上部溶岩（輝石かんらん石玄武岩・かんらん石玄武岩及び石英輝石かんらん石玄武岩）である。西彼杵半島の地質は、その大部分が長崎変成岩類で占められ、大田和～大瀬戸にかけての北西側には、その上に古第三紀の堆積岩類が見られる。北松浦玄武岩は半島の北端部を中心に、長崎市外海町などにも散在的に見られ、時津町ではやや纏まった広がりが見られる。

天久保遺跡に隣接する遺跡としては、石田遺跡・高火頭（たかびと）遺跡がある。筆者は1990年代末に（西海町当時の）町道拡幅に伴う確認調査に関わったことがある。本調査には至らなかったが、路線上の数カ所に支石墓と見まがうような餅状の未風化核岩が見られたため、工事業者の協力を得て下部構造の有無などを慎重に確認したものの、結果的に支石墓と判断できるものは皆無であった。

**風観岳遺跡** 大村湾に浮かぶ長崎空港の南東に位置し、大村市と諫早市の境界、標高210～215m程度のなだらかな斜面に立地する。周辺の表層地質は天久保遺跡と同じ新第三紀中新世後期の北松浦玄武岩類で[Bu]上部溶岩（輝石かんらん石玄武岩・かんらん石玄武岩及び石英輝石かんらん石玄武岩）である。A地点の第三号支石墓の上石は「玄武岩質で、比重を考慮すると重量は約2.9トンに達するものと推測される。」とされ、また第8号支石墓の上石は「玄武岩で、推定重量1.5トン」と報告されている。「遺跡の周辺には玄武岩の露頭があり、石材の入手は容易である」（註4）とも記されており、玄武岩の未風化核岩が豊富に存在していることを示している。



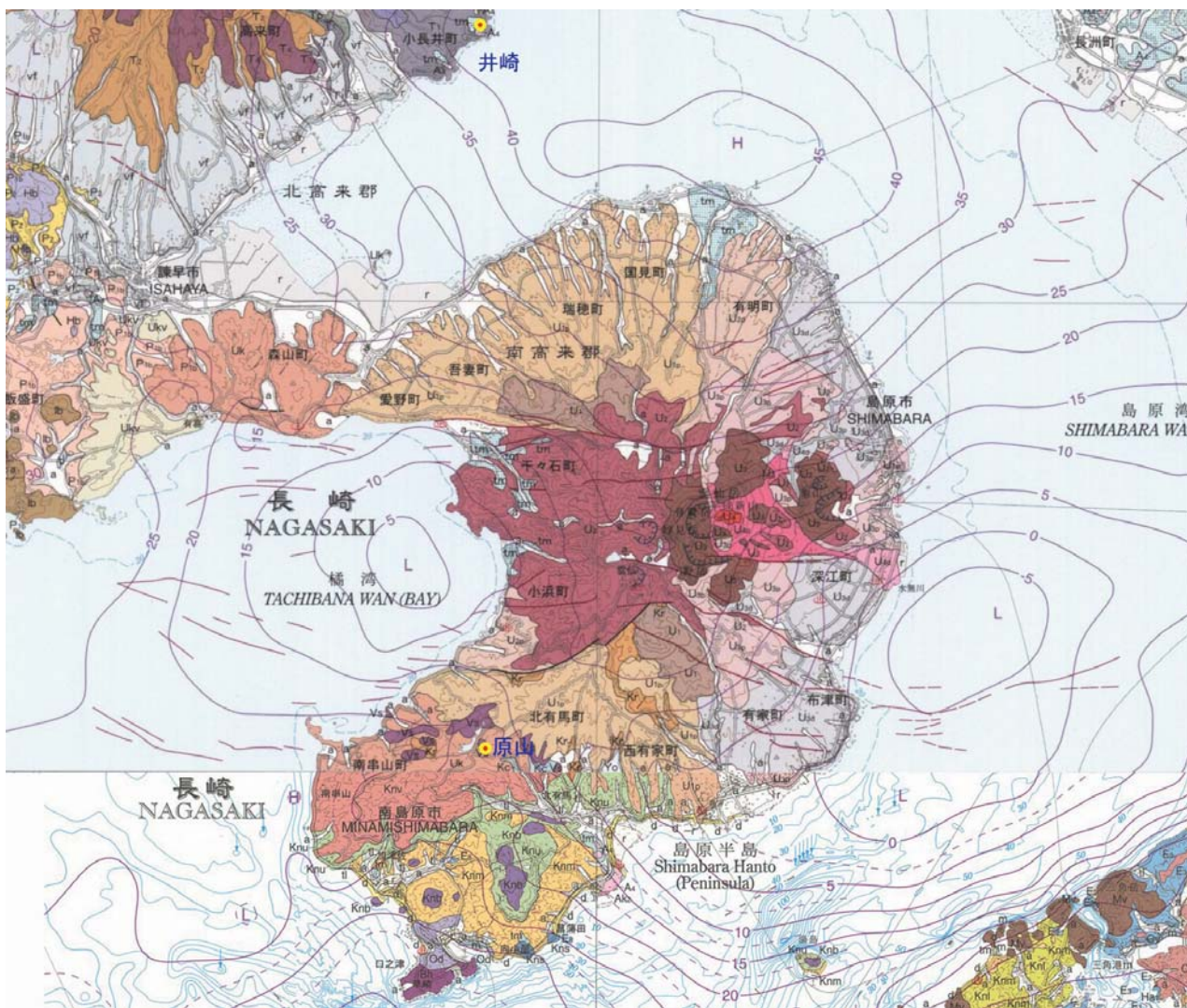
第4図 長崎地域の支石墓と周辺の地質③

**原山遺跡** 雲仙岳から南西に延びる山麓の標高250m付近に立地する。本来は推定100基を超える日本最大級の支石墓遺跡である。島原半島は「小浜町飛子から北有馬町の原山、有馬川河口の谷川に至る線を境として、雲仙火山群からなる北部の雲仙火山地域と南部の南島原火山地域に大別される。

－中略－ 南島原火山地域は、第三紀層を安山岩や玄武岩を主体とする溶岩が覆う火山性台地（南島原台地）で、起伏に富む地形をなしている。」（註5）とされる。遺跡周辺の表層地質は第四紀中期更新世の諏訪池玄武岩及び相当層 [Vs]（玄武岩溶岩及び火砕岩）である。なお島原半島では口之津周辺でも新第三紀前期鮮新世の早崎玄武岩 [Bh]（かんらん石玄武岩溶岩及び火砕岩）が見られる。

**井崎遺跡** 多良岳から南東に延びる丘陵の末端に立地する。周辺の表層地質は第四紀前期更新世～中期更新世多良岳火山の[T1]古期玄武岩及び郡川火山岩類（玄武岩・安山岩溶岩及び火砕岩）である。周辺にはごく狭い範囲ながら、第四紀後期更新世の[A4]阿蘇－4火砕流堆積物（角閃石デイサイト溶結凝灰岩、及び非溶結のガラス火山灰及び軽石）と後期更新世の中位段丘堆積物である[Tm]（礫、砂及び泥）が見られる。多良岳火山の噴出物には[T1]のほかに[T2]古期安山岩、[T3]（新期玄武岩）、[T4]（新期安山岩）があるが、小長井町より西側の大部分は[T2][T4]でいずれも安山岩地帯である。

鎌田(1979)によれば「有明海に面する山麓部の小長井地域は玄武岩溶岩地帯であり、竹崎は単独の玄武岩質火山体をなし、噴火口跡が竹崎港となっている」とのことで、島原半島南端から海岸線に沿って有明海を北上した場合、最初に到達する玄武岩地帯が小長井町井崎周辺ということになる。



第5図 長崎県域の支石墓と周辺の地質④

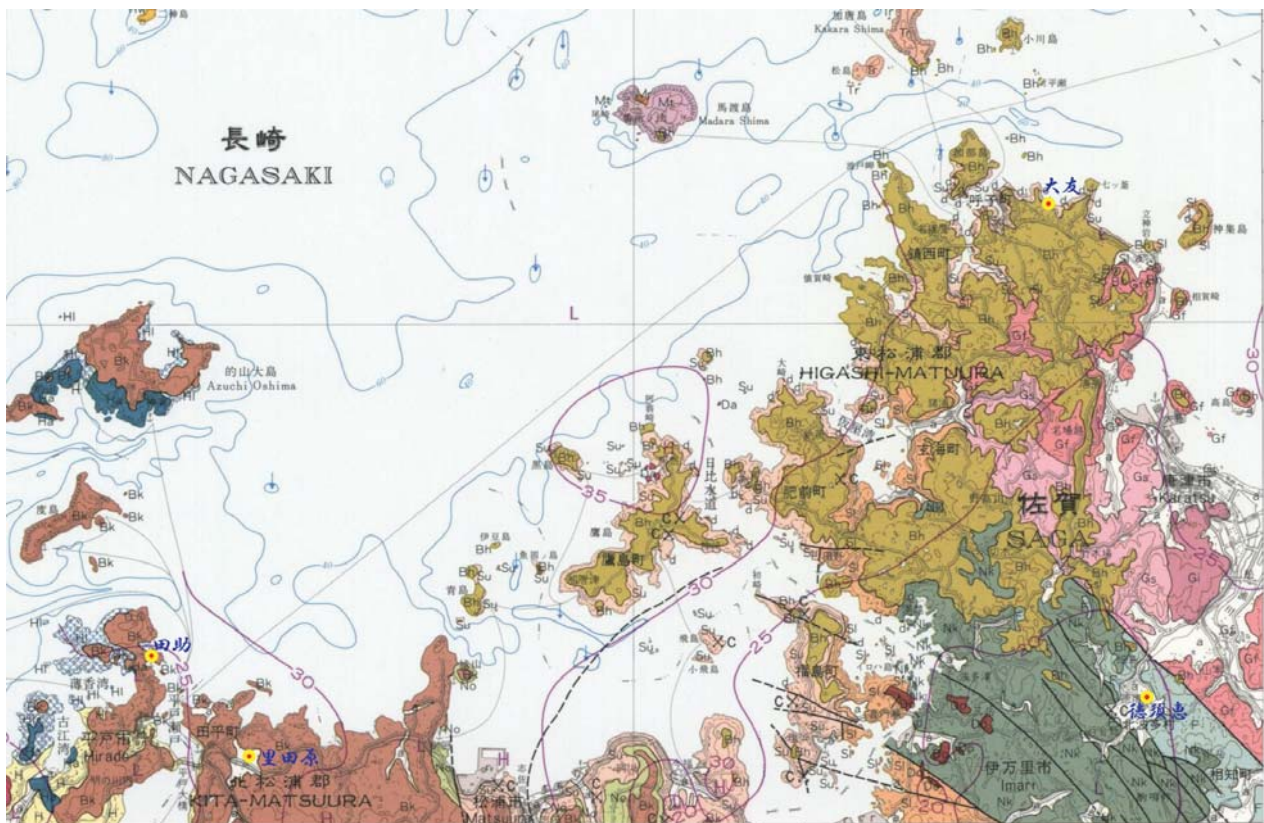
## B. 佐賀県域の支石墓と周辺の表層地質（第6図～第7図参照）

佐賀県における支石墓の分布は、唐津湾周辺と背振山南麓地域に大別される。前者は、割石・迫頭・葉山尻・岸高・森田・五反田の諸遺跡が唐津湾東岸に集中しているほか、東松浦半島北端には大友が、松浦川左岸のやや遡ったあたりに徳須恵が立地している。

川道寛さんは、前掲書の②唐津平野の支石墓のあり方について「唐津湾に北流する松浦川の河口付近に注ぐ宇木川・半田川という小河川の流域にある沖積平野に面した丘陵の先端部に立地している。そのあり方は5基から10数基の支石墓が一群をなして存在する。」と述べているほか、③佐賀平野の支石墓のあり方では「背振山系から佐賀平野に伸びる丘陵の先端部が支石墓の墓域に選択されている。久保泉丸山遺跡・礫石遺跡のように大規模なものもある。下部構造は石蓋土坑が大部分であるが、小児用と思われる甕棺もある。後世の古墳造営によって上部構造は破壊されている場合が多く、上石の多くは残っていない。支石が確認できるものは約半数で、本来はすべての支石墓に支石を有していたものと考えられている。時期的には縄文時代晩期終末（弥生時代早期）から弥生時代前期後葉・中期にいたるものもあるが、概して平野部に位置するものが後出する傾向にある。」と述べている。

**大友遺跡** 宇久松原と同様の砂丘遺跡だが、周辺の表層地質は新第三紀鮮新世後期の東松浦玄武岩類[Bh]（玄武岩溶岩（一部ドレライト））で、支石墓の上石として玄武岩の未風化核岩が利用できそうな点では、長崎県の田助や里田原と類似した環境と考えられる。

**徳須恵遺跡** 遺跡自体は第四紀完新世の堆積物である沖積地（[a]崖錐，沖積層及び海浜堆積物）に所在する。周辺の東側は古第三紀始新世の相知層群[F]（砂岩，泥岩及び石炭），さらに断層線の東



第6図 佐賀県域の支石墓と周辺の地質①

側は白亜紀の深江花崗岩 [Gf] (黒雲母花崗閃緑岩及び石英閃緑岩)や早良花崗岩 [Gs] (黒雲母アダメロ岩) が見られる。西側は古第三紀漸進世の杵島層群 [Nk] (砂岩, 泥岩, 礫質砂岩, 凝灰岩及び凝灰質砂岩泥岩) である。表層地質は他の諸遺跡と趣を異にするが, 遺跡から見て北・北東・北北西の各方向には, 極めて狭い範囲ながら大友遺跡周辺と同じ東松浦玄武岩類 [Bh] が見られる。

**割石遺跡・迫頭遺跡・葉山尻遺跡・岸高遺跡・森田遺跡** この5遺跡は, 唐津湾の東岸に集中して所在する。いずれも立地は丘陵部の先端もしくはそれに接する沖積地で, 周辺の表層地質は後期白亜紀前半旧期花崗岩類 (糸島型) 深江花崗岩 [Fuk] (片状細-中粒黒雲母花崗岩(ペグマタイトを伴う)) である。なお葉山尻遺跡の北方に位置する鏡山頂部の狭い範囲は, 新第三紀鮮新世玄武岩(能古島など) [B1] (アルカリ玄武岩溶岩) で, これが支石墓の上石として利用されているかについては確認していないが, 周囲の状況からは深江花崗岩 [Fuk] を利用している蓋然性が高いように思われる。

**五反田遺跡** 唐津湾東岸に所在し, 前述した葉山尻遺跡などとも近い位置関係にある。表層地質は後期白亜紀前半旧期花崗岩類 (糸島型) 糸島花崗閃緑岩 [Ito] (片状中粒角閃石黒雲母花崗閃緑岩及びトータル岩) である。

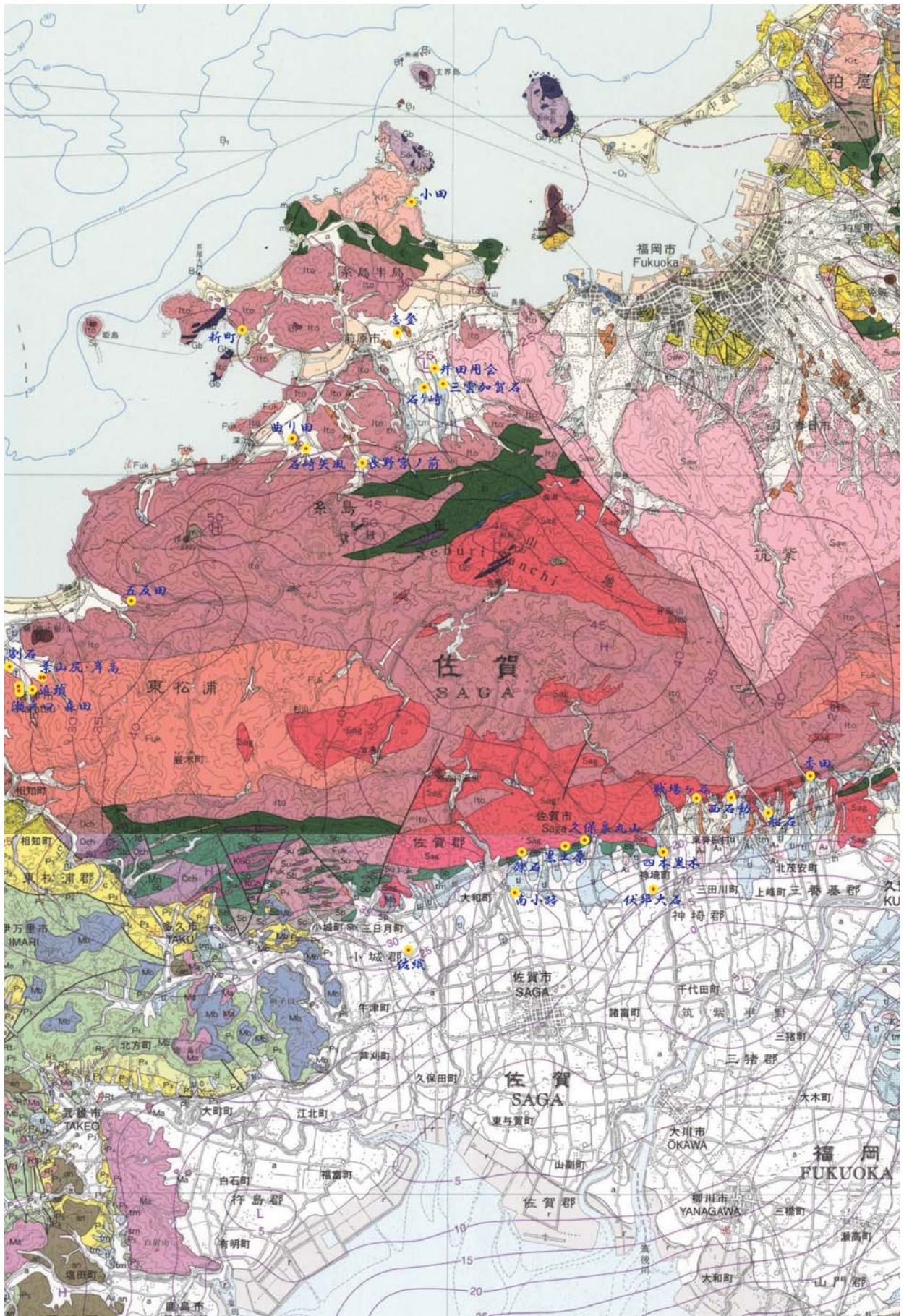
**佐織遺跡・南小路遺跡・礫石遺跡・黒土原遺跡・伏部大石遺跡・四本黒木遺跡・戦場ヶ谷遺跡・西石動遺跡・船石遺跡・久保泉丸山遺跡・香田遺跡** 背振山南麓～佐賀平野にかけて所在する。立地や考古学的特徴は, 先に引用した記述の通りである。佐織・南小路・伏部大石・四本黒木・西石動・舟石の6遺跡は, いずれも沖積地に, 礫石・黒土原・戦場ヶ谷・久保泉丸山・香田の5遺跡は, 丘陵の末端部に所在している。

周辺の表層地質は, 丘陵部分が後期白亜紀前半新期花崗岩類 (嘉穂型) の佐賀花崗岩 [Sag] (細-中粒ざくろ石含有白雲母黒雲母花崗岩 (ペグマタイトを伴う)) である。興味深いのは支石墓の分布が [Sag] の分布範囲と見事に一致している点である。佐織は, 地質図熊本の本A-1の東端近くに位置しており, [Sag] はその北側から東側にかけて分布している。東端には香田遺跡が所在しているが, この付近は長崎自動車道の路線上としては最後の [Sag] 分布域である。

### C. 福岡県域の支石墓と周辺の表層地質 (第7図参照)

ここでも川道さんの記述 (前掲書 1997) を引用する。「福岡県の支石墓はほぼ糸島地方に限定されると言っても過言ではない。そのあり方は1~10基程度の小規模な遺跡が普遍的で, 新町遺跡は例外的である。また支石墓は土坑墓・木棺墓などの墓制と混在することが通例で, 支石墓の築造が終焉したのちも甕棺墓などの墓域として継続的に営まれる傾向が看取される。」とのことである。

**小田遺跡・新町遺跡・志登遺跡・井田用会遺跡・石ヶ崎遺跡・三雲加賀石遺跡・曲り田遺跡・石崎矢風遺跡・長野宮の前遺跡** 多くは丘陵端部～沖積地に立地し, 一部は砂丘に所在する。小田の表層地質は後期白亜紀前半新期花崗岩類 (鞍手型) の北崎花崗閃緑岩 [Kit] (中粒普通輝石含有角閃石黒雲母トータル岩及び花崗閃緑岩) で, ほかの8遺跡周辺の表層地質は後期白亜紀前半旧期花崗岩類 (糸島型) 糸島花崗閃緑岩 [Ito] (片状中粒角閃石黒雲母花崗閃緑岩及びトータル岩) である。井田用会・石ヶ崎・三雲加賀石については, 東側に後期白亜紀前半新期花崗岩類 (嘉穂型) の早良花崗岩 [Saw] (カリ長石斑状中粒白雲母含有黒雲母花崗岩 (ペグマタイトを伴う)) の分布域が見られる。



第7図 佐賀県域の支石墓と周辺の地質②, 福岡県域の支石墓と周辺の地質



#### D. 表層地質に関するまとめ

長崎県域で支石墓遺跡の全てが玄武岩地帯に立地していることは明らかである。それも佐賀県域や福岡県域のように特定の岩石地帯に集中してのことではない。島嶼部・県北・西彼杵半島・多良山麓・大村湾岸・島原半島というふうに、各地に分散しているにもかかわらず、なのである。

宇久松原・田助・里田原はいずれも玄武岩地帯か、玄武岩の低丘陵に囲まれた沖積地に所在する。こうした地質的環境を「玄武岩地帯(a)」とする。天久保・風観岳・原山・井崎は、いずれも典型的な「玄武岩地帯(a)」である。一方、大野台・小川内・狸山・四反田の周辺は、浸食作用により失われているため表層地質における玄武岩の面積は狭いものの、板状石や未風化核岩の利用が可能と推定される環境で、これを「玄武岩地帯 (b)」とする。

佐賀県域のうち、唐津湾東岸の割石・迫頭・森田・葉山尻・岸高は、花崗岩地帯である。五反田は地理的にも上記の支石墓群に近いが、表層地質は糸島半島の遺跡群と同じである。同じ佐賀県でも、背振山南麓～佐賀平野にかけての一角は佐賀花崗岩との関係が強い。大友遺跡は佐賀県内の遺跡だが、田助・里田原と同類の「玄武岩地帯(a)」で、地質的環境としては長崎県北に含めて考えても大過ないであろう。

福岡県の支石墓は糸島半島周辺に集中しており、北端の小田は北崎花崗閃緑岩である。井田用会・石ヶ崎・三雲加賀石の3遺跡は東側に早良花崗岩の分布域が見られるものの、基本的には糸島花崗閃緑岩地帯である。志登の上石は花崗閃緑岩と玄武岩の両者が見られるが、これについては後述する。

以上をまとめると、長崎県域：玄武岩地帯(a)・(b)、佐賀県唐津湾東岸：深江花崗岩地帯、佐賀県背振山南麓～佐賀平野：佐賀花崗岩地帯、福岡県糸島半島周辺：糸島花崗閃緑岩地帯（一部、北崎花崗閃緑岩。志登の上石の半数は玄武岩）で、大きく見ると長崎県：玄武岩地帯、佐賀県：花崗岩地帯、福岡県：花崗閃緑岩地帯（+玄武岩）ということになる。

#### E. 韓半島の地質について

韓国の地質も簡単に見ておきたい。吉川敏之(2006)によれば「韓国の地質は、大きく4つの地域に地質構造区分され」ていて「北から Gyeonggi (京畿) 地塊, Ogcheon (沃川) 帯, Yeongnam (嶺南) 地塊, Gyeongsang (慶尚) 盆地」と呼ばれている。「韓国には花崗岩が非常に多く分布しており、韓国の地質の約1/3を占めて」いるとのことである。済州島については「韓半島南西沖に浮かぶホットスポット火山で全島がアルカリ玄武岩からなっている」という。細山光也(1996)は「半島全体に花崗岩が多いが、-中略- 松林花崗岩は半島北部に分布し、大宝花崗岩はソウルなど半島中部に多く、仏国寺花崗岩は南部に多い。」「鮮新世の地層は、済州島などに分布している。済州島、ウツリヨウ島、独島および白頭山などには第四紀の火山が形成されている」と記している。

『志登支石墓群』「第七章朝鮮・満州のドルメン」(藤田亮策)では、「石材はその附近に得られるものを使用し、扁平石の卓子形は石灰岩・砂岩等が多いが、朝鮮の各地には花崗岩が多いために、その巨塊が最も多く使われている。しかもかなりの遠距離から運んだと思われるものがあり、その石材の原所在地の知られるものが少なくない。」と記されている。

以上のことから韓国の地質は花崗岩が主で、玄武岩は少ないことが伺える。その点を確認するために、釜山大学に在籍中の広瀬雄一さんにメールで訊ねてみた。返事には「河仁秀先生と鄭澄元先生に聞きました。玄武岩は済州島と白頭山にしか無いとのこと。安山岩は何処にでもあり、といわれました。」とあり、後続メールには「支石墓材質は花崗岩が多数です。全羅南道では花崗岩の採掘場も見ついています。慶尚南道は仏国寺花崗岩帯です。」と記されていた。

### 3. 支石墓の立地と表層地質との関係が示唆すること

#### A. これは偶然ではない

地質図上で確認した支石墓遺跡の在り方は、長崎・佐賀・福岡という現在の行政区分に対応するような違いが明らかになった。これは偶然なのであろうか。統計学の入門書ではコインを空中に投げた場合の表裏の出現確率が問題とされることがある。出現確率を1/2と仮定し試行回数を10回とした場合、10回連続で表(または裏)が出続ける確率は、2の10乗分の1 = 1/1024 = 0.097%となる。これは極めて低い確率で「滅多に起こらないことが起こっている」と考えられる。この事象が現実に発生した場合、偶然の結果である確率がゼロではないにせよ、通常は何らかの理由を考える必要がある。とくに金銭が絡んでいる場合、何らかの作為的な事情、つまり「イカサマ」によるものと判断されるであろう。さもなくば超能力者か魔法の仕業である。

ここで取り上げた長崎県内の支石墓遺跡は計11カ所である。近似例として佐賀県大友遺跡を含めれば計12カ所となる。そのすべてが玄武岩地帯(a)・(b)に立地していることを確率論的に計算するのは難しく、筆者の思考のおよぶレベルではないが、相当に低いであろうことは容易に想像できる。その背景には、何らかの事情があると考えた方がよさそうである。

宇久松原遺跡では、支石墓以前の文化として縄文後期の阿高式系土器が確認されていることから、宇久島の中でも遺跡が所在する地域が古くからの居住適地であり、そこが偶々、玄武岩地帯であったと解釈することも可能ではある。しかし風観岳や原山は、標高が200mを超える山中である。とても偶然による選地とは思えない。それなりの理由が想定されるべきであろう。

#### B. 支石墓築造における「石材へのこだわり」について

長崎県域における支石墓が玄武岩地帯(a)・(b)に偏在している事実は、築造集団にとっての「玄武岩(あるいは玄武岩地帯)へのこだわり」の強さを示していると考えられる。端野晋平さんの「支石墓伝播のプロセス - 韓半島南端部・九州北部を中心として -」(端野 2003)の、[Ⅲ. 分析とその結果 C. 上石の形態・規模の比較]には極めて重要な記述が見られる。少し長くなるが引用させていただこう。

「上石の形態・規模は、支石墓の築造過程において、上石の選定が単純に個人の任意によってではなく、集団のメンタル・テンプレート(mental template)(Deetz 1967)により行われたことを考慮すると、韓半島南端部と九州北部の支石墓の親縁性を測り、伝播ルートを推定する上で重要な属性である。上石に用いられる石材は日韓両地域ともに主として花崗岩・玄武岩・安山岩等の火成岩であり、各地域での差異は環境資源に起因する差異というよりは、むしろ支石墓築造に際して集団相互のメンタル・テンプレートの差異を大きく反映するものと考えられる。」との指摘である。なお James Deetz の『Invitation to Archaeology』は、1988(昭和63)年に邦訳され、日本語で気軽に読めるようになった。『考古学への招待』(関俊彦 1988)では、mental template は「精神的範型」と訳されている。

支石墓の築造に際し、その精神的範型に玄武岩や花崗岩など特定の岩石が重要な要素として組み込まれているのであれば、たとえば長崎県域の支石墓遺跡が、玄武岩地帯に偏在していることは頷ける。佐賀県域・福岡県域についても、志向する岩石が花崗岩や花崗閃緑岩など長崎県域とは異なるにせよ、精神的背景としては同一視してよさそうである。そうした前提で石材への「こだわり」を考えるために、県内の支石墓遺跡としては最も韓半島に近い宇久島を基点として、天久保(西彼杵半島)、田助・里田原・大野台・小川内・狸山・四反田(県北)、風観岳(大村湾南岸)、原山(島原半島)、井崎(有明海西岸)の各支石墓遺跡にいたるルートを想定し、その間の地質的環境を概観しておきたい。

### (1) 宇久島から天久保までの想定ルートと表層地質（第8図～第9図参照）

宇久島の最高標高は城ヶ岳の258mである。「地上から見渡せる距離・高精度計算サイト」（URL：<https://keisan.casio.jp/exec/syster>）で計算すると理論上は60.81km先までを見通すことができる。宇久島の南方、約28kmに位置する頭ヶ島白浜遺跡では韓国隆起文土器が出土しており（古門編 1996）、少なくとも縄文前期ころからの彼我の交流が想定される。宇久松原遺跡の支石墓と併せて考えれば、断続的ながら古くからの関係が続いていた可能性を想定できよう。小値賀町の野崎島や新上五島町の中通島北部の東岸を経由すれば、宇久島から頭ヶ島への到達は容易だったと思われる。頭ヶ島の東側には、飛石状に平島・江島・大立島・大島・寺島がある。各島の間隔は5～10km程度である。大島の東端の先には中ノ島・端ノ島があり、ここまで来れば西彼杵半島の天久保は、もう目前である。

地質的な環境を見ると、頭ヶ島は全島が堆積岩（五島層群）である。平島も大部分が堆積岩（野島層群）で、一部に五島花崗岩類の分布が見られる。江島はほぼ全域が白亜紀の江島層（安山岩火砕岩・溶岩・岩脈・シルト岩及び礫岩を原岩とするホルンフェルス）で、南端のきわめて狭い範囲に白亜紀の花崗岩類が見られる。大立島は全体が白亜紀の花崗岩類である。大島は大部分が堆積岩（西彼杵層群）で、南東側には間瀬・杵島層及び上部伊王島層の堆積岩類が分布している。寺島もほぼ全島が堆積岩類（高島・寺島・諫早層群）で占められ、ごく狭い範囲に花崗岩類が見られる。上述したルートを辿った場合、天久保周辺は一定の拡がりをもつ初めの玄武岩地帯（a）ということになる。

### (2) 四反田・狸山・小川内・大野台・田助・里田原までの想定ルートと表層地質（第3図参照）

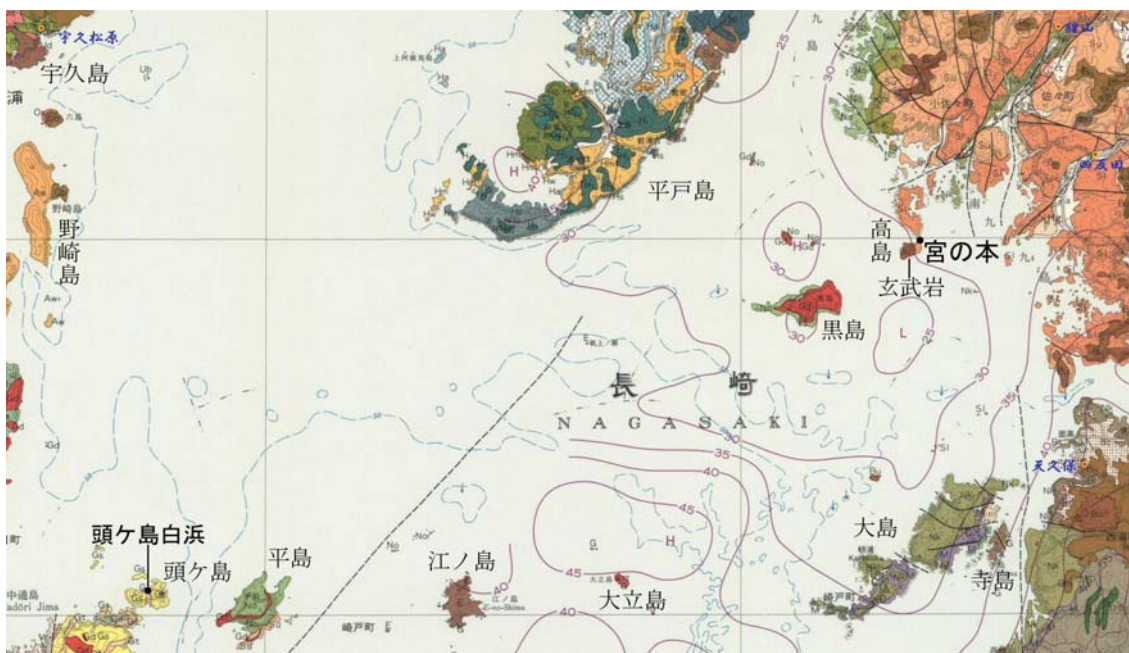
大立島から北東方向に15kmほど進むと佐世保市黒島に至る。黒島の大部分は五島花崗岩類で、海岸線に沿うように堆積岩類（野島層群）が帯状に分布している。その先の高島は大部分が堆積岩類（相浦層群）だが南端は玄武岩の分布域である。「筋骨隆々の弥生人」が発見されたことで有名な宮の本遺跡は、この玄武岩地帯に隣接する砂丘上に立地している。さらに進んで佐々川を遡れば狸山にいたり、黒島から北九十九島を経て江迎川を遡れば、大野台・小川内も間近である。この一帯は先述した玄武岩地帯（b）で、新第三紀層である佐世保層群の上部を北松浦玄武岩が覆っているが、浸食作用が進んでいて平頂部にのみ玄武岩を残すメサ（卓上台地）の特徴的な地形が形成されている。北九十九島を北上して平戸瀬戸を抜ければ、平戸島北端の田助にいたる。里田原は、田助の南東に位置する釜田川の河口（33.369528, 129.593000）から遡上した可能性が高いと思われる。

### (3) 天久保から風観岳までの想定ルートと表層地質（第4図参照）

天久保の上陸地点を現在の西海市面高～黒口周辺と仮定した場合、そこから風観岳にいたるには、いったん北上して佐世保湾に入り針尾瀬戸を抜けて大村湾に入る必要がある。針尾瀬戸の両岸は玄武岩地帯で、それより北側にも玄武岩の散在的な分布域がある。ハウステンボスの西側は西彼杵層群の堆積岩類で、部分的に玄武岩が残っている。早岐瀬戸を挟んだ川棚町側も西彼杵層群が広がっており、その上部を有田流紋岩類（**Ar**:黒雲母流紋岩・ざくろ石流紋岩及び角閃石流紋岩溶岩, **At**:火山角礫岩・凝灰角礫岩及び凝灰岩）が覆っている。大崎半島はほぼ全域が有田流紋岩である。川棚川右岸の大村湾に近い一帯には玄武岩が見られる。川棚川左岸と彼杵川右岸に挟まれた東彼杵町にかけての一帯は虚空蔵山火山岩類（**Ka**:普通輝石安山岩・かんらん石輝石安山岩溶岩, **Kt**:輝石安山岩溶岩及び凝灰角礫岩, **Kf**:輝石安山岩溶岩）である。彼杵川左岸から大村市北部にかけての一帯は散在的ながら大野原玄武岩や、北松浦玄武岩が比較的広い範囲に分布している。その南側は多良岳火山岩類輝石安山岩火砕岩だが、さらに南下して鈴田川を越えると風観岳が所在する北松浦玄武岩地帯となる。



第 8 図 長崎県域の支石墓遺跡と関連遺跡の位置



第 9 図 宇久島・頭ヶ島・平島・江島・大島・寺島・西彼杵半島の位置と地質

大村湾西岸（西彼杵半島東岸）の表層地質も見ておきたい。海岸沿いの大部分は長崎変成岩類だが、西海橋の南方に位置する西彼町白崎郷から下岳郷にかけては北松浦玄武岩のやや纏まった分布域が見られる。それより南側は変成岩類が主体だが、大村湾南端に近い時津町子々川郷周辺にいたると再び北松浦玄武岩の分布域があり、西時津郷周辺にも同様の玄武岩が見られる。それより東側の大部分は長崎火山岩類で、風観岳周辺までの間に玄武岩の分布域は見られない。

以上述べてきたように針尾瀬戸から大村湾に入った場合、その南下ルートが東岸であれ西岸であれ沿岸を航海する途中で数カ所の玄武岩地帯に遭遇した可能性はきわめて高い。にもかかわらず大村湾沿岸で現在までに確認されている支石墓遺跡は風観岳のみであり、その位置は針尾瀬戸から見て最も奥まった大村湾南岸の、しかも標高200mを超える山中である。風観岳の在り方は、玄武岩地帯へのこだわりの強さを示すと同時に、なにか別の事情を暗示しているのかもしれない（註6）。

#### （4）天久保から原山および井崎までの想定ルートと表層地質（第4図・第5図・第11図参照）

天久保から島原半島に所在する原山までは、西彼杵半島西岸に沿って角力灘（五島灘）を南下し、長崎半島先端の野母崎を経て橘湾沿いに進むというルートを考える。他のルートと同様に、小舟での沿岸航海を想定すれば、最も現実的と思われるからである。西彼杵半島の表層地質は大部分が長崎変成岩類で、玄武岩は西海市大瀬戸町から長崎市の北部にかけて散在的に見られる。松島や池島などがそうであり、長崎市外海町周辺や三重・檜山町の周辺も玄武岩の分布域である。式見町北部（註7）・四杖町・見崎町の山中にも大野原玄武岩の分布域が見られるが、いずれも範囲は狭い。これより南側の長崎港口にかけては、主に長崎火山岩類（輝石安山岩溶岩・角閃石安山岩凝灰角礫岩）地帯である。

長崎港の対岸は長崎半島の基部である。小ヶ倉あたりからは、再び長崎変成岩類である。玄武岩がないわけではないが、その分布は西彼杵半島のそれよりさらに狭小である。長崎半島も西彼杵半島と同様に大部分は長崎変成岩類で、蛇紋岩がそれに次ぎ、古世代の変斑れい岩、古第三紀の堆積岩である香焼層がある。南端の野母崎を過ぎて東進すると天草灘・橘湾に入る。ピワで有名な茂木港周辺には白亜紀の三ツ瀬層（赤色泥岩・砂岩及び礫岩）や新第三紀鮮新世の茂木層（凝灰岩・軽石凝灰岩及び泥岩）が見られるが、その先は長崎火山岩類である。牧島もほぼ輝石安山岩溶岩だが、ごく一部に大野原玄武岩が見られる。牧島対岸の舟石岳・行仙岳・井樋ノ尾岳から諫早市飯盛町下釜付近までは、井樋ノ尾岳安山岩（角閃石安山岩溶岩円頂丘及び岩脈）である。その東から有喜周辺までは有喜火山岩類、南串山火山岩類、上滴水安山岩及び大岳火山岩類（火山砕屑岩、礫、砂及び泥）である。森山町周辺は同じく有喜火山岩類ほか（安山岩溶岩及び火砕岩）である。

橘湾奥部の雲仙市愛野町から北東側の吾妻町、瑞穂町、国見町周辺は、古期雲仙火山前期の火砕流及び火山麓扇状地堆積物（角閃石デイサイト火山灰、火山礫及び火山角礫（軽石）を含む）である。千々石町と小浜町の一帯は古期雲仙火山後期の溶岩（角閃石デイサイト・安山岩溶岩）である。北有馬町に入っても古期雲仙火山前期または後期の火砕流及び火山麓扇状地堆積物（角閃石デイサイト火山灰、火山礫及び火山角礫（軽石を含む））か（角閃石デイサイト・安山岩火山灰、火山礫及び火山角礫）である。

さらに南下して南串山町周辺までくると有喜火山岩類、南串山火山岩類、上滴水安山岩及び大岳火山岩類（安山岩溶岩及び火砕岩）とともに、ようやく諏訪池玄武岩及び相当層（玄武岩溶岩及び火砕岩）に到達する。ここが原山支石墓群の一帯である。この玄武岩は南串山町甲の海岸部（32. 687831, 130. 157869）にもわずかな分布域があり、原山へは現在の北串山郵便局付近（32. 692932, 130. 171719）の南方に注ぐ境川を遡上するルートが、最も考えやすい。

島原半島をさらに南下し、加津佐町に入ると狭い玄武岩地帯に遭遇する。この玄武岩は第四紀前期更新世口之津層群上部上原玄武岩及び相当層で、口之津の山中にも散在的に分布している。島原半島南端の口之津町早崎一帯は、新第三紀前期鮮新世の早崎玄武岩の分布域である。口之津を過ぎて北上すると、有馬川の河口にいたる。ここから遡上すれば上原玄武岩の分布域である（註8）。この周辺より北側の島原半島沿岸部（有明海側）には、玄武岩の分布域はない。諫早湾に沿って航海すれば、やがて玄武岩地帯である井崎周辺に到達するが、国見町神代か瑞穂町西郷あたりから渡海したとしても不思議ではない。

#### (5) 玄武岩志向性の強さと石材識別のたしかさ

西彼杵半島の天久保を基点として南下するルートを考えて場合、原山まではとても長い旅である。もちろん海岸線を忠実に辿ったという証拠があるわけではなく、むしろ西彼杵半島南部の三重や手熊周辺からは、長崎半島西側の伊王島・沖の島・香焼島を経て深堀周辺にいたった可能性もある（註9）。深堀より先は、長崎半島の海岸線に沿って南下し、野母崎より東側は橘湾沿い進んだ可能性が高い。

このルートでは、牧島のごく一部を除いて、原山に到達するまでの間に玄武岩地帯はほとんど存在しない。つまり支石墓築造集団にとって原山周辺は最初の玄武岩地帯であり、必要条件を満たす場所だったと考えられる。玄武岩に対する強い志向性にもとづく選地の可能性を示す事例といえよう。

想定したルート上に玄武岩地帯が少ないことは明らかだが、輝石安山岩溶岩地帯（長崎火山岩類）の分布域はある。輝石安山岩の未風化核岩は、長崎市内の山中でもよく見かけるもので、支石墓の上石として使えそうなサイズや形状も珍しくない。風化が進んでいる場合は外見が玄武岩と似ていることもある。しかし大村湾岸も含めて、現在までに輝石安山岩地帯における支石墓の確認例はない。築造集団にとって玄武岩と安山岩（註10）の未風化核岩は、「似て非なるもの」として弁別されていたのであろう。こうした事実も、玄武岩への強い志向性を如実に物語る有力な状況証拠と考えておきたい。

#### (6) 砂岩の利用について

長崎地域の支石墓が玄武岩地帯に偏在しているなかで、上石に砂岩を用いている例がある。小川内と宇久松原である。小川内では「一〇基の支石墓はすべて箱式石棺を主体部にもつ形態である。遺跡の土層は、砂岩の基盤の上に三〇～四〇センチの厚さで堆積していた。石棺を築くための土坑は粘土中だけではなくさらに砂岩の基盤を一〇～三〇センチ程度掘り込んでいる。なお基盤を掘り込むために使用した工具の跡が土坑の砂岩に残っていた。」（註11）とされる。

草稿に目を通していただいた福岡県教育委員会の大庭孝夫さんからは「大野台や狸山と近い地理的条件ながら（小川内で玄武岩に対する）こだわりがないことについては、どう理解すればよいのか」という重要なご指摘を受けている。現時点では、この疑問に対する明確な回答を用意できていないが、憶測を交えた考えを記しておきたい。

前述したように大野台・小川内・狸山・四反田はいずれも玄武岩地帯(b)に所在する遺跡で、本来は広く玄武岩に覆われていたものが、風化・浸食によって堆積岩類が多く露出しているエリアである。未風化核岩がさらなる風化によって小形化し、石棺の石材には使えても支石墓上石としての大きさを保持していなかったために、砂岩が代替利用された可能性はあろう。小川内ではすべての内部主体が石棺であり、そうしたことと関係があるのかもしれないが、それについても今後の検討課題としたい。

なお宇久松原でも5号支石墓の上石が砂岩と報告されているが、専門家による同定ではないらしい。宇久島では堆積岩の分布域がないため、島外からの搬入を含めた再検討が必要であろう。

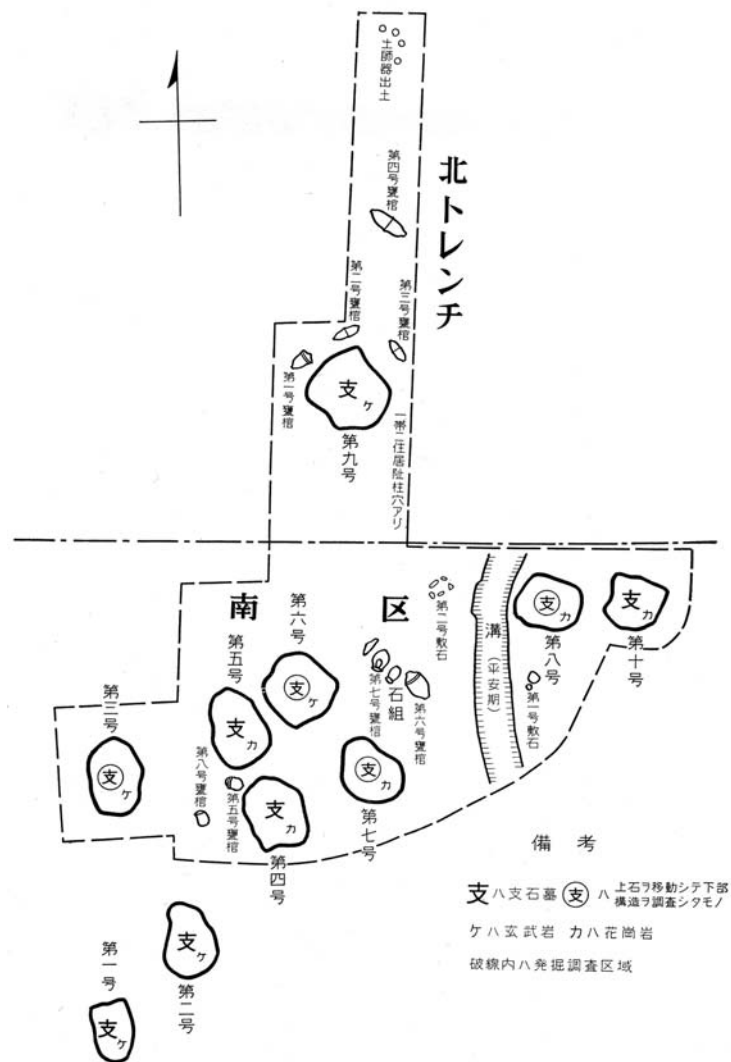
### C. 志登支石墓群における花崗閃緑岩と玄武岩の共存について（第10図参照）

ここで福岡県糸島半島に所在する志登支石墓群の問題に触れておきたい。志登では半数の上石が花崗閃緑岩だが、残り半数の上石は玄武岩である。両者は共存していて、ほぼ玄武岩一色と考えられる長崎県域とは、明らかに異なる様相を呈している。この問題は、どう理解すればよいのであろうか。

志登支石墓群の報告書（文化庁 1956）は、まさに「微に入り細を穿つ」というべき内容で、遺構・遺物の問題に留まらず、支石墓を築造するに際しての、あらゆる可能性に言及されている。まずは地質的環境についての記載内容を確認しておきたい。第四章第一節一、3. 志登支石墓の岩石類（唐木田芳文）では「支石墓一〇基はその岩質から次のように類別される。」とし、「一、かんらん石玄武岩A、（一号、二号、及び九号）、二、かんらん石玄武岩B、（三号及び六号）、三、花崗閃緑岩（四号、五号、七号、八号、及び一〇号） このほかに埋もれた小破片としてかんらん石玄武岩Cがある。」と述べられている。それぞれの岩石学的所見も記されているが、それらについては、省筆する。

「支石墓岩石の推定産地」については「花崗閃緑岩はその岩質・ジルコン群色から見て糸島郡一帯に広く分布する糸島花崗閃緑岩に属するものである。この糸島花崗閃緑岩の中でもとくに青色石英を含むものは可也山山体、加布里に産す。支石墓玄武岩に似た岩石は残島・今津・今山・可也山等に転々と分布している。支石墓の花崗閃緑岩と玄武岩が共に同じ場所から運ばれてきたものと仮定すれば、可也山が最も可能な出所である。他は何れもこの二種類の岩石が共存していない。なお可也山には現在も支石墓の岩石のような大きな転石が存在している。以上のことから支石墓岩石は可也山から運び出された可能性が最も強い。」と述べられている。

第八章 志登支石墓群の地位第一節 志登支石墓群の年代（鏡山猛・森貞次郎・齋藤忠一部補足）では「志登の甕棺の形式は、古くは夜臼式より遠賀川式を経て中期須玖期に及んでいる。－中略－或は上石や石質の差異によって前後の説をなすかも知れない。すなわち、支石墓群集の中心にある四・五・七・八が花崗岩であり、その近接地三・六が玄武岩B、周辺の一・二・九の三個が玄武岩Aとなっているから、石質と位置に関係があり、中心部が先に設けられ、後に周縁に拡がり石の材質を変え



第一一図 遺跡調査説明略図 (Fig. 11)

第10図 支石墓と上石岩石名の関係（『志登支石墓群』より転載）

たという考え方もあり得る次第である。」という、瞠目すべき仮説が示されている。

6号は、上石が玄武岩Bだが、3個の支石は、1個がかんらん石玄武岩、2個が中粒石英閃緑岩で、副葬品は「石囲の底面と思われる高さから打製の石鏃六個が発見された。-中略- 鏃先をほぼ東方に向けていることも偶然ではないように思われる。」と記されている、石鏃の石質は2点が黒曜石、4点が石英質黒色片岩とのことである。ほかの遺物では「弥生式土器片（須玖式）・石庖丁未完成品破片と共に須恵器・青磁残片」もあるが、「後世の堆積土であることが明らか」とされている。

8号の上石は花崗閃緑岩で、副葬品として4点の磨製石鏃が発見されている。「上石直下から弥生式時代文化前期の土器の破片も発見されて、磨製石鏃と共に年代推定の上に有力な手がかりを得ることができた。」とあり、土器片のうち1片は「薄く丹が塗られてへら磨研された小形の壺の口縁であることが確かめられた。」と述べられている。支石は1個で、花崗岩（註12）と記されている。

志登の報告書で述べられている仮説は、墓域の中心（花崗閃緑岩）→周縁（玄武岩）という分布の在り方から上石の岩石の違いに時間差を想定しようとするものである。これは同一集団における内的な岩石志向の変化を示す可能性もないわけではないが、明確な動機は見いだしにくい。糸島半島周辺では花崗岩・花崗閃緑岩を志向する集団が先行して支石墓を築造し、その後に玄武岩を志向する集団が到来して支石墓を築造したのかもしれない、志向する岩石を異にする集団が接触・融合し、同化していく過程の一端を示していると考えられなくもない。その場合、地理的には玄界灘沿岸（東松浦半島）に所在する佐賀県大友との関係が考えやすいが、有明海西岸の井崎も玄武岩地帯(a)に立地していて時期的に原山より新しいことから、志登との関係についても興味を惹かれるところである。

#### D. ここまでのまとめ

長崎県域において支石墓が築造されている遺跡周辺の表層地質を検討した結果、すべてが玄武岩地帯(a)(b)に所在していることが判明した。また宇久松原が所在する宇久島を基点とし、長崎県本土部の各支石墓遺跡へいたるルートを実定して表層地質を概観した結果では、大村湾沿岸では玄武岩地帯が比較的多く見られるのに対し、西彼杵半島・長崎半島・橘湾沿岸を経由して島原半島の原山や有明海西岸の井崎にいたるルートでは玄武岩地帯が少なく、ほぼ原山周辺が初の玄武岩地帯であることも明らかになった。さらに想定したルート上には輝石安山岩溶岩地帯が複数箇所存在するにもかかわらず支石墓が築造されていない事実も明らかとなり、支石墓築造集団にとっての玄武岩に対する志向性の強さが浮き彫りになった。

玄武岩への強い志向性が見られる一方、小川内や宇久松原のように上石に砂岩を利用している事例も見られた。こうした例外的な存在は、支石墓築造集団にとっての志向性が「上石としての玄武岩」ではなく「地質的環境としての玄武岩地帯」にあったことを示していると考えておきたい。

福岡県の糸島半島に所在する志登支石墓群では、半世紀以上前に刊行された報告書の考察において分布の在り方から見た上石と岩石名との関係が注目され、花崗閃緑岩（中心部）→玄武岩（周縁）という差異が時間差を示しているかもしれないという仮説を示されていたことに触れた。そしてこれは単なる石材志向性の変化ではなく、花崗閃緑岩と玄武岩という石材に対する志向性を異にする集団が接触し、同化していく過程の一端を示している可能性があることを考えた。

このように支石墓上石の岩石名や遺跡周辺の表層地質など地質的環境に目を向けることで、支石墓に関する新たな事実が明らかになった。それゆえ支石墓が特定の岩石地帯に偏在して築造されているという事象は、考古学的見地からの検討対象になるものと判断される。とくに長崎県域では玄武岩への志向性が強さが、伝播ルートを考える際の有力な手がかりになりそうである。



#### 4. 伝播ルートの問題 ー対馬・壱岐で支石墓が発見されない理由ー (第11図参照)

支石墓の伝播に関する、これまでの研究を簡単に振り返っておきたい。端野晋平さんの論文(2003)では「起源地については特に全羅南道に当たる西南部とする見解(西谷 1980; 本間 1991)で一致しているが、経由地については済州島(本間 1991)と対馬・壱岐(西谷 1980)の2見解に分かれる。また、最初の到達地についても五島列島を含む長崎県の西北九州(沈奉謹 1979; 西谷 1980; 本間 1991; 森田 1997)と玄界灘沿岸の北部九州(森 1969; 甲元 1978; 岩崎 1980)の2見解に分かれる。」と述べられている。

宇久松原の報告書で川道寛さんは a. 東南部から対馬・壱岐を経由して西北九州にいたる北方説と、b. 西南部から済州島を経て西北九州へいたる西方説があること(西谷 1980, 1997)を紹介し、「碁盤型が朝鮮半島西南部に分布の中心があることを考えれば、西方説は理解しやすいところもあるが、半島西南部あるいは済州島からの距離は200kmを超えることから通常の往来を想定することは困難で、不時的な漂着が想定できる程度であろう。ー中略ー 長崎県西北部と朝鮮半島西南部もしくは済州島との交流を示す遺物がまったく存在しないこともこの進路をとったとすることに否定的な材料である。」と述べ、土器の検討から「宇久松原遺跡の編年的位置は支石墓として最古期におくことはできない」とする。さらに「対馬・壱岐両島には支石墓はみられない。それどころか縄文時代晩期後半の遺跡は皆無ではないが、きわめて少ない。この時期にはこの地域は半島と九州の中継地としての性格よりも通過地点と位置づけたほうが良さそうである。とりあえずここでは西谷説を支持しておきたい。」と結んでいる。この西谷説とは、a. 北方説のことである。

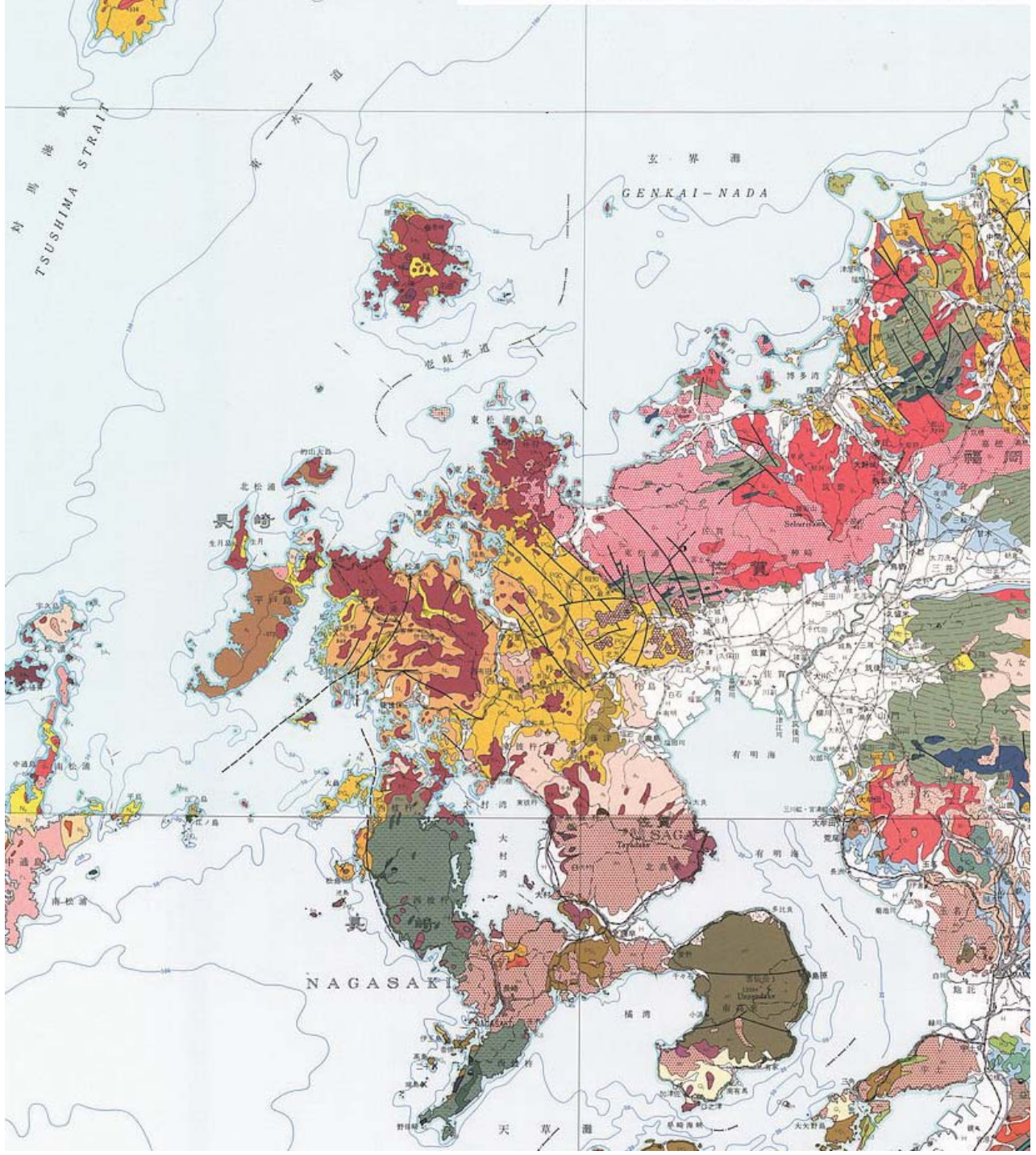
2014(平成26)年9月、長崎県埋蔵文化財センターで「支石墓の謎 墓地にみる日韓交流」というシンポジウムが開催された。その概要は古澤義久さんがまとめておられる(古澤 2016)ので、それを引用しながら内容を振り返っておきたい。主題は、「なぜ対馬・壱岐に支石墓が存在しないのか」ということである。「その理由として想定されるのは、①「対馬島・壱岐島は通過地点であるから存在しないという可能性」、②「済州島→五島ルートで支石墓が伝播した可能性」、③「対馬島・壱岐島にも存在するが、発見されていない可能性」の3種の可能性が最初に提示された」という。「日本列島の支石墓の起源地は嶺南地方・湖南地方とみられるので、①の可能性が最も高いであろうという雰囲気であった」と述べられている。

古澤さんの個人的見解としては、「対馬・壱岐で支石墓が存在しない理由として、該期の集落が対馬・壱岐には存在するものの、支石墓という精神文化を規定する墓制の受容に係る決定を行い、それを九州島に流布するほどの影響力を持った大きな集団が存在しなかったためであると推定したことがあった。」と述べておられる。このように支石墓の伝播については、従来、多種多様な可能性と見解が示されている。

繰り返しになるが、端野さんによれば「上石に用いられる石材は日韓両地域ともに主として花崗岩・玄武岩・安山岩等の火成岩」とのことであり、小稿で取り上げた西北九州の支石墓周辺の表層地質は玄武岩・花崗岩・花崗閃緑岩である。渡来人が西北九州という異郷の地において、故郷では馴染み深かったであろう石材と同一の地帯を探し求めたと仮定するならば、玄武岩に馴染み深い集団は墓域としての玄武岩地帯を探し求めるであろうし、花崗岩や花崗閃緑岩に馴染み深い集団ならば、花崗岩地帯や花崗閃緑岩地帯を目指すのは当然のことと言えよう。まさに端野さんが指摘されたメンタル・テンプレート、に基づく社会的(伝統的)行為と考えられるからである。そうした前提で以下では、支石墓研究の積年の課題でもある「対馬・壱岐で支石墓が発見されない理由」について地質的な環境の面から考えてみたい



50 万分の1地質図 (福岡・鹿児島) の凡例を元に作成 (一部改変)



第11図 1 : 500,000地質図 (福岡・鹿児島)

### A. 花崗岩・花崗閃緑岩を志向する集団の場合

唐津湾東岸の表層地質は主に花崗岩、糸島半島周辺では主に花崗閃緑岩である。地質的環境という点では花崗岩の利用が多い韓半島との類似度が高い。一方、中継点と考えられる対馬・壱岐を地質図で確認すると、壱岐の大部分は玄武岩であって花崗岩・花崗閃緑岩地帯は見られない。花崗岩・花崗閃緑岩を志向する集団が壱岐を経由したとしても、志向する岩石自体が存在しない地質的環境だったならば支石墓を築造しなかった（できなかつた）のは当然の帰結と言えるであろう。

対馬の地質は堆積岩(対州層群)が大部分を占めるが、巖原町内山から豆敷にかけての山中に花崗岩の分布域がある。対馬市観光交流商工部博物館建設推進課の尾上博一さんにお訊ねしたところ「内山から豆敷にかけては、たしかに花崗岩が分布しています。顕著に露頭しているのは内山で、内山集落の中を流れる河川の河床が滑らかな花崗岩で構成されているのは、観光地にもなっています。」「内山は対馬の中でも希な海岸に面していない集落です。」「豆敷では山中で花崗岩の露頭はあまり目立ちません。従って、海岸にも花崗岩の礫を見ることはほぼありません。」との回答をいただいた。

対馬は万関瀬戸を挟んで上・下両島に分かれるが、先史時代の遺跡が圧倒的に多いのは上島である。下島でも花崗岩の分布域に近い豆敷周辺に縄文時代～古墳時代とされる遺跡がないわけではないが、わずか3カ所と極端に少ない。こうした事情もあり、渡来人が対馬を経由したとしても花崗岩の存在を知ることはなく、支石墓の築造にいたらなかった可能性が考えられよう。

### B. 玄武岩を志向する集団の場合

花崗岩・花崗閃緑岩に対する志向性が看取される玄界灘沿岸（唐津湾東岸～糸島半島周辺）に比べ、長崎県域では玄武岩に対する志向性が顕著である。特定岩石への志向性には、故地における伝統的な石材利用が大きく関わっているものと考えられる。少なくとも玄武岩との関わりがない集団で玄武岩に対する強い志向性が生まれるとは考えにくい。支石墓の系譜が韓半島に求められ、玄武岩が中朝国境の白頭山と済州島にしか存在しないという前提で考えれば、済州島が故地としての最も有力な候補になるのは必然である。そして済州島から宇久島へ、さらに頭ヶ島・平島・江島（註13）・大島・寺島を経由して西彼杵半島、あるいは県北や島原半島へという一連のルートは地理的にも無理なく想定しやすい。シンポジウムの仮説②「済州島→五島ルートで支石墓が伝播した可能性」では対馬・壱岐を経由するとは考えられないので、この場合も両島で支石墓が発見されないのは当然と言えよう。

### C. 済州島との関係について思うこと

ここで済州島を故地あるいは経由地とする仮説は、玄武岩への強い志向性や表層地質との関係からの推測に過ぎないもので、考古学的手続きによるものではない。「長崎県西北部と朝鮮半島西南部もしくは済州島との交流を示す遺物がまったく存在しないこと」や済州島と西北九州の支石墓自体の非類似性、200<sup>km</sup>を超える長距離の航海が可能であったか、という疑問が示されるのも当然である。

端野さんも、IV. 考察 B. 伝播ルートで李清圭氏の研究を引用し、済州島の支石墓が「最終的には数枚の板石を地上に立てて、それを埋葬施設とするいわゆる「済州島式」へと独自の型式変化を遂げることが想定されている。それらの年代は出土遺物が少なく不明な点が多いが、おおよそ無文土器時代終末から三韓時代・三国時代前・中期（郭支里式）にわたる時期に属す。また、数十、数百mの間隔をとって多くが1基ずつ分布する点は、主として群集して墓地を形成する韓半島南端部支石墓や日本の初期支石墓とは異なる。」「特に地域性をよく示す住居址では - 中略 - 松菊里式住居址（休岩里式）が済州市三陽洞遺跡で検出されている。これは日本にみられる - 中略 - 松菊里式住居址

(検丹里式)とは異なる。したがって済州島支石墓は、日本支石墓とは異なり韓半島西南部に起源する可能性が高く、日本への伝播ルートにおける経由地としての可能性は低い」と結論づけておられる。

このように地質的環境の視点から見た場合、済州島が有力な候補になりうる可能性は高いものの、従来の考古学研究の成果と整合しない点が最大の問題となる。しかし済州島との関係を否定すると、逆に地質的な視点から見えてきた「玄武岩へのこだわり」の由緒を何処に求めるべきか、という問題が残る。これは自然科学の成果にもとづくことであるから、簡単には動かせない。今回は触れることができなかつたが、今後は中国沿海部の地質的環境を含めた、広範囲な検討も必要になるであろう。

産経ニュース(2015.8.7 07:06)に掲載されている高倉洋彰氏の「【歴史のささやき】「支石墓」から見る古代の交流」(<https://www.sankei.com/region/news/150807/rgn1508070037-n1.html>)には、興味深い話が掲載されている。「済州島にも支石墓があるが、ここの支石墓は変わっている。これとそっくりの支石墓」が、中国浙江省温州市に隣接する瑞安にあるという。「瑞安には、不思議なことに支石墓が集中している。しかも、済州島の支石墓に酷似していた。」「中国・温州から海岸沿いに北上し、寧波から舟山列島を経てさらに北上すれば済州島に行けないこともない。」と記されている。瑞安の支石墓上石の岩石名は不明だが、済州島の支石墓と酷似しているとの記述には、重要な意味がある。日本支石墓の起源を中国大陸に求められるか、については意見の分かれるところであろうが、かりに瑞安から済州島を経て西北九州へ到来しているのであれば、とても興味深いことである。

済州島は全島がアルカリ玄武岩に覆われており、最高標高は漢拏山の1,950<sup>㍎</sup>である。山頂から見通せる距離は167.19<sup>㍎</sup>、標高1,500<sup>㍎</sup>地点で146.64<sup>㍎</sup>、標高1,000<sup>㍎</sup>地点で119.72<sup>㍎</sup>である。山頂から宇久松原までは240<sup>㍎</sup>を超えているので、理論上、直接の目視による航海は無理である。しかし尾上博一さんによれば、済州島-宇久島間とほぼ同距離の位置にある対馬・豆酩崎から済州島が望見できた、という経験のある方が、ご自身を含めて少なからずおられるとのことである。それが光の屈折による光学的現象の可能性はあるにせよ、現実に見えた、という事実は重視されてよいであろう。

広瀬雄一さんによれば1996(平成8)年~1897(平成9)年にかけて、済州島から佐賀県唐津港を目指した筏による航海実験が行われたとのことである。いずれも荒天により失敗に終わったが、1回目は最も近い長崎港に曳航され、2回目も五島列島近海から伴走船に曳航され、長崎に寄港した後、唐津港に曳航されたという。1回目の出航は1996年5月1日で、長崎港に曳航された際の長崎新聞の記事があるとのことであった。済州島と五島列島の関係を考える上でこうした情報にも注意しておきたい。航跡図があれば渡海ルートを検討する上で貴重な資料となろう。このほか1948(昭和23)年に発生した済州島四・三事件の際、大勢の島民が日本を目指しての逃避行を試みたという歴史的事実もある。

このように隆起文土器段階(縄文時代前期相当)や宇久松原の支石墓の時代から現代にいたるまで、済州島や韓半島南岸一帯と宇久島・小値賀島を含めた五島列島周辺との接触は、断続的ながら続いていたものと考えられ、済州島から西彼杵半島にいたる海上ルートは十分に想定可能なものである。

口頭でのことだが、川道さんは渡来人を「難民」と考えておられるとのことである。渡来人を難民と考える見解は以前からあり(註14)、従来の年代観で言えば春秋・戦国時代、近年の弥生時代開始時期の500年遡上説に従えば、西周時代の混乱に伴う「逃避行の民」ということになろうか。年代観はさておき、筆者も難民説の可能性は高いものとする。ここでの難民を「戦乱や弾圧からの逃避行」とすれば、それは単方向的かつ一回性のことで、小舟一艘の小集団単位で見れば双方向的・反復的な航海の必要があるとは思えない。具体的な社会情勢は詳らかでないものの、支石墓をもたらした渡来人を難民と考えた場合、急迫の侵害から逃れるために命の危険を賭して舟に乗り込んだのであれば、それまでの日常生活が一変したであろうことは容易に想像できる。かろうじて西北九州沿岸まで辿り

着いたにせよ、環境の激変による伝統的規範の混乱や崩壊、新たな融合を生じていた可能性は十分に想定されるところであり、それが葬送儀礼に関係する諸事におよんでいても不思議ではない。

故郷から遠く離れた異郷の地で、周辺の環境に適応して生活する過程において、さまざまな面での変容は、きわめて自然のことと思われる。写真で見るとかぎり濟州島の支石墓は日本のそれとは大きく異なっているようで、たしかに直接的な関係を見いだすには無理がありそうである。しかし上述したような混乱状況を想定した場合、はたして考古学的手続きによって抽出された相異と相似をもって親縁性や時系列の変化を論じることが可能なのか、という素朴な疑問もある。

現代日本における遺骨の取り扱いはいつに多様である。遺骨の一部をペンダントとして肌身離さず持ち歩くという人もいれば、樹木葬、海洋散骨、はては宇宙葬なるものまである。ごく最近のことと言えばそれまでだが、半世紀前には想像もできなかったような激しい変化である。墓制変容に関するダイナミズムの問題は、より多角的な、たとえば宗教社会学的な視点からの検討などが必要になるのかもしれない。

## 5. おわりに

近年の新しい学問領域の一つに「文化地質学」というものがある。「文化地質研究会 設立趣意書」（平成30年3月10日）には、「私たちはこの大地の上でどのようにして生きてきたか、そしてどのように生きていくのか。それを考えるとき、そこで活動する「人」に焦点を当てた人文・社会科学的視点とその根底にある「大地」に焦点を当てた地質学的視点を正しく理解し、両者を融合していくことが必要である。」と記されている。これは今後の考古学研究にとっても重要な指摘であろう。

小稿は、これまで積極的に論じられることが少なかった上石の岩石名や、遺跡周辺の表層地質との関係から支石墓の問題を考えたものである。必ずしも自身の目で各支石墓を確認できたわけでもないため、細部については事実誤認があるかもしれない。そうしたことも含めて不十分な点は多々あろうが、それでも立地と表層地質の関係に目を向けることでいくつかの事実と可能性を指摘し、多少なりとも、その有効性を示すことができたものと考えている。支石墓の問題を考えるに際しては、考古学的手続きで導出された結果と、地質的環境から見えてきた事実との双方を、不可分なセットとして論じることが望ましいのではなからうか。研究の進展に期待したい。

### 【追記】

支石墓の立地と表層地質の関係を考えるにいたった経緯は、冒頭に述べた。本来ならばフィールドワークが不可欠なテーマである。筆者が学生生活を過ごした1970年代は、若い人には縁遠いかもしれないが、考古学（Archaeology）＝「歩けオロジー」という雰囲気の色濃く残っていた時代でもある。

丘陵地帯をくまなく舐めるように歩きまわり、犬に吠えられ、農家の方に怒鳴られながらの踏査である。時には見知らぬ方に麦茶と握り飯をいただいて喉の渇きを癒し、空腹を満たしたこともあった。あの若かりし日々の思い出は、まるで昨日のことのようでもある。ただ、ひたすら歩くことが遺跡を理解するための王道であると信じて疑うことはなかった。今もその思いに変わりはない。かなうことならば各地の支石墓を訪ね、高校時代に経験した数多くの地学の巡検を思い出しながら、周辺の地質も観察したかったが、今となっては諸般の事情が許さない。それゆえ、この執筆には躊躇いがあった。文字通り「地に足がついていない」からである。

「研究ノート」としての執筆も考えた。しかし新型コロナウイルスの影響が大きく、図書館や資料館が閉鎖を余儀なくされていることもある。こうした状況は、いつ悪化するか、わからない。

そこで漫筆に切り替えることにした。当初は【老々漫筆】としていたが、最近の日本語はおかしい。「せいご」「でんでん」「がいちてき」などという摩訶不思議な読み方が聞かれる昨今であり、まさに「未だ曾つて有らざる」時代である。このままいくと「老々」は「おいおい!」と読まれかねない。内容についての御批判ならばともかくも、タイトルだけを見て「おいおい!」と思われるのは、困る。で、[老々]は[老朗]に改めた。むろん造語であるが、同期の友人達が次々と前期高齢者の仲間入りを果たすなか、筆者も前期高齢者突入前夜の日々を過ごしている。年はとったが、これからも明るく元気で、前向きに生きていきたいものだ、という願いを込めている。

西彼杵や長崎半島の沿岸部には、入り江を中心とした集落が数多く点在している。近年の宅地開発や波消ブロックの設置などでその景観は大きく変えられつつあるが、かつては白砂青松の美しい景色が広がっていたに違いない。入り江や集落の規模は地形により様々だが、筆者には、どの入り江にも遅くとも縄文時代前期の曾畑式土器段階以降からの痕跡が残されている、という確信がある。高校生当時の踏査経験（聞き取り調査を含む）にもとづくものである。住宅が密集している浜堤上では表面採集ができないことも多く、考古学的証拠としての遺物を示すことは難しいけれども、確信は変わらない。遺跡の開始時期は縄文時代早期末まで遡る可能性もあるが、発掘調査の事例が少ないことから証拠が十分とは言えないのが現状で、やはり確実なのは前期の曾畑式土器段階以降である。

港町での分布調査の経験がある方にはご理解いただけると思うが、家と家との間隔は人ひとりが、かろうじて通れるほど狭く、未舗装であることが多い。そんなところに入り込み、地元の方に不審な目で見られながら、うつむいて地面を凝視し、表面採集をするのである。現代なら、間違いなく警察に通報されていたことであろう。薄暗い路地で黒曜石の碎片を見つけたこともあれば、電柱の立替え工事後のわずかな残土から石鏃を発見したこともある。関東での台地や丘陵の踏査も大変だったが、漁村の踏査はまた別のつらさがあった。そんな状態だから、一回の踏査で得られる遺物は少量である。しかし同じ遺跡を何度となく訪れるうちに、遺物は多少なりとも増えてゆく。帰宅後、水洗いをしていると、曾畑式土器の細片を発見したりするのである。

もう10年も前のことだが、その前年に急逝された、故・福田一志さんの実家を訪ねたことがある。場所は新上五島町である。帰途、歩いて小串遺跡にさしかかった際、工事で遺物が散乱しているのを発見した。この時に採集した遺物は、中尾篤志さんによって福田さんの追悼論文集に報告されている。

その翌日、有川港からほど近い、弥生時代の墓地として有名な浜郷遺跡を訪ねた。砂丘遺跡で過去の調査地点は、すでに宅地か道路になっている。東側には広い砂浜が広がっているので歩いてみた。

遺物はほとんど無かったが、わずかに顔を出していた玄武岩製剥片と土器の細片各1点を採集することができた。土器は親指の爪ほどで全体に摩耗していたが、極めて薄く、胎土には滑石粉末を混入しており、一条の沈線が描かれていた。まぎれもない曾畑式土器である。干潮時なら、もっと多くの遺物が見つかったかもしれない。報告されている遺跡で言えば、平戸市の千里が浜遺跡に近いような感じである。この経験も、これまでの踏査にもとづく確信を、さらに強固にすることになった。

筆者の踏査経験は、長崎半島や西彼杵半島の一部に過ぎないが、上述した確信は、大村湾西岸や五島列島を含む広い範囲に拡大して適用できるものと考えている。今回はサイエンス・ファンタジー風のイメージとしてしか描くことができなかつたけれども、縄文時代人の活動領域とネットワークは筆者の想像をはるかに超えている可能性がある。それは今後、遺跡の分布や、各種遺構・遺物の分析に基づく考古学的検討の成果として、明らかにされるであろう。

## 【謝辞と献辞】

なにより執筆のきっかけを作ってくださった宮崎貴夫さんに、心からの御礼を申し上げたい。宮崎さんは昨年、『長崎地域の考古学研究』という440頁にも及ぶ本を自費出版された、長崎県考古学界の重鎮である。不勉強な筆者にとって、その存在は計りしれないほど大きく、ご指導をいただいている、という安心感があればこそ小稿を書き進めることができた。感謝とともに、末永いご健康とご活躍を祈念する次第である。

宇久松原遺跡の調査と報告書を担当された川道寛さんは、昨年度の「岩宿文化賞」を受賞された、九州の代表的な旧石器研究者である。編年論や技術論にとどまらず、黒曜石の原産地推定の論文も書かれるほどの筋金入りの「石屋さん」で、縄文・弥生の石器群に対しても精力的に取り組まれている。初めてお会いしたのは、泉福寺洞穴第三次調査に数日間、参加させていただいた1972年の夏であった。当時、明治大学の1年生だった川道さんは長髪の頭にタオルを巻き、作業ズボンにはベルト代わりの荒縄を通し、両腕を組んで地面を力強く踏みつけ遠くを睨んでいた。その風貌はまるで海賊船の船長のようなようであった。以来、お世話になっていて、今回も数多くの貴重なご助言をいただいている。

宮崎貴夫さんと川道寛さんの、考古学に向き合う真摯な姿勢には尊敬すべき点が多く、これまでも多くのことを学ばせていただいている。まことに有り難いことである。

大庭孝夫さんにはメールのやりとりを通しての貴重な御助言のみならず、地質図上での支石墓位置や遺跡名を丹念に確認していただき、作業ミスを御教示いただいた。調査に追われながらのご多忙の身にもかかわらず、丁寧に対応していただいたことに、心からの感謝を申し上げる次第である。

広瀬雄一さんとの出会いは、1980年前後、彼が慶応大学の大学院修士課程に在籍中のころである。横浜市の調査現場では、ともに汗を流したが、夜遊び友達でもあった。当時のことは若気のいたりというほかない。1984年だったか、一緒に江坂輝彌先生の研究室の片付けを手伝いに行き、創刊当時の考古学ジャーナルの抜刷や、直筆の原稿をいただいたことがあった。棚の上にはお菓子の空箱があり、その蓋に「日本全国の、おもしろい石鏃」と書かれていたのを見た時には、顔を見合わせて苦笑した。江戸時代の収集家、木内石亭の世界（弄石社）を垣間見た思いがしたからである。今回の執筆に際しては、韓半島の地質や、済州島から西北九州（唐津）を目指しての航海実験に関する事など、貴重な情報をいただいた。間接的ながら、河仁秀先生と鄭澄元先生にも感謝申し上げる次第である。

尾上博一さんと初めてお会いしたのは、彼が熊本大学文学部の研究生を経て、長崎県学芸文化課に嘱託として勤務した1998年頃である。高校の同窓生という関係もあり、一緒に飲むことは多かったが、不思議と同じ現場に立つ機会はなかった。2000年の春、筆者は大瀬戸町（現西海市）雪浦清水遺跡の報告書作成に従事していた。表紙を飾った縄文土器（雪浦清水式）の見事な実測図を担当してくれたのが尾上さんであった。すでに当時の巖原町に就職が決まっていた、対馬に行けば縄文土器の実測をする機会など二度となかろうから、とそそのかした結果である。今回は対馬の地質、とくに花崗岩の分布域や豆殿の海岸について御教示いただいたことが大いに参考になった。感謝申し上げたい。

西海考古同人会の古門雅高さんと一緒に仕事をしたのは、1996年に刊行された『頭ヶ島白浜遺跡』が最初である。以来、立山分室での勉強会の開催、西海ニュース・西海考古の発刊など、お互いに力を合わせてやってきた。いつも怠惰な筆者を励まし、温かく支えていただいている。小稿についても様々なご教示をえて、どうにか形をなすことができた。心から感謝を申し上げたい。

最後に故・高野晋司さんのことに触れておきたい。かつて「おから亭」という馴染みの店が爆心地公園の近くにあった。若いころは手元不如意のことも多かったが、そんなときでも高野さんがキーブ

したボトルさえあれば飲むことができた。マスターに「高野さんのボトルは、ある？」と聞くだけで水割りなり、ロックが出てくるのである。ご本人にしてみれば、さぞや迷惑なことだったろうが笑顔で「おう、いつでん飲んでよかぞ！」とおっしゃってくださっていた。そんなお人柄の方であった。

高野さんにはどれほどお世話になり、どれほどの迷惑をおかけしてきたかわからない。逝去されてはや7年が過ぎた。追悼論文集は2015年に刊行されたが、当時はなにも書くことができなかった。

筆者はこれまでも調査や報告書の作成に関わる機会があったが、よもや高野さんの専門分野である支石墓にまつわる文章を書くことになろうとは、夢にも思わなかった。不思議なご縁というほかない。

まことに遅れ馳せながら、ではあるけれども、この漫筆を高野さんの御霊前に捧げ、長きにわたる御厚誼と学恩への感謝の印としたい。今はただ、静かにご冥福をお祈りするばかりである。

#### 【註】

- 註1 支石墓は「構築」されるものなのか、それとも「築造」されるものなのか『志登支石墓群』の報告書では「築造」と「築造」が併記されているが、厳密な使い分けはわからない。最近の論文を見ると「築造」という表現が主流のようなので、小稿でも「築造」という表現を用いている。
- 註2 古門雅高氏の御教示による。
- 註3 正林 護 1997 「大野台支石墓群」『原始・古代の長崎県 資料編Ⅱ』長崎県教育委員会
- 註4 高野晋司 1997 「風観岳支石墓群」『原始・古代の長崎県 資料編Ⅱ』長崎県教育委員会
- 註5 宮崎貴夫 1997 「第一節 原始・古代の島原半島 1. 島原半島の風土・景観」  
『原始・古代の長崎県 資料編Ⅱ』長崎県教育委員会
- 註6 古門雅高氏の御教示によれば、縄文時代後期後半から晩期にかけて、大村扇状地への進出が進むという。「大村湾に進入した渡来人が、黒丸遺跡や竹松遺跡の繁栄ぶりを見て、無用の軋轢を避けた可能性があると思いますか」との質問に対しては「支石墓が福岡平野に見られないのは、支石墓集団が玄海灘周辺に進出した際には、福岡平野には一定の社会勢力が存在したため、進出できなかったとの見解もあるようで、在地勢力との関係はあると思います。」との回答をいただいた。
- 註7 筆者の1971年8月16日付けの踏査記録には、聞き取り調査の内容として「以前、式見小学校を造成の際、松の木の下にあった大板石の下より、鉄刀を伴った人骨が多数発掘されたいが、詳細は不明である。」と記している。また1972年5月20日付けの記録では「式見より牧野へ行く途中の道傍の畑中、俗称を箱石又は三枚石 (SANMEISHI) と呼ぶ所にあり、暈大・厚さ30cmぐらゐの板石 (andesite) を三枚重ねた物である。周辺の畑ではパテナの古い黒曜石剥片が採集された。」と記している。半世紀近く前のことで記憶が曖昧だが、地元の方に、平家の落ち武者伝説と関連づけて「古くから掘り起こすと祟りがある」、といわれていると聞いたことは覚えている。巨礫が火山岩だったことは間違いないと思うが andesite (安山岩) と書いているのはおそらく筆者の誤認で、今になって地質図を確認すると、玄武岩の可能性が濃厚である。支石墓の可能性も考えられなくはないので、いずれ機会をみつけて再踏査したいと考えている。
- 註8 宮崎貴夫さんから草稿の読後感を記したお手紙を頂戴した。数多くの貴重なアドバイスが含まれており、そのすべてを活かすことはできなかったが、「「上原」という地名で思い出しました。」1978 (昭和53) 年ころ、「正林さん、高野さんと3名で、無線塔建設に伴って上原で分布調査と試掘を兼ねた調査を1週間ほどおこない玄武岩の大石を何個か機械を使って起こして調べましたが、遺物も支石墓も発見できませんでした。標高が300mほどありますので立地が高すぎたのか、水田可耕地の谷底平野などが近くになかったためか、支石墓集団は「上原」を利用しなかったのだと思います。」と記されていた。
- 註9 西彼杵半島西岸にある長崎市柿泊遺跡 (宮下・高田 1997) では珪化木製の礫器が出土している。これは遺跡の周辺で入手できるものではなく、長崎半島に近い伊王島・沖の島・香焼島および深堀周辺の海岸で採集されている可能性が高い。柿泊は立地や石器組成から旧石器時代～縄文時代にかけての狩猟場と考えられている遺跡で、伊王島までの距離は7～8km、深堀までも10km程度で、至近の海岸集落である手熊までは沢を下れば歩いて30分もかからない。手熊集落の浜堤部には貝塚を伴う縄文～弥生時代の遺跡があり、そことの関係性も注目される遺跡である。深堀もまた縄文～弥生・古墳時代の貝塚を伴う遺跡である。深堀など、長崎港を挟んだ対岸との往来は恒常的だった可能性がある。



- 註10 火山岩である流紋岩・安山岩・玄武岩（深成岩での花崗岩・閃緑岩・斑禰岩に対応）の分類は、基本的にシリカ(sio<sub>2</sub>)の含有量によっている。ただ肉眼観察には限界があり、井崎遺跡周辺の表層地質でも触れたように、[T1] 古期玄武岩及び郡川火山岩類（玄武岩・安山岩溶岩及び火砕岩）という記載もある。
- 註11 寺田正剛 1997 「小川内支石墓群」『原始・古代の長崎県 資料編Ⅱ』長崎県教育委員会
- 註12 志登支石墓群の報告書において、花崗岩という記述が見られるが、岩石学的記述では、すべて花崗閃緑岩と記されており、それを略したか誤記したかのいずれかと考えられる。
- 註13 江島の南西側丘陵には江ノ島遺跡（長崎県遺跡地図第110集27-2. 散布地：縄文／弥生、標高10～30<sub>m</sub>）が確認されている。現地を踏査された宮崎貴夫さんによれば遺物が少なく、調査も実施されていないため詳細は不明とのことだが、頭ヶ島と西岐杵半島の間位置する島の遺跡だけに注目しておきたい。
- 註14 たとえば蔡鳳書（2002）には、「春秋時代末年から奴隸制社会は崩壊してゆき、混乱した不安定な社会となった。山東人たる孔子は、この状況を見て「道行はれざれば、桴に乗り海に浮かばん」と嘆いている。」との記述がある。いわゆる「乗桴浮海（じょうふ-ふかい）」、つまり世の中が悪くなる一方なので、筏に乗って海外へでも行こうか、という意味で、この場合の海外とは日本のことを指しているらしい。

#### 【引用・参考文献】

- 加藤靖郎・横山俊治 2010 「2005年福岡県西方沖地震による玄界島頂部のノンテクトニック断層」  
『日本地すべり学会誌』47巻1号 p.42-50  
[https://www.jstage.jst.go.jp/article/jls/47/1/47\\_1\\_42/\\_article/-char/ja/](https://www.jstage.jst.go.jp/article/jls/47/1/47_1_42/_article/-char/ja/)
- 鎌田泰彦 1979 「有明海の地形・地質 ☆日本沿岸海洋誌 その18：有明海①」  
『沿岸海洋研究ノート 第17巻, 第1号』p.75 [https://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo\\_10578964\\_po\\_ART\\_0009588628.pdf?contentNo=1&alternativeNo=](https://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_10578964_po_ART_0009588628.pdf?contentNo=1&alternativeNo=)
- 川道寛編 1997 『宇久松原遺跡』 宇久町文化財調査報告書第4集 宇久町教育委員会
- 中村大介 2016 「支石墓の多様性と交流」『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要』第6号  
長崎県埋蔵文化財センター
- 端野晋平 2003 「支石墓伝播のプロセス - 韓半島南端部・九州北部を中心として -」  
『日本考古学』16 日本考古学協会
- 古門雅高編 1996 『頭ヶ島白浜遺跡』 有川町埋蔵文化財調査報告書 第1集 有川町教育委員会
- 古澤義久 2016 「平成26年度東アジア国際シンポジウム「支石墓の謎 墓地にみる日韓交流」の成果」  
『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要』第6号 長崎県埋蔵文化財センター
- 文化地質研究会 2018 「文化地質研究会 設立趣意書」 <https://sites.google.com/site/bunkageology/home/kulturgeologie>
- 文化庁 1956 『志登支石墓群』埋蔵文化財発掘調査報告 第四 吉川弘文館  
(鏡山猛・森貞次郎・渡辺正気・山崎光夫・唐木田芳文・藤田亮策・齋藤忠)
- 細山光也 1996 「韓国の地形・地質 - 研修旅行の教材として -」『愛知教育大学教科教育センター研究報告』  
第20号 [https://aue.repo.nii.ac.jp/?action=repository\\_uri&item\\_id=2362&file\\_id=15&file\\_no=1](https://aue.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=2362&file_id=15&file_no=1)
- 松本 拓 2002 「型式とその解釈 - 現代漆器資料を用いた一考察 -」『史観』第146冊 早稲田大学史学会  
<https://core.ac.uk/download/pdf/144466406.pdf>
- 宮崎貴夫 2019 「長崎県本土地域の弥生文化形成期前後の遺跡と支石墓」『長崎地域の考古学研究』自費出版
- 宮下雅史・高田美由紀編 1997 『柿泊遺跡 - 長崎市総合運動公園建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -』  
長崎市教育委員会
- 吉川敏之 2006 「韓国の白亜系の地質 - 韓国と日本の地質図作成グループの研究交流 -」  
『地質ニュース』619号 [https://www.gsj.jp/data/chishitsunews/06\\_03\\_02.pdf](https://www.gsj.jp/data/chishitsunews/06_03_02.pdf)
- ジェームズ・ディーツ著 関俊彦訳 1988 『考古学への招待』雄山閣
- 蔡 鳳書 2002 「<研究ノート>山東省の古代文化と日本弥生文化の源流：考古学資料を中心として」  
『日本研究：国際日本文化研究センター紀要』25  
[https://nichibun.repo.nii.ac.jp/?action=repository\\_uri&item\\_id=688&file\\_id=18&file\\_no=1](https://nichibun.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=688&file_id=18&file_no=1)

## 執筆者一覧（五十音順）

大坪芳典	株式会社埋蔵文化財サポートシステム
大庭孝夫	福岡県教育委員会
土岐耕司	国際文化財株式会社
古門雅高	西海考古同人会
宮崎貴夫	長崎県考古学会
渡邊康行	西海考古同人会

### 西海考古 第11号

2020年12月21日 発行

発行 西海考古同人会  
編集 西海考古同人会事務局  
〒850-0874  
長崎県長崎市魚の町6-15-902  
古門 雅高 方  
E-mail : cqe07660@yahoo.co.jp  
郵便振替 : 01770-5-75643  
印刷 株式会社 昭和堂